
黄金の时代

木村 洋平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄金の時代

【Nコード】

N5627W

【作者名】

木村 洋平

【あらすじ】

遙か昔、この世界では黄金の時代と呼ばれる歴史の絶頂期が存在していた。けれどその栄華はすっかり過去のものとなり、現在では人間や魔物、亜人といった種族が渦巻く混沌の大地が広がっていた。そこで、ヴァラルと呼ばれる一人の男はかつての時代の栄光を再び取り戻すため、アールヴリールの大地で一人奮闘するのであった……（注：主人公最強の要素が多分に含まれています。そのことを留意の上、お読み下さい）第二章、完結しました。

プロローグ

かつて、黄金の時代と呼ばれる歴史が存在していた。

その時代に生きていたありとあらゆる種族は繁栄を極めてこの世の春を謳歌しており、まさにそれは誰もが夢見るユートピアを具現化した世界であった。

けれどある日突然、世界全体を巻き込む大災厄が起こることによって状況は一変する。

火山の噴火による環境の変化、地殻変動による大地震、長期にわたる疫病。未曾有の災厄により、世界は何度も滅亡の危機に瀕していた。

それでも世界は滅びることはなかった。一人の男によって……

しんしんと雪が降り続く中、古城がそびえたっていた。

その城の周りには雪原が広がっており、命の息吹をほとんど感じさせないさびれた土地だ。

だが、そんな辺鄙な場所にある古城は古ぼけた雰囲気を持ちながらも、どこか懐かしさを感じさせるものである。

そして、城の中にある一室で彼らは会議の真つ最中。そこは、百人

は優に入れそうな広い部屋だったが、ぽつんと置かれた長机と人数分の椅子があるだけだった。

「……本当にそれで良いのか？ここにいても周りには何も無い所だぞ？」

漆黒の髪と瞳、男とも女ともとれる中性的な顔立ちの男は疲れた声で問いかける。ぼろぼろになるまで使い込んだ軽鎧を着て、輝きを失いあちこち欠けた剣を腰に下げ、魔力を失った杖を椅子に立て掛けていた。

彼の名はヴァラル、世界崩壊の危機を招いた大災厄をくいとめた張本人である。

「いいえ、主様。そんなことはありません。確かにここは他と比べて寂しい土地ですが、もとより私たちはどこにも行く当ての無い身。主様の心配には及びません」

安心感を与えるような優しい声でこう答えたのは、腰までのびた艶やかな金の髪に青い瞳、そして尖った耳。派手さは無いが、全身をゆったりと包み込んだ白いローブを身につけている彼女の名はアイリス。ハイエルフと呼ばれる種族である。

「俺もここに残ることに問題はない。特にやることもないし、のんびりさせてもらうさ」

若い声でヴァラルに語る彼の名はガラム。青い髪と琥珀色の瞳を持ち、精悍な剣闘士という人間の姿をとってはいるものの実はドラゴンだ。

「主、私のこともおきになさらず。この地で少々やることがありま
すので……」

凜とした声でこう言ったのは悪魔のセラン。彼は肩まで伸びた燃え
るような深い紫の髪に緑の瞳、貴族が着るような上品な服を着てお
り、誰もが振り返るような整った顔には理知的な雰囲気を漂わせて
いる。

「……分かった。では話を続けさせてもらう。以前にも言った通り、
俺はしばらくの間眠りにつく。期間は正直言って分からないが、当
分の間目覚めることはないだろう。そのため、城にはそれなりの蓄
えを用意しておいた。この場所を拠点にして、今後どうするか身の
振り方を改めて考えておいてくれ。何か聞きたいことはあるか？」

「主、身寄りの無いわれらの同胞を見つけた場合、ここで保護する
ことをお許し願いたいのですが？」

「それも考えなければならなかったか……よし、セラン。同胞の保
護に関してはそれぞれの判断に委ねる。食料等も城にあるもの全て
を使い切るつもりでかまわない。」

「ありがとうございます」

セランは口ではそう言いつつ、にやりと笑みを浮かべた気がした。

何故だろう、とてつもなくいやな予感がしたが、ヴァラルは話を続
けることにする。

「他に何かあるか？」

「主様、この土地で新たに森を造りたいのですが……」

アイリスが遠慮しがちに聞いてきた。

(森か……)

彼女も分かっているのだろうか？この土地は荒れ果てているため、それを緑地化するととなると途方もない年月がかかるだろう。つまり、この場所にずっと身を寄せるということになるのだ。

「別にかまわない。だが、相当困難な作業だぞ？いくらアイリスとはいえ、そう簡単には上手くいかないと思うんだが？」

「大丈夫だ、いざとなれば俺やセランがいる。どうにでもなるさ」

「ええ、そうです。アイリス、私達も微力ながらお手伝いさせていただきますよ」

ガラムとセランはアイリスをフォローする。やけに自信満々だ。どうやら二人もここで手伝うつもりのようだ。

「そうか……すまないな、手伝ってやれなくて。せめてこの辺りをもう少し住みやすいところにしたかったんだが……」

「そんな！主様は立っているだけでもやっただというのに！この城だって、私達のために造ってくださったことぐらい理解できます！」

アイリスの言っていることは正しい。本来、ヴァラルが眠るだけならここまでの城を造る必要がないのだ。彼は、最後まで付いてきてくれた仲間達のために置き土産として造り上げたのだ。口では自分

のためといつていたのだが、長く旅してきた三人はそんな見え透いた嘘にだまされるほど馬鹿ではない。

「だからそれは……まあ良い、それよりも話を戻すぞ。セランにも言ったように、後のことは各自の判断に任せる。ただ、何か重要な問題に直面したのならば話し合って決めるようにするんだ。この最果ての地にいる以上、お前達は運命共同体だ。それを忘れないでもらいたい」

ここでヴァラルは一旦言葉を切り、共に歩んできた仲間を見て改めて言葉を口にした。

「三人には色々な所で助けられた。これからはしばらく会えなくなるが、今生の別れということでもない。だからまた会えることを楽しみにしている。」

椅子から立ち上がり、深々と頭を下げた。

そうして会議は終了し、四人は部屋を後にした。

向かう先は地下深くに作られた小さな部屋。長い城の通路をいくつも渡り歩き、ついにその扉の前に到着した。

「見送りすまない……」

アイリスに支えられながら疲れた声で彼は言う。本格的に限界が近いようだ。

「主様こそ。お目覚めになられるまで、私たちはいつまでも待ち続けています。」

「そうだ。ゆっくり休みな。」

「主、後のことはわれらにお任せください」

アイリス、ガルム、セランはヴァラルと再び会うことを約束した。たとえどんなに時が経とうとも。

それを聞いたヴァラルは満足げに頷き、アイリスの手を離れそのまま部屋の中へ入っていった。その部屋へは三人だけが出入りするこ
とが出来るのだが、この場では誰もその場を動かなかった。

背後からは、

「おやすみなさい。 主様……」

アイリスの小さな声が聞こえたような気がした。

こうして、一つの時代は終わりを迎えた。

多くの種族は滅び、高度な魔法のほとんどが失われ、歴史の闇に埋もれていった。

けれど、その全てが滅びることはなかった。彼らは時の流れに身を任せ、静かに生きていた。

そうして、幾年の月日が流れ、物語は再び動き始める……

目覚めるとき

アールヴリール大陸の北西部には、外部からの侵入を拒むかのよう
に巨大な山脈が連なっている。

メクビリス山脈。そこを踏破したものはいまだかつて誰もいない。

そのメクビリス山脈が囲むようにして守っている大地の中心に、一
つの古城があった。

古城ローレン。かつてこの世界を救った男が眠る城である。

そのローレン城地下深くにある小さな部屋で、彼は長年の眠りから
ついに目覚めた。

「……………あふ……………」

備え付けられたベッドの上で大きく口を開けてあくびをするヴァラ
ル。頭がぼうつとする。けれど、また眠りたいという欲求は不思議
と無かった。

寝ぼけ眼で彼はおもむろに起き上がり、軽く伸びをした。

「よく寝た……………それにしてもあれからどれ位経ったんだ？」

辺りを見渡すと、以前と変わらない簡素なベッドといくつかの家具
があるだけの地味な部屋。眠る前に一度三人に見せたときはそれぞ
れ微妙な顔をしていたのだが、ヴァラル自身、ここはそれなりに気
に入っていた。

(……誰かが最近入ってきたのか?)

足元を見ると床にはチリ一つ落ちていない。誰かが毎日欠かさず手入れをしてくれたのだろう、ありがたいことだ。ヴァラルはそう思い、すたすたと歩き出し隣の部屋で湯を浴びる。

(あゝやっぱり最高だ。生きた実感がする)

何年ぶりになるかわからない、熱いお湯が彼の体を温める。そうして、徐々に彼の意識は覚醒していった。

身も心もさっぱりとしたヴァラルは腰にタオルを巻き、衣装棚に向かい中に用意された一着を手に取り、着替え始めた。

(……ん?何か少し服が豪華になっているような気が……まあ、気のせいだろう)

慣れない服に悪戦苦闘し、ようやく着替が終わって部屋の外に出ようとする。

扉が開かれた。

「主様っ!?!」

そこにいたのはアイリスで、ヴァラルの姿を見るなり急に抱きついてくる。

押し倒さんばかりの強い衝撃を受けた彼は、何とか彼女を押しとどめた。

「っとと……おお、アイリスか。こんなに早く会えるとは思ってなかったぞ。久しぶりだな」

あれからどれくらいの時が流れたのかは分からないが、アイリスの美しさはまったく変わっていないかった。久しぶりに見たせいもあったのか、輝かんばかりの笑顔を見せる彼女は、以前よりも魅力が上がっているようにも感じられた。

「主様がお目覚めになられたと感じて、一目散に飛んできました！他の皆も急いで出迎えの準備をしている最中ですよ！」

「出迎え？ここにはアイリスしかいないんじゃないのか？」

彼女は興奮した様子で語り、ヴァラルは驚きをあらわにする。

（まさか、あの日以来ずっと約束を守り続けていたのか？）

「ガルムやセラも勿論いますよ。あれから私たちはここでずっと暮らしてきたんです。仲間を探すため外に出たこともありますが、ほとんどはこの場所で過ごしていました」

……事実のようだ。三人はヴァラルが思っている以上に義理堅い一面をもっていたみたいだ。

「ガルムやセラもいるのか。会うのが楽しみになってきたな」

あいつらはここで一体何をしていたのだろうか？確かアイリスは森を

造る、ガルムはその手伝い、セランは仲間の保護だったか。どれもこれも非常に大変なものだ。上手くいったのだろうか？少し気になった。

その後、アイリスが外から軽食を持ってきてくれ、ヴァラルはもくもくと食べた。久しぶりの食事だったため、野菜やパン、スープや飲み物の一つ一つはどれも格別の味だった。

アイリスはそんな彼の姿を微笑ましげに眺めていたが、そんな時彼女が急にまじめな顔をして沈黙するのを目撃する。おそらく誰かと魔法で会話をしているのだろう。

「主様、準備が出来たみたいなので一緒に来てください！」

（……準備？一体何のことだ、ガルムやセランがここへ来るんじゃないのか？）

そう思うこともままならず、彼女はあっという間に食べ終わってしまった食事をてきぱきと片付け、彼女はヴァラルの手を引いて部屋の外へと連れ出し、

（ああ、こうして外に出るのは久しぶりだな……）

ヴァラルは城の地下深くの場所とはいえ感慨深くそう思ったのだった。

二人は古城ローレンの果てしない道のりを歩いていく。無論そのまま徒歩で移動するわけではなく、所々に設置された転移魔法陣を利用

用してのことだが……

そして、そんな中城の窓から差し込む日の光で起きたのはちょうど朝の時間帯のようだということを知った。

（やはり朝日はまぶしいな……ってちょっと待て。城の様子が少し変だぞ？）

目を細め、城の内部を改めてみると、どこかが違う。いやかなりおかしい。

「なあアイリス、気のせいだと思うんだが、この城はこんなに立派だったか？俺が作ったときはもつとぼろかったはずだったんだが……」

長い廊下を歩いている途中、ヴァラルは疑問に思ったことを口にした。本人はぼろいと評しているがそれは外観の話である。中身は全く別であり、この城に張り巡らされた防衛魔法は正常に機能しているのだから。

「主様がお休みになられてからどれだけの時が経ったと思ってるんですか？千年ですよ！千年！それだけあれば立派にもなりますよ」

（千年か……随分と長い間休んでいたな。それくらい長く眠っていたのなら城自体も変わるのも当然か）

「だが、ここにはアイリスとガルム、セラシカいないんだろう？さすがにここまですることは無いと思うんだが……」

壁の一部をとってみても、高価な材料を使っていることが分かる。

置かれている壺や絵画、彫像もきつと名のある芸術品に違いなかった。……銅像や絵画に出ている人物がヴァラルにそっくりだということのもきつと彼の気のせいだろう。

「もう……主様はまだ気がつかないんですか。まあ良いです。もう少しで分かりますよ」

彼女は少々呆れながらもどこか楽しそうに言った。以前の彼女は、もう少し落ち着いた雰囲気を持っていたはずだが、今では子供のようにはしゃいでいる。

(千年の月日は性格も変えるのか……)

ヴァラルはしみじみ思った。

そうこうしているうちに、二人はとある大部屋の扉の前に立った。その非常に大きな扉は重厚感あふれるもので、中にある部屋がいかに重要な場所であるかを示している。

「これからこの部屋の中へご案内します。何があっても驚かないでくださいね？」

アイリスが扉を開け、中へ入るよう促した。何かとんでもないことが起こる気がする。そのような予兆をかすかに感じ取り、ヴァラルは恐る恐る部屋の中へ入っていく。

結果として、ヴァラルの予想は当たったのだった。

部屋の中へ入って、まず最初に目に入ったのは正面にある立派な玉座。この世の粹を集めたかのような繊細かつ優美なそれは、作り上げるだけで一体どれほどの労力を掛けたのが想像もつかないほど素晴らしいものであった。

また玉座だけでなく、部屋全体にも荘厳な装飾が施されている。調度品一つだけでも一体どれほどの価値があるのか、ヴァラルには想像も付かなかった。彼のように、ここへはじめて訪れた者全員はこの部屋のもつ雰囲気には圧倒されたであろう。

さらに、玉座へ向かう道の左右には漆黒の甲冑を身につけた騎士たちが一斉に剣を胸の高さに掲げ、この城の主に向けて臣下として最大級の礼をささげているのをヴァラルは間近で見た。この騎士たちも相当な剣の使い手なのだろう、一つ一つの動作に一切の無駄がなく、気品すら感じたのだから。また、魔力量も一人ひとりが破格の大きさだということもすぐに分かった。にじみ出る魔力の残滓がこちらにぴりぴりと伝わっており、それだけでも十分な証明だった。

（おいおいおいおい……なんなんだこれは……こんな奴ら俺は一人も知らないぞ？）

ヴァラルが驚くのも無理は無い。この城を造ったとき、この大部屋は人っ子一人いないがらんとした空間だったのだから。それがいまやこれである。

「主様」

それらの光景に啞然としてみると、アイリスが近寄ってそのまま彼

の手を握り、赤絨毯が敷かれている道の中央へ誘う。左右の黒騎士達の顔を見ることは出来なかったが、ヴァラルを見る視線には尊敬の眼差しが含まれていることが読み取れる。いや、これは最早崇拜の域に達していた。

そうして幾多の視線に晒され、彼女に手を引かれ玉座の前で彼女は不意に手を放すとそこには懐かしい二人がいた。

ガルムとセランである。ガルムは相変わらずラフな服装である一方、セランはどこぞの大神官かのような仰々しい法衣を纏っていた。

（おい、セラン。お前は悪魔だろう……）

心の中でヴァラルは突っ込みを入れるのだった。

そうして四人は集まり、再会の喜びに浸るかと思えばそんなことは無かった。こんな敵かな雰囲気ではガルムとセランに陽気に挨拶できるほど彼は愚かではない。ヴァラルは説明しろと言わんばかりに彼らをにらめつけたが、三人の放つ無言の圧力に屈し、渋々玉座に腰を下ろした。

こうして式典は始まった。セランがこの国の成り立ちを説明し、玉座にいるわれらの主がいかに偉大な方であるかを延々と語っていた。

ヴァラルにとってほとんど覚えの無いことだらけだったが、多少真実が混じっていた分性質が悪い。

そして、主はまだお目覚めになられたばかりなので、正式なお披露目はまた後日行うものとして式典は幕を閉じた。

その後、四人は城の一室で食事を取りつつ、やっと再開の喜びを分かち合った。そして食事を終えた後、ついにヴァラルは口を開いた。

「それじゃあ、そろそろ言い訳を聞こうじゃないか。どうしてこんなことになっているんだ？」

そうしてヴァラルはここに来るまでの間に疑問に思ったことをセランにぶつけた。城がかなり豪華になっていること、前は雪原だった場所に街が広がっていること。ここは寒冷地帯だったはずなのにどうしてこんなに暖かいのか、極めつけはここが国として成り立っているということだ。

「言い訳も何も、主が仰ったではないですか。われらの同族を保護しろと」

「だからといってこれはやりすぎだ。俺は国を造れとは言っていないぞ」

事も無げに言うセランに、すかさずヴァラルは反論した。いったい同族を保護することでどうして国ができるのか。そんなことで国が出来るのなら誰でも実践するだろう。いやするに違いない。

「あの、主様。ここにやってきた皆さんはとても疲れきっています。故郷は跡形も無くなり、家族とも離れ離れになって生きる気力を失っている方がほとんどでした。けれど、セランが懸命に彼らの仲間を探してきたおかげで、無事に家族や知り合いと再会できた方が大勢いたんですよ」

「そんな奴らがお前さんに対して恩を感じるのは当然のことだと思っぞ。まあ、国を作ると聞いたとき、俺も最初はびっくりしたけど

な。でも、そのほうが色々やりやすかったんだ。この土地の開発はそれなりの人数がいるとアイリスとセラランが言ってたからな」

アイリスがセラランを援護し、ガルムもまたフォローする。この三人が国造りの首謀者のようだ。

(三人とも森を造らないで国を造っていたのか……一体何を考えているんだ……)

そう突っ込みを入れようとしたが、ヴァラルはアイリスとガルムの言葉に複雑な気持ちを抱きながらも一応は納得するのであった。

「分かった……そんな事情があつたのなら仕方ない。俺も許可を出した以上、責任を待たないとな。お前たちばかりに押し付けてはいられん。それで？これから俺は何をすれば良いんだ？」

「とりあえず、主には改めて国民の前で挨拶していただきます。文面は私が考えるので、それを覚えていただければ結構です。それまでは少し時間があるのでこの国を見てまわるのはいかがでしょうか？」

さすがにこのままのんびりとしているわけにもいかない。ヴァラルは気持ちを切り替え、セラランに質問すると彼はヴァラルにこう提案する。

「そうするか。俺も気にはなってたんだよ」

さっきは取り乱したが、これは決して悪いことではないのだ。むしろ良いことはずなのだ。世界の破滅に比べれば、こんなことどうということはないはずだ。

「私個人から見てもなかなか良い国になってきたと思いますよ。実際に見ていただければ分かるかと」

（セランが褒めるだなんて珍しいこともあるんだ……まあ、あのときは何かを褒めるという状況すらなかったからな、仕方ない）

「そつえば、この国の名前は何なんだ？まだ聞いて無いんだが」
ヴァラルはふと疑問に思ったことを口にした。玉座の間でちらりとセランが言ったはずなのだが、そのときのヴァラルは集中力を欠いていたのですっかり忘れていたのだ。

それを聞いた三人が一斉に答えた。

「アルカディア理想郷」
「」

盟友との再会

アルカディアには大きく分けて、三つの区画がある。

自然豊かな湖や森林・耕作地が存在するユグドラシル区画。アルカディア周囲を守るようにしてそびえたつ山々に大規模な鉱山地帯があるウトガルド区画。国の中枢機関が集中し、商業施設や教育機関が立ち並ぶビフレスト区画。責任者はそれぞれアイリス、ガルム、セランが担当している。

ユグドラシル。

アルカディア内で最大の敷地面積を持つこの場所は食糧生産を担う一大拠点だ。肉類や卵、牛乳といった動物性食品、穀物や野菜、果物といった植物性食品、拳句の果てには海産物まで生産しているとのことだ。要約すると、加工食品や調味料を含めたありとあらゆる食材がここで手に入れることができるのだ。勿論貴重な樹木や薬草もここで手に入れることが出来る。そして、こんな凄い場所であるということを知るのは、ヴァラルがアイリス合流した直後のことである。

目覚めてからの次の日、ヴァラルはアイリスが責任者を務めるユグドラシル区画を訪れる予定となっている。彼自身、どこの区画からでも良かったのだが、アイリスが是非最初にユグドラシルへ来てくださいと強く言われ、特に反対する理由もなかったのでそのまま決定したというわけだ。

因みに、二日目はウトガルド区画、三日目はビフレスト区画をまわる予定である。

(……なんだこりゃ?)

ヴァラルは適度に身支度をして、城の一室にある無駄に豪華な部屋で朝食を摂ろうとしていた。すると、運ばれてきた料理の中にこんがりと程よく焼けた魚がヴァラルを死んだ目で見ており、それを見かけた瞬間、

「お前は！どうして！ここに！いるんだ！」

彼は焼き魚につい突っ込みを入れてしまった。

……まず、昨日の話から森を造るというアイリスの目的は十分に達成できたようだ。そこで、食糧を生産し始めたのもまあ良いだろう。だが周りを山で囲まれた場所で、どうやって魚を入手したのか。昔は辺り一面雪原で、海などなかったはずだ。

(まあ良い……今日はアイリスとユグドラシルを回る。そのときに聞けば済む話だ)

そう思いつつ、ヴァラルは目の前にある魚をぱくりと食べ始めたのであった。

(ご馳走さん。さてと、そろそろ出発するか)

食事をした後、ヴァラルは余裕をもってユグドラシルの入り口に向かう。彼は時間には厳しいほうなのである。……少々寝すぎな部分はあるが。

(早すぎるだろう……)

ユグドラシル区画の森の入り口。ヴァラルは三十分も前にここへ到着したはずなのだが、すでにアイリスは辺りをきよろきよろしていた。

「すまない、少し待たせたか？」

「そんなことないです！私も今来たばかりですから！」

どう考えてもそれ以上待つていてくれたようだ。申し訳ないと心の底から思いつつ、ヴァラルはこの後の予定を聞く。

「今日はよろしく頼む、アイリス。それで？今日はどこを案内してくれるんだ？」

「はい。今日はこのユグドラシルおすすめの場所を見てまわろうかと思えます。さすがに一日では全部を見ることは出来ませんからね」

ちなみに、今回は簡単な隠蔽魔法を使つての秘密の視察である。正式なお披露目前に顔を出すと、どここの区画でも大パニックになるとのことだ。だが、それを見破る者もこのアルカディアにはそれなりにいるので注意してほしいとセラランに言われた。

「分かった。ところで今日の朝食に魚が出てきたんだが、あれは一体どういふことなんだ？」

「あつ！気づきましたか。今日はその疑問に答えられる所にも主様を案内しようと思います。楽しみにしててくださいね」

今朝の出来事はアイリスの仕込みのようで、それも含めて彼女はヴアラルに見せたいものがあるようだ。

……………だんだんとセラんに似てきたのは思い違いであって欲しい。森へ歩き始めたアイリスの後をついていきながらヴアラルは思うのであった。

「このユグドラシルには私たちハイエルフの他に沢山の方々が暮らしています。皆さんとても仲良しなんですよ？」

それなりに整備された森の道を二人で歩きながら、アイリスはこの区画に住む仲間や動物達を説明してくれた。

ユグドラシルにはハイエルフやフェアリー、ケンタウロスやユニコーン、ウッドゴーレム等多種多様な森の住人達が暮らしているという。敷地面積が最大規模を誇るだけあって、その数の多さも圧倒的である。

そして、その中には幻獣もいるということにヴアラルは驚きを隠せなかった。

幻獣。

狼のような姿をとっているが、非常に高潔な存在で基本的に他の種族と関わりあうことはない。雷や風を纏い疾走する姿は森の王者と住人達から敬意をもって呼ばれている。

「幻獣もいるのか。だが、大丈夫なのか？あいつらは確か縄張り意識が相当強いはず。トラブルにならなかつたか？」

そう。幻獣はその誇り高さゆえ、住処への侵入者は決して容赦しないのだ。ごく稀に生還する者もいるのだが、大抵はそのまま生きて戻ることは無い。そんな連中がこの住人とトラブルを起こしたら……想像したくもない。

「そんなことはありません。逆に彼らはユグドラシルの開拓に一番最初に協力してくれたて、そのおかげもあって他の方々も積極的に手伝ってくれるようになったんですよ？」

成る程……アイリスの説明通り、森の王者である幻獣達が自ら動くのなら、この森の開拓もかなり進んだことだろう。

「それはすごいな。気難しいあいつらを従えるなんて」

「そんな、従えるだなんて……私はユグドラシルを造り始めてから、一度たりとも彼らをそんな風に思った覚えはありません！」

「すまんすまん、冗談だ。だが、それでもここまでのものを造り上げたのはアイリスが頑張ったからじゃないか。本当に凄いことだと俺は思うぞ」

ヴァラルは彼女を褒め称える。口には出していないが、開拓する上で、ヴァラルの想像を絶するよなつらいことや悲しいことがあつただろう。それをおくびにも出さず森の仲間達の素晴らしさを語る彼女はまさにこのユグドラシルの管理者にふさわしい。改めて彼はアイリスの強さを認識するのだった。

「えへへ……ありがとうございます……」

アイリスが照れた顔を浮かべているのを眺めつつ、二人は森をさらに進んだ。途中、一角獣やケンタウロスに出会ったが、特に問題もなくアイリスは彼らと会話をしていた。子供が生まれたので是非祝福して欲しい、新しい野菜を作ったので是非食べに着て欲しい等、アイリスはユグドラシルの中で相当慕われているようだった。

いまではこうして和やかに会話をしているが、ここに住む住人の多くがかつて絶滅の危機に瀕していた者達ということの後で教えてくれた。多くの自然が失われ、希望を失った者達がアイリスと共に生き残るためにこの森を造り上げたようだ。その命の力強さにヴァラルは心を動かされた。

(……)

けれど、ケンタウロスの一人がアルカディアの王が復活したと語り始めてから始めてから彼の心はスツと冷えた。

内容自体は昨日セランが玉座の間で語ったようなものだった。けれど彼らがそれを誇らしげに語り、ヴァラルをヒーローのように崇めるその姿を見て、彼は複雑な感情を抱いていた。昨日はその話に反応するものがいなかったのが幸いだったのか、こうして喜びに満ちた彼らの顔を見ているとなんともいたたまれない気持ちになってしまった。

アイリスが彼らとの話を終え、色々な果物を貰ってヴァラルに謝らうと振り向いた。

「主様、すみません。話が少々長引いて……あの、どこか調子が悪いのですか？近くで休憩を取りましようか？」

(……………いかな)

こんなところで彼女に迷惑を掛けてはいけない。折角の貴重な時間だ、一秒たりとも無駄には出来ない。ヴァラルは気持ちを切り替え、アイリスに返事をした。

「すまない。少し考え事をしていたんだ。心配を掛けたな」

「……………そうでしたか。それなら主様、もう少しだけ頑張ってください。目的地はすぐそこですよ！」

それから十分後、ついに目的地の一つに到着した。そこは外周だけでも数十キロにも及ぶ巨大な湖だ。アイリスによるとこの湖深くには海底洞窟があり、海と直接繋がっているのだそうだ。

(……………ん？なんなんだ？これは……………)

ふとヴァラルは奇妙な感覚に囚われた。誰かがここへ近づいている気がする。けれどすぐにその感覚は無くなりヴァラルはそれを思い過ごしたと考え、アイリスと湖畔の近くにある芝生の上で昼食を摂ることにした。

話は少し変わるが、アイリスの作る料理は美味しい。それはヴァラル、ガラム、セランの共通認識だった。千年前、彼らは楽しみといえる

ものがほとんど無かったが、毎日の食事だけは彼ら三人の唯一の楽しみだったのだ。

あのときはそこそこの材料しか扱うことが出来なかったが、今は違う。何せユグドラシルの責任者は彼女であり、日々の料理が彼女の手によりつくられた食材から生み出されているのだ。

確かに、昨日の昼食、夕食共に、けちのつけような無い美味しさだった。

けれど、アイリスの料理は違う。食材ごとにヴァラル好みの味付けや調理法等、全てに至るまで知り尽くしているのだ。そんな彼女がヴァラルのためだけに手料理を作ってきてくれたのだ。期待しないほうがおかしい。

「さて、アイリス。今回はどんな料理を作ってきてくれたんだ？正直言ってかなり待ち遠しいのだが」

「ふふつ。主様、慌てなくてもちゃんと用意してありますよ」

急かすヴァラルを落ち着かせるように、彼女は大きなバスケットから料理を取り出した。おにぎりやから揚げ、卵焼きやウインナー、サラダと先ほどケンタウロスたちから貰った果物といったラインナップだった。

（おおっ！！これはっ！！）

「見どこにでもあるような料理だと思っしてしまいがちだがそんなことはない。」

彼女の真骨頂は、こうしたありふれた料理にこそ真価を発揮するのだから。

いただきますと二人が手を合わせたと同時に、ヴァラルは料理に唸うん喊かんした。

まず彼は最初におにぎりを食べ始めた。米の一粒一粒に程よく塩気が混じり、湿った海苔との相性は抜群だった。また、中に入っていた具は梅干であり、こんなものまで作っていたのかと驚きつつ食していた。

昆布、ツナマヨといったヴァラルの好物のおにぎりをちゃんと把握していたアイリスに感謝しつつ、次々と料理に手を出していった。

から揚げは魔法を使ったのか、揚げたてのようなからつとした衣にジューシーな肉汁が口の中であふれ出した。卵焼きはふわつとろけるような味、ウインナーはパリツとした歯ごたえ、サラダはレタスのシャキシャキとしたみずみずしさ、マンゴーのような果物は濃厚な甘さの中にさっぱりとした味わいでヴァラルの舌を楽しませた。

「ご馳走様でした。アイリスさん、本当に美味しかったです」

このときばかりはヴァラルは敬語になっていた。いつもは不遜な態度を誰にでも働く彼だったが、彼女の料理の前では全く太刀打ちできずにいるのだった。

因みにヴァラルがこのように敬語を使うのは滅多にないため、この姿は非常に貴重なものであることを忘れてはならない。

「ありがとうございます、主様。こうして美味しく召し上がってい

ただただだけでも私は幸せです」

アイリスはかしくまっているヴアラルの姿に苦笑しつつ、思っていることをそのまま彼に伝える。

何故なら千年間、彼女はヴアラルを待ち続けてきたのだ、こうして彼と何気ない日常を過ごすだけでもこの上ない幸せなのであった。

二人はその後、食後の麦茶を飲みながらゆっくりとしていた。この麦茶もキンキンに冷えており、ヴアラルの喉に清涼感をもたらした。飲み終えた後、ヴアラルはのんびりと芝生の上で横になっていた。風が心地よく吹き、今にも眠りそうだ。隣ではアイリスが幸せそうにヴアラルの顔を眺めている。

「平和だなあ……」

千年前、ここは草の根一つ生えない土地だったのだ。それがここまで自然豊かな土地になるとは……これも彼女のおかげなのだろう。ヴアラルはアイリスに声をかけようとしたとき、湖に異変が起きた。

（……何だ!!）

水面に巨大な影が写りこみ、水かさが徐々に増していく。その事態を受け、ヴアラルは湖の近くへ寄った。その一方、明らかに異常な状況だというのにアイリスはのんびりと立ち上がり、こちらへやってきた。

（アイリス!!何のんびりしているんだ!!）

そして、ヴァラルが声を上げようとした瞬間、凄まじい水しぶきが上がり、その生物は姿を現した。

青く輝くような鱗、蛇とドラゴンの体躯を併せ持ったそれは海神リヴァイアサン。全身から海の力をみなぎらせている彼は、かつてヴァラルたちに力を貸してくれた盟友でもある。

「こんにちは、フィリス。今日はまたどうしてここへ？といっても、貴方なら分かりますか」

彼女はちらりとヴァラルの方を向いた。

「アイリスか。いやなに、懐かしい気配がしてな……目覚めていたのか、ヴァラル。久しいな」

リヴァイアサンのフィリスはその巨大な体躯をヴァラルのいる方向へ向ける。それなりの隠蔽魔法をヴァラルは掛けていたつもりなのだが、彼はそれをあっさりと見破っていたのであった。

「ああ、久しぶりだ。まさかあんたがここにいるとはね……てつきりフィリスは聖地へ戻っていったと思っただけだ……何かあったのか？」

ヴァラルはかつての盟友がここにいるわけを知りたかった。

「何、大した理由ではない」

フィリス曰く、ヴァラルたちと別れた後、聖地と呼ばれる海底神殿に一度戻ったのだそうだ。けれどそこは大災厄によって影も形もなくなっており、彼は世界を転々とする日々が続いていたらしい。そ

んな折、風の噂でアイリスたちがこの地で国を造っていると聞き立ち寄ってみたところ、ここはかつての聖地と同じように魔力が溢れる素晴らしい土地だったという。

「そのためこの地へ住まわせてくれるようアイリス達に頼み、今に至るといっわけだ」

長々と語り終えた彼はヴァラルと目を合わせた。

「そうだったのか……すまないな、色々」と

ヴァラルは今でも何か出来ることがあったのではないかと思案し、結局詫びることしかできない自分に腹を立てる。

「何を言うのかと思えば。本来、あの大災厄によって我らは滅びるはずだった存在。むしろ感謝したいほどのな。この地で心安らかに過ごせる事に」

「すぐ謝る所は相変わらずですね、主様は」

フィリスは勘違いを正すかのようにヴァラルに言い、アイリスも千年経っても変わらない主の癖に少し呆れていた。いらぬ苦勞まで背負おうとするのが彼の悪いところだと常々思っていたからだ。

「ところでフィリスはここで……ああ、なるほど。アイリスの言っていたのはそういうことだったのか」

「ええ、主様の想像通りです」

「まさか、ここにきて漁をするとは思ってもみなかった。だが、こ

れが案外面白くてな……」

フィリスはこの湖深くにある海底洞窟に住んでおり、彼はアルカデアへ魚介類を提供しているようだ。周りを山で囲まれているのに、どうして海産物が食卓に並んでいることに疑問に感じていたヴアラルだったが得心がいった。

そうして、盟友との再会の時間は瞬く間に過ぎていく。その間、ヴアラルたちはフィリス視点からのアルカデアの近況を聞きつつ、彼と同類の存在である他の者たちの行方について話し合っていた。

「……結局のところ、あいつらとはあれっきりなんだな」

「そうだヴアラル……だが二人のことだ、きっとこの世界のどこかで遅く生きているに違いない。いつかここにも気づくだろう。そのときまでゆっくりと待とうではないか」

そういつてフィリスはこの話を締めくくり、数瞬の間が置かれた後、アイリスは話を切り出した。

「フィリス、本当に申し訳ないのですが……」

アイリスはこの後、別の場所へ訪れることを心苦しい気持ちになりながらも彼に伝える。

「おお、もうそんな時間だったか……いやいや、つい長話をしてしまった」

「それはこっちも同じだ。中々面白い話が出て楽しかった。また

な、フィリス」

「ふっ、そのときは我が住処へ招待しよう。楽しみにしていると良い」

(フィリスの住処か……気になるな……まあ、それは後の楽しみにするか)

こうして二人は彼のいる湖を後にして、次の目的地へ向かった。

時刻は夕方、ヴァラルとアイリスは大急ぎで小高い丘にたどり着いた。この場所はユグドラシル全域を見渡すことの出来る所で、彼女はこの光景を最後に見せたかったようだ。

「主様、いかがでしたか？このユグドラシルは。といってもほんの一部しか見せられなかったのですが」

夕陽を背にして映る彼女は本当に美しい、ヴァラルは改めてそう思った。

「千年経ったとはいえ、これほど自然が豊かな場所だとは思わなかった。本当にびっくりした」

「ありがとうございます。そう言っていたただけでも本当に嬉しいです。けれど私だけの力ではここまで出来ませんでした。そして何より、主様のおかげでユグドラシルを含めたアルカディアはここまで立派になったんです」

「俺が？一体どういうことなんだ」

千年眠り続けていたはずなのだが、知らない間にアイリス達に力を貸していたようだ。身に覚えの無いことに彼は戸惑った。

「主様が眠りにつかれた後、この辺りは信じられない早さで魔力が
大気に満ちていったんです。いまではかつての聖地以上に魔力が集
まっているのですよ、ここは」

実は、聖地と呼ばれる場所には絶対条件がある。

それは大気中の魔力濃度が一定水準以上に達することだ。この他に
も様々な条件はあるのだが、とにかく、この条件を満たすことが一
番難しかった。

「目覚めたばかりなのに、やたらと調子が良いのはそういうことだ
ったのか……」

ヴアラルは得心がいったように呟いた。魔力濃度が高いと、アルカ
ディアの住人は活性化する。言い換えれば絶好調の状態が続くのだ。

「他の区画でもこの土地に惹かれてやってきた方々がたくさんいま
す。今は無理でもそのうちに会ってくださいな」

「分かった。そのうちな」

「……あつ！そろそろですよ主様！」

アイリスがそういうと、太陽は徐々に地平線の彼方から徐々に沈ん
でいき、彼女と二人で過ごす時間はこれで終わってしまった。

「こうやって主様と一緒に夕日を眺めることが私の夢だったんです」

「……随分と小さい夢なんだな」

「ええ、そうなんです。私は毎日を穏やかに過ごすことが出来ればそれで良いんです……」

その後、ぼそぼそと彼女が何か言ったような気がした。

「すまん、アイリス。聞こえなかった、もう一回言ってもらえないか？」

「何でもありません！さて、そろそろ帰りましょうか。あんまり遅いと二人に怒られます」

そうやって彼女は歩き出し、ヴァラルはその後が続いて丘を去ろうとした。

「そうだ、アイリス。まだ言ってなかったな」

「主様？」

アイリスは後ろにいる彼に振り向こうとして、

「ただいま」

ヴァラルは思い出したようにそう口にした。

「……おかえりなさい……主様あ……」

アイリスは泣きそうになっていた。

ウトガルド

ウトガルドはユグドラシルとは違い、荒野の大地が広がり、そしてこの区画の代名詞とも呼べるメクビリス山脈がそびえたつ区画だ。

メクビリス山脈。

突然の豪雨、常に吹き続ける強風、断崖絶壁の山々。並の生き物なら一日で息絶えてしまう険しい山岳地帯であるこの場所はアルカデアを守護するに相応しい天然の要塞である。

そのためなのか、このウトガルドに住む生き物もドラゴンやドワーフといった強靱な生命力を宿している種族が多い。

だが、荒んだ環境のウトガルドには他の区画には無い大きな魅力がある。それはメクビリス山脈自体が魔力を大量に溜め込んだことで、稀少な鉱物資源が泉のように湧き出ているのだ。そのため、ドワーフ達は今日もせっせと山を掘り続けている。

(……………さすがにいないな)

そして、彼はウトガルドの入り口である山の麓へと到着し、辺りを見回して一安心した。

アイリスのように早く来られてはたまったものではない。万が一の事態に備え、彼は三十分も前からこの場所へ来ようと意気込んでい

ただが、結局心配は無用のようだった。

そうして風がびゅうびゅうと音を吹き荒れる中彼を待ち、約束の時間の五分前ガルムは駆け足でこちらにやってきた。

「おお危なかった。ヴァルは時間にはうるさいからな」

息を簡単に整え、ヴァラルに話しかけるガルム。急いでいたようだが、彼に疲労の色は見えない。

「何か事情があるなら怒りはしない。ところで、どうして今日はあの姿じゃないんだ？」

ガルムはドラゴンだ。その気になれば姿を変えることで、あつという間にここへたどり着くことが出来るだろう。けれど、人の姿で走る彼を見てヴァラルは不思議に思ったのだ。

「いやなに、これには深あい理由があつてだな……」

何故ここでも人の姿をとっているのかという彼の疑問に彼は答えてくれた。

そもそも、ガルムはこのアルカディアに住むようになってから人の姿でいることが多くなっていったようだ。セランやアイリスと何度も顔を合わせる機会が多いのも理由の一つなのだが、一番の理由は真の姿を現すことで、大抵の者が怖気づいてしまうからなのだそうだ。故に、人前ではあまり本来の姿に戻ることは無いのだという。

「全く……俺で怖がるようなら、セランが元の姿に戻ったら一体どうなるんだ……失神でもするのか？」

ガルムが不満げに語っている。

「あれはなあ……アイリスも最初びっくりしてたっけ」

まあ、セランがあの姿になることは余りないだろう。相当怒らせる必要があるのだから。尤も、そんなことをさせた相手は即座に死ぬことが確定するが。

「ああ、それとだ。言い忘れたんだが今日は少し予定変更だ」

「ん？今日はガルムの住処に行くんじゃないのか？」

そう。今日はメクビリス山脈にあるガルムの住処へ訪れることになっていた。だが、予定変更とは一体どういうことだ？なにか不都合が起きたのか？ヴァラルは動くった。

「実はな、いままでメクビリスの鉱山とドワーフの工房を見せてもらえないか今まで交渉してたんだよ。あいつら、前もって言わないと絶対に見せないって強情張ってな。そこをどうしてもって頼みにいったんだが、何とかねじ込むことが出来た」

「へえ、凄いじゃないか」

ドワーフ。浅黒い肌で筋骨隆々とした体を持ち、口に髭をたくわえている彼らは、鉱山の奥深くに住み、そこから採れる金属を加工する技術に長けた種族である。彼らは気難しい種族だ。というより、仕事一筋の連中が多い。そんな彼らの仕事現場へ押しかけるのだ。なかなか骨の折れる交渉だったに違いない。

「ウトガルドへ来たんなら、この二つは絶対にヴァルに見せようと思っただ。俺の住処へ行くのはその後だ」

「……なんだか悪いな。手間をとらせたようで」

ヴァラルは彼の心遣いに感謝した。ガルムはドラゴンということと周りからは粗暴なイメージを持たれているが、こういったところでさりげない気配りが出来る頼れる仲間なのだ。

……まあ普通のドラゴンとは少々違うのだが、それを知っているのはアルカディア内でもそう多くはないだろう。人の姿でいることが多いという彼のことだ、むしろ少ないはずである。

「いや、俺も久しぶりに見たかったからな。もののついでという奴だ。さて、そろそろ行くか。あんまり遅れるのもまずいからな」

軽くヴァラルの言葉を返してガルムは歩き出した。確かに、いつまでも話をしている遅れることになれば彼の厚意を無駄にしてしまう。そのため、ヴァラルもガルムの後に続いた。

三十分後、メクビリス山脈を眺めながら原野を歩き続けていた二人は目的の場所に着いた。

鉱精の回廊。ウトガルド区画の中で鉱石の最大産出量を誇る鉱山である。ここから採掘される鉱石は最高級の品質をもち、アルカディア内の重要施設や武器、魔法アイテムの材料等、ありとあらゆる場所に使われている。因みに、ヴァラルの住んでいるローレン城にも

その多くが使われている。

その鉱精の回廊の前で一人のドワーフが二人を待っていた。今回も隠蔽魔法を使っているのでドワーフには、ガルムだけしか見えていないはずだ。

「おいガル、急にここを見たんだなんて一体どういう見をしているんだ？わしらにも都合というものがあるのだぞ？」

ドワーフが不機嫌そうにガルムに文句を言った。

「悪いエド。ほら、ヴァラルが起きただろ？アルカディア中をまわることになったとき、ここの区画だけ問題があったらまずいだろう？だから今回の視察はそれをチェックするためのものだと思うてくれ。何、邪魔はしないさ」

ドワーフの名はエドというらしい。彼はドワーフの中でも指折りの実力者であり、特に武器や防具作成に関しては彼の右に出るものはいないとのことだ。

「ふん、何を考えているのだから……今日はこの中と工房を見せるということでいいんだな？」

渋々ながらもエドは確認を取った。口は悪いが、根は案外良い奴なのだろう。

「（ああ、よろしくたのむ）」

「ふんつ。せいぜいはぐれないようにするんだな。迷ってもそのまま置いていくからな」

ガルムはその場で、ヴァラルは心の中で呟き、こうして三人は鉱精の回廊へ足を踏み入れたのだった。

「……………なあガル、お前さん何かしたか？」

鉱山の中へ入ってからしばらくして、今まで無言だったエドが、薄暗い坑道を歩きつつガルムに質問した。どうやら彼はこの場所がどこか変であるということに気づいているようだ。

「質問の意味が分からん。別に俺は何もしてないぜ？」

その一方、ガルムは何が起こっているのか全く理解できていないという顔で彼に答えた。

「……………ならいいんだ」

「……………何なんだ？ 一体？」

エドはヴァラルの瞳をじっと見たかと思うと再び歩き出し、その一方でガルムは何がなんだかさっぱりだという表情をして困惑していたのだった。

しかし、ヴァラルはエドの言いたいことが少し分かったような気がした。

騒がしいのだ、ここが。

そこまで大きなものではない。ただ、ささやき声のようなものが辺

りから聞こえてくるのだ。

その声に悪意は感じないのだが、正体はわからない。とにかくガラムたちとはぐれないようにしよう。一旦思案するのをやめ、急いで二人の後を追った。

「これは……何だ……」

三人がその場所に着いたとき、誰もが驚いた。

そこは大きな空洞が広がっていて、いくつものテントが張られていた。おそらくここはドワーフたちの中継地点のようなものなのだろう。いつもなら何の変哲もない所なのだが、今日は全く違っていた。

空洞を構成している壁が光り輝いているのだ。それも様々な色で。まるでここへ訪れたヴァラルを歓迎するかのようだ。

（おいおい、まさか俺のせいなのか？これ）

けれど、そんなことを露も知らないドワーフたちは慌てふためいている。彼らの動揺振りがこちらにも伝わってくるようだ。

「エドさんが来たぞ！」

一人のドワーフがエドを見つけけるなり、急いで近づいてきた。彼もこの事態に困惑している一人のようだ。

「エドさん！これは一体どういうことなんですか！」

「わしにも分からん……こんなことは始めてのことだ……」

彼も内心戸惑っていたが、やはり他のドワーフとは違う。何が原因でこのようなことが起きたのか、冷静に分析するのだった。

「まさか……」

そうしてエドは違和感に気づいたのか、ガルムへ話しかける。

「なあ、ガルよ。本当にお前さんは何も知らないのか？わしは今朝お前が急にここへ来たいと報告を受けてからどうも怪しいと思っていたのだ」

先ほどとは違い、どんな嘘でも見逃すまいとする目でガルムを睨みつける。その眼光の鋭さにさすがの彼も怯んでしまった。

「俺がここへ突然来た時だって今までも何回かあったし、そのときは何も起きなかったじゃないか！そんなこと急に言われても……
…あ」

「……何か知っているみたいだな。さて、とつとと白状してもらおうか？」

ガルムが変な声を漏らすのを見逃すはずも無く、じりじりとにじり寄るエド。ガルムはその迫力に気圧され、今にもその場から逃げ出しそうだ。

(そろそろ潮時か……あつちでもばれ、こつちでもばれるか……これってお忍びの意味本当にあるのか?)

この辺りでどうかしないとガルムにあらぬ疑いがかかり、大変なことになる。ヴァラルはそう考え、隠蔽魔法を解いた。

「全く、ガルの奴め。そんな大事なことを黙っていたのか……………」

「さっきのことを含め、本当にすまない。これは俺のわがままだったんだ。エド、ガルムを責めるのなら俺を責めてくれ」

気絶しているガルムの隣でヴァラルはエドにここまでの経緯を説明し謝罪していた。

ここは鉱山の外にあるエドの工房。あれからヴァラルはドワーフたちを落ち着くよう説得して回った。

けれど、突然アルカディアの王が現れたということで周りはさらに慌て、一時はパニックになりかけたが、エドの一喝によって事態は終息に向かっていった。「さすがはエド、俺の見込んだ男は違うね！」と、調子の良いことを言っていたガルムは彼の拳骨を食らい、依然としてのびたままだ。

「いや、過ぎたことをいちいち掘り返してもしょうがない。こちらこそみつともない姿を見せてしまったな。折角来てくれたというのに、こんな場所しかお主を迎えられないのはドワーフの恥だな…」

「恥だなんてとんでもないぞ。さっきの鉱山での出来事を見ていたが、随分と部下から慕われていたじゃないか。俺が起こしてしまった騒動をいとも簡単に鎮めた男の住処だ。けちをつけるはずないじ

やないか」

「……そうか？そう思ってくれただけでも随分助かる。わしもあのときは無我夢中だったからな。若造どもにもお主のこと、よく言い聞かせておこつ」

「そうだぜエド！ヴァル、見てみるよこの剣！すげえ綺麗じゃないか！」

いつの間にか復活していたガルムが大型の剣を勝手にどこからか持ち出していった。

(本当に、こついうところは相変わらずだな……)

「エド、もし良ければ工房を見せてもらえないか？実は、それがここに来た理由でもあるんだ」

「良いとも。お主からすればまだまだかもしれんが、それなりの自信作がある。是非見て欲しい」

そんな会話の後、三人は一旦昼食をとった。こつ見えてもエドはなかなかの料理上手で、ガルムとヴァラルの舌を唸らせた。さすがはエド、つくる事に関しては何でも器用にこなすな。

そして本日目の目玉の一つであるエドの工房にある倉庫に二人は足を運んだ。

「おお、やっぱりすっぱ」

そこには剣や槍、槌やハルバードといった武器の数々や、重厚な盾

や、鎧といった防具が所狭しと並んでいた。

「すごいな……どれもこれも」

ヴァラルは剣の一つをとり、溜め息を漏らしていた。一見すれば無骨な剣や鎧に見える。けれど極限までに洗練された武具はある種の美しさを放ち、芸術品と呼んでも差し支えないものばかりだった。ここにある武器や防具はエド渾身の力作なのだろう、これほどのものを作り上げる彼の腕にヴァラルは驚嘆した。

「そうだろう、そうだろう。俺やセラも人の姿のときはこの武器を使ってるんだぜ？いいだろう」

ガルムがあちこちにある武器を振り回しながら自慢気に話した。

「こらっ！！何をしているんだっ！！」

（お前が作ったわけじゃないだろう……だが、確かにうらやましい……）

二人が騒いでいるのを横目にヴァラルはエドに武具を作ってもらおうと決意し、ヴァラルはすぐさまエドと交渉に入った。

「なあ、エド。俺もそのうち武具を作ってもらえないか？材料と費用はこちらで出す」

「全く、ガルのやつめ……おお、すまんすまん。つい気をとられていた。勿論、構わないぞ。むしろこちらからお願いしようと思っていたところだ……けれどな」

「何だ？エド」

「……お主の剣を以前見せてもらったことがあるのだが、あれを使えばよいのではないか？」

（あの折れたやつか……）

「あれは駄目だ。すでに使い物にならないし、あんな剣が必要になるほど切羽詰っているわけでもないだろう？それにエド、俺はお前の作った武具を使ってみたい」

ヴアラルは真剣に思いを伝える。というより、エドのような男にはこうして頼むしか方法は無いと思ったからだ。

「そうか……そこまで言われたなら、期待に答えねばなるまい。分かった、いつでもやってやる。金は取らん。材料もこちらに任せてもらえるのなら今からでもやっても良いが？」

頼みを通じたのか、エドは素直に引き受けてくれた。さらに破格の条件までつけて。だが、さすがにそこまでしてもらってはこちらの立つ瀬がない。

「いや、約束してくれただけでもありがたい。いずれ頼むことにする」

（さて、どんなものをつくってもらおうか……）

「……良いよな、ヴアルは。こう見えてエドはドワーフの中でもかなり頑固者なんだぜ？俺だって作ってもらうのに相当時間がかかったんだぞ」

すると、ガルムがぶーぶー文句を言い始めていた。

「既にエドの武具を持っているくせに何を言っているんだ。別にいいじゃないか、一回くらい」

やけにあっさりしていたと思っただが、彼もやはりドワーフであり、作る相手を選んでいたようだ。

「ガルは礼儀がなつとらん。セランはそのあたりきちんとしていたぞ。それにお前さんはすぐ壊す。何回直したと思っっているんだ。もっと大切に使いえ」

（つて、エドのつくった武具を壊すだつて？……ガルムは一体何をしているんだ）

「いやあ、すまんすまん。あいつらの相手をするついで……な」

「何度も言っただが変身すれば済むことだろう。なぜその姿で戦おうとする？わしには理解できないぞ」

やれやれといった具合で呆れるエド。それはもう諦めに近いものだった。

「それだと弱いものいじめになるって言っただろう？互角の勝負をしたいんだ俺は」

「どこの世界にあいつらと戦う馬鹿がいるか！！そんな奴ら見たことないぞ……！」

「俺がいるじゃん。ヴァラルは当然として、セラんにアイリス、フリスもいけるな。後はあいつ等に……何だ、結構いるじゃないか」

「そういう意味で言ってるんじゃない!……はあ、お前さんの相手をするのは本当に疲れる……」

(……心中察する)

ガラムはいい奴なんだが、たまに話がずれることがあるのだ。二人のやりとりを見ながら、エドを気遣った。

(……って、また何かここに来るのか!?)

ヴァラルは突然の出来事に驚くと同時に、外から何かが着地したかのような轟音が部屋中に響いた。

「おっもしかして……」

「まさか……」

ガラムはこの原因が何か知っているような顔をしており、エドはとてつもなく嫌な予感がするといった感じで冷や汗を流し、ヴァラルたちはそれぞれ三者三様の反応をするのであった。

暴虐の龍王、天のバハムート

エドの倉庫から外へ出ると、三人の前にドラゴンが二本の巨大な足で佇んでいた。

しかも、このドラゴンは大きい。いや、とてつもなく大きかった。

ワイバーンに代表される飛竜は最大でも十メートル程の大きさになる。けれど、ここにいる龍は少なくとも爪先から頭のとっぺんまで二十メートル以上はあり、両翼を広げれば凄まじい大きさを誇るだろう。

エンシェント・ドラゴン(古代龍)。彼等はかつてこの世界の上位種族だった。強大な魔力をその身に秘め、大空を自在に飛び回る彼等は何者をも寄せ付けぬ存在であり、時の一大勢力を築いていた。

だが、大災厄が発生したことで、彼等の栄光は地の底へ堕ちた。種の繁栄よりも個々の強さを求めたため、その数は他の種族に比べて非常に少なかった。それが仇となり、ヴァラルが眠りについたときには既に種として滅びかけていたらしい。

そんな絶滅危惧種だった彼等が何故こんなところにいるかは特に問題ではない。ユグドラシルにいる連中のようにここへ逃れてきたのだろう。

だがここで問題なのは龍鱗の色だ。

エンシェント・ドラゴンにもいくつかの種類があり、龍鱗の色でそ

れは判別できる。赤みがかかったオレンジなら火龍、金色がかつた黄色ならば雷龍、きらきらと輝いた緑色ならば風龍だということだ。そしてこのドラゴンの龍鱗の色は黒、つまり黒龍である。

彼等の社会はいわば実力主義のところが多い。力を常に求めてきた彼等だ、それも当然の成り行きのことである。そのような中で黒い鱗という存在は彼等の間である意味象徴的な存在であった。

何故なら、黒龍はエンシエント・ドラゴンたちの王なのだから。

ただでさえ一体一体が強力な固体なのに、それを凌駕する力とはどれほどのものだろう。その希少性と相まって黒龍をつけねらう者たちが後を絶たなかった。

しかし、黒龍は他の種族や同族の龍たちを叩きのめした。

それも徹底的に。

そのためついた名が暴虐の龍王。奴とは争ってはならない。それが黒龍というものであり、同族からも畏怖される存在がヴァラル、ガラム、エドの三人の前に立っていた。

「こら！その姿でここへ来るなどあれほど言っただろう！もう忘れたのか！」

しかし、そんなことを百も承知といわんばかりに、エドが大声で怒鳴りちらす。黒龍は反逆するものを一切許さない。ここにいるドワーフのエドもその気になれば簡単にひねりつぶされるだろう。

「ああ、すまないエド。つい忘れてしまった。余りここへはこないからな、許してくれ」

けれど、そんな考えとは裏腹に黒龍はエドに向かってぺこぺここと謝り始めた。

「それで済むならさっさと手伝え！ああ、小屋が……」

黒龍が着地したときに、衝撃によってちょうど近くにあった小屋を吹き飛ばしてしまったようだ。そのため、辺り一面には色とりどりの石が散らばっている。どうやら鉱石を貯蔵しておく場所みたいだった。

「おお、マルサスじゃないか。どうした？こんなところで」

エドが泣く泣く鉱石を集めているのを横目にして、ガルムはマルサスという名の黒龍に声をかけた。

「ああ、ガルム殿を見かけたと龍たちが騒いでおったので、挨拶をしようと思いこの場所へ来たのだ」

「そういえばあまりここへは顔を出していなかったな。悪い悪い！すっかり忘れてたわ！」

（ガル、お前はここの責任者だろう……ちゃんと顔くらい出しとけ）

ガルムはここ最近ウトガルドへ行かないで、ビフレストにあるセランの屋敷に泊まりこんでいたらしい。

彼のそんな態度にヴァラルはうなだれていた。

「しかし、珍しい。ガルム殿がここへいるなんて……おや？隣にいる方はもしかや？」

「おお、分かるのか。こいつはヴァラル、アルカディアの王様だ。といってもほんの二日前に目覚めたばかりだけどな。今日は案内を兼ねてここへ寄ったんだ」

ガルムはここにいるわけを彼に説明すると、マルサスは大層驚いた様子だった。

「ほう、貴方がヴァラル殿だったか。噂は龍達の間で聞き及んでいる。私達を助けてくれて感謝する」

「おい、ガルム……こいつはあの黒龍なんだよな？俺が想像していたのと随分違うんだが……」

なんともむず痒い態度で挨拶され、暴虐の龍王と呼ばれる彼がこのような態度でいることにヴァラルは調子を崩され思わずガルムにたずねてしまった。

「そうだが、ヴァル。ま、それでも最初会ったときは結構気が立ってたけどな。だけどそれも当然だろう、あいつ含めて百体もいなかっただからな」

ガルムと会う前のエンシエント・ドラゴンたちは常に命を狙われ続けていたそう。その身に秘める強大な魔力を手にしようと次から次へと襲われたのだ。ヴァラルが眠りについた後も世界は争いに満ちており、彼らも生き残りをかけて必死に戦っていたという。

けれど、度重なる襲撃により徐々に追い詰められ、さしもの黒龍であるマルサスも満身創痍の状態だったらしい。

そのため、ガルムのことを最初見たときは人間だと勘違いし、躊躇いもせず襲い掛かったのだそうだ。

「……ああ、今思うと最低な出会いだった」

「すまないガルム殿。あのときは同胞を守るために死ぬ物狂いだったのだ」

どうやらマルサス自身、元々争いを好まない性格であり、彼から積極的に戦いを仕掛けることはなかったのだという。けれど黒龍ということで命を狙われ続け、それを返り討ちにしてきたことで不本意な名前までつけられたとのこと。そしてガルムと出会い、仲間と共にこの地へやってきて現在に至るそうだ。

「フィリスもそうだったが、マルサスたちも随分と苦労してきたんだな」

「アイリスも言ってただろ、アルカディアにいる連中はそういう奴らばかりだって。それよりもフィリスに会ってたのか。……後で驚かせようと思ってたのに」

「余計なことはしなくて良い。それよりもエドを手伝うぞ、少し大変そうだ」

ヴァラルは近くに落ちていた鉱石を拾い始める。そこへガルム、マルサスも加わったことで予想以上に鉱石集めは早く終わり、とりあえずひと段落した。小屋は新たに立て直さなければならぬが、そ

れはまた後日ということになった。

「すまないな、わざわざ手伝ってもらって」

「何、武具を作成してもらった。これぐらいどろどろということはない」

「後はマルサスにやってもらう。元々あいつのせいなんだ、きつちり働いてもらわないとな」

「程ほどにしておいてくれ。あいつをみている限り、本当に悪気があったわけじゃなさそうだったからな」

「分かっておる、多少荷物運びをしてもらうだけだ。……ところで、おぬしはこれからどこへ行くつもりだ？ここにはメクビリス山脈しかないぞ？」

メクビリス山脈は断崖絶壁の場所だ。一応ウトガルドの観光名所にはなっているが、そこへ登ろうとするにはマルサスたちの力が必須なのだ。

「勿論あそこへ登るつもりだ。ガルムの住処へ行くことになっているからな」

「何と！……成る程、おぬしならあの山を登ることなど造作もないだろうな。しかしガルムの住処へ……珍しいこともあるもんだ……」

「そんなに珍しいのか？」

事前に聞いてはいたが、エドがここまで驚くとは思いつきもなかった。ヴァラル。一体どれほど凄い場所なのだろうか。彼は反射的に尋ね返していた。

「そりゃそうだ。実際に見たことがあるのはセランとアイリスぐらいしかいないらしいからな。まあ楽しんでくるんだな」

「ああ、そうするよ」

そういつてヴァラルは工房でエドと別れたのであった。

「おう、終わったか」

外ではマルサスとガルムがなにやら話しこんでおり、工房から出てきたヴァラルに対し、ガルムは声を掛けてきた。

「まあな、二人は行かないのか？」

「俺の場合エドといつも喧嘩になるし、マルサスは怒らせたばかりだ。今回はパス」

「全く……それで？この後はガルの住処にどうやって行くつもりだ？さすがに道案内してもらわないと俺が困る」

「うーん……その前に少し歩くか。マルサス、お前も来るか？」

きよろきよろと辺りを見回し、ここでは都合が悪いのかガルムは場

所を変えるようとする。

「良いのか？今回はガルム殿とヴァラル殿でまわる予定だったので
は？」

「別に俺は気にしない。別に一人二人増えても変わらないだろう」

「ヴァルがこう言ってるんだ。気にするな」

「……感謝する」

こうしてヴァラルとガルム、そしてマルサスは移動を開始する。後
ろではズシンズシンと地響きを鳴らして歩き続けるマルサスがあり、
誰が見ても奇妙な光景だった。

十分後、ヴァラルたちは周りには乾燥した荒野の大地に立っていた。
辺りには三人だけ、マルサスの巨体が有り余るほどの広大な場所だ。

「……よし、ここなら問題ないだろう。マルサスの二の舞にはなり
たくないからな。それにここからは徒歩だと時間がかかりすぎる。
ということでヴァラル、ちょっと待て」

ガルムはそういつと同時に、

人の姿を解き放った。

輝くような魔力の奔流が凄まじい勢いでガルムを中心に渦巻く。そ
のあまりの眩しさにマルサスは目を開けていられず、じつじつと竜

巻が発生したかのような突風をヴァラルはその身に受けて、ガルムはその姿を人から龍へと徐々に変貌させていったのだった。

そうして長いようで短い時間は終わり、彼は本来の姿を二人の前に見せた。

白銀に輝く宝石のような龍鱗、巨大な岩をも切り裂く長く鋭い爪、何者をも粉碎する巨大な顎、そして見るもの全てを圧倒する翼、

聖獣バハムートとよばれる存在がそこにはいた。

聖獣は四体存在する。

水のリヴァイアサン、炎のイフリート、地のタイタン、そして天のバハムートだ。

バハムートはドラゴンと呼ばれる強大な種族の頂点に君臨する。そのためなのか聖獣の中でも屈指の実力を持っているため、アルカディア内でも彼の真の姿と戦うことが出来るのはほんの一握りの存在だけだろう。

また、ガルムは聖獣であるにもかかわらず特定の聖地をもっていなかった。それ故、最後までヴァラルと行動を共にした唯一の聖獣でもある。

「ガルム殿の本当の姿……何時見ても凄いな……」

聖獣であり、ドラゴン族の覇者である彼の姿をみてマルサスが感動

に打ち震えている。

一方、その横でヴァラルは、

「何度見てもでかいな。やっぱり人の姿のままているのが正解だな」
そんなことを言っていた。

「おい！ヴァルまでそんなこと言うのかよ……まあ良い、それよりも早く乗れ」

「良いのか？」

ヴァラルは確認する。彼は背中に何かを乗せるのがあまり好きではないのだ。

「今日は俺が案内役だといっただろう？ほら、さっさと乗った乗った！」

「……わかった。ならお言葉に甘えんとするか」

ヴァラルはガルムの背中に乗ると同時に、彼は翼をはばたかせ、一気に急上昇した。そうしてヴァラルたちはメクビリス山脈へあるというガルムの住処へ向かった。

「こうしてガルの背中に乗るのも千年以上前のことなのか」

眼下には断崖絶壁の山岳地帯が広がっている。確かにこんなところ

を歩こうとするのは自殺行為である。けれど、こうして空を飛んでいる彼らには全く関係のないことだった。

「そんなに経ったのか。だが俺の背中に乗せた奴は今までにアイリスとセララン、そしてヴァルだけだな。光栄に思えよ」

確かに聖獣がこのようにして誰かと馴れ合うということ自体、非常に珍しいことではあった。だがガルムの場合、そんな枠組みから外れた存在であったため少々疑問が残る。

「はいはい、どうもありがとうございますがむさま。これで良いか？」

「……感謝の欠片もないお礼をどうも。そんなことより、そろそろ着くぞ」

軽口を叩き合っている間に到着したようだ。さすがはガルム、これほどの距離をあっという間に移動するとは、流石天のバハムートの名は伊達ではない。

「よっど……」

そうして彼は自分の住処へ着地し、ヴァラルも滑り降りるようになってその地へ立った。その後やや遅れてマルサスが到着した。

「おいマルサス、着地はもっと丁寧にしろ」

「す、すまない……」

ずずんときこちなく着地した彼は、ガルムの住処に訪れていること

でかなり緊張していたようだ。無理もない、聖地へ行くことが許されるのは聖獣に信頼されたほんの一握りの者たちだけだからだ。尤も、ガルムはそんなことを微塵も考えていないだろうが。

ここはガルムの住処である霊峰、所謂聖地である。以前は聖地を自分の手で造ることを考えもしなかった彼だが、フィリスがアルカデア内で海底神殿を造り始めたのを直に見て、対抗心に火がついたようだ。幸いにも時間は大量にあったため、彼なりに試行錯誤を経てつい最近完成したという。

辺りは霧がかかっているなかなか見えてこなかったが、不思議なことに草木の香りがした。すると、ゆっくりと霧が晴れ、その答えがわかった。

「これは……」

草原が広がっていたのだ、周囲一帯に。まるで空中庭園のようだ。蝶が舞い、多種多様な花があちこちで咲いている。仮にもここは荒々しい崖が立ち並ぶメクビリス山脈。そこはドラゴンのような強靱な生命力の持ち主が生きることを許される過酷な場所なのだ。

それなのにここだけは違っていた。砂漠のオアシスを見つけた遭難者もきつとこんな気持ちになったのだろう。

信じられないと。

「どうだ？ まだまだアイリスのユグドラシルには及ばないが、それでも何とかここまで出来たぜ」

得意げにふふんとガルムは鼻を鳴らした。

「十分すごい。ガルにこんな才能があったとは……別の意味でびっくりした」

(というかこんな場所を放置するとは……勿体無いにも程があるぞ)

「このことは龍達の間で長く語り継ごう。ガラム殿の住む場所はまるで桃源郷のようだな」

「そうだろう、そうだろう……っておい！マルサス！お前はそこまですしなくて良い！」

「何を言うのかと思えば。ガラム殿、ここへ呼んだということとは私にここを長く語り継げとそういうことではないのか？」

「違う違う、おれはただ……」

二人が言い争っているのを横目にヴァラルは辺りを散策する。

ユグドラシルでもそうだったが、彼らはやることがヴァラルの想像を遥かに超えるものだった。なので、彼としてはここまで大事になってしまったことに戸惑いを隠せずにいるヴァラルだった。

(まだやっていたのか、あの二人は)

だが、そんな暗い気持ちを見せるわけにもいかない。心機一転してヴァラルが二人の元に戻ってきてても彼らはまだ言い争っていたのだ。

(しかし、どうやって止めるか……そうだ、ものついでに聞いて

みるか)

「なあ、ガルム、マルサス。実はお願いしたいことがあるんだが、ちよつと良いか？」

「ヴァラル殿か。なんだろう、私に頼みごととは？」

「何だ？ヴァラル」

マルサスとガルムがこちらへ向き、彼は二人にあることを口にした。すると、二人は途端に驚きの表情を見せる。

(やはりまずかったか？)

「……そんなことか？別に俺は良いぜ」

「私も大丈夫だ。むしろ光栄の極みだ」

と思っていたヴァラルだったが、当然といわんばかりにガルムとマルサスは返事をした。

「良いのか？俺としては有難いんだが……」

「おう、他にもないお前の頼みだ。問題ない」

「いくらでも持っていつて構わない。どうせ直ぐに生えてくるものだ、気にすることはない」

「…わかった。それなら遠慮なく」

(しかし、こんなに簡単で良いのだろうか？もっと悩んでもいいものじゃないのか？)

「……まあ、別に良いか」

こうして、ヴァラルはウトガルドの探索を終えた。

とてつもなく大きな収穫を得て。

王の乱心

ヴァラルが目覚めてから三日目、セランもまた二人と同様ヴァラルに見せたいものがあるようで、ビフレスト区画の一角にある地下施設に来ていた。

「おいセラン」

「何でしょう？主」

「お前、フィリスやマルサスのこと隠してたな？」

「……はて、一体何のことやら。私にはさっぱり分かりませんよ」

「とぼけても無駄だ。二人から直接聞いたからな」

アイリスやガルムが聖獣や古代龍のことを事前に話さなかったのはセランの入れ知恵なのだという。

彼のこういうところは本当に意地が悪いのだ。

「あの二人、もう喋ったのですか。まあ良いです、ばれてしまったものはしょうがありません。主、とっとと先へ行きますよ」

「……それだけか……」

そうしてセランに聖獣や古代龍のことを詰問し、悪びれもしないセランと共に二人は地下を目指していたのだった。

「……にしても、森に山にとどめは地下か。どれだけアルカディアは広いんだ」

どこまでも伸び続ける地下通路をひたすら歩き続けているヴァラルとセラン。あちこちには同じような扉があり、似たような光景がずっと続いているので彼を見失うとここで迷子になってしまいそうだ。

「伊達に千年かけてませんよ。ユグドラシルは地上では最大の大きさを誇りますが、地下を含めればビフレストもそれに匹敵します」

なんでもアルカディアの地上部分が制圧された場合のことを考え、地下要塞を建造中のこと。さらにセランは幾つかの防衛策を検討中だとのこと。

その後はさすがに怖くて聞けなかったが。

「はあ、そこまで行くともう呆れるしかない」

ヴァラルはため息をつき地下通路、いやすでにダンジョンと呼んでも過言ではない階層をいくつも潜り抜け、ようやく目的地にたどり着いた。

ヴァラルは一瞬この場所が闘技場だと思った。

けれど、地下だというのにあまりにも広すぎて奥が全く見えない。

「ここは何なんだ？」

「主、国を形作るのに不可欠な要素、何だと思えますか？」

「……軍隊。するとここはその演習場か？」

「正解です。つい最近創設したばかりですが、一応この国にも軍はあります。とはいえまだ一万ほどですが……」

そう言うと同時にどこから現れたのか、黄金の甲冑に身を包んだ騎士たちが一斉に二人の前に集まりだした。様々な武器や盾、杖を持った彼らがあつという間に整列する姿は圧巻の一言だ。

（一万ほど？馬鹿を言うな、一人一人の錬度と魔力量が段違いだぞ。こんな奴らをどこから連れてきたんだ……）

セランは一体何と戦うつもりなのか、疑問は尽きないヴァラルだった。

「ガラムによると、ここ三百年の間にアルカディアの外では国がいくつか成り立ち、戦が行われるようになったそうです。その報告を受けて、私達もこの国を守るため軍を編成することにしたのですよ」

こんな大事なことをあっさりこの悪魔は言う。

（外の世界も国が出来たのか……）

ヴァラルは感慨深くなるのだった。

「……とはいえ、メクビリス山脈を力づくで越えられるのは今のと

ころ古代龍位エドゥン・ア・チムンしかないので特に心配はしていませんが」

ヴァラルの表情をみて、補足するようにしてセランは説明する。

（確かに、あれは徒歩で登るものじゃない。最低でも飛竜を連れな
いと無理だ）

昨日あの山々を眺めたヴァラルもその意見に同意する。

……それでも不可能に感じてしまう彼であったが。

「そういえば、前に見たあいつらは何なんだ？ここにはいないよう
だが」

ここにいる騎士達は全員黄金の甲冑を身につけている。贅沢、いや
悪趣味というか、セランが考えつきそうなことだ。けれど、玉座の
間にいた漆黒の甲冑を身につけた騎士達は見あたらなかった。

「彼らは主直属の部隊です。主の命令なら何でも従いますよ」

実力はここにいる騎士たちよりもさらに上で、言うなれば独立した
存在のようなものだ。セランは説明する。

（成る程、そういうことだったのか……ってちょっと待て）

「まさか俺が死ぬと命令すれば死ぬのか？さすがに冗談だろう？」

思わずヴァラルは尋ね返してしまった。

「死にますよ？試しに一人連れてきましょうか？」

さりとんでもないことを言うセラン。ヴァラルはきょんとしている彼の表情を見て本当のことだと実感するのだった。

「そんなことしないで良いッ！！わかったからッ！！」

「なら良いです。ああそうだ、ついでにこれを渡しておきますね」

セランはヴァラルに黒々と輝く宝石のようなものを手渡す。

「……これは？」

「彼らを召喚するための魔石です。どうぞ好きなときにお使いください」

「わかった……」

(使いどころは十分に考えないとな……)

ヴァラルはそう思い、セランから受け取ったその召喚石を”しまった”。

それを確認するや否や、セランは黄金の騎士達に彼を紹介し、その力を見せるようにと命令する。

するとそのとき、ヴァラルは何故セランが地下に施設を作ったのが今になってようやくわかった。

魔法が雨のように飛び交い、剣戟が衝撃波を巻き起こし土を巻き上げる。

そう、彼らの訓練は外でやるには余りにも危険なものだったからだ。こんなことをやればビフレストはあつという間に壊滅状態になってしまつだろう。それほどまでに訓練は過激なものだった。

（本当に危なすぎるだろう……ここは）

そのため、何時犠牲者が出やしないかと冷や冷やしていたのだった。

その後二人は地下の訓練施設を後にしてローレン城の巨大な倉庫へ足を運んだ。

ここは以前、ヴァラルが三人のために食料や衣類、様々な魔法具等、生活に必要なものをここへ保管していたところだ。

「何だ、全く減っていないじゃないか。三人とも使わなかったのか」
倉庫を見たヴァラルが驚くように言った。ぱつと見る限り、千年前と全く変わっていないかったのだ。

「いえ、勿論ある程度は使わせていただきました。けれどアルカディアが出来てから意外にこの国は豊かになったので、使った分はきちんとお返ししようと思ったのです」

「何だ、そんなことだったのか。変なところで律儀だなセランたちは」

「けれど、主に見ていただきたいところはここではないのです」

パチンとセラランが指を鳴らすと宝物庫の先に扉が現れた。所謂隠し扉というやつだろう、その扉をセラランが開け、ヴァラルを案内するのだった。

(今度は何をたくらんでいるんだ?)

扉を開けると長い通路が二人を待っていて、その左右には堅牢な扉がいくつもあった。奥にもまだありそうだったのでかなりの数になるだろう。

そして、セラランがその扉の一つを開け、ヴァラルをその中へ入れた。

「……………何だこれ？」

さすがのヴァラルも言葉を失った。

彼の視界には金銀財宝の山、山、山。部屋自体がかなりの大きさなので、それを覆い尽くさんばかりの量というのは想像だにしないだろう。後ろでニヤニヤしているセラランにヴァラルはやっとのおもいで声を掛けた。

「……………これは何だ、セララン」

「主のものですが」

「そうじゃない！これをどうやって手に入れたのかを俺は聞いているんだ！」

「先ほども言ったように、この国はそれなりに豊かになったんですけれど、さっきの宝物庫だけでは入りきらなかったので新たに作っただんですよ」

セラランがそう答えた途端にヴァラルは部屋から飛び出し、次から次へと扉を開いていった。

ある部屋はきらきらと色とりどりの輝きを放っている鉱石が山のようになり、またある部屋は貴重な魔法道具がぎゅうぎゅう詰めになった部屋、またある部屋は希少な秘薬や幻とも言われた霊木が所狭しと置かれた部屋だった。

そうしてヴァラルは通路にへたり込む。さすがにこれは彼の心に相当のダメージを与えたようだった。

(少しやりすぎてしまったか?)

セラランはそう思いながらヴァラルに近づいていった。

「しっかりとしてください。主はこの国の王、むしろこれくらいは当然なのです」

慰めのような、そうでないような励まし方でヴァラルを元氣付けた。

「……………俺はな、ここを皆の一時的な隠れ場所として造ったつもりなんだ。ここで傷ついた心と体を休めて、それから外の世界で再び頑張れるようにこの城を造ったんだ。それがどうだ？起きてみれば、周りは王様が目覚めたと騒ぎ立てる。セラランも知っているだろう？俺がした過ちのことを」

ヴァラルの口調が暗いものになる。

(しまった!!これはさすがにまだ早かったか!!)

セランは急いで二人に連絡した。

「ですからあれは」

「似たようなものだ。あれは俺がしたのも同然のことだ。皮肉だな、俺はお前達の同族を大量に見殺しにしてきたんだぜ?世界を救うという名の大義名分で。それを救世主のように崇める奴らを見ると笑えて来るよ」

こうなったヴァラルはしばらく手がつけられない。千年前も彼の自己嫌悪モードが何度かあったが、今回は少し、いやかなりまずい。

「……………」

「最初はさ、ここにいる奴らが幸せそうなのを見て、それでもいいかと思っていたんだ。だが、俺を見る目はどいつもこいつも結局似たようなものばかりだ。当然だよな、世界を救ったんだから。だが、そいつらはその結果だけしか見ようとしない。過程を省いてだ。俺の血なまぐさい冒険譚を聞かせたらきつとドン引きするぜ?」

「……………」

「そういうわけで、俺は辞めさせてもらおう……………後はお前たちで好きにしな。世界を征服するもよし、ここで一生暮らすのもよし、だが俺は眠らせてもらうよ。今度は誰も入れないようにするがな」

「言いたいことはそれだけか？」

「……ッがッッ！……！」

セラんに似つかわしくない男の声が響くと突然ヴァラルは殴られ、長い廊下を転がるようにして吹き飛ばされた。よろよろと起き上がるとそこにはアイリスとガルムがおり、セランが急遽彼らを呼び出したらしかった。

「はあ。全くヴァルの奴がここまでへたれだとは思わなかったぜ。何が俺を見る目がくだ。あほかっつーの。そんなの当たり前だ。お前さんがどう思うとも世界を救ったという事実は変わらん。過程はどうであれ、それは真実なんだ」

「それにですね、主。アルカディアの住人は主のやってきた血なまぐさい冒険譚とやらを全員知っています。知っているからこそ、彼らは貴方を崇拜するのです。誰が進んで火山の噴火口に潜るのですか？誰が地割れの中に飛び込むのですか？あのときの私達は自分のことしか考えていませんでした。自分さえ助かれればそれで良い。あの時代はそれが顕著でした」

「けれど主様はそのような中、自ら立ち上がり私達を滅びの道から救い出してくれました。過ちを犯したから？例えあの事実が本当だったとしても、私達にはそれを確認することは出来ません。そのことでまだ主様を糾弾する不埒な方がいるのなら私が許しません！消し炭にします！」

ガルム、セラン、アイリスが思い思いの言葉をヴァラルに伝える。アイリスからは少々物騒なことを聞いた気がするが、あえて気にしないことにした。

「それにですね、主。外の世界では既に人間たちが溢れかえっているのです。そんな中、私達が外の世界で暮らそうとしたらどうなるか分かりますか？彼らは私達の力を恐れ、排除し、あまつさえ利用しようとするでしょう。最早私達の安住の地はここしかないのです。そこをどこをどうか理解していただきたいのです」

セランは真面目な口調で必死に伝える。こんな彼は久しぶりに見た。

「他の国を征服すること自体、この連中なら簡単に出来るだろう。だがその後は？人間達に無用な混乱を与えるだけだ。それに世界が崩壊する様を俺達は見てきたんだ。争いがいかに無意味であったか、アルカディアの住人でそれが理解できない奴はまずいなさ。ま、そんなことも分からないで死んでいった馬鹿共は知ったこっちゃないが」

「それに主様、このアルカディアは外にあるどの国よりも豊かです。つまり、私達は外へ出る必要がないのです」

控えめなアイリスもこればかりは断言する。失われた魔法や技術を駆使し、千年かけて造り上げたのだ。そのため、既にこの国は彼女の誇りになっていた。

(……………何俺は馬鹿なことを言ってたんだ……………)

ヴァラルは彼らの言葉を聞き、改めて自分がいかに愚かだったということを思い知らされていた。罪滅ぼしだといって勝手に助けておいて、その後のことは放置する。彼らからすれば良い迷惑だ、だったら最初から助けなければ良かったのだ。つまり、世界を救ったのなら、その後にかかる責任もきっちり持てということなのだろう。

「すまなかつたな……つい愚痴をこぼしてしまった。これからは気をつける」

ヴァラルは大いに反省する。そして、こんなことを二度と口にしないとは彼は誓った。

「いいえ、主様。私達のほうこそ主様の気持ちを考えずに自分たちの考えを押し付けてしまいました。本当に申し訳ありません」

「いや、いいんだ。よく考えてみれば悪いことなんて全くないんだからな」

一体俺は何をうじうじ考えていたのだ。王となり、その国は安泰そのもの。このどこに不満があるというのか。あの金銀財宝の山を見て俺は少々錯乱していたようだ。そして、ガルムが殴ってくれることで改めて正気に戻ることができた。

「そういつていただけだけでも有難いです。それにしても……セラン！！いきなり主様にこれを見せるなんて貴方はどういう神経しているのですか？こんなもの、いきなり見せられたら誰だってびっくりします！！それにガルム！！主様をいきなり殴りつけるだなんて、何考えているんですか！！主様だから無事なもの、他の方だったらとつくに死んでいきますよ！！」

ほっとしたのもつかの間、アイリスが烈火のごとく怒り出した。

その後二人はアイリスにこっぴどく叱られていた。やりすぎたと思っただのか、ガルムとセランは黙って頷いているしかなかった。しかも彼女がこれほど怒ったのは初めてのようで、二人は小さくなって

いったのだった……

(アイリスを怒らせないようにしよう……)

ヴァラル、ガルム、セランは心に刻み込んだ。

救われたもの

「で？どうしてこんなにあるんだ？」

「ええ、それはですね……」

セランによると、アルカディア内に流通する品物はヴァラル商会という組織が取り仕切っているのだという。

「何勝手に人の名前を使っているんだ」

「気にしたら負けですよ、主」

因みに、最初の頃はとても小さな店から始めていたらしい。そして国が発展していくにしたがって徐々にその規模は拡大し、現在ではアルカディアで買い物をするならヴァラル商会が一番だと住人達から認識されるほど巨大なものに成長していったのだ。

そのため商会のトップ、つまり総帥であるヴァラルにはこれだけの財産が溜まっていったのだという。

「はあ、一体何をやっているのだから……」

自分の名前を使って商売を始めたり、勝手に総帥になってたりと、色々突っ込みどころ満載の話聞いていたヴァラルだが、これまでこのことを含めセランに一言言ってやりたかった。

（お前、やりすぎ）

所変わってここはビフレスト区画にあるヴァラル商会の本店。

木造五階建ての建物はアルカディアと共に歴史を積み重ねてきたかのような貫禄を放ち、通りを歩いているものなら知らないものは誰もいないと言えるほど知名度の高い所だ。

そして、そんな重厚感溢れる商会の扉の前にヴァラルとセランは訪れていた。

(それにしても、あの二人は本当によくやる……)

あの騒ぎの後、アイリスとガルムの二人はまだやることがあったよ
うで、ユグドラシルとウトガルドへ戻っていった。

仕事を放り出してまでわざわざ駆けつけてくれた二人にヴァラルは
別れる際に礼を言うと、二人は当然のことをしただけだと当たり前
のように答え、そのまま帰っていったのだ。

(持つべきものは友だな、やっぱり)

「主、ぼーっとしてないでそろそろ行きますよ?」

「ああ、悪い。すぐ行く」

そして、ついさっきの出来事を回想しながらヴァラル達は商会の扉
をくぐっていった。

「失礼しますよ」

「えっ……セラン様っ!?!」

セランが急に訪れたということでもヴァラル商会は大慌てになった。なにせ、ビフレストの責任者である彼が何の断りもなしにここへ訪れるのは極めて珍しいことだからだ。

(これで主も姿を現したらどんなことになるのでしょうかね)

(うるさいぞ、少し黙っておけ)

そして、急遽通された応接室で二人はヴァラル商会の代表を待ち、小声で彼を黙らせたのだった。

「……しかし、よろしかったのですか?わざわざ主自ら出向くことはなくても」

「何を言っているんだ。城の宝物庫を見ただろう。あれほどの財を築いてくれたんだ、俺が礼を言わないでどうする?」

そう、今回ヴァラルがここへ訪れた理由は城にあった大量の財宝を寄贈してくれた人物へ感謝するためだ。あれを知った以上、そのまま放っておくわけにはいかない。二人はこの後の予定を全てキャンセルし、ヴァラル商会へやってきたのだ。

……まあ、その予定とやらもほとんど思いつきで決定したようなも

のばかりだったとセランは後に語っていたが。

(ん？誰かが来たな？)

すると、小走りでこの応接室に近づく気配があった。きっとヴァラル商会の代表なのだろう。急な訪問だったが、この場所で仕事をしていたようだ。そしてあつという間に部屋の扉が開かれ、その人物が顔を見せた。

深紅と呼ぶにふさわしい赤い瞳、かつてこの地域を覆っていた雪原のような純白の髪を持つ吸血鬼ヴァンパイアの男がセランたちの前に現れた。

「おお、これはセラン殿。急にこちらへお越しくださるとは珍しい。何か私達に依頼でも？」

ヴァンパイア。夜の闇に紛れ、生き血をすすり、様々な生き物に恐怖を撒き散らす存在。だが、この場にいるヴァンパイアは一般的に伝えられる存在と一線を画していた。

それもそのはず。遙か昔、存在が確認されただけでも僅か数体ヴァンパイア・ロードだけという、ヴァンパイアの中でも特に稀少とされる存在、真祖なのだから。

ヴァンパイアロード。夜の王と呼ばれている存在は、ヴァンパイアの突然変異種だと考えられている。なぜなら彼らは生き血をすする必要が無いからだ。またその身に秘めた魔力も桁外れのもので、同族から畏怖の対象となっていた。そのため彼らは必要以上にその存在を秘匿し、現世との関わりを断っていたのだ。

「いえ、ヘスター。こちらの方が貴方には是非礼を言いたいとのこと

で。私はその付き添いです」

セランが言ったのを確認して隣にいたヴァラルが姿を現した。

そのとき、突然現れた男にヘスターというヴァンパイアは一瞬身構えたが、その髪と瞳のを見て驚愕の色をあらわにした。

「はじめまして、だな。俺はヴァラル。城にあった宝の数々がお前さんのおかげだということをさっき知ってな、改めて感謝しに来た。もしかして都合が悪かったか？」

簡単に自己紹介をしてヴァラルは目の前の吸血鬼を見る。

(こいつとはどこかで会ったような気がするな……しかしそれはどこだったか……)

ヴァラルは自身の記憶を掘り起こすようについ考えこんでしまった。

「いえ、決してそんなことはッ！お目覚めになられたとは聞き及んでいましたが、こんなに早く訪れていただけとは思っていません。つたもので……それよりもヴァラル殿、私達からも礼を言わせてくださいッ！」

「礼？一体何のことだ？」

もしかして見覚えがあることと何か関係があるのか。ヴァラルはつい尋ね返していた。

「私達は貴方に命を救われたのです」

そういつて、ヘスターは語りだした。

かつて、吸血鬼には幾つかの派閥があった。ヘスターのような真祖に対して好意的な感情を向ける擁護派、それとは逆に彼らを恐れ、排除しようとする過激派、その二つに大きく分かれていた。

だが擁護派といっても真祖の力を利用し、自分達の道具にしようと画策する吸血鬼が大勢いたため、実状としてはどちらも似たり寄ったりだったそうだが。

その頃、ヘスターは妻と娘の三人で人里はなれた小さな村で雑貨店を経営していた。そこまで儲かる仕事ではなかったため、生活は貧しいながらもひっそりと暮らしていたのだという。

けれど、大災厄が起こったことで状況は一変する。

どこから彼らの存在がばれたのかは分からなかったが、過激派が攻め込んできたのだ。統制の取れた動きを見せていたため入念に準備してきたのだろう、彼らの動きに無駄はなかった。

尚、大災厄の影響により、吸血鬼の連中とヘスターの双方は思うように戦うことは出来なかった。それでもヘスターは真祖であるがゆえ、数で勝る彼らに妻と二人で互角に渡り合うことができた。

娘が人質に取られるまでは。

まだ幼く、力を上手く扱うことが出来なかった彼女は、物置に隠れていたところを過激派の一人である吸血鬼に見つかってしまったのだ。

……それからは一方的に彼らの為すがままだった。

ヘスターは取り押さえられ、彼らに四肢を折られて、全身のあらゆる場所に無数の傷をじわじわとつけられていったのだ。

ここで、強靱な回復力を持っていたことが仇となり、怪我が治ると同時に四肢は再び折られ、体を傷つけられていったのである。怪我が治るとはいえ、受けた苦痛までは癒すことは出来ない。しかもヘスターの魔力も無限ではないため、徐々にその回復力は落ちていき、一週間が経過した後、彼は瀕死の状態になっていた。

辛うじて妻や娘には手出しはなかったが、二人はヘスターがいたべられる姿を常に見せ付けられることで絶望に顔を歪ませ、心が折れかかっていたのであった。

「そんなとき、貴方が現れた」

そして止めを刺される直前、ヴァラルが現れた。

いきなり人質の見張りである吸血鬼たちを倒され、慌てる彼らを見ながらヘスターは意識はそこで途絶えた。けれど、最後に見た漆黒の髪と瞳は今まで忘れたことはなかったという。

「目覚めると、妻と娘の二人からあの時どのようなことがあったのかを説明してくれました。彼らを倒し、私を治療した後は妻に安全

な場所を教え、去り際にヴァラルという名前を言ってその場を去っていったそうです」

まるで英雄譚を話すかのようにヘスラーは語り終えた。深紅の瞳がさらに赤くなっている。感激のあまり泣いているのだろう。だがその一方、ヴァラルは別のことを考えていた。

（随分と派手なことをやらかしたみたいだな、当時の俺は）

助けたときは幼さの残る青年のような感じだったが、今見ると印象がまるで違う。男らしさが増したというか、ダンディーな紳士になったというべきか。

……涙で顔がぐしゃぐしゃになっていたが。

「そして、セララン殿が私達を見つけてくださり、アルカディアへ移住しないかと誘ってくださったのです。今は主が眠っているが、国を造ることに協力してくれないかと。その主の名前を聞いたとき私はびっくりしました。それはそうです、何故なら家族を助けてくれたあのお方だったのですから」

涙を拭きながら、彼は語る。

その後、ヘスターたちはアルカディアで再び雑貨屋を経営していたのだそうだ。ヴァラルに恩返しをするためなのか、見る見るうちに雑貨屋は成長していき、ここまでの大規模なものになったという。

「私達にとって、ヴァラル殿は世界を救ってくれた英雄でもありません。ですが、それ以上に家族を助けてくれた恩人なのです。あのときは本当にありがとうございました……」

その言葉にヴァラルは揺らいだ。世界を救ってくれたからではなく、家族を助けてくれたというごく当たり前の素直な感謝の気持ちに。

こうした感謝を受けたのはこれが初めてではなかった。だが、そのときのヴァラルは罪の意識に苛まれていたため、その言葉が彼の心に響くことはなかった。けれどガルムに殴られ、セランとアイリスから思いの丈をぶつけられた今はその言葉を真正面から受け止めることが出来た。

(無事で何よりだったな……)

ヴァラルは心の底からそう思うことが出来た。

真祖の娘

その後、二人は商会后にしてヘスターの家へ向かった。

是非妻と娘にも会ってください！！

と、半ば強引に連れて行かれたヴァラルだが、あの二人がどうなっているのか気になっていたため、特に嫌な気はしなかった。

「すごいな、これ」

「流石です。よく手入れが行き届いていますね」

「気に入っていただけたようで何よりです。きっと二人も喜ぶでしょう」

ビフレストにあるヘスターの自宅もまた立派な所であった。侵入者を一切通さない巨大な門を通り抜けると荘厳な庭園が広がっており、ヴァラルとセランを驚かせた。ヘスターによると、これは妻のエイミアと娘イリスの趣味なんだとか。それにしてもこれほどの規模になると維持するのも大変そうだ。いや、これほど豪華な屋敷だ。使用人も大勢いるのだろう。

「……お帰りなさいませ、旦那様」

「ああ、ただいま」

入り口の扉をくぐると、何十人もの使用人が三人を出迎える。妻のエイミアは商会の副代表であるため取引先との打ち合わせ、娘のイ

リスは魔法学院にいるのだそうで、現在この場にはいなかった。

「おいおい、ここに住んでる連中に学校なんて必要あるのか？」

思わずセランとヘスターに尋ね返すヴァラル。何せアルカディアの住人は魔法のエキスパート達が大勢いるのだ。そのため彼らは今更学校に通う必要性があるのだろうかと彼は疑問に思った。

「主……勘違いをされているようですが、全員が私達のように魔法を扱えるわけではないのですよ？」

セランはヴァラルの的外れな質問に苦笑しつつ、こう答える。

「ヴァラル殿、捕捉しておきますとセラン殿は魔法学院の理事長でもあるのです」

「そうなのかよっ!?!?……おいセラン、ちゃんと教えられるのか？」
さらにヘスターが衝撃的な事実を彼に告げ、ヴァラルは驚愕した。
子憎らしいこの悪魔が教鞭をとる姿などとても想像できなかったからだ。

「私はたまたま学院のほうに顔を出す程度です。実質、リスが責任者ですからね」

「……おい、ヘスター……娘のリスは今学院にいるんだよね……」

「はい、学院長としてですが」

「……………」

当たり前の話ではあった。あれから何年の時が経ったと思っているのだ。ヴァラルはまたも盛大な勘違いをしたのだった。

「どうやら主には多大な誤解があったようですね」

セランはアルカディア内における魔法学院の解説を始めた。

ビフレストにあるメルディナ魔法学院は単位制を採用しているのだという。初等部、中等部、高等部、カレッジクラスと別れており、必修単位を取得した後、新たな科目を選択し、取得していくという形だ。

初等部から高等部までの間はアルカディアに住んでいる者ならば誰でも入学資格があり、カリキュラムも比較的緩やかだ。さらに授業料もほぼ無料といっても過言ではないくらい安く、真面目に取り組むことで卒業することも容易である。

因みに、高等部を卒業する時点でアルカディアで生活する上での十分な知識、技能、経験を得ることが出来るが、希望者にはさらにその先がある。

カレッジクラスだ。

カレッジクラスは初等、中等、高等部とは違い、科目ごとに卒業資格が設けられているため、一定数の必要単位を取得した上での卒業という概念は無い。

けれど、一つの単位を取得するだけでも十年以上かかるものがほと

んどであり、さらに設置科目が無数にあるため、全ての科目を制覇するのは事実上不可能だといわれていた。

「いわれていた？」

「カレッジクラスの科目を全て取得した人がいるんですよ。一人だけ」

メルディナ魔法学院に存在する一人の才女、それがイリスだという。

彼女はカレッジクラスに入学すると同時に、日常生活に支障を及ぼさない範囲で取れるだけ科目をとっていった。魔法に関する複雑怪奇な学問を一年ごとに行われる試験でことごとく優秀な成績でパスし、周囲を驚かせていったのである。

一つとるだけでも、十年かかると言われる科目を一年で取得、それも複数同時という前代未聞の事態にさすがのセランも驚きを隠せなかったという。このため、彼はその日のうちにメルディナ学院の教授に彼女を推薦したのだという逸話まで残っている。

「確かに、セランが他人を褒めるだなんて滅多にないからな。確かに驚かれるわけだ」

「しかもそれだけではないのですよ、彼女は」

教授になってからもイリスはカレッジに設置されている単位を堅実に取得していった。そしてヴァラルが目覚める二百年前、彼女は前人未到のカレッジクラスの全単位取得という偉業を成し遂げたのだ。それを機に、セランは学院長職をイリスに譲り、そのまま引退しようと思っていた。

「私はこれでも忙しい身ですからね。なのに彼女ときたら……」

「あのときは本当に申し訳ない……けれど、娘にも考えがあつての事だったので。それをどうか……」

「分かっていますよ、ヘスター。別に気にしていません」

けれど、彼女は己の才能に胡坐をかいていたわけではなかった。学院長に就任した直後に、教授陣を抱きこみ、セランを理事長として学院に引き留めたのだ。

ヴァラルはセランのことを悪戯好きの性悪悪魔だと思っているが、アルカディア内の彼の評価はそのようなものではなかった。ビフレストをアルカディア一の経済特区に仕立て上げた彼の手腕は凄まじいものがあり、魔法の知識も才女であるイリス以上と目されていたのだ。そのため、彼を逃すことは学院の大きな損失であると考えたイリスは決して彼を学院から逃がすことはなかった。

「……やれやれ、一体誰に似たのやら。その強引さ、まるで主を見ているかのようでした」

一通り語り終えた後、ヴァラルの顔を見やるセラン。何故かは分からないが、とても満足げな顔を浮かべていたのだった。

「いや、どう考えてもお前のせいだろう……すまない、ヘスター。娘さんを預けたばかりに……」

ヴァラルはセランに突っ込みをいれ、割と真剣に謝罪をする。話を聞く限り、折角の貴重な逸材がセランのような性格を引き継いでし

まったと感じたからだ。

「だったらもつと早く目覚めればよかったです」

「無茶言つなよ」

だが、そんな二人のやりとりを見ていたヘスターは苦笑していた。家族を助けてくれたこの国の王がこんなに気さくな人だとは思ってもしなかったし、セランも彼と会話するときはとても楽しそうにしているのを見て、プライベートの彼はこんなにも面白い人だと想像できなかつたのだ。

そして、この国が発展した理由が今やっとわかつた気がした。王は民を想い、民は王を思う。簡単そうに見えて非常に難しいことを彼らは為し続けているのだ。

(まだまだ自分も精進しなければ……)

ヘスターは決意を新たにするのだった。

さっきのやりとりを延々と廊下で繰り返していたヴァラルとセランは、ヘスターに案内された豪華な客室で夕食が出来るまで待つことになった。

「それでどうでしたか？ユグドラシル・ウトガルド・ビフレストをまわった感想は？」

出された紅茶と茶菓子を楽しみながら、二人は今までのことを振り

返っていた。

さすがにアルカディアの商人の屋敷に出てくるだけあって本当に美味しい。夕食が出来るまでのつなぎとしか考えていなかったが、茶菓子があつという間に減っていったため、ヴァラルは自重しセランの問いかけに答えた。

「凄く楽しそうだったな。ここに来る前はあいつら結構大変な目に逢ってたんだろう？それが嘘に感じる位だ」

事実だった。お忍びが功を奏したのか、どこの区画でも住人達の間には明るい顔をしていて希望に満ち溢れていた。千年経過しているのだから何かしらの問題が発生してもおかしくはないのに、それが全く感じられなかったのだ。アイリスたちのおかげなのだろうが、それ以上にアルカディアに住む住人たちのモラルが異常に高い。そのため、ヴァラルはこの国がどれだけ優れているのかを肌で実感していたのだった。

「しかし、最初の頃は結構大変でした。各区画同士のいざこざがあったり、この国を乗っ取ろうとする不屈き者がいたり。前者の方は話し合いで何とかなるのですが、後者は流石に……」

「ああ……それは気の毒だったな」

勿論、そう思ったのはセランやガルム、アイリスの三人ではなく、謀反を起こした連中にある。

アイリスは先程のことで怒らせると予想以上に怖いことが判明したが、ガルムとセランが切れると本当に洒落にならないのだ。

「……そんなことが多々あってこの国はここまで来たんです。どうです？この国に対して愛着は沸きましたか？」

「……愛着も何も、俺は眠るときからここでずっと暮らす予定だったんだ。それを今更言うか？けれど、多少守るものが増えたただけだ。何の問題も無い」

ヴァラルは事も無げに言つてのける。宝物庫で何かが吹っ切れたのか、その言葉に偽りは無かった。

「それは良かった。これでもまだ沸かないようなら、もっと凄いことを考え付く所でした」

「勘弁してくれ……今日は結構頑張ったんだ。少しは主に対して労いの言葉があってもいいんじゃないのか？」

「これくらいでへばってもらっては困ります。主にはもっと色々なことをしてもらつ予定なので」

彼の脳内では様々な計画があるのだろう、怖いくらいの笑顔でヴァラルに告げた。

「……ずいぶん見ない間に性格が悪くなったじゃないか。というか、さっきアイリスに叱られたばかりじゃないか」

「それはそれ、これはこれ、です。私はこれでも悪魔ですから。主こそ随分と心が小さくなりましたね。以前はあれほど威厳に満ち溢れていたというのに、嘆かわしい限りです……」

よよよと泣き崩れるセラン。やたら美形なだけに見るものが見れば情欲をそそられるかもしれないものだが、ヴァラルは気味悪がっていた。

「セラン、正直言つて不気味だ……それにあの頃の話を持ち出すな。元々の性格がこうだったんだ。それを無理に捻じ曲げていただけだ」

「まあ、その性格は追々直していくとして……そろそろ時間なので行きましようか」

しかしそれは嘘泣きだったようで、彼はヴァラルを急かした。

「何だ？何かあるのか？」

大体こういふときのヴァラルの勘は当たる。嫌な予感だけだが。

「主、城ならともかく、商会の総帥である貴方がそんな格好で夕食に顔を出すだなんて考えられません。ヘスターにはもう頼んでいますが、主には身支度をしてもらいます」

「どうせそんなことだろうと思ったよ……分かった。もうどこでも好きに連れて行くがいいさ……ってうおー!!」

諦めた口調でヴァラルが言うと、入り口からヘスターの従者たちが突然現れ、ヴァラルを連れ去っていった。彼は浴場と思われる場所で強制的に入浴させられた後、衣装室でセランが着ているような貴族の服に着替えさせられてしまうのだった。

(あつという間だった……しかし、どうにも動きづらいな。これ)

このような服というのは、質は確かに良いのだが少々堅苦しくて苦手だ。ヴァラルは独りごちながらそう思った。

ヘスターの従者が案内してくれた部屋では、既に役者がそろっていた。セラんにヘスターそして、その妻のエイミアと娘のイリスがいて、エイミアとイリスの印象はそれぞれ異なる雰囲気を持っていた。

「ヴァラル様、お久しぶりです。お元気でしたか？」

エイミアがヴァラルに声をかける。再会できたのが何よりも嬉しそうだ。

彼女はアイリスと同じ美しい金の髪を持ち、鮮やかな赤の瞳でヴァラルをじっと見ていた。外見の年齢で言えば二十台の後半といったところだろうか。白いドレスが彼女には非常に似合っており、彼女のおっとりとした雰囲気がこの場を和やかにさせていた。

「ああ、エイミアの方こそ元気そうでした。あんなことがあったんだ、色々と心配したんだぞ？」

「おかげさまで。今はこうして家族と三人で過ごさせて頂いています。それよりも、娘を紹介させてください」

そういつてヴァラルの前にイリスを引き合わせた。

「ヴァラル様、以前はお父様とお母様を助けていただき、本当にありがとうございました。紹介に預かりましたイリスと申します。どうぞお見知りおきを」

そういつて、ドレスの裾をつまんで優雅にお辞儀をした。

イリスは両親から受け継いだのか、プラチナブロンドの艶やかな髪だった。外見は二十台の前半でエイミアと対照的に黒いゴシックドレスを着ており、真紅の赤い瞳でヴァラルのことを興味深く観察していた。

因みに二人共、百人の異性がいれば百人とも必ず振り返るくらいの美女だった。

それも恐ろしいくらいに。

「よろしく。セランから話は聞いたぞ、何でもカレッジクラスを制覇したそうだな。すごいじゃないか、あいつが誰かを褒めるだなんて滅多に無いし」

「そんなことはありません。あのときは私のせいでお父様を失いかけました。あれくらい当然のことです。それに……」

「何だ？」

「……何でもありません。お父様、そろそろ食事が来る頃では？」

イリスが一瞬口ごもったかと思うと、父のヘスターに立ち話は何だからと席へ移動するよう促す。

「おお！そうだな。ささヴァラル殿、セラン殿、どうぞこちらへ」

そうしてヴァラルとセラン、ヘスター家の合わせて五人の夕食会が

始まった。

彼が代表として改めてヴァラルたちに簡単な挨拶をした後、食事が運ばれてくる。

(言いつー！)

出されてた料理は、材料である肉・魚・穀物、野菜・果物はどれも超一級品であることを伺わせ、それらが調理されることで一品一品がこの世のものとは思えない程、極上の味だった。

さらに、ヘスターとエイミアのビフレストで実際にあつた商談、イリスの魔法学院での出来事をそれぞれが面白おかしく語り、時間は瞬く間に過ぎていったのだった。

そうして食後のデザートである様々な味のアイスを食べ終えて一息ついた後、ヴァラルは改めて口を開く。

「それにしても、イリスが美人になったのは本当にびっくりした」

イリスと出会ったときはまだ十歳にも達していなかったはず。けれど、目の前にいるのは妖艶な美女。あまりの成長ぶりにヴァラルをひどく驚かせた。

「ヴァラル様、私達も成長するのですよ。ヴァラル様こそ、昔と全く変わっていないのでは？ 私としてはそちらの方が驚きです」

「俺はただ寝てただけだからなあ……それならセランのの方が凄いな

じゃないのか？」

「主、今まで黙っていましたが私には小じわが出来ているのです…」

「へえ、どれどれ……って単に眉をひそめただけじゃないか！勘違いさせやがって！」

たまにセランはヴァラルを笑わせようとする。だが、それらの大半は寒いもので、今回もまた失敗に終わるのだった。

そして、そんなやりとりを微笑ましげに見ていたエイミアが時間を確認し、二人に尋ねる。

「ヴァラル様、セラン様。今日はもう遅いですし、こちらへお泊りになってはいかがですか？」

「おお、是非そうしてください！」

ヘスターも続けて二人を誘った。

すっかり夜も吹け、外では星が輝いている。確かに、外へ出るのを躊躇う時間帯だ。けれど、

「ああ、大丈夫。俺達はそろそろお暇させてもらおうよ」

ヴァラルはやんわりと断った。あくまでこれは内緒の視察なのだ、しかもユグドラシルやウトガルドでも城に戻って休んだため、ビフレストだけ鼻屑するわけにはいかないかった。

また……イリスからなにやら変な雰囲気醸し出していたのも、此処へ泊まる事を躊躇させた理由の一つだった。

ヘスターとエイミアは善意で言っているのは間違いない。けれどイリスはそれを見越していたのか、ただ静かに紅茶を飲んでいた。

「そうですか……それでは迎えのものを出します。少々お待ちください」

ヘスターは残念そうに部屋を出て行き、エイミアもまた二人に土産を持たせてくれるようで、そのまま厨房へ向かっていく。

その際、ちらりと娘のと合図をとったような気がした。

「主、服を取りに行ってください。少々お待ちください」

セランもヴァラルの服を回収しに行く。その言動に不自然さは無かったが、どうにも怪しいとヴァラルは思った。

そして部屋にはヴァラルとイリスの二人きりになった。

まるで誰かが仕組んだかのように。

「ヴァラル様、どうして断ったのですか？」

「分かっているくせに何を言っているのだから」

彼女が何を企んでいるのかは分からないが、ヴァラルはこの状況を

作り出したのはイリスだと踏んでいたのだった。

「あら残念。泊まっていただければそれは良い夢を見ることが出来ましたのに」

「生憎千年眠っていたのでね。夢はもう飽きるほど見た」

二度と見たく無いものがあつたのか、彼は不躑に答える。

「……ならまたの機会にしますか。本当は色々と御奉仕の準備が整っていたんですけど……しょうがありませんね」

「そうしろそうしろ。もう寝る時間だからな、早くベッドに入ったほうが良いぞ」

何の準備だかは知らないが、変な色香を振りまくイリスの誘惑を断ち、ヴァラルは子供のように彼女を扱う。

結局彼の中ではいまだに十歳の頃の彼女が印象づいていたのだった。

「もう……そうやって子ども扱いして……もしかして、そちらのほうがお好みとか？」

「違うわっ！」

実のところ、イリスは彼と二人っきりで話をしたかったようだ。彼女が此処へ移住したときは既にヴァラルは休眠中。そのため彼が此処へ訪れていると聞いたときは、感激のあまり気絶しそうになったという。

因みに今でも平静を装ってはいるが、胸の動悸が止まらないように、しきりにヴァラルに対し熱い視線を送っていた。

(普通に話してくれれば良いものを……どうしてこうまどろっこしい真似をするのか……)

一方、ヴァラルはそんな情念の凝り固まった彼女の気持ちを全然わかっていないのであった。

そして短い会話の時間は終わり、迎えの馬車がやってきた。ヴァラルの着ている服はそのまま進呈されることになり、いよいよヘスタ―達との別れが近づいてきた。挨拶を済ませ、これから出ようとするとときにイリスがヴァラルにすつと近づき、

「また来てね、ヴァラル」

耳元で艶めかしく囁いた。

(……イリスのやつ、猫かぶっていやがった……)

ヴァラルは彼女のドッキリに最後の最後まで気づかなかったのだった。

ヴァラルの決断

ビフレストを訪れた数日後、ローレン城の玉座の間はかつてない熱気に包まれようとしていた。千年の長き月日を経てこの国に新たな王が誕生するのだから、盛り上がらないはずがない。

そしてその中にはヴァラルたちの見知った顔もあった。

「……アイリスとヴァラルはまだ来ないのか」

老剣士の姿をした彼は聖獣リヴァイアサンのフィリス。彼もまたこのローレン城へ招待されていたのだが、とてもイライラしていた。

彼はガルムとは違って気難しい性格であるため、他の者達とこうして会うのはどうも苦手なのだ。

「フィリス殿、落ち着きなされ。彼らが来るまでまだ時間はある。急いだところでどうにもなりませんまい」

「……うむ、そうだな。すまなかつたなマルサス」

落ち着いた男の声でフィリスを諭したのは仰々しい騎士の格好をした古代龍エンシェン・ド・マルサスのマルサス。その指摘は正しかったのか、フィリスは謝罪し、腕を組み、目をつぶることでじっと二人が来るのを待つことにしたのだった。

（聖獣リヴァイアサン……やはりガルム殿と同じ雰囲気を感じさせる……）

マルサスはそんなフィリスをみて内心動揺する。ガラムと話すことは何度もあったのだが、同格の存在である彼とこうして会話するのは初めてのことで、この場の雰囲気も合わさってかなり緊張していたのであった。

「フィリスにそういいながらマルサス、お前さんも随分きよるしているようだが？」

するとマルサスの心を読んだかのようにエドが話かける。彼もまた、ドワーフの代表の一人として呼ばれていたようだ。

「そ、それは……」

「安心しろ、わしも震えておるわ……考えてもみる、アルカディアは千年の歴史を持ちながらもいまだ正式な王は誕生していなかったのだ。それにユグドラシル、ウトガルド、ビフレストに存在する種族が一同に介しているのだ、緊張しないほうがおかしい」

口ごもるマルサスを慰めるように言っただけでエドはマルサスを目で促す。すると妖精王セイランと幻獣の長フェンリルがヴァラルについて語り合っていた。アイリスが見込んだ男だとか、フィリスと旧知の仲であるとか、一つ一つの内容が途方も無いものだが、大体あつているところがまた凄い。

基本的にユグドラシル、ウトガルド、ビフレストの住人は最低限の交流する機会はあるのだが、このような大規模なものはいままでなかった。アイリスやガラム、セランが有能すぎるため、彼らを仲介することで大抵のことがどうにかなってしまうのだ。

尚、ここにいる種族は人の姿を取っていて一見分かりにくいだが、それでも一人ひとりが強大な力や魔力を持っていることはすぐに分かった。

空気がまるで違うのだ、ここは。

「随分と大物達が集まっているのだな……」

マルサスはそれらを呆然と眺めていた。

「……しっかりしろ、マルサス。お前さんだつて相当注目されているぞ？ 舐められないために、もっと堂々としなければ。仮にもエンシエント・ドラゴンの王なんだぞ」

エドはおどおどしているマルサスを叱咤激励する。

何だかんだいってアルカディア内でマルサスは相当の実力の持ち主だ。他の区画よりも強大な種族が闊歩しているウトガルド内でも最強の名を欲しいままにしているのだが、どうもその自覚が足りないようで親友として彼を心配するエドがそこにはいた。

「失礼、ドワーフのエドさんでよろしいでしょうか？」

「誰だ？ あんたは？」

すると、エドはとある魔族の男に声をかけられた。その男はビフレスタの魔法研究所に勤める職員のように、エドの鍛冶技術の高さに興味を引かれ是非話を伺いたいとのことだ。

「まあいいだろう……マルサス、この機会に新たな友人でも作るこ

とだな、頑張れよ」

エドもまた、男の語る内容に好奇心を刺激されたのか、二人はそのまま会話に没頭するのだった。

「……さすがだな、エド。私も見習わなければ」

マルサスに興味がわいたのか、妖精王と幻獣の長が話しかけようと近づいてきたのを見て、彼もまた気持ちを切り替えていった。

「いやはや、これはまた凄いな……」

ヴァンパイア・ロード
真祖のヘスターとエイミアもまたこの光景に驚いていた。大勢での会食を幾度も経験していた彼らだったが、それはあくまでもビフレスト内のことであり、こうして全区画の種族の代表が揃うのは前代未聞のことだったからだ。

「あなた、セラン様がお見えになっていないようですが」

「エイミア、セラン殿はきつとヴァラル殿の所へいるのだろう。今日は彼の夢が実現する日なのだから」

「そうでした。よく考えてみれば当たり前のことでしたね」

そう、元々アルカディアという国造りはセランが最初に提案したのだとアイリスとガラムから以前聞かされていた。セランは冷静沈着な性格だが、目的のためならあらゆる手段を用いても成し遂げようとする情熱的な面を持つ。その彼の夢なのだ。時間はかかったが、

ようやくそれが叶おうとしているのだ。ここへいるはずが無い。

セランは物事を一人で解決しようとする癖がある。そのためヘスタは危なっかしい彼を影ながら支えてきた協力者の一人なのだ。

「おや、そういえばイリスはどこへ行ったのだ？」

「あなた……」

少し抜けたところはあるが。

その頃、ヴァラルたちは玉座の間から少し離れた城の一室に集まっていた。これから始まる式典のための最終確認を行っていて、後は準備が整うのを待つだけである。

「しかし、国の王様ねえ。俺は別に良いんだが、他の連中はどうなんだ？ マルサスやエド、ヘスターたちは皆良い奴だったが、平気なのか？」

セランが用意してくれた台本を読みつつヴァラルは四人に尋ねる。緊張感がまるで感じられていないその姿は本当にこの国のトップなのかと思わせる位だ。

「私達が長年主様のことを語り続けてきたので、その辺りは大丈夫です。むしろ主様に興味津々といったところでしょうか」

「ヴァラルは言わば生きた伝説だからな。俺もよく質問攻めにあっただぜ」

「御伽噺に出てくるような英雄がこの世に現れるだなんてさすがに想像できませんからね」

「それを成し遂げる辺り、ヴァラル様はさすがといたしますか」

アイリス、ガルム、セラシ、そしてアイリスが次々と彼に言葉を返していく。

あの日以来、アイリスは毎日この城へ来るようになった。まだ数日しか経っていないのだが、すっかりこの場に馴染んでおり、各区画の責任者の三人を前にして堂々と立ち振る舞うその姿は非常に魅力的だった。

けれど、たまにセラシが二人いるような錯覚に陥ることがヴァラルにはあり、そのためなのか、気苦労も加速度的に増えていくヴァラルであった。

「お前たちの方がよっぽど化け物じみている気がするけどな……」

ヴァラルにとっては千年此処を平穩無事に保ち続けていることの方が信じられないことだった。半不老不死の彼らを纏め上げ、此処まで国としての体裁を保っていたのは並々ならぬ彼らの努力があったことだろう、彼は改めて感心する。

「っとそろそろ時間じゃないのか？」

ヴァラルが時間を確認した。そろそろ四人は戻ったほうがよさそうな頃合だ。

「時間が経つのは早いですね主様。それでは一旦失礼します」

「ああ、また後でな」

「ヴァル、緊張してびびるなよ？」

「お前がな、ガル」

「黒騎士が出迎えに来ます。逃げないでくださいよ？」

「分かってる。何回目だ、このやりとりは」

「ヴァラル様、私達家族も楽しみにしていますね」

「イリスもな。こんなことはそう何度もあるものじゃないからな。ヘスターたちにもよろしく言っておいてくれ」

そして、四人はヴァラルと簡単なやりとりをした後、部屋を出て行くのだった。

(……………行ったか……………)

後に残されたのは、ヴァラル一人だけ。まだ目覚めてから十日もたっていないが、これまでのこと、そしてこれからのことを考えていた。そしてこの国のために一体自分は何が出来るのだろうかとヴァラルはずっと考え続けていたのだった。

(やはり、俺に出来るのはあれしかないのかも……………)

そして一つの決意が彼の中で生まれると同時に部屋の扉が開かれ、

黒騎士と共に部屋を後にしたのだった。

玉座の間へ到着すると視線が一斉にヴァラルに集中する。しかし、誰一人騒ぎ立てる者はおらず、厳かな雰囲気にもまれていた。そしてヴァラルは視線をやりすごし、そのまま玉座へ歩いていった。

戴冠式もまた滞りなく進行する。セランたちが綿密に計画していたおかげなのか、アクシデントの一つも起こらなかった。そして、ヴァラルの前にドワーフたちの持ちうる全ての技術を投入した世界でただ一つの王冠が差し出された。

そのとき、ヴァラルは予定には無い自らの決意を彼らに告げるのだった。

「皆みなの者っ！！私はかつてこの地で長い眠りについた！！そのとき、ここは草の根一本生えていなかった不毛の大地であった。けれど、長年の眠りから覚めるとそこは理想郷という名にふさわしい所だった！！これほどの国を造り上げことに心から感謝する。だがこれで終わりではない！！私が目覚めたからにはさらにはこの国を発展させることをここに誓う！！そして歴史の闇に消えた黄金の時代を再び取り戻し、未来永劫の繁栄を約束しよう！！」

そう高らかに宣言すると、一瞬の静寂の後、

割れんばかりの歓声と拍手が沸き起こった。

失ったものは取り戻せば良い

そう結論付け、ヴァラルは過去の自分と決着をつけ、

この日を持ってアルカディアに新たな王が誕生した瞬間でもあった。

ここはビフレストにあるセランの屋敷。屋敷というよりも宮殿に近い広さを誇っているが、中は意外と質素であった。セランが豪華にすることを嫌ったのだろう、城もそのままにしておくよう指示しておけばよかったと、ヴァラルは今更ながら後悔するのだった。

あの演説の後とはにかく大変の一言に尽きた。三人の仲介があったとはいえ、延々と各種族の長たちと話すことになり、途中で休憩をする余裕など一切無かったため、結局ヴァラルが一息つくことが出来たのは、屋敷で行われた晩餐会が終了してしばらく経った後のことだったからだ。

そして現在、彼は晩餐会の会場外にあるテラスに出て一休みしていた。夜のひんやりとした風が彼の熱い体を冷やし、ヴァラルは改めて今日の出来事を振り返っていたのであった。

「主様、いかがでしたか？このアルカディアの皆さんは」

すると、夜風に当たっていたヴァラルの元へアイリスとガルム、セララン、そしてイリスが駆け寄ってくる。

「ああ、良い奴ばかりだった。少々畏まりすぎなところがあったけどな」

「当然だろう、あんなことを言ったんだからな」

「私もびっくりしましたよ。いきなり言い出すのですから」

「ですがヴァラル様、私はとても感動しました」

あれは四人にとって相当驚いたようで、熱心に思うところを述べていたのだった。

「お前達ばかりにお膳立てさせるわけにはいかないからな、驚いてくれただけでも俺は満足だ」

「まんまと乗せられたわけですか……それで？主はこれから如何なされるのですか？私達としてはこの後色々とやっていただきたいことがあるのですが」

(いい機会だ、四人には話しておくか……)

「俺はアルカディアを出ようと思ってる」

ヴァラルは彼らに淡々と告げた。

旅立ち

ヴァラルがそう答えた途端、四人は愕然とした表情を浮かべた。

「ヴァラル様……何かこの国に不満があるのですか？」

「イリス、それは違う。むしろ逆だ。満足しているからこそ、国の外を見てみたくなった」

この国は既にヴァラルがいなくても十分に機能している。今日の晩餐会で様々な種族の王や長と話し合ったが、それぞれが自分の役割をきちんと果たし、それをイリスたちが纏め上げることで強固な体制を築いていた。つまり、留守を安心して任せられるのである。

「そんな！どうしてわざわざ主様が行くのですか！？私たちが代わりに行けば済む話ではないですか！」

(自分のいつていることが理解でき無いわけじゃないだろうに……)

「アイリス、仮にお前が外に出たとする。だがユグドラシルはどうなる？セイランやフェンリルから聞いたぞ、随分慕われているじゃないか。そんな彼らをどうするつもりなんだ」

「そ、それは、誰か代替りの者を……」

アイリスは戸惑うようにヴァラルの問に答える。しかし、ヴァラルはそんな曖昧な答えを許さなかった。

「どうやって選ぶ？ハイエルフの中から選ぶのか？だが、そうなる

と他の種族が黙っちゃいないぞ。彼らも皆優秀だ。それを無視してハイエルフだけ優遇するわけにはいかないだろう」

それに、誰かから選抜したとしても上手くいくとは思えない。国造りに大きく貢献したアイリスだからこそ、ここまで支持されているのだ。不老不死に近い存在のため、老いて仕事をやめるということも無い。セランのときもそうだった。

アルカディア、いや、優秀すぎるがゆえの弊害だった。

「う……ううう」

(ちょっときつく言い過ぎたか?)

だが、ここで引くわけにはいかないとヴァラルは気持ちを改める。何せアルカディアの未来がかかっているのだから。

「俺からもいいか？ヴァルの言いたいことは大体分かった。アルカディアを発展させたいというあの言葉が嘘じゃないこともわかった。だが、外に出る必要があるのか？この国に残っていても色々なことができるんじゃないか？」

いつになく真剣な表情でガラムが真面目な顔でヴァラルに疑問をぶつける。そのためヴァラルもまた彼に思ったことを話す。

「俺はフィリスと話して一つ疑問に思ったことがある。リヴァイアサンであるフィリスがいて、何故アルカディアにイグニスとケイルがない？」

イグニスとは聖獣イフリースのことで、ケイルとは聖獣タイタンの

ことだ。

「それは……外の世界の聖地で暮らしているんじゃないのか？」

「だが、フィリスの昔住んでいた聖地はなくなっていたそうじゃないか。それでここに来たと」

「なら、俺達みたいに新しく聖地を作ったんじゃないか？」

(それは考えにくいな……)

この場所はかつての聖地以上に魔力が満ちているのため、聖獣である彼らならいずれこの場所に気づいたはずだ。

「なあ、セラノ。外の世界で聖地を作り上げるまでにどれぐらいの時間がかかるんだ？」

「そうですね……フィリスはここで三百年かかって作りましたから、外の世界ではその五倍以上かと。それに魔力孔を探すだけでも相当時間がかかるかと」

魔力孔というのは魔力が間欠泉のように噴き出している所だ。けれど地表に流出しているだけでもごく僅かであり、その大半が地中、または海中奥深くに存在するため、見つけ出すにもそれなりの苦勞がある。

「聖地を作るのにはこれだけ時間がかかるものらしいぞ。因みにガラム、お前はどれくらいかった？」

「あいつからアドバイスを貰ってだからな……四百年くらいだ」

「……アルカディアでさえこれだけ時間がかかったんだ。外の世界で聖地を作ったのは考えにくい。それなのに、この場所にはいないということとはだ、二人の身に何かあったのかもしれない」

「……おい、さすがに考えすぎじゃないのか？ だってあいつらだぜ？ そう簡単にやられるとは思えないんだが」

「そういう意味で言ったわけじゃない。だが、それなりの理由があるはずだ。それを俺が確認しに行くんだ」

そして、出来ることならアルカディアの発展のため二人をこの地に引き入れたい。それが彼の本音だった。

「……」

ガラムは目をつぶり何かを考えているようだ。

すると、セラン・イリスの二人から反論が上がった。

「主の言いたいことは分かりました。それならば聖獣の搜索のため、軍や私の部下を派遣しましょう」

「そうです。ヴァラル様が直接動く必要はありません。ここは私達にお任せください」

(そう来たか……)

「セラン、イリス。勘違いしないでもらいたいんだが、俺は何も二人を探すためだけに外に出るわけじゃない」

「何故です？では一体何のために行くのですか？」

「その前に確認だ。セラン、外に出たのは一体いつが最後だった？」

「三百年ほど前です。第一の理由として、同胞達がアルカディアにほぼ集まったこと。第二に、外で戦が確認されたため。そして最大の理由が、ここが発見されることで主の眠るアルカディアが荒らされないようにするためです」

(三百年か……結構長いな……)

「分かった。それじゃあ、俺の意見を言わせてもらう。まず、第一にこの状況において軍やセランの部下を動かすほど切羽詰っていないからだ」

三百年経っても外の世界から使者の一人も来ない以上、この国はまだ見つかっていないというのが妥当だろう。それならば、アルカディアのことはできるだけ秘密にしておきたい。

「第二の理由として、この国の王として直接外の世界を見るためだ。視察といったほうが良いのかもしれない。今はここが見つからないから何もなくても大丈夫なのかもしれない。だが、いずれ誰かが俺達の存在に気づくはずだ。そのときになって考えるよりも、今のうちに見聞を広めようと思ったただけだ」

そう、今のうちに外の世界を知ることが彼の最大の目的だ。彼はアルカディアがさらに発展するためにも外の国々との交流がいずれ必要になると確信していた。そのため、セランの部下からではなく、直接自分の目で確かめたかったのだ。

「そつですか……」

「……」

(少しまずいな……)

四人は鎮痛な面持ちでヴァラルを見ていたため、彼はフォローに入
った。

「俺が目覚めるまでここを守ってくれたんだろ？ 本当にありがた
いと思ってる。なに、戦争をするわけじゃない。危なくなったら直
ぐに戻るつもりだ」

「主様を倒せる者がこの世界にいるとは考えられません!!」

「ヴァラル様を傷つけるのなら、私が直々に引導を渡してあげます
……」

「というかそいつら死ぬんじゃないのか？ ヴアルを本気にさせたら
かなりやばいし」

「主はそういうところ、本当に容赦ないですからね…やりすぎない
てくださいよ?」

(アイリスとイリスはさておいて……ガラムとセラも俺のことを
何だと思っているんだ……)

その後、四人はヴァラルの粘り強い説得に負け、渋々ながらも了解
してくれた。

結局、彼の意志を最大限配慮するのが自身の勤めだと心のどこかで分かっていたのだ。

(ありがとうな……)

そしてヴァラルは、そんな彼らに精一杯感謝するのだった。

ヴァラルの決意を皆に告げた後の一週間は国を挙げてのお祭り騒ぎが続いた。ユグドラシル、ウトガルド、ビフレストの各区画の種族が入り乱れ、その結果ヴァラルも目を回すほど忙しくなり、他のことを考える余裕は一切無かった。

そしてその二日後、ようやく一段落したところで、彼は準備を始める。

「ウトガルド・エドの工房にて」

「エド、邪魔する」

ヴァラルはエドの工房に再び足を運ぶ。武具の材料が揃ったため、彼に改めて作成してもらったためだ。

「おお、お前さんが。話は聞いたぞ。この国の外へ出るそうだな」

「ああ。だからその前にエドに作ってもらおうと思っただけ」

祭りの最終日、ヴァラルがこの国を出ることを皆に伝えた。その結果大混乱が予想されるかと思いきや、意外にもあっさりと受け入れられた。後で聞いた話なのだが、四人が事前に根回しをしてくれたようだった。

「ほう、それでは材料を持ってきたということだな」

「ああ、これだ」

「……これは……よく手に入ったな、こんなもの。あいつらがよく許したものだ……」

そういつてヴァラルは巨大な包みを広げ、エドに確認を取ると彼は驚いた顔でそれらをしげしげと眺めていた。

「意外にあっさりだったぞ？まあ、持つべきものは友というやつだ。それで、何とかかなりそうか？」

「当たり前だ、わしを誰だと思っておる、一ヶ月待て。その間に最高のものを作ってみせるわ」

作って欲しいものは事前に伝えてある。後は、エドがこれらを扱えるかどうかだが、彼は自信満々にそう答えた。

「期待してる、エド」

「おう、楽しみにしておけ」

詳細を二人で話し合った後ヴァラルはエドの工房を後にした。今日中にビフレストとユグドラシルも回らなければならぬため、彼は

少し急ぐことにした。

くビフレスト・ヘスターの屋敷にてく

「……ふむ、わかりました。それで、いつまでに用意すれば？」

ヘスターは羊皮紙に書かれてある魔法道具・魔法薬のリストを見ながらヴァラルに尋ねる。

「そうだな、ここを出るまで一ヶ月以上あるからそれまでに頼む。金は宝物庫にある奴で大丈夫か？」

「……いえ、御代はいただきません」

(また何を言っているんだか……)

書かれてあるものはアルカディアで流通している一般的な類のものばかりだが、何せ数が多い。そのため合計するとかなりの金額になる。

「おい、俺が総帥だから気を使っているのか？それは商売人としてかなりまずいんじゃないか？」

「いえ、そういうわけでは。ただ、私個人としてお願いがあるので」

「なんだ？」

「娘を貰ってやってください」

「……おい」

娘と引き換えに商談を成立させようといつとんでもない父親がそこにはいた。

「……というのは冗談で」

「……脅かすなよ」

彼は口ではそういつていたが、ヴァラルはそれが冗談に聞こえなかった。

(……というかセラランに影響されすぎだ……ビフレストの連中)

「実はヴァラル殿には、ある者の行方を探ってもらいたいのです」

ヘスターは語りだした。かつて彼には魔族の友人と家族ぐるみ付き合いをしていたのだが、大災厄の日以降会えないという。尚、セラランにそのことを相談し探してもらったのだが、結局見つからなかったため、ヴァラルには出来る範囲で良いので彼らの安否を調べて欲しいそうだ。

「わかった。善処することにする。ところで、その魔族の名前は？」

「彼の名は……」

「ユグドラシル・とある森の中」

「なあ、これってかなり貴重なものじゃないのか？」

「ヴァラルがユグドラシルを訪れると、アイリスから稀少なハイエルフの霊薬を大量に貰っていた。これはアルカディアに出回っている魔法薬のエリクシルよりも数段効果が高いものであり、聖獣であるガラムやフィリスが重傷を負ってもすぐに完治する。だが、この霊薬は長い年月をかけて生成されるものであるため、とにかく数が少なかった。」

「主様の身に何かあるほうが問題です！」

「……なら有難く受け取っておく。すまないな、あんまり長くいてやれなくて」

「それなら今すぐここへ残るよう考え直してください！-！」

「それは無理だ」

「うう……」

アイリスが呻く。別れの日が近づいているためなのか、最近このようにしてやたらとヴァラルを引きとめようとしていたのであった。

（……すまないな、アイリス）

「その代わりといっては何だが、明日は空いているか？よければ二人でどこか出かけないか？」

そこで、ヴァラルは彼女のご機嫌取りをすることにする。

「本当ですか！？……はっ！いけない！こんなことで騙されませんよ、私は」

「そうか……ならイリスでも誘うことにするか」

「まっ待ってください！行きます！行きますから！」

けれど、結局イリスはヴァラルの前に敗北を喫したのだった。

（ローレン城にて）

「ねえヴァラル、本当に行くの？」

窓が開けられ、ツインテールの彼女の髪が風に揺れている。その一本一本がサラサラとしており、まるで絹のようだ。

「ああ、もう決めたことだ」

「……お願い、私も連れて行って。もうあの頃の私じゃない。きつと役に立ってみせるから」

イリスは旅の同行を申し出る。

彼女のような申し出は、アルカディア中から数え切れないほどにあった。しかし、ヴァラルはそれら全てを断った。一回その申し出を受けてしまうときりがなくなるからだ。それにイリスの場合、メルディナ魔法学院の実質的な責任者だ。イリスたちのようにおいそ

れと連れ出すわけにはいかないのである。

「駄目だ。そんなことよりさっさと家へ帰るんだ」

「また子ども扱いして……私ってそんなに魅力ない？」

イリスがまたとんでもないことを言い出した。

「違う。イリス、今何時だと思っている？」

「一時でしょ？」

「夜の一時だ。親父さんたちも心配しているだろう、早く戻るんだ」

「お父様とお母様の許可は取ってある」

「……」

（ヘスターめ、やはりあれは本気だったのか）

「というわけで……むぐ」

ヴァラルはじりじりと寄ってきたイリスの顔にクッションを押し付ける。

「仕方がないな……ほら、何もしないのならここで寝ても良いぞ。何かしたら叩き出す。さてどうする？」

「……分かった。今日のところはおとなしく引き下がることにする」

「それと朝になったらすぐに帰ること、良いな？」

「んふふ、分かった」

そうしてヴァラルのベッドに彼女がもぐりこんできたと思ったたら、あっという間に眠りこけてしまった。

(やはりまだまだ子供だな……)

ヴァラルはそう思い、彼女の隣で静かに眠り始めたのだった。

そしてついに出発の準備が整った。

ヴァラルが目覚めてから二ヶ月の月日が経った頃のことである。

早朝、アルカディア内に設置されている転移魔方陣の前で五人は集まっていた。

「ヴァラル様、何かあれば連絡を。すぐに駆けつけます」

「分かった、イリス。そうならないよう気をつけることにする」

「ヴァル、あんまり暴れるなよ？」

「主の持つその強大な力を利用してようする者が必ず現れるでしょう。くれぐれも気をつけて下さい」

「了解。ガラムにセラン、忠告受け取っておく」

「主様、これを」

「これは……ケリユケイオンなのか？」

アイリスが差し出したのは一本の輝かしい魔力を秘めた杖。世界樹から作られたそれはかつてヴァラルが愛用していた杖であり、とうの昔に魔力を失っていたはずのものだ。

「私たち四人からの贈り物というわけです」

「そうだけ。全く、直すのに苦労したぜ」

「……よくやる……」

ヴァラルは口ではそういつつも、その杖を大事に大事に”しまった”

そして彼が転移魔方陣の上に移動すると、魔方陣が眩く輝き始める。

「必ずここへ帰ってくる！留守の間ここをよろしく頼むぞ！」

強烈な光が辺り一面を覆いそれが徐々におさまったとき、ヴァラルはアルカディアから姿を消し、

この日を境に、

アールヴリール大陸に新しい時代の風が吹いたのだった。

絶対強者

アールヴリール大陸には現在、四つの国が存在している。

冒険者ギルド発祥の地ともされるトレマルク王国。

魔法研究において最先端を誇る魔法皇国ライレン。

広大な領土を持ち、軍事力では他国を圧倒するバルヘリオン帝国。

数多くの信徒を抱え、各国に多大な影響力を持つ宗教国家アルン。

その他に、魔物や亜人の生息が確認されている暗黒の地ニールベンスがある。

そして現在、トレマルク王国にあるフェンバルの森にヴァラルはいた。

「アルカディアの周りはこちらという場所だったのか」

彼は周囲を確認しつつ感慨にふける。

朝露が草に滴り落ち、木の香りが森の全域を濃密に包んでいる。アルカディアとは全く違うところであると彼はしみじみと実感していたのだった。

フエンバルの森は冒険者の間で迷いの森として恐れられている。それは、奥へと進んでいった者たちがまるで神隠しにあったかのよう
に二度と戻ることが無いからだ。

尚、その実態はこのあたりに住む魔物がひととき強く、大抵の者ではあつという間に殺されてしまうという至極単純な理由なのだが、死体を確認するものが誰もいないため、神隠しに遭うと誤解されているのである。

けれど、それはあくまでも奥地に進んだ場合のことであり、比較的浅い場所であるならば良質な薬草が採取できるので近隣の村々では大変重宝されている場所でもある。

（ここはメクビリス山脈を覆う森というわけか。成る程、こうも深いと誰も寄り付かないのもわかる気がするな。っとその前に……）
ヴァラルは袋から地図を取り出し、これから先どのように進むかを
思案する。

この地図はセランの部下たち作成したもので、恐ろしく詳細に書かれていた。暗黒の地であるニーベンスまでは無理だったものの、ヴァラルの旅においてかなり重要なものだ。

「近くに村があるな……とりあえずそこまでいってみるか」

地図の正確性に驚嘆しつつ、ヴァラルは進むべき方角を確認し、フエンバルの森の近くにある小さな村を目指すことにしたのだった。

「しっかし、こうも生い茂っているとどこにいるか分からなくなるな」

フエンバルの森に生えている茂みをひたすらかき分けつつやれやれといった表情で呟くヴァラル。

彼が愚痴をこぼすのも無理はない。ヴァラルがさっきいたところはメクビリス山脈と森との境界部分、いわば最深部になる。そこから森の外へ出ようとするのだ、今まで誰も最深部へ到達したものがないため、このことを地元の間人が聞いたらびっくりするだろう。

（ま、こうして自然が元に戻っていることを確認できるし、それはそれで良いんだが）

そうしてヴァラルは森の外へ出るためにずんずんと歩き続ける。

けれど、彼の旅はそう上手くいくものではなかった。以前もそうであったように、彼の冒険には何らかのアクシデントが発生するのが当たり前なのだ。

「うわあああ！！」

（……いきなりかよ）

しばらくの時間が経過し、ヴァラルが森の木陰で休憩をしていると、男の悲鳴が聞こえてきた。なにやら近くで穏やかではない事態が発生しているようだ。

(どこだ……ん？あっちか)

彼はすぐさま辺りの気配を確認すると、近くで大きなものと小さなもの、二つの気配がした。恐らく、その一方がさつき悲鳴を上げた男のものなのだろう。

「よし、確認するか」

彼はそうや否や声が聞こえてきた場所へ急ぐことにしたのだった。

ヴァラルがそこに到着すると、一人の男が大きな猪のような魔物に襲われていた。

男はここへ薬草を取りにきたのかいくつもの大きな袋をもっており、腰を抜かしている。今までこのような魔物と遭遇したことが無いのだろう、短剣を持っていたがそれを握り締める手はぶるぶると震えていた。

一方、猪の魔物の方は二本の大きな牙を持ち、男の持っているナイフでは傷一つつけることは出来ないくらい、頑丈そうな毛皮をその身に纏っている。さらにその魔物の目は完全に血走っており、フーと荒い息を立てて目の前の人間を完全に敵とみなしているようだ。

「おい、大丈夫か？」

「ひっ！あ、あんたは！？」

ヴァラルは魔物を一瞥しながら近寄って彼に話しかけると、急に現れたヴァラルにびっくりしたのか、似たような悲鳴を上げていた。

「俺はヴァラル、あんたの悲鳴が聞こえたからここへ来た。それよりも立てるか？」

そういつて男をグイと引つ張り上げ、容態を確認する。

(特に目だった怪我は見当たらないな……多少すり傷があるが、走ることに問題ないだろう)

「お前はとりあえずここから逃げる。魔物は俺が何とかする」

「あ、あんた冒険者の人なのか？」

冒険者とは何だ？聞きなれない単語にヴァラルは首をかしげたが、今は尋ね返す暇はない。

「……まあそういうものだ。とにかく早く行け、こいつをこれ以上刺激するな、できるだけそっと逃げる」

「す、すまない」

男はその場からよろよろと立ち去っていく。何とか森の外へ逃げなければ良いが、ひとまずは目の前の魔物をどうにかしないと行けない。ヴァラルは彼を見届けた後、そう判断したのだった。

「……さて、目覚めてからこういったことは初めてだからな。体が鈍っていないか少し心配だ」

ヴァラルは腕を片方ずつ回し、目の前の魔物と対峙する。けれど腰に差している剣を引き抜くことはせず、棒立ちのままであった。どうやら素手で相手をするつもりのようなのだ、そしてかかってこいとはかりに猪の魔物に指で挑発した。

舐めるなど魔物はヴァラルへ突進していく。四本の強靱な足で彼に迫り、大きな二本の牙が彼に襲い掛かった。周辺の木々をなぎ倒すその威力は、巻き込まれればただではすまないだろう。

けれど、ヴァラルは落ち着いていた。目の前に何もかも破壊し尽くさんとする魔物の突進がその身に迫ろうとも。

そして、あらゆるものを巻き込み、魔物がヴァラルをなぎ倒そうとした瞬間、

その動きが唐突に止まった。

魔物は四肢を踏ん張り懸命に前に進もうとする。だがその努力もむなしく、その体はびくともしない。いきなりわけの分からない出来事に混乱していた魔物は、正面に映ったその光景に驚きのあまり目を見開いた。

そこでは、ヴァラルが魔物の鼻先を片手で受け止めていた。

その場から一步も動かずに。

「……………」

魔物は信じられないかのように激昂して牙を振り回す。

こんな馬鹿なことがあるかと。

しかしヴァラルはその瞬間、間合いからふつと離れた。霞を相手に戦っているかのように手ごたえが感じられなかった魔物は再び彼を獰猛な視線で射抜く。そして、さっきの怯えた男のことはすっかり忘れ、目の前のヴァラルに向けて生かしては帰さぬと言わんばかりに敵意をむき出しにするのだった。

「……おいおい、こんなものなのか？」

その一方、猪の魔物の敵意を軽く受け流し、ヴァラルは呆れの混じったため息を吐いていた。彼にとってもこれは計算外だったようだ。

魔物のあまりの弱さに。

そんな彼の心の機微を感じ取るかのように、再び猪の魔物がヴァラルに向かって突進する。さっきよりもさらに速いスピードだ。

けれど彼は難なくそれをひらりと避ける。大抵の者では直ぐに轢き殺されてしまうような猛進をいともたやすく。

また、手ごたえの感じられなかった魔物はすかさず方向転換をして再び襲い掛かる。

(……)

ふとヴァラルの顔は本当にこれが全力なのかと確認するかのようになり、

一瞬訝しげになった。

そして、先程と同じようにまた片手で受け止められてしまったのだ。
った。

その後、そんなことがあれから何回も行われることでヴァラルと戦っている（つもりである）魔物も、目の前の男が明らかに異常な存在であることに気がついた。自分がまるで試されているかのような、そんなあまりにもばかばかしい一つの考えに至ることで。

けれど、それは正しかった。

そもそもヴァラルは目の前の魔物を殺そうと全く思っていないのだから。

（……もういいだろう）

そしてヴァラルは魔物の力量を把握し終えたかのように目の前で伸びをする。ウォーミングアップは終わったようだ。

「ある意味予想外の展開だったが……まあ、良いだろう」

突然、魔物の目の前にいたはずのヴァラルの姿は掻き消えた。そして彼は疾風の如く走り出し、魔物との距離を一気に縮め、

「じゃあな」

鼻っ柱に拳を叩きつけた。

そのとき、ヴァラルと魔物との間で強烈な光が迸り、

大爆発が起こった。

結果、魔物の命は一瞬にしてかき消されたのであった。

「なっなんだ!?!」

そのとき、丁度森の外にたどり着いた男の耳にすさまじい轟音が聞こえてきた。森全体が雄たけびを上げたかのようなその衝撃はヴァラルと魔物を中心に広がっていき、大地が震えたかのような振動で男は一瞬よろめいた。

「くっ!!」

あわてて男は森の方へ振り返る。すると、鳥達がギヤアギヤアとやかましく一斉に空へ羽ばたいていき、森が騒がしくなったかと思うと、直ぐにもとの静けさを取り戻すのだった。

「一体、何があったんだ……」

男は呆然とその光景を眺めていた。

「しまった……やりすぎた……」

その頃ヴァラルは顔を手で覆い、後悔していた。

目の前に広がるのは物言わぬ死体と化した猪の魔物だ。けれど、その死体には大穴が空いており、それは大型の大砲を至近距離でぶつけたかのような巨大なものだった。

ヴァラルは目の前の魔物を気絶させようと思い、こつんと殴りつけたつもりだった。けれど、その結果は見ての通りの大惨事となっていた。

「すまん、といっても聞いちゃいないか……」

彼はひとまず目の前の死体を片付けることにした。この惨状を誰かが見たらまずい、彼の直感はそう告げいそいそとその魔物を土の中へ埋めたのだった。

その作業は十分ほどで完了し、猪が暴れまわったあとに残った切り株の上で彼は休憩をとることにした。

「しかし、これは想定外だったな……外の魔物は皆こういうものなのか？」

ヴァラルは戸惑っていた。彼自身、それなりに強いと思っている。万全の装備ならアイリス、ガラム、セランを三人同時に相手に出来る程度には強いと自負している。イリスが加わるとちょっと厳しいが。

またこの冒険には国の命運がかかっているため、万全の態勢で望んだつもりではあった。

なにせ戦争が確認されてから三百年が経っているのだ。外の者たちの実力が未知数である以上、アルカディアの住人に危険な目に遭わせるわけにはいかない。そのため屈指の実力者である自分が出向くことで万が一の事態にも対応できると思ったからだ。

けれど、思わぬところでつまづいてしまった。

以前、ガラムが世界を支配できると言ったことがあったが、ヴァラルは冗談だと思いき流していた。戦争というものは結局のところ数で決着が着くので、いくらアルカディアでも外の国々を丸ごと相手に出来るとはこれっぽっちも考えていなかったのだ。

(……ま、あいつはこのあたりで一番弱いものだったということにしよう……)

彼は気持ちを切り替え、倒した証拠である魔物の牙の欠片を持ってその場を後にした。

しかし、ヴァラルは気づかなかった。

この世界に彼と並び立つ者など誰一人存在しないということに。

冒険者

ヴアラルが森の外へ出ると、猪の魔物に襲われていたさっきの男に会った。あの時からだいぶ時間は経っていたが、彼はヴアラルの身を案じて待っていてくれたようだった。

「おお！無事だったのか！」

男は助けてくれたヴアラルに駆け寄り声をかけた。その顔は驚きと笑顔が入り混じったものだった。

「お前も森の外に出られたんだな」

彼もまた男の無事を確認して一安心した。逃げた後で再び他の魔物に出会ったりしたら元も子もないからだ。

「さっきは助かった、おかげで命拾いしたよ。それでさっきの魔物はどうした？なにやら凄惨な音が森の中から聞こえてきたんだが、もしかして何か関係あるのか？」

「ああ、魔物が大岩にぶつかって勝手に勝手に自滅したんだ」

ヴアラルは平然と事実と異なることを言っただけ、その証拠として魔物の牙の欠片を男に見せた。

彼としては本当のことを言っても良かった。だが、気絶させるつもりで殴ったら魔物に大穴が空いたと懇切丁寧に説明しても一体誰が信じるだろう。ヴァラル本人でさえあれには驚いたのだ、いたずらに彼を混乱させるわけにはいかない。それにあの場にはこの男はいなかったのだ、いくらでも言いようはある。

というわけで、ヴァラルは適当に誤魔化すことにしたのだ。

「そ、そうか。まあとにかく無事で何よりだった。ヴァラルといったな。このあとはどこかに用事でもあつたりするのか？」

男はヴァラルの言葉に少し疑問を感じていたが、助けてくれたことには変わりはない。しつこく聞いて彼の機嫌を損ねるのもまずいだろう、そのため話題を変えることにした。

「とりあえず、この森の近くにある村に行こうと思っている」

時間はちょうど夕暮れ、何とか日が沈まないうちに森から出る事が出来た。折角外の世界に出たのだ、人々がどんな生活をしているのかヴァラルは気になっていた。

「ならちようどいい。俺はその村から来たんだ。まだ宿は決まっていないだろう？今日はうちに泊まっていつてくれ。ああ、自己紹介がまだだったな。俺の名前はカウン、よろしくな」

まだ若い男はそう名乗った。

「ああ、「こちらこそ」」

二人は森を後にして村を目指して歩き出した。その途中、カウンが

これから向かう村について色々と教えてくれた。

テトスの村。トレマルク王国デパン伯爵領にあたるこの村は総勢百人ほどの小さな村だ。森に程近いこの村は辺境の地として知られ、あまり人が訪れることはない。いたとしても村自体ではなく、フェンバルの森に用がある者達がほとんどだ。またテトスの村の産業は農業を主体としているおり、ここで暮らしているカウンも幾つかの野菜を育てているのだという。

そして、カウンを襲った魔物についても説明してくれた。

猪の魔物はボボルと呼ばれ、このあたりで農作物を荒らし、時には人を襲う凶暴な魔物である。二本の牙はとも頑丈なため武器の製作に用いられることもあるのだとか。そのため、村中総出で討伐をしようと計画しているときに運悪く遭遇してしまったのだと。薬草を手に入れるため、うっかり欲張って奥まで進んだことを彼はしきりに反省していた。

ヴァラルはカウンが凶暴な魔物であるボボルについて語っている姿をみて複雑な気持ちになった。

ボボルは人を襲う。村にとっては脅威だったろう。けれど、その一方でフェンバルの森の奥地に入ろうとする者も襲っていたはずだ。つまり、彼らは間接的にはあるがアルカディアを守っていたことになる。そんなことを言っていたらきりがないのだが、それでもヴァラルは外の世界で初めて殺した魔物に対してもう一度心の中で謝った。

それなりに整備された道を歩き、ヴァラル達がテトスの村へついたのは日が丁度沈みきり夜になったときの頃だった。入り口には柵が

設けられており、その前には見張りが立っていた。カウンが見張りの村人に事情を説明し、村へ入る事を許可されたヴァラルはカウンの家に向かった。

「さあ、上がってくれ。とはいっても何も無いところだけだな」

「邪魔する」

ヴァラルはカウンの家に入りこんだ。小さな家だったが、きちんと整理整頓されていてきれいな感じのものだった。几帳面な性格なのだろう、彼は。

ヴァラルはテーブルに座りしばらく待っていると、カウンが薬草を煎じたお茶と野菜を煮込んだスープを振舞ってくれた。どちらも素朴な味だったが、ヴァラルはそれを文句の一つも言わず食べた。彼に好き嫌いはないのだ。

二人の腹が膨れたところで、カウンは口を開いた。

「さて、改めてヴァラルには礼を言う、本当にありがとう。それでヴァラルはこれからどうするつもりなんだ？良ければ聞かせてくれないか」

「とりあえず数日はこの村に滞在して次のところへ行こうと思っ
ている。俺の目的は世界を見て回るからだからな」

「へえ、それじゃあ旅は始まったばかりなのか。…待てよ、ここ以外では近くに村はなかったはずだ。それなのにどうしてフェンバルの森にいたんだ？」

カウンは前々から疑問に思っていたのだ。何故こんな辺境の地にヴァラルがいることについて。

やはり聞いてくるか…

ヴァラルは少し真面目な顔をしてカウンに語りだした。

「……俺の故郷は随分と人里離れたところにあつて、そこから俺は出てきたんだ。世界のことをあまり知らずにいるのはさすがにまじいと思つてな。その途中、あの森でお前さんの声が聞こえてきたから駆けつけたというわけだ」

アルカディアから来たと言えばどんなに楽なことだろう。けれど、ヴァラルはまだ見つからない彼らのことを素直に話す気にはなかった。仮にも一国の王なのだ。軽々しく口にすべきではないことくらい彼には分かつていた。

嘘とも本当とも取れる話をして、助けたことを前面に押し出す。少し強引だがいけるか？

「そうだったのか……すまないな、変なことを聞いてしまつて」

カウンが申し訳なさそうな顔で謝罪してきた。戦争によつて故郷を失った者達が暗黒の地ニーベンスで集まり、集落を形成しているというのを知ることがある。ヴァラルもまたその一人なのかもしれ

ない。そうなるにつらいことを思い出させてしまったな…

カウンは盛大に誤解していた。

「いや、そう思つのも当然だろう。気にすることはない」

彼の勘違いに気づくことなくヴァラルもまた安堵した。

何とかそらすことが出来た……

だが、今は凌ぐことが出来ても、この先はどうなるかわからないな……

ヴァラルは自身の身分を証明する手段を見つけようと思った矢先、

「てっきりヴァラルは冒険者だと思つたんだが……」

あの聞きなれない単語を耳にした。

「その冒険者というのは一体何だ？」

ヴァラルはすかさず質問した。この話を聞き逃してはいけない。そう咄嗟に判断したからだ。

「ああ、そうか。ヴァラルはまだ知らなかったのか。じゃあその説明をしないといけないな」

冒険者。

魔物を狩り、未開の地を探索し、貴重なアイテムを手に入れる等、アールヴリール大陸において欠かせない職業の一つである。トレマルク王国が発祥の地とされ、客からの様々な依頼をギルドと呼ばれる組合を通して受けることで生計を立てている。

そもそもこの職業が誕生したのは、王国特有の事情が絡んでいた。

三百年前、バルヘリオン帝国とニーベンスに住む魔物の間で戦争が勃発した。そのとき、トレマルク王国はまだ弱小国家であり、他の国に比べ戦力が圧倒的に不足していた。そこで、武勇に優れた者を戦争の期間中雇っていったのだ。つまるところ傭兵のようなものだったが、これが冒険者の始まりとも言える。その後彼らはギルドという組合を結成し、戦争の援軍だけにとどまらず、様々な客からの依頼をこなしていった。そして、その利便性が評価されあつという間に大陸全土へと拡大していった。

冒険者がここまで広まった理由にはその自由度にある。冒険者となるときにギルドに一定の金額を納めることで身分を保証されるのだ。それが国々を渡り歩くための証明になり、自由に国ごとに起こっている様々な依頼をこなすことが出来るのだ。そして冒険者の間で有

名になると、各国から破格の待遇で迎えられたり、そのまま信頼できる仲間と共に冒険の日々に明け暮れることだって可能なのだ。

とはいえ世の中は当然そんなに甘くはない。身分を保証されるとはいえ衣食住にかかるお金は自分の腕で稼がなければならぬし、トラブルが起これば基本的に当事者間で解決を迫られる。そして依頼の失敗は死を意味することが多々あるのだ。事実、このアールヴリール大陸では数多の冒険者が死亡、もしくは再起不能状態となっている。つまり、冒険者稼業は自身の持つ実力がそのままステータスになるのだ。

「成る程……」

ヴァラルにとって冒険者というのは非常に魅力的な職業に感じた。何せ金さえ払えば国々を自由に回れるのだ。これほど今の自分に適したものはないと心の中で笑みを浮かべた。

「冒険者に興味を持ったみたいだな。そういえば、この村にも冒険者が一人いたはず。引退したらしいが、それなりに有名な人だったらしい。ヴァラルはまだこの村にはしばらくいるんだろう？寝泊りはここでして、村を見学したり、彼の話聞いてきたらどうだ？」

「良いのか？ここに滞在しても？」

「何を言っているんだ。ヴァラルがいなければ今頃魔物の腹の中だったんだ。気にするな」

そうしてヴァラルはしばらくの間テトスの村に身を寄せることになった。

忍び寄る影

次の日、ヴァラルは村長の家に呼ばれ彼からも礼を言われた。カウンを助けてくれたこと、そして魔物を倒してくれたことに対してだ。この村はそこまで貧しいわけではないが、冒険者達を雇ってボボルを倒すほど金銭的に豊かではなかった。そのため、村中総出で倒すとなると村人からかなりの死傷者が出るのが予想されたのだが、偶然とはいえヴァラルがそれを未然に防いでくれたことになる。

村長との話が終わったあと外に出ると、カウンが待っていた。彼によるとローグという元冒険者の男は街に出かけていて、今日の夕方には帰ってくるのだそうだ。そのため、ヴァラルはそれまでの間カウンと共にこの村を見て回ることにした。

テトスの村の特徴として村の周囲の水路があちこちに引いてあるところだ。これは水源まで足を運ばずに水を得ることが出来、そのおかげで効率的に作物が育つよう工夫がなされていた。ヴァラルはその光景を眺め、外の世界の人々の営みにいたく感動していた。千年前、メクビリス山脈を越える前にここに立ち寄ったことをヴァラルは覚えていたが、そのときはテトスの村など存在せず、ただ荒地が広がっていただけなのだ。改めて世界が救われたのだということを確認に実感していた彼だった。

そして夕方、二人は村の酒場に訪れていた。広場の近くにあるこの酒場は集会場としても村人達に利用される活気溢れる場所である。そのため、元冒険者のローグとはここで待ち合わせることになって

いた。

ヴァラルとカウンは酒場に入ってテーブルに座り、彼のことを待った。しばらくすると、酒場の入り口から一人の人物が現れた。使い古された皮の鎧と鉄で作られた剣を持った熟年の男が二人に近づいてきた。

「よう！あんたがこの村に来た冒険者かい？俺はローグ。昔は冒険者をやっていた者だ」

ローグはヴァラルと握手を交わした。ゴツゴツとした力強い手だ。それなりに有名な冒険者だったというのはあながち嘘ではないようだ。

「俺はヴァラル。まだ冒険者にはなっていないけどな」

「何言ってるんだ、カウンから話は聞いたぜ。偶然とはいえあいつを倒したんだってな。冒険者に必要なのは腕っ節の強さも大事だが、運も重要なんだ。ヴァラルには素質あると思うぞ。ま、いずれは俺が倒していたけどな」

「ローグさん、そんなこと言ったら俺はここにはいませんよ……」

カウンは少し呆れたようにローグに言った。だが彼の言葉遣いから、ローグがこの村でいかに尊敬されているのかがわかる。

「おおっと、そうだったな。すまんすまん。とりあえず俺からも礼を言っぜ。すでに聞き飽きたと思うけどな」

そういってローグもまたヴァラルたちと同じ席に着いた。因みに、

今回は村長の厚意で彼らの酒代は無料となっていた。せめてこれくらいは礼をさせてほしいとのことだ。

三人は杯を交わし、互いに飲みあった。出された料理は味が濃いものも多く、酒との相性もばっちりだ。

「それで？ヴァラルは俺に何を聞きたいんだ？」

ローグは酒を飲み、口元をぬぐいながら尋ねた。

「とりあえずどうやってたら冒険者になれるのかということを知りたい」

「わかった。といつても冒険者になること自体、今はそんなに難しいことじゃない。昔はいろいろと決まりみたいがあつたらしいがな。とにかく金さえギルドに払えばそれで冒険者を名乗れるぞ」

冒険者になるためにはまず各地に点在するギルドの館に足を運ぶ必要がある、テトスの村からだとセクリアの街が一番近く、そこで登録すれば良いとのこと。他の街でも登録は出来るが、これといって差異はないらしい。

「何だ、なるのは意外に簡単なんだな」

ヴァラルは拍子抜けしていた。どこかの学校を卒業したりとかそういうことは無いみたいだ。あつたのならそこへ入学してでも冒険者になろうと決意するほど意気込みを増していた彼だったが、とんだ思い違いをしていたようだ。

「まあな、だかのし上がるのは大変だぞ？俺は引退するまでにたく

さんの冒険者が倒れるのを見てきた。俺自身も相当危ない橋を渡ってきたと思っぜ？この世界は本当に実力のある者しか生き残れない」

基本的に冒険者として有名になるためには何よりも強さが大事だ。ギルドではテトスの村のように魔物の討伐依頼が割合として多いため、それをこなしていくことで各国に顔を売っていくのだそうだ。けれどその道半ばで倒れた者は数知れず、ローグ自身も何度も命の危険に晒されてきたのだという。

もちろん、貴重なアイテムを入手したり、秘境を探索することで名を上げることが出来る。けれど、そういった依頼は強力な魔物や亜人と遭遇することが多く、結果として高い実力を求められる。むしろ討伐といった単純なものとは違い、アイテムや秘境に関する知識も重視されるため依頼を受けるものはかなり少ない。

それでも結局あいつらには勝てないけどな……

ローグは何かを呟いたと思った。たら急に明るい口調になった。

「それでも、やりがいがあることには間違いない。依頼は結構金になるものが多いし、たくさんの知り合いが出来る」

「奥さんのことですよね、それって」

カウンがいきなり変なことを言い出した。

「ばっ、馬鹿言ってんじゃねえ！俺はそういうことを言ってるわけじゃなくてだな……」

「へえ、もしかして引退したのもそれと何か関係があるのか？」

ヴアラルも興味があるのか話に乗り出してきた。

「そ、それはだな……」

恥ずかしいのか、ローグは少しずつ語りだした。

冒険者時代、魔物の討伐依頼を受けて彼はとある村に立ち寄った。そのとき魔物に襲われそうになった娘を助けたことで彼女に惚れられてしまい、それ以降彼女との付き合いが始まったそうだ。そして、結婚を機にローグは引退を決意し、その後はこの村で子供とともに暮らしているという。彼によると、冒険者をしているところに出会いはたまにあるようだ。生涯の友を得たり、男女の冒険者同士が死線を潜り抜けて恋に落ちることになったり、極端な例では貴族のお嬢様に見初められるといったこともあるのだとか。

「だが、そうなる前に大抵のやつはくたばっちまう。俺はたまたま運が良かったんだ。あるときだって村人達が加勢しに来なければやられていた。だからなヴアラル、冒険者は臆病なくらいで丁度良いんだ。決して焦っちゃ駄目だ。とにかく生き残ることを最優先にするんだぞ、先輩からのアドバイスだ」

「助言感謝するよ。何事も慎重に行動するのは俺も同意見だ」

ヴアラルは思ったことを素直に伝えた。というよりも身に覚えのあることだらけだった。けれど、千年後でもさすがにそんな出来すぎた出会いはないとそのあたりは冗談半分に聞き流していたが。

「…随分と物分りが良いな。これからなろうとする奴らは大抵我の強い連中が多いんだけどな…まあ、俺からはこんなところだ。さら

に詳しいことはギルドの館に行つて聞いてくるといい。俺も引退してから結構時間が経つから、何か変わっていることとかあるかもしれない。他に何かあるか？」

酒場も閑散とし始め、恐らくこれが最後になるだろう。ローグはヴアラルに促した。

「ああ、そうだ。冒険者のこととは別に聞きたいことが一つあった」「何だ？」

「この村は一体何に怯えているんだ？」

「…どうしてそう思ったんだ？ヴアラル？」

ローグのかわりにカウンが質問した。

「昨日見張りの男を見てから疑問には思っていた。俺を必要以上に警戒していたし、村長の顔もどこか影を帯びていた。何より村の雰囲気暗い。不作というわけでもないし、一体何があつたんだ？」

そう、彼は不思議だったのだ。何をそんなに怯える必要があるのかと。フェンバルの森から魔物が畑を荒らすことがあるようだが、それでもこの怖がりようはどこか異様だった。まるで魔物ではなくも

つと他のものに怯えているような……そんな感じがした。

「やはり分かるか……これでも心配させないように隠していたんだけどな……」

諦めたかのようにローグはため息を吐いた。

彼によると最近このあたりで何者かが村を襲い、次々と壊滅しているのだという。それもテトスの村よりも規模の大きい村が次々と。村から金品が無くなっている事から盗賊団の可能性があるという。

けれど、今回の盗賊団は何かが違う。ローグは壊滅した村々をまわっているうちに気づいた。その盗賊団の異常性に。

通常、盗賊団は金品を奪う他に女・子供を攫っていくのを目的としている連中だ。彼も冒険者時代、そのような輩と何度か戦ったこともある。そのため、残された死体は大抵男がほとんどだった。けれど、壊滅した村に横たわる遺体の数々を見てローグは驚きをあらわにした。

男だけでなく若い女や子供、そして老人までもが、

消し炭となって見つかった。

別に焼死体が珍しかったというわけではない。短剣で殺されたものもいたし、矢傷で倒れたものもいた。ただ、逆にあまりにも多かったのだ、黒焦げで見つかった遺体の数が他のものに比べて。

そのためテトスの村はすぐに、この地域を統治している伯爵に討伐部隊を派遣してもらえよう嘆願書を出した。けれど、盗賊団は結局発見されることは無く討伐隊は成果も上げられないまま引き返すことになった。それも当然だろう、目撃者が誰もいないのだから。

そのあとも、繰り返し要望したのだが、トレマルク王国は帝国や魔物との小競り合いが続いているため、なかなかこちらにまで手が出せずにいた。

また、冒険者たちを雇おうにもこの村にはそこまでの余裕はなく、結局村を巡回する人数を増やすのが精一杯なのだという。

「そういう不吉な奴がこのあたりをうろついているからな。出来るだけ心配をかけたくなかったんだ」

カウンはローグが語り終わると、ヴァラルに補足をした。

「それにしてもよく気づいたな…やっぱりヴァラルは冒険者の才能があるようだ。期待してるぜ、後輩」

そう言ってローグはグイと酒を飲み干した。

アザンテ盗賊団

それからの数日間は瞬く間に過ぎていった。ヴァラルはこの辺りの自然を調査しつつ、村の畑仕事などを手伝っていた。彼が確認したところテトスの村周囲の自然は千年前とは見違えるほどに回復しており、これを調査し終えた段階でこの村から出ていっても良かったが、村人たちは旅人がこんな辺境の地に来ることが珍しいのか連日連夜ヴァラルを酒場に連行していった。

またある日の晩、ローグの家に招待されたこともあった。

「ヴァラルか、今日はよく来たな」

「邪魔する。それとカウンから差し入れた」

ヴァラルは彼が趣味で作っているという果実酒をローグに渡した。カウンは今日見張り役のため、ここへは来られないのだ。

「ああ、悪いね。カウンの酒はこの村では結構人気なんだぜ。食後にどうだい？」

酒瓶を持ちながらヴァラルを誘った。彼もカウンの酒のファンであるようだ。

「それは良い。楽しみにしてる」

ローグの家族はライとレイという双子の男の子と、妻のサリスを入れての四人家族だ。

双子はまだまだやんちゃな盛りで近所の子供達と一緒に冒険者ごっこをして、よく怪我をして帰ってくる。それをサリスが咎め、ローグが子供達のフォローするということが日常茶飯事なのだそうだ。

妻のサリスは三十代後半の女性だ。ローグの年齢が五十手前なので、なかなかの年の差である。そのため付き合いだした当時は村の男達から相当冷やかされたらしい。何せサリスは村一番の人気者だったため、彼女の心を驚づかみにしたローグは彼らから尊敬と嫉妬の念を一身に受けたのだ。

最初の頃はローグも彼女と付き合い合えたことが嬉しかったようだ。けれど冒険者をしている以上自分はいつ死ぬか分からないし、もしもことがあつたらきつと彼女を悲しませてしまう。この場所に滞在するのも限界があるし、何よりも彼は生粋の冒険者だった。簡単に今までの生活を捨てられなかったのだ。

そのとき、村の人たちは無理を承知で彼女と一緒に連れて行つてくれないかとローグに頼み込んだ。別れが近づいていることを悟っていた彼女は口には出していなかったが、だんだんと表情が暗くなっているのが彼らには理解できたのだ。本当はこの村に留まって貰いたかったが、そんなことを恩人である彼に頼めるはずも無かった。

ローグは村人達の決意を聞いて、サリスに一年だけ待つて欲しいと頼んだ。冒険者の自分と決着をつけてくるとそう言い残して。要はプロポーズである。

そして一年後、テトスの村に新居を構えたローグは彼女を迎え、現在に至るといふ。

「ローグも色々あったんだな…というか、昨日はそんなこと全然言わなかったじゃないか。…もしかしてこれで酔ったのか？」

カウンの酒は質が良い分、酔うのも早かったようだ。

「…ああ、そうかもな。いや、ヴァラルのように何でも話せる奴には久しぶりに会ってな。本当は先輩としてアドバイスしたかったが、逆にこうして身の上話につき合わせちゃってる。俺も年をとったな…」

「不安なのか？例の盗賊団のことで」

「まあな。村の連中には尊敬されているが冒険者は随分昔のことだ。奴らを相手に今の俺がどこまで出来るか正直わからない…」

ローグもまた不安だったのだ。あのような不可解に壊滅した村々を見て、正体不明の盗賊団に対抗できるのかどうか。

「けどな、ここには俺の妻や子供達がいる。そう簡単にはやらせるつもりはないぜ」

そう言っただけのけたローグの目は力強いものだった。

そしてその翌日、その言葉を待っていたかのように事件は起こった。早朝、ローグの家に泊まっていたヴァラルは不穏な気配を察知して目覚めた。なにやら村が騒がしい、そんな気がしたのだ。

「どうしたんだローグ。何かあったのか？」

外に出ようとしたローグをつかまえ、事情を聞いてみた。

「ああ、ヴァラルか。村の外に巡回しに行っていた連中が戻らないんだ。だから搜索隊をこれから出すところなんだよ」

「もしかして、カウンが？」

「いや、あいつは途中で交代したからこの村にいるはずだ」

ローグがそういうと同時に、外から叫び声が上がった。

「何だ！？」

急いで家を出ると村のあちこちに火の手が上がり、いくつかの家が燃えていた。まるで誰かがこの村を襲撃したかのような…まさか！？

「ローグさん！！」

村人達が必死な面持ちで彼に近づいてきた。何かから逃げてきたのか体中は汗だらけで、彼らは相当慌てていた。

「どうしたんだ！！一体！！」

「あいつらが来たんですよ！」

その言葉を聞いた瞬間、

「男達は女・子供、老人連中を急いで非難させるんだ！！戦闘があるかもしれない！！決して一人で行動するなよ！！」

ローグは大声で怯える村人に檄を飛ばす。すると、彼の言葉にはつとしたように彼らは散らばっていった。伊達に彼が尊敬されているわけではない、何度も村から魔物を撃退してきたローグだからこそ村人達は彼を深く信頼していたのだ。

「ヴァラル、お前も妻や子供達と非難するんだ。まだ冒険者にもなっていないんだろ？お前はまだ若い。それにこの村の客人に危なっかしい真似をさせることはできないしな」

「だが、村を見る限り敵は大勢いるみたいだぞ。一人で大丈夫なのか？」

「村の男達は人を殺す覚悟なんて出来ちゃいない。訓練はしたんだが正直言って当てにならない、無駄死にさせるだけだ。それにヴァラル、言っただろう？冒険者ってのは臆病なくらいでちょうど良いとちゃんと覚えておけよ？」

そういつて彼は駆け出していった。

村の中心部にある広場は既に大変なことになっていた。逃げ遅れた

と思われる村の男たちは盗賊団と思わしき集団と戦っていたが、腰が引けていて頼りなかった。ここが辺境の地であるため、人間相手に戦うということの経験が彼らには圧倒的に足りなかった。

実際この村で実戦経験者はローグだけなのだが、それでも村を守ろうと必死に農具を振りまわし抵抗していた。

けれど、盗賊団は彼らの必死な姿を嘲笑うかのように短剣を操っていた。最初は単調な突きを繰り返して慌てふためく村人をからかい、徐々にそのスピードを上げて皮膚を切り裂いて恐怖心を煽る。そして命乞いを散々したところで殺す。

アザンテ盗賊団。総勢五十人に及ぶこの集団は、このような残虐な手口で村人達を襲っていた。この近隣で暴れまわっている盗賊団は彼らだったのだ。

「やめろお!!!!!!」

そのアザンテ盗賊団の一人が飽きて村の男を殺そうとしたとき、大声で盗賊を怒鳴りつけ一人の男が割り込んできた。

ローグである。

「なんだあ？お前何邪魔してんだよ」

気分が削がれたように盗賊は目の前の男に言った。

「これ以上はやらせん」

ローグは怒気を込めて盗賊を睨めつけると同時に剣を構えた。

「へえ、武器の構え方くらいは知ってるのか」

盗賊もこいつは素人ではないなと考え、短剣を構えなおした。

一瞬の沈黙が二人の間に流れ、戦いの火蓋がきって落とされた。

「ハアツ！」

先に仕掛けたのは盗賊の方だ。素早くローグの懐に潜り込み短剣を繰り出して、彼の命を絶とうとする。

「フンツ！！」

けれど彼はその攻撃をサツと横に回避し、お返しといわんばかりに剣を横に薙ぎ払った。

「！！チイツ！」

思わぬ抵抗にあった盗賊は慌ててそれを避けた。一瞬でも遅ければ彼の命は無かつただろう。それぐらいローグの一撃は鋭いものだった。

「…さっきまでの奴とは随分違うじゃねえか？お前、冒険者か？」

盗賊は思わず尋ねてしまった。こいつは明らかに戦い慣れしている、そう判断したからだ。

「それがどうした？無駄口を叩いている暇は無いぞ」

ローグは盗賊に向かつてすぐさま斬りかかった。まだ村の連中が残っている、急いで片付けなければ彼らの命が危ない。そう思い彼は目の前の敵を倒すことに専念した。

盗賊もまたやられっぱなしではなかった。ローグの放った斬撃を避け、彼もすかさず短剣を振りかざした。

それからは一進一退の攻防が続いた。盗賊が次々と短剣で突いてくるのを、ローグはひたすらそれを避け、剣で弾き、隙あらば薙ぐようにして斬りつけ、反撃に転じていた。

「くそっ！！」

盗賊は苛立っていた。これだけ攻撃しても、盗賊はローグに目立つた外傷を負わせることが出来ないでいたからだ。目の前の彼が息一つ乱れていなかったのも盗賊の心に焦燥感をもたらしていた。

埒が明かないと見て盗賊は一気に勝負に出た。真正面から短剣を構え、盗賊が出せる最速の一撃を放った。けれど、そんな正直すぎる攻撃が当たるはずも無い。ローグはその攻撃を弾き、バランスを崩した盗賊に対して袈裟懸けに斬りつけた。

「ぐっ！？」

全身から血を流して盗賊は地に倒れこみ、そのまま二度と起き上がることは無かった。

「大丈夫か！？」

盗賊が死んだことを直接見たローグはすぐさま駆け寄り、男の無事を確かめた。

「あ、ああ。すまないローグさん……」

その男はカウンだった。体のあちこちに怪我を負っていたが、幸い命に別状は無さそうだ。けれど、ローグが駆けつけてこなかったら物言わぬ死体になっていただろう。カウンは助けられたことでその恐怖が蘇り、身震いをしていた。

「ここは俺に任せておけ。お前は避難しろ。場所は分かるな？」

「本当にすまない…ヴァラルやローグさんといい、俺はいつも誰かの脚を引っ張ってばかりだ…」

「泣き言は後にしろ。……ほら、とりあえずこれで歩けるだろう。早く行くんだ！」

簡単な手当てを施した後、ローグは他の村人を助けるため再び戦いの場へ戻っていった。

それからのローグはまさに獅子奮迅の働きを見せた。先ほど戦った盗賊がそれなりに強かったのもあったが、それでもあつという間に五人を立て続けに斬り伏せた。

彼は冒険者を辞めて十年経とうとしているが、毎日の鍛錬を欠かすことは無かった。そのため、今でも第一線で活躍できるほどの力量

を彼は保持し続けていた。ただ弱いものだけを相手にしていた盗賊とは強さの質が違うのである。

そうして六人目となる盗賊を倒したところに一人の男が現れた。ひよろりとした体格ではあったが、その周りには手下と思われる盗賊たちがいた。

「随分とやってくれたじゃないか？ええ？」

全身から肉の焼けたにおいを発している彼の名はアザンテ。この盗賊団を率いる男である。

「お前がこの盗賊団の親玉か」

「そうだ、一人の男に次々とやられたというの報告を聞いてな。けど、どんな奴かと思ったらただの老いばれ冒険者じゃないか。一体何やってたんだあいつらは……」

死んでいった盗賊たちを小馬鹿にした彼はローグの姿を見て呆れていた。

「油断するのは勝手だがな……あまり俺を舐めるなよッ!!」

ローグは一気に駆け出した。人数が多いとはいえ、目の前の男さえ倒せばその後はこちらのものだ。そう思い、彼に向かって叩きつけるかのように斬り下ろした。その瞬間、

「ま…魔法士か…」

彼の手には一本の杖が握られていた。

「そつだよ。気づくのおせーよ」

魔法士。

スペルマスターとも呼ばれ、魔力を操りそれを様々な形でこの世界に具現化させる者のこと言う。

そつ、トレマルク王国で相次いだ焼死体はアザンテの仕業であった。

「な…なぜこんなことを…」

ローグの疑問ももつともである。魔法士はどこへ行っても優遇される。冒険者ギルドや軍、貴族の護衛など、彼らはあるとあらゆる場所で重宝されるのだ。ローグも何度か魔法士と出会ったことがあるが、誰もが高い地位を得ていたのだ。

そんな雲の上の存在がなぜこんな盗賊をやっているのか。彼には理解できなかった。

「そんなの決まってるだろ？お前みたいな奴を見るのが楽しいからだよ。どいつもこいつも最初は俺のこと見下しておいて、俺がちよつと本気を出すと泣いて謝りだす。ほんと笑えるわ」

再び盗賊団たちはドツと笑い出した。まるで殺しを楽しんでいるかのような声が辺りを包んだ。ローグが地べたを這い、彼らはそれを

上から見下す。

弱者と強者がここにはつきりと分かれたときだった。

「く……狂っている……」

彼らの下品な笑い声をきいてローグは呻いた。

そんな、そんなことのためにこの村は無くなるのか。

妻と子供、そして村の人たち。

貧しい中でも知恵を出し合って生活してきたのだ。

それがこんなにも呆気なく……

「あー面白かった。さてと、俺達はまだやる事が山ほどあるからな。そろそろ死んでくれ」

ひとしきり笑ったアザンテは杖をローグに向けた。距離は三メートル、決して外すことは無い。魔力が杖の先に集中し、

すまない……サリス、子供達……

まさに魔法が発動しようとしたとき、

「ちょっと待て」

燃えさかる炎の中から悠然と

ヴァラルが現れた。

狩るものと狩られるもの

「あ？」

盗賊達は突然の出来事に戸惑っていた。それはアザンテも同様だった。いきなり炎の中から男が現れたのだ。それだけでも彼らの気を引くには十分だった。

黒い髪に黒い瞳、腰に帯びた古びた剣と鎧。剣士なのだろうが、アザンテたちを見て物怖じを一切していない男の雰囲気はどこか異様だった。

「おいローグ。しっかりしろ」

「う、ヴァラルか……村の連中はどうした？」

「大丈夫、お前のおかげで皆無事だ。後はお前だけだ。それと喋るな、傷に触る」

ヴァラルはローグに近寄り、どこからともなく瓶を取り出して中に入っている金色の液体を飲ませた。

その瞬間とんでもないことが起きた。

みるみるうちにローグの体が治っていくのだ。大火傷を負った皮膚は瞬く間に再生し、その光景を目の当たりにした盗賊たちからも動揺の色が広がっていた。

「ヴァラル、こ、これは、一体…？」

自身に起きた突然の変化にローグは思わず尋ねていた。当然だろう、鎧がぼろぼろになっているとはいえ、体には傷一つついていなかったのだから。

外の世界での使用は問題ないみたいだな…

「少し休んでいる、後は俺が引き受ける」

「そんな、無茶だ！あいつらは魔法を使う！俺達じゃ勝てない！」

「魔法？ああ、そういうことか。だが問題ない。それよりもローグ、お前は離れてろ。少し邪魔だ」

有無を言わさぬその声に、熟練の冒険者であった彼はすごく奥へ引き下がった。彼の言葉は少々不躰だったが、どこかローグを気遣うような気持ちが込められていた。

さっきの光景を見ていたアザンテは顔には出ていないが、盗賊たちと同じように戸惑っていた。

この世界では傷を癒すためには、数種類の薬草を調合した傷薬か、ポーションとよばれる魔法薬で治すのが基本である。前者は安価で手に入るが傷口を癒すくらいのもので、後者は骨折程度の怪我を直すことが出来るが高値で取引されている。さらに言うならどちらと

も即効性ではなく半日から数日かけて治す遅効性のものだ。

魔法士でも治癒魔法を使えるものはいるが、それでもこの回復速度はありえない。全身の大火傷を治すためには、治癒魔法に長けた魔法士が数時間つきつきりでかけ続けなければ治らないのだ。

「お前、一体誰だ？」

アザンテは怪訝な目でヴァラルを見た。さっきのやりとりから見ていると二人は知り合いのようではあったが…

「俺はヴァラル、冒険者だ。まだ登録はしてないけどな」

「嘘をつくな！！それにさっきの変な液体、あれは一体何なんだ！！」

アザンテは吼えた。こんな奴が唯の冒険者であるはずが無い。しかも登録も済ませてないだと？断じてありえない！

「本当のことだ。それとさっきのものはエリクシルといって魔法薬の一種だ。しかし、ここにはエリクシルは無いのか…」

ヴァラルは残念そうに呟いていた。

一方、アザンテは彼が何を言っているのかさっぱりわからなかった。アザンテも魔法士だ、人並み以上に魔法の知識はある。それでもエリクシルという言葉自体、今日初めて聞いたものだった。

「っと、そんなことを言ってる場合じゃなかった。お前達、いくらなんでもこれはやりすぎだ。この村に何か恨みでもあるのか？あつ

たとしても度が過ぎることには変わりないがな」

「っははははは！いきなり何を言い出すかと思えば！こんな辺鄙な村に恨みなんてあるわけないだろ？俺達はやりたいことを自由にやっているだけだ。ヴァラルといったか？エリクシルとやらの魔法アイテムを含めてお前には色々と聞きたいことがある。すこしつきあってもらうぜ」

こんなときに説教を垂れるとは目の前の男はどこかおかしいようだ。辺りは火の海だというのにこの能天気さ。それなりの冒険者と思っただが、どうやら違うみたいだ。こいつは唯の馬鹿だ。

アザンテたちは臨戦態勢を取った。

「…つまり、俺に喧嘩を売ってるわけだな？良い度胸だ…相手になつてやる」

ヴァラルは盗賊たちに挑発するように言った。

「……やれ。生きてさえいればいい、とつとと始末しろ」

アザンテは手下たちに指示をした。こちらは四十人以上いる。それに対して相手は一人、どう考えても負ける要素は見当たらなかった。盗賊たちは一斉に走り出した。元々いたぶるのが得意な彼らだ。腕や足をとることに何の躊躇も無い。しかも相手は武器を構えてさえいない。

これはやれる。

そうしてあっという間に三人がヴァラルに肉薄し、短剣を突き出したとき、

ヒュンと、

何かが風を切るような音がして、

盗賊たち三人の首が宙に舞った。

ドサツドサツドサツと襲い掛かった盗賊たちの首が子気味よく地面に落ちると同時に辺りは静寂に包まれ、彼らは目の前で起きた出来事に思考が追いつかないでいた。

そして仲間だった彼らの首を呆然と眺めて盗賊たちが次にヴァラル

を見ると、

白銀に輝く剣を手に持ち、黒光りする鎧に身を包んでいた。

何だよ…あれ…

誰かがぼつりと言った。

さっきまでは古ぼけた剣と鎧だったはずなのに、いつの間にかそれは一変しており誰もが息を呑んでいた。

盗賊たちは美術品の価値など一切分からない。

宝石ならまだしも名のある彫像や絵画を奪う際、それらを見ても心を振るわせたことなど一度もない。彼らはをただの金としか見ておらず、まして剣や鎧でそんな感情を抱いたことはなかった。

けれど、目の前にある剣と鎧はそんな彼らの固まった価値観を一瞬にして吹き飛ばした。

それほどまでに綺麗だったのだ、目の前に存在する武具は。

「おい、何ぼうつとしているんだ」

ヴァラルは目の前で惚けている彼らに声をかけた。

仲間が三人も死んでいったはずなのに盗賊たちはただ突っ立っただけだった。まるでそのまま殺してくださいといわんばかりに。

その言葉にはつとした彼らはヴァラルを再び見た。けれどさっきの威勢はどこにいったのか、盗賊たちは戸惑いの色を浮かべていた。

「来ないのならこっちから行くぞ？」

ギョロリとヴァラルは盗賊たちを見まわした。その目はまるで命を狩る死神のような目であり、誰もがその場に立ち竦み、一斉に怯えだした。

「おいおまえら！たかが一人に何ビビッてるんだ！しっかりしやがれ！もし逃げ出したりしたなら…分かってるんだろうな？」

アザンテは自身を鼓舞するかのよう盗賊たちを怒鳴った。さすが

はリーダーだけあってヴアラルの軽く飛ばした目線に怖気づくことはなかったようだ。

「ひっ!」

そして誰かが小さな悲鳴を上げると同時に

ヴアラルは歩き出し、

一方的な虐殺が始まりを告げた。

「あ、あああ……」

盗賊の一人は思わずうめき声をもらしていた。

いきなり三人が死んだと思ったら武器は変わっており、そのあとも

風を切るような音が聞こえたかと思うと対峙していた盗賊たちが一人また一人と死んでいく。

男は彼らを次々と斬り伏せていく。男は別に何かをしたわけではない。剣の動きが早すぎて見えないのだ。

深く斬り込んだと思えば短剣を持っていた腕を斬り飛ばされ、後ろをとったと思えば、まるで頭の後ろに目があるかのように振り向きざまに相手を薙ぎ払う。

命乞いをしようとしても、言葉を発する前に頭と胴体は分断され、声を発することが出来なくなっていた。

四十人以上いた盗賊たちはその数を瞬く間に減らされた。逃げ出した盗賊もいたがそんなことをアザンテは許さず、杖を彼らに向け、死んでいった。

どちらにせよ、盗賊には既に逃げ場はなかった。

「ひ、ひひひひ……」

最後の一人となってしまうた盗賊はがち歯を鳴らしながらヴァラルと対峙していた。

こんな辺鄙な村にたった一人で何十人も相手をする事ができる冒険者がいたなんて誰が想像できただろうか。変な魔法薬や武具を所持している者がいるだなんて誰が思うだろうか。

そして、ヴァラルの目が盗賊の目と合った瞬間、

彼の命は消えた。

「さて、何か言い残すことはあるか？」

ヴァラルは盗賊の最後の一人を始末すると、アザンテに向かってそう言った。

けれど、アザンテは笑っていた。手下が全員死んだというのになんて奴だ、ヴァラルはそう思いつつも彼に期待した。

盗賊たちは武器を持っていたが、一人ひとりの技量を見る限り最初に戦った猪の魔物の方が強いことを肌で実感していた。

彼は盗賊たちと戦っていたとき、久しぶりに使った剣の動きを確認するかのようには振るっていたのだが、彼らはヴァラルの剣筋がまるで見えていなかったようだ。

だから、アザンテの繰り出す魔法を心待ちにしていたのだ。

「へへっ、これほど強い奴を見たのは初めてだぜ。だがな、冒険者風情が俺に勝てるはずがないんだよ！」

杖をヴアラルルに向けて魔力を集中させ、必殺の魔法を放った。

『ファイア・ボール』

メラメラと激しく燃える火の玉が男に襲いかかる。

『ファイア・ボール』 自体、魔法士なら誰でも使うことができる。だが、アザンテの作り出した火の玉は直径一メートルほどの巨大なものであり、鎧を身につけていても中の人間ごと焼き尽くす強力なものとなっている。

アザンテの恐ろしさは初歩ともいえる魔法を殺人の域まで高めることで、魔力の消費を抑え、素早い詠唱を可能にしたことだ。その恐ろしさのため、魔法皇国ライレンでは彼に多額の懸賞金をかけたいた。

そんな彼の魔法が男を焼き殺そうとする。アザンテはエリクシルのことを聞き出せないことを後悔したが、死んだ後に彼の持ち物を漁れば良いかと気持ちを改めた。

だが、そんなことは起こるはずもなかった。

「こんなものか」

そういつて男は無造作に剣を振ると、火の玉はその瞬間、虚空に消え失せた。

「……は？」

アザンテは間抜けな声を漏らした。

「どうした？もう終わりなのか？」

「何だ…」

アザンテはすかさず『ファイア・ボール』を放った。だが、ヴァラルが白銀に輝く剣を振るう度に火の玉は消えていった。彼はどんどん近づいてくる。

「何なんだよ！！お前は！！」

アザンテは目の前で起きていることが理解できなかつた。水の魔法を使った防護魔法を張っていたのならまだ分かる。だが、炎を斬つたのだ。剣を振っただけで炎が消えるという馬鹿げた現象をいまだに信じられずにいた。

彼がそう思うのも無理は無い。

ヴァラルの持っている剣は『真龍の剣』と言う。

聖獣バハムートの白銀に輝く鱗から作り出されたその剣はヴァラルの魔力に呼応して真の姿を現す。

その特徴はヴァラルの意志に応じて威力を変化させることができる所にある。あらゆるものを『断つ』ということに特化され、最大威力はヴァラルが千年前に使っていた『レーヴァテイン』に匹敵する。

そのため、こちらに向かって放たれた魔法を『断つ』ことなど造作も無い。

ドワーフのエドはヴァラルに対して武具を破格の条件で作り出したのにはわけがある。

彼はヴァラルの使っていた武具に心惹かれていたのだ。アルカディアに来た当初は自分の作り出すものが最高のものだと思っていた。彼だったが、ヴァラルの使っていた剣や鎧を見て自尊心を打ち砕かれた。

力を失っても尚、当時のエドが作り出した最高傑作を上回るものだったからだ。

そのため彼はヴァラルの持つ武具を超えようと研鑽の日々を続け、ガルムたちの協力があつたとはいえ、ついにその領域に手を伸ばすことが出来たのだ。

お前が俺の使っていた武具を目指していたのは知っていたが、ここまでのものとは…流石だな。

だがな、エド、

これはやりすぎ

そうこうしているうちに、ヴァラルとアザンテとの決着が付こうと
していた。

アザンテの魔力が尽きたのだ。

いくら燃費に優れた魔法でも、詠唱を続ければあつという間に魔力は尽きてしまう。また、アザンテ自身の精神的な動揺も大きく影響しているのだろう。彼はヴァラルに恐怖し、その場にへたり込んだ。

「な、なあ。俺と手を組まないか？二人で協力すればあつという間に」

「断る」

「お、おまえがリーダーをやってもいい。い、いやむしろあんたがふさわしい。さ、さっきまでのことは謝る。だから、」

「何のメリットもないし、お前が俺に殺意を向けた時点で既に殺すことは決めていた。だから諦める」

「そ、そんな……た、頼む、許してくれ……」

「そうやって命乞いをした他の村人達も殺してきたんだろう？ 駄目だ」

「う、うわアあああああ！」

彼は杖を振るい、彼は反撃を試みたが、

「五月蠅い」

ヴァラルはアザンテを何の躊躇もなく斬り伏せた。

「馬鹿な奴だ……本当に……」

ヴァラルは一人呟いた。

「それからのこと」

メラメラと炎があたりで燃え盛る中、足音が聞こえた。ヴァラルがアザンテを打ち倒し、こちらへ向かってきたのだ。

はっと我に返ったローグは彼に聞きたいことが山ほどあった。けれど、気持ちとは裏腹に体は全く動かなかった。

全身が恐怖しているのだ、目の前の圧倒的な存在に。

ローグも人を殺したことがある。その中にはアザンテのような下衆な者が殆どだったが、それでも必ずといっても良いくらい気持ちが悪くなり落ち込んだり、怒りに燃えていたりもした。

けれど、ヴァラルは何十人も倒した直後だというのに顔色一つ変えずにこちらへ近づいてくるのだ。

まるで同じようなことを何度も経験してきたかのように。

同じ人間であるはずなのに、どうしてここまで何食わぬ表情でいられるのだろうか。そんな彼を前にして、ローグは今まで張り詰めていた緊張の糸がついに切れ、そのまま意識は闇の中に沈んでいった最中、

「…それが当然の反応だ」

ヴァラルが何か口にしたような気がした。

彼が目覚めたのはそれから三日後のことだった。

「…う、ここは…?」

「おお、気がついたようじゃな」

ここはテトスの村にあるローグの家。アザンテ盗賊団の襲来によってこの村にある家の殆どがなくなったが、ここだけは無事だったらしい。いま、サリスと子供たちはローグのかわりに村のあちこちで手伝いをしているようだ。

「村人達は!？」

「まて、そうあせるでない。順番に説明する」

村長に話を聞くと、見張りの二人以外は全員無事で、カウンもローグと分かれた後、彼らと合流できたそうだ。

生死の境を彷徨った村人が何人もいたのだが、彼らは全員ヴァラルの持っていたエリクシルを飲むことで一命を取り留めたらしい。

肝心のヴァラルはアザンテに懸賞金がかかっていたことを知ると、その金を村の復興に使ってくれ、それと引き換えに、ここで起こったことはできるだけ秘密にしておいてくれといった後、その日のうちこの村を出て行ったようだ。

「まるで嵐のような男じゃった…」

村長はそう語り、話を締めくくった。

ローグは村長の話を聞きつつ、三日前に起こった出来事を回想していた。

エリクシルと呼ばれる魔法アイテム、盗賊たちを瞬く間に制したヴ
アラルの卓越した剣技、そして白銀と漆黒に輝く剣と鎧。

全てが彼の常識を覆してしまった。

特にアザンテの魔法を打ち消したあの剣。

魔法士の才能がない彼でも、ヴアラルの持つ武器が強力な力を秘め
ていることが分かってしまった。

そもそも前提からしておかしかったのだ。どこの世界にあんなもの
を持った冒険者見習いがいるというのだ。はつきりいって相当目立
つ。

だが、そこまで思考をめぐらせることで彼はふと気づいた。

(だからあの二つは最初古ぼけた剣と鎧に見えたのか……)

アールヴリール大陸での魔法の武具は非常に貴重なものとして知ら
れる。そのどれもが国宝や貴族のコレクション、有名な冒険者の手
に渡り市場に出回ることがほとんどないためだ。

つまりヴァラルは貴重な魔法の武具を二つも所持していることになるのだが、それでは当然注目されてしまう。

それらの目欺くため、見るものを誤認させる効果があつた魔法の武具には付与されているのだらう、そう推測をした。

しかし、彼は魔法の知識がないため気づかなかつた。

世界中の魔法の知識を総動員しても再現不可能だとされる『失われた過去の遺物』であるということに。

「どうしたものか……」

テトスの村を去つたヴァラルはその日の夜、セクリアの街に向かう途中の草原で腰掛けながら大いに悩んでいた。

この世界では魔法士という存在がいて、彼らがローグのような冒険者達に恐れられているのは分かつた。

だが、ヴァラルとしてはあの程度の魔法で怖がられてしまうのなら、それをいとも簡単に破つた自分は一体どうなってしまうのだ。

彼としては出来るだけ目立つことを避けたかつたのだが、またもや出だしからつまづいてしまった。

エリクシルがまだこの世界には存在しないこと、エドの武具が予想以上のものであったこと、そして外の世界の人々との力量差。

ヴアラルにとって良いことなのか悪いことなのか分からないほど踏んだり蹴ったりの出来事だった。

盗賊団が現れた時点で逃げても良かった。だが、ヴアラルはテトスの村の村人達をあのまま見捨てるわけにはいかなかった。少しの間だが世話になった村だ、彼らを見殺しにするほどヴアラルは薄情ではなかったのである。

そのため、先程の出来事を踏まえ、これからの行動をどうするか改めて考えていた。

どうもこの世界に来てから別の意味で調子が狂うな…

とりあえず、頭を一旦整理し、現在の状況を確認した。

目的は冒険者を隠れ蓑にして外の世界を知ること。そして聖獣たちとヘスターから頼まれた魔族の男の行方を探ること。とりあえずこの三つだ。

そして、最悪の事態はヴアラルの素性、またはアルカディアが知られてしまうということだ。

アルカディアに関しては特に心配はしていない。あの四人にはきつく言い渡してあるし、何よりメクビリス山脈がある。フェンバルの森付近も辺境の地ということもあり、そうそう人は寄り付かないだろう。

ヴァラルの素性の方もあまり問題がないように感じる。冒険者という職業は出自を気にしないことが多いという。彼らに求められるのは力だ。さらに毎日多くの冒険者が生まれ、そして死んでいく。要は使い捨てる存在であるため、彼らの出生を調べるだけ時間の無駄なのだ。

後は誰かから強制的に喋らされたり、自分から打ち明けたりすることだが……

前者は考えるまでもない。そんなことを考えた不埒な輩を正面から捻り潰せば良い話だからだ。

後者も…今のところないだろう。聖獣はともかくとして魔族の男には打ち明かす必要があるが、基本的に昔の知り合いはアルカディアにいるはずだ。打ち明けるにしてもヴァラルの信頼に足る人物、つまり過酷な旅を承知の上で共に旅する新たな仲間がこの世界にいることが前提条件だ。

アルカディアに招いても良いと彼が思うくらいに。

「そんな奴がそうそういるとは思えないけどな…」

そこまで考えるとそれなりの余裕があることに気がついたが、

「結局なるようにしかならないか……」

そう言って、よくわからない結論に達した彼はその場所で野宿の準備を始め、眠りについた。

セクリアの街

日の光が夜の闇を照らし出す頃、ヴァラルは目を覚ます。外の世界に来てからというもの、彼は夜明けと共に行動するようになった。その理由は朝日を拝みたいというごく単純なもののだが、それでもアルカディアの王城で見るときとはまた別の感動があるのだ。

「よし、今日もまた頑張るとするか」

ヴァラルは簡単な身支度を済ませ、朝食の干し肉と果物を食べ終わると次の目的地、セクリアの街へ向かう。

途中、コボルトという犬のような魔物と何度か遭遇したこともあったが、ヴァラルの拳と剣の前にあっけなく沈黙することになったのはまた別の話だ。

「……このままでも十分いけるな」

ヴァラルは自分の体を確かめるように身につけている装備を確認する。何の魔力も秘めていない古びた剣と鎧。テトスの村での出来事から、彼は徐々にだが相手の力量に合わせて戦うことが出来るようになってきた。

最初のうちはボボルと同じように相手の体に大穴が出来たり、体がパツクリと二つに分かれるというグロテスクなことがあったのだが、それも今では良い思い出だ。

また、ヴァラルはテトスの村の出来事を踏まえ、毎朝トレーニングをするようになった。主に肉体面ではなく精神面のものなのだが、彼の身に渦巻く膨大な魔力を上手くコントロールするよう心掛けるのであった。

実はローグが倒れた際、ヴァラルは彼に魔力を無意識のうちに当ててしまい、そのせいで気絶してしまったことが後にわかった。そのため、これから様々な人と出会う中でいちいち気絶させてはまずいので、セクリアの街に着く前に習得する必要があったのだ。

「ガラム、セラン、お前達の苦勞が少し分かった気がする……」

ヴァラルはアルカディアにいる仲間との距離がほんの少し縮まったような気がした。

その日から街道を歩き続けること五日、日が徐々に傾き始めた頃、ヴァラルはついに目的地にたどり着いた。彼の力を持ってすればあつという間に到着することが出来るのだが、そんな野暮なことはない。彼はゆつくりと辺りの風景を眺めながら旅を楽しみたいため、あえて徒歩で移動していたのだから。

「ここがセクリアか。結構立派なところなんだな」

セクリアの街。

デパン伯爵が治めるこの地はトレマルク王国の中でも特に発展が著しい街として知られている。

このセクリアの街は最初、テトスの村のように寂れたところであったという。けれど伯爵がこの地を拠点にして改革を始めたのをき

かけに、大きく変わり始めた。

この地に蔓延っていた役人への賄賂を徹底的に摘発し、新たな商店の参入を以前よりも緩やかなものにしてセクリアの街での取引を活性化させ、警備隊を常備しての治安の安定化を目指す等、人々にとってデパンは理想ともいえる施政者であった。そのため、人々も彼の行いに報いるかのように伯爵領は発展し続け、現在ではトレマルク王国内でも有数の街としてここは知られている。

「ひとまず宿屋とギルドに立ち寄ってからこの街をまわるか。ああ、その前にどこの宿が良いかお勧めを聞いておかないと……」

入り口に設置されている案内板を見てこの後の予定を決め、ヴァラル街の中へ入っていく。

「そういうことならエンラルの宿がお勧めだ。この街は初めてなんだろう？ だったらそこが良い。中央の市場へも近いし、ギルドの館もそこからなら分かりやすい場所にあるしね」

「わかった、わざわざ引き止めてすまないな」

入り口にいた門番に礼を言い、値段とサービスが良いと巷で評判のエンラルの宿へヴァラルは向かった。

「いらっしやい。おや、見かけない顔だな。冒険者かい？」

十五分後、彼はギギイと古めかしい音を立てレンガ造りの大きな建物の扉を開いて中へ入る。すると五十ほどの男がヴァラルに話しかけてきた。雰囲気からしてこの宿屋の店主なのだろう、彼はそう考える。

「ああ、ここで新しく冒険者をはじめようと思ってな。これで宿を一週間ほど取りたい。空いているか？」

ヴァラルは腰に下げていた小袋から銀貨を七枚取り出し、店主の元に差し出した。するとあからさまに彼の顔は驚き、

「おいおい、こりや多すぎだ。何の冗談だ？」

銀貨をつきかえしてきた。

「そうなのか？すまない、その辺りのことはよくわかってないんだ。良ければ教えてくれないか？」

テトスの村では何だかんだいってただで泊まり、飲み食いし続けていたヴァラルであったため、この世界での物の価値がいまいちわかっていなかったのだ。

「ああ、良いよ。しかし、随分綺麗な銀貨だな。これをどこで？」

しかもヴァラルの出した銀貨は純度が相当高いようで、そのことも相まってか店主にだいぶ怪しまれた。

彼はなぜこんなものをもっているのか？それはセランが予めアールヴリール大陸にある貨幣をこっそりと集め、それを元にアルカディア内の金貨等を鑄潰して作り上げていたのだ。そのため、ヴァラルは貨幣を持ちながらも、その価値については良くわかっていないという不思議な状況になっていた。

「気にするな。それよりも話を聞かせてくれ」

店主はヴァラルのことを貴族の子息だと勘違いしたようで、この国での貨幣価値について親切に教えてくれた。

このアールヴリール大陸には金貨・銀貨・銅貨があり、銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨十枚で金貨一枚と同じ価値を持ち、これはどの国でも大体同じなのだとか。アールンではさらに教会が特別に発行する聖鍔金貨というものがあるらしいが、なかなかお目にかかれない代物で、金貨五枚の価値があるという。

一般的な宿屋は銅貨十枚で泊まることが出来るのだが、エンラルの宿は安さを売りにしているため銅貨八枚で泊まれる。つまり、ここで銀貨七枚というのは明らかに多すぎということだ。また話を聞く限り、アールヴリールでは銅貨が主流の通貨だということもわかった。

しまったな…あっちでの金銭感覚がまだ残っているのか。

一方アルカディアでは銀貨一枚で宿に泊まる事が出来る。もちろんぼったくりというわけではない、むしろ安すぎて怖いくらいだ。あそこでは銀貨が住人達の間で主流の通貨となっているし、宿自体も高級なホテルとも言つべき所なのだから。

そのため、宿屋を経営する者たちは基本的に趣味の一環としてやっていることが多いという。ヘスターもいくつか経営しているらしいのだが、お見せするほどのものではないとのこと。ヴァラルを案内してくれなかった。

(ま、そのほとんどがお前さんが経営していることは知ってるけど…しかししただけ金持っているんだ、ヘスターめ……)

自分の宝物庫のことを棚に上げて彼に文句をつけるヴァラルであった。

「そついうわけだ。って聞いてるか？」

「……ああ、よく分かった。だが、これからはここで色々世話になると思う。一枚だけでも受け取ってもらえないか？」

「そうは言っても、そんなに金があるならもつと良いところがたくさんある。なんでまたこんなところへ？」

「知らなかったのか？」

ヴァラルはセクリアの街で一番人気なのがこの宿であることを店主に説明した。

彼は門番だけでなく、道行く人たちにもお勧めの宿屋はどこであるかということを探ねまわり、結果として十人中八人のお墨付きがあったためここに滞在することを決めたのであった。

「それは光栄なことだ。話を聞いたからには貴族の冒険者様だろうが断るわけにはいかなかったな。おつと、自己紹介がまだだった。俺はケラク、この街のことなら何でも聞いてくれ」

本当に彼は知らなかったようだ。それにケラクは話の中で色々と言ふヴァラルのことを誤解していたが、

「俺はヴァラル、こちらこそ宜しくな。しばらくの間世話になる」

訂正するのも面倒なので彼もそのまま名を名乗り、そして二人はが
つちりと握手を交わした。

（ひとまず宿は確保できた、この後はギルドだけだな。そうだ、ケ
ラクにいるいろんな店や酒場のことを聞いてみるか。彼なら良いとこ
ろを知っているはずだ）

セクリアの街に着いてこれからのことに期待を寄せるヴァラルであ
った。

新たな出会い

ヴァラルはエンラルの宿で部屋を借りた後、再び外へ繰り出した。街全体が夕暮れに包まれ、人々の足はすっかり早くなっていた。けれど、セクリアの街はこれから夜になることで、昼間とはまた別のにぎやかさを取り戻すこととなる。

「酒場の場所も聞いたことだし、とつとつと済ませるか」

彼は街の一角にある冒険者ギルドへ足を踏み入れた。

「ギルドへようこそ！」

受付嬢と思われる若い女がヴァラルに向かって挨拶してきた。

冒険者ギルドはこの辺りで一番大きな建物であったためすぐに見つかった。木造の建物のホールに入ると、冒険者と思われる男達がちらりとヴァラルを眺めた。が、それらの視線をやり過ぎればさっきの受付嬢に声をかけた。

「冒険者登録をお願いしたい」

ヴァラルはここに来た用件を端的に伝えた。

「はい、わかりました。ギルドへ訪れるのは今回が初めてですか？」

「ああ、そうだ」

「分かりました。それではこちらへ案内します。着いてきてくださ

い
」

二人はギルドの一室にある小部屋へ案内され、ヴァラルは彼女の話
を聞くことになった。

「それでは冒険者ギルドについて簡単に説明します。ここではお客
様からの依頼を受け、冒険者の方々に斡旋するということを行っ
ています。依頼内容は魔物の討伐や商人達の護衛、薬草・鉱石の採取
や遺跡の調査等、様々なものがあります。ここまでで何か質問はあ
りますか？」

ヴァラルは比較的質の良い紙の束を手渡され、それを読みながら彼
女の話聞いていた。

「そうだな…まず、それらの依頼は冒険者なら誰でも受けることが
出来るのか？それとここでは金を払えば身分を保証してくれると聞
いたのだがそのところを詳しく教えてもらいたい」

「わかりました。まず、冒険者にはクラスがあり、AクラスからE
クラスまでの五段階となっています。冒険者を始められる方はEク
ラスからのスタートとなり、昇格試験をクリアするとクラスアップ
ということになります。E〜Dクラスはお一人でも十分こなせる内
容が多いのですが、Cクラス以上になるとパーティを組む必要が出
てきます。特にBクラス以上ともなるとそのほとんどがパーティで
の依頼ですね。」

ギルドではクラス制を設けている。これは新米の冒険者が己の力を
過信し、高クラスの依頼を引き受けてクライアントとのトラブルや
力量を超えたモンスターに殺されるのを未然に防ぐという役割を持
っている。いくら冒険者が使い捨ての存在とはいえ、勝手に出て行

つてそのまま死んでしまうのは非常に困ることなのだ。ここでは出来るだけギルド側としても損耗を大きく減らしたいという思惑が絡んでいた。

それでも依頼の最中何が起こるかわからないため、結局冒険者同士の実力の指標くらいにしか役に立っていないのが実状ではあるが。

昇格試験の内容は主に魔物退治なのだそうだ。Dクラスの試験は比較的楽だといわれているらしいが、それでも毎回死者が絶えることはない。冒険者は昇格試験で命を落とす場合も多いのだという。

そして、冒険者はCクラスから一人前の冒険者と周囲に認められる証でもあるらしい。この世界では十代で冒険者として動き出す者が多く、その彼らが冒険者としてEクラスからCクラスに上り詰めるまで数年かかるといわれている。ローグがいったようにこの世界で数年生き残るだけでも大変なことで、Cクラスに上がることが出来るのは年に二十人いれば良い方だと言われる。

なぜここまで難しいのか。それはCクラスからパーティでの依頼が急激に増えるためDクラスのうちに仲間を見つけ、彼らと連携をとる必要性があるからだ。しかもCクラスからは昇格試験の内容がパーティを前提に作られているため、Dクラスは仲間集めのクラスともいえよう。因みに、パーティは意思統一や経済的な側面から大体四人から五人で構成されることが多いのだという。

一旦話を区切り、再び彼女は説明を開始した。

「身分の保証の件についてですが、登録をする際、冒険者の方々に金貨を一枚いただいております。それによりカードを発行し、冒険者の方の身分証明にするというわけです。くれぐれも盗難には気

をつけてください。再発行手続きは時間がかかりますし、追加で金貨を払わされますから」

ギルドカードを狙ったの盗難もあるようだ。まあ、それも当然だろう。何せ身分を保証し、国々を回れるパスポートのようなものだ、貧しいものにとってはそれなりに価値のあるものなのだろう。

「わかった、気をつけるようにする」

その後は報酬の受け渡し方法、依頼者とのトラブルに関しての対応等、諸々の説明を受けた。ヴァラルは金貨を支払い、さっきの紙のうちの一枚に必要な事項を記入した。勿論出身地など、ばれたらまずいことは一切書かなかった。

そして二時間後、ヴァラルはついにギルドカードを手に入れた。

これで外の世界での身分は確保できた。後はこれからどうするかだが、ひとまず今日は後回しにしよう。

セクリアの夜の街を楽しむ気満々のヴァラルであった。

ギルドの館を出るところで彼女はヴァラルに声をかけてきた。

「ヴァラル様、これから頑張ってくださいね。私達が出来る範囲でお手伝いさせていただきますので、どうかお気をつけください」

「わざわざどうも。こっちも冒険者になった以上簡単には死ぬ気はないからな」

ヴァラルは彼女に礼を言っでギルドの館を離れた。

外はすっかり暗くなり道行く人は昼よりも減ったが、店のあちこちからは笑い声が聞こえてくる。

セクリアの街での夜が始まったのだ。

「ほう、そうか。さっき登録したばかりなのか」

ケラクと同じくらいの年の男は言った。

ここは中心街を少し外れたところにあるクレーヌ亭。名前にある通り、目の前の男クレーヌが営んでいる酒場だ。とはいっても席の数は二十にも満たない。けれど様々な酒を取り揃え、物静かな雰囲気。この場所はセクリアの街の知る人ぞ知る隠れた穴場となっている。

「まあな、案外簡単なものだったよ」

この時間帯になっても客はヴァラル以外誰もいない。繁盛している

のかしてないのか良くわからないこの酒場で二人は話していた。

どうやらここは紹介制の場所のようで、それなりの客しか相手にしていないみたいだ。最初ヴァラルがここへ訪れた際クレースは怪訝な顔をしたが、ケラクからの紹介だと伝えるとあっさり態度を変えた。

「しかし珍しいな、ケラクがこんな新米をここに寄こすとは」

ここにはヴァラルのほかには様々な冒険者が通っているようだ。しかも有名どころがそれなりに。そんなところへヴァラルはこのこと来てしまったようだが、当の本人は全く気にしていない様子だった。

「まあ、気にするな。とりあえず酒と食事、それとつまみを何品か頼む」

そう言って銀貨を数枚カウンターの上に置いた。

「ほう、ただの初心者というわけじゃないみたいだな。待ってる、今作ってきてやる」

そう言って、彼は食事を作りにも奥へと引っこ込もうとしたとき、

「クレース、今は空いているか？」

一人の冒険者がやってきた。

「見慣れない顔だ。知り合いなのか？」

美しくつやつやとした流れるような長い髪をしている彼女はクレース

スに尋ねた。

「ついさっき知り合っただばかりだ。何でも冒険者になったばかりだ
そうだ」

「ヴァラルだ、宜しく」

「ああ、そういうことか。私はセレシア。ヴァラルと同じように冒
険者をしている、こちらこそ宜しくな」

明るい茶色の髪と青空のような澄んだ青い瞳をした彼女は明るい声
でそういった。

機能性と美しさを兼ね備えた赤を基調とした服を着こなし、スカ―
トと長いロングブーツをはいている彼女は凛々しさと気品に溢れ、
冒険者というよりも高潔な騎士のようだとヴァラルは思った。

年は十代の後半だろうか。若々しさに満ちているがその一方でロ―
グと同じ、いやそれ以上の実力をもっているのだろう。物腰がとて
も優雅なのだが、全くの無駄がない。その年にしてどれだけの経験
をしてきたのか。彼女はまさに冒険者の憧れの存在だった。

「成る程、セレシアはバルヘリオンから来たのか」

カウンターの席で二人は隣同士で酒を飲み、料理を食べながら互い
に話をしていた。

彼女は修行の一環として冒険者をしているのだという。身元までは

分からなかったが、ヴァラルのように何らかの事情を抱えているのが冒険者だ。そんな野暮なことは聞かないというのが彼らの暗黙のルールとなっていた。というか、初対面なのにいきなり出身地を明かすセレシアはなかなか豪胆だと思った。ヴァラルは間違えてもアルカディアから来たなんて言えるはずがないからだ。

「だが、私が国へ帰ることになってな。その前に昇格試験を受けようと思う、トレマルクへ来たのだ」

セレシアは最後に仲間達との思い出として受けるとのことだ。彼女が実質的なリーダーだったため、そのままパーティは解散する予定だという。そんな理由で死者が多数出る昇格試験を受けようというのだから、彼女の仲間もなかなか肝が据わっていると感じざるを得ない。だが、それ相応の実力があるのだろう、仲間達を語る彼女の姿はどこか誇らしげだった。

そして、この夜の出来事がヴァラルとシアの最初の出会いだった。

二人の関係

二人が酒場を出たのは結局あれから四時間も経った後のことで、夜の闇はさらに深くなり通りにはヴァラルとセレシア以外誰もいなかった。しかし、時折笑い声が聞こえていることからすると、徹夜で飲み明かす者が結構いるのだろう。元気なことだとヴァラルは思った。

「そういえば、ヴァラルはどこへ泊まるんだ？ここへ来たのは初めてなんだろう？」

親しげに彼女は言った。最初会ったときとは違い、少し砕けた口調になっていた。

「ああ、ケラクという主人がやっているエンラルの宿というところに泊まる予定だ。人気のところだと聞いてな」

「そうなのか！いや、私もそこへ泊まっているんだ。あそこの店主とは顔馴染みでな、ここへ来る際はよく世話になっているんだ」

「ということはお仲間達も？」

「いや、彼らは別の宿に泊まっている。皆良い奴だ。日を改めて紹介させてくれ」

「楽しみだな、それは。…今更の疑問なんだが、どうしてここまで俺に良くしてくれるんだ？まだ会って一日も経っていないじゃないか」

「それは…ヴァラルは冒険者として登録をしたのが今日なのだろう？それに私は辞める身だ。いわば冒険者として最後のおせっかいというものだ。それに…ヴァラルからは何か不思議な感じがするんだ」

「不思議な…ね」

「い、いや。別に悪い意味ではない。ただ懐かしいというか安らぐというか…ああ、もう何を言っているんだ！私は！」

自分で言っていることが良くわからなくなってしまったセレシアは気が動転したようで、ヴァラルは苦笑しながらその姿を眺めていた。

そうして二人が宿へ到着する前にハプニングが起こった。

「お！さっきの兄ちゃんじゃないか！冒険者登録は済ませたのか？見知らぬ連中だ。しかし彼らの口調からするとヴァラルのあとをつけて来たようだ。どうもギルド内でちらちらとこちらを見ている奴らがいると思っただのだが、こいつらだったのか。わざわざご苦労なことで。」

「ああ、まあな。で？俺に何のようだ？もしかして依頼でもあるのか？だったらギルドの方を通してくれ」

依頼者は掲示板で募集するほかに、冒険者を直接指名する場合もある。だが、これは有名な冒険者ではないと使われないといわれる制度だ。何せ前金と報酬は相当高額になり、冒険者自身が断ることも出来るからだ。

それでも、大抵の冒険者は指名されれば喜び勇んで依頼を受けることが多い。金も勿論そうだが、自分達が認められているという証でもあるのだ。

「へへ、いやそういうわけじゃない。ちょっとあなたの持っているカードが欲しいだけなんだ。何、おとなしくしてれば危害は加えない。とつとと渡しな」

そういつて男達は音を立てて刃物を抜いた。辺りは薄暗いため、男達の顔は見えづらい。成る程、こういうことに手馴れているみたいだ。

「その嬢ちゃんも俺達に着いてきてもらう。かなりの上玉そうだからな、へへッこの後が楽しみだ」

早速トラブルに巻き込まれてしまった。どうやら人攫いを兼ねた泥棒の連中のようで、ギルドから注意されたことがあっという間に降りかかってしまった。

全く、人がいい気分だったというのに最後の最後でぶち壊した。軽く相手してやるかと思っていると、

「ヴァラル、ここは私に任せてくれ」

セレシアは前へ一步踏み出していた。

「ほう、威勢がいいねえ嬢ちゃん。だが、俺達は五人。そっちは二人。手を借りないとまずいんじゃないのかい？」

「ルーキーにそこまでの無理はさせられない。それに私一人でも十分だ」

「言ってくれるねえ。それじゃあお相手願おうかッ！」

男達は駆け出した。最初の二人が様子見とばかりにナイフを見せ付けながらセレシアの前に立つ。対する彼女は腰に下げていたレイピアををすつと彼らの前に突き出した。刃先が彼らを威嚇するかのようにピツと伸ばされることで、男達はウツと思わず声を漏らした。

じりじりとした緊張感があたりを包み込むと、その空気に耐えかねたのか前にいた男の一人がナイフを振りかざした。刃先が暗闇の中でキラリと光り、セレシアに向けて凶刃が襲い掛かる。しかしそれを冷静に見極めた彼女は相手のナイフが届くより先に、

男の手をレイピアで突き刺さした。

「い、イデエエエ！！！！」

男の一人はポロリとナイフを地面に落とし、庇うかのようにもう一方の手で負傷した手を押さえた。

「やってくれたなッ！！！」

仲間が傷つけられたのを見て男達は一斉に彼女に襲い掛かった。多

少バラつきはあるが、このままではあっという間に囲まれてしまう。だが、

セレシアは何と男達の方へ駆け出していった。彼女の予想外の行動に一瞬彼らの動きが硬直してしまった。しかしその隙を見逃すまいとして、セレシアは一気に近づき、

「はああああ！！！！！！！！」

彼女の手から超高速のレイピアが男達に繰り出された。

「これはすごいな……」

彼女の戦いを間近で見ていたヴァラルは思わず呟いた。

男達とセレシアが接触したと思ったとき、彼らはどさりと崩れ落ちた。しかし、彼らはうめき声を漏らしていたため、命に別状はないのだろう。四人の男を一瞬で制し、しかも致命傷を負わせることのない卓越した技量。彼女のその姿はまさに一流の騎士だった。

今のヴァラルも拳でなら無力化することは出来るだろう。けれど、セレシアと同じように四人を同時に武器を持って戦った場合、一人ずつ無力化することになるだろう。まだ武器での制圧に慣れていないヴァラルはそのまま彼らを殺してしまうからだ。

けれど、彼女は難なくそれを成し遂げた。セレシアのことだ、殺そうと思えば簡単に出来たのかもしれない。けれどあえてそれをしな

かった。

それほどまでに実力が違いすぎたのだ。

男とセレシアの間には隔絶した力量差がそこには存在した。

「ヴアラル、すまないが警備隊の人たちを呼んできてくれないか？」

レイピアをさっとしまった彼女は男達が持っていた縄で彼らを拘束した。自分で自分の用意した縄に縛られるのはいたく滑稽だったが、

「ああ、分かった」

そのままヴアラルは警備隊を呼びにいった。

「おお、これは…」

目の前の状況をみた彼らは目の前の光景に驚いていた。無理もない、女の冒険者が一人で五人もの男を捕縛したのだ。しかも騒ぎを聞きつけたのか、現場にはたくさんの野次馬がそこにはいた。

セレシアは盗賊たちが目に見える範囲で物陰に隠れていた。壁を背にして腕を組みながらヴアラルを待っていたようで警備隊の中に見えるのを見つけると、急いで駆け寄ってきた。

「どうだった？あいつらの様子は」

「私の姿を見るなり怯えていたよ。どうやら私の顔に見覚えがあっ

たようだ」

「ん？確かにセレシアは凄い腕を持っていると思ったが…、結構有名な人だったのか？」

「私が吹聴しているわけではないんだが、その、知らない間に…なさ、後は彼らに任せよう」

「おいおい、事情も説明せずに帰るのか？さすがにそれはまずいんじゃないのか？」

すると、野次馬達は騒ぎのことよりも急に現れたセレシアを見ていたようだ。彼女の方もどこか気まずげに辺りを見回していた。

何だ…？この雰囲気は？

「あの、もしかしてBクラスのセレシア・ミアエットさんですか？」

すると、警備隊の人がヴァラルの疑問に答えるかのようにそう言った。

冒険者はCクラスで一人前と呼ばれる。けれど、その上にも当然クラスは存在する。

ではなぜ、Cクラス以上の人間がここまで騒がれるのか。それはB

クラス以上の特殊性にある。

Bクラスからは人並み以上の努力は当然のこと、類稀な才能と運を両方味方につけた者達が集結しているからだ。そのため、Bクラス以上の存在はこの世界には百人もいない。アールヴリル大陸全体の冒険者は十万人といわれているため、彼女は冒険者の中でもトップエリートとして名を馳せていることがわかる。

また、Bクラスのパーティには必ずといっても良いほど魔法士の存在がある。大抵彼らがリーダーを勤めているのだが、セラシアの場合が違う。彼女はその実力でリーダーに上り詰めたのだ。というか、魔法士の方から自らパーティに志願してきたのだ。

そのため、Bクラスの魔法士からはいやに注目され、それ以外の冒険者達は彼女を憧れと畏怖のまなざしで見るとだ。

「なるほどね…」

あの騒ぎの後、ヴァラルたちはエンラルのロビーで話していた。と
いうかセラシアが一方的に彼を連れ込んだのだ。

「いや、決して騙そうとかそういうことは思っていないんだ。ただ、
こんな風に喋るのは本当に久しぶりだったんだ…」

どうやら彼女は何も知らないヴァラルと普通に話すことがとても楽しかったようだ。周りの冒険者達は彼女に気を使い、仲間達もどこか遠慮しがちな態度でいるのだと。だから警備隊が来たらとっと立ち去るうとしたり、野次馬達にどこかそわそわしていたのは彼に

ばれないようにするためだったのだろう。

だったら彼らをそのままにしておけばよかったのだが、そこはやはり彼女としても見過ごせなかったのだろう。いずれにせよすぐに分かってしまうことなのに、ここまで意固地になってしまうということとは彼女も色々と苦労してきたのだとヴァラルは思った。

「別に気にしてないぞ。俺もセレシアと話せて楽しかったのは事実だからな」

「そうか…そう言ってもらえるだけで有難い…それでだな、ヴァラル。厚かましいと重々承知の上で言う」

「ん？何だ？」

「ヴァラルさえ良ければさっきと同じように接してもらえないだろうか？」

…本当に彼女は豪胆だ。つまり、人目のある中でEクラスの冒険者がBクラスの冒険者に対して対等に接して欲しいという。当然、そんなことになればヴァラルは他の連中から白い目で見られることは間違いない。下手すれば彼女の仲間達からも嫌な顔をされるに違いない。

「構わない」

だが彼はあっさりと承諾した。

「い、良いのか!？」

断られるとばかりに思っていた彼女は身を乗り出して思わず尋ね返した。

「だから良いといっているだろう。誰かに敬語を使うのはあまり好きじゃないんでね。俺にとっても実はありがたい提案だったりする」

「というか、彼は滅多なことでは敬語は使わない。ほんの一部だけ例外はあるが、彼の態度はたとえ王侯貴族が相手でも一切変わらなかつたりする。」

「す、すまない。少し動揺してしまった。しかし、ヴァラルの前だと私はどうも調子が狂う…本当にEクラスなのか？」

「言っただろう？ さつき登録したばかりだつて。逆にセレシアが変なだけだ。無礼千万で引つ叩くならまだしも、そのまま接してくれだなんて大抵のやつはそんなこと頼まない」

「ふふふ、そうか。だがヴァラルも十分おかしいと思うぞ？ 私のことを知ってもまるで驚くそぶりが見えないし、さつきと全然態度が変わっていないじゃないか」

「驚くのはもう慣れたしな…それにこれが俺の性格だ、まあ気にするな。それとセレシア、俺のことはヴァルで良い。親しい奴は俺のことをそう言うからな」

そう言っている者はアルカディア内でもごく僅かだった。堅苦しいのが苦手な彼は何度も言い方を直すようアイリスやセラランたちに言っただけで聞かせたのだが、まるで効果がなかった。それでもヴァラルはめげずに広めようとしていたのであった。

外の世界でのことだが。

「分かった、ヴァル。良かったら私のこともシアと呼んでくれ、私をこのように呼ぶのは本当に少ないんだ。遠慮なくそう言ってくれ」
何と、こんなところに奇妙な同士がいた。

「そうだな、改めて宜しくだな、シア」

「こちこそ、ヴァル」

そういつて二人はロビーを離れた。もうすっかり遅い時間だ。早く寝なければ明日に差し支える。そう思っつてヴァラルは自分の部屋へ移動していたのだが、

「ん？シアもこっちなのか」

「ヴァルこそ」

二人はそのまますたと廊下を歩いていくと、部屋にたどり着いた。しかし、

「なっ！隣だったのか！」

「そっちこそ！」

お隣同士だった。

二人の奇妙な関係はまだまだ続きそうだった。

初仕事

次の日の朝、ヴァラルはセレシアと共に朝食を食べ終えた後ギルドの館に向かった。彼女はヴァラルにメンバーを紹介したがっていたが、とりあえず今日のところはお引取り願った。

何せ今日は冒険者として初めて活動するのだ。アルカディアでヴァラルがそんなことをしようものならアイリスたちが大騒ぎしてしまうため、彼は年甲斐もなく心が高鳴っていたのである。

館に到着すると、昨日の受付嬢が同じ場所で仕事をしていた。熱中しているようで、こちらにはまだ気づいていない。

こんなに朝早くから勤勉なことだ、そう思いつつ今回の用件を彼女に伝えるため声をかけた。

「昨日冒険者登録をしたヴァラルだが、早速依頼をこなしたい。何か良いものはないか？出来ればやりがいがあるようなもので」

「ヴァラル様でしたか。こんなに朝早くからようこそいらっしゃいました。早起きなんですね」

「まあな。人は少ないみたいだし、時間があるのなら選ぶのを少し手伝ってもらえないか？まだ掲示板には慣れていなくてね」

「分かりました。それでは今あるEクラスの依頼を持ってきますので少々お待ちください。それと、無理に掲示板の方を利用しなくても私に直接声をかけてくだされば色々アドバイスを差し上げられると思うので是非活用してくださいね」

「わかった」

そうして彼女は一旦仕事を中断し奥からEクラスの紙の束をドサリとおいて、ヴァラルと共に相談を始めた。

しかし紹介されたものを手に取って吟味していくうちに彼の顔は徐々に怪しくなり、三十分を経過した頃にはすっかり曇っていた。

「他にはないのか？例えば、古代遺跡の調査とか、ニーベンスの探索とか」

二人はカウンターでうんうん唸りながら目の前の問題に取り組んでいた。

「そんなのあるわけじゃないですか、ヴァラル様。昨日初めて登録したばかりなんですよ？」

そう、ヴァラルは何の依頼を受けるかで悩んでいたのだ。

彼が言った内容は基本的にBクラス以上のパーティが受けるもので、Eクラスのヴァラルに受けられるはずもなかったのだ。

けれどヴァラルは諦めきれず、駄目もとで聞いてみたのだが、結局無駄だったようだ。

ヴァラルは冒険者登録をする際、一つの誤算が生じていた。それはニーベンスを含む未確認の地に足を踏むことが出来なくなってしまうことだ。

冒険者は軽はずみな行動をしてはいけない。身分を得て、各国のパスを手に入れると同時に彼はクラスという枷に囚われた。

しかし、それもまた当然なのかもしれない。ニーベンスや、まだ十分に調査されていない秘境や遺跡にルーキーであるEクラスの冒険者を放り出したらどうなるか。

いわずもがな、彼らがあつというまに死んでしまっただろう。

ギルドは無駄死にさせるため身分を与えたわけではない。きちんと昇格し、それから向かって行って欲しいのだ。

しかも上記の二つは個人ではなく、国という大掛かりなもので、当然報酬も良い。そのため、Bクラス以上のパーティーでは毎回争奪戦が繰り広げられている程、人気なのだ。

「しかし、さすがにこれは…」

Eクラスは冒険者の中でも最低クラスである。依頼も魔物の討伐や秘境の探索ではなく、店の雑用や街の中の荷物の運搬等、日雇いの労働に少し毛が生えた内容となっていた。

故に、その多くがヴァラルにとって物足りないものであった。

「えっと、ヴァラル様のご要望は挑戦し甲斐のあるものということでしたかね？それではこの魔物の討伐依頼は如何でしょう？」

「どれどれ…」

彼女が一枚の依頼養子を差し出し、ヴァラルに確認を取った。そし

てそこに書かれていた内容は

”コボルドの討伐”

「これは却下」

「え〜！何ですか？」

「飽き…いや、気分が乗らないからだ」

「ヴァラル様、この依頼はEクラスの方々だったら結構苦勞するものなんですよ？Dクラスの方でも油断して失敗することだってあるんです。齒ごたえのある依頼が欲しいというから見せたのに…」

ぶーぶーと彼女は文句を言う。

というか、口調が昨日に比べ馴れ馴れしくなってきた様な気がするぞ…

しかし、このままでは言いあっていただけでは埒が明かない。そう思ったヴァラルは

「その紙を見せてくれ」

「あ、ちよつと！」

受付嬢から依頼用紙の束をひったくり、自分で調べることにした。

「ふむ…」

確かに魔物の討伐は良い物がない。と言うより、討伐依頼の数自体がかなり少なかった。

さすがにEクラスに頼めるほど簡単なものではないらしい。そうすると期待出来るのは採取依頼か？

ぺらぺらと紙をめくっているとヴァラルはとある依頼に目がいった。

”ハナメキ草の採取”

「これなんかはどうだ？」

「その依頼ですか…」

ヴァラルが紙を差し出すと、受付嬢は怪訝な顔をした。どうやら何かありそうである。

「難しいのか？」

「いえ、そういうわけじゃないんです」

彼女曰く、これはレニア溪谷に生えている野草をとってこいという依頼のようだ。採取自体は比較的簡単なようだ、

「時間がかかるんですよね…」

彼女が言うには、ここへ往復で四日かかるといいうらしい。しかもそ

「ヴァラルだ。今回は宜しく頼む」

この儂げな女性が今回の依頼者らしい。ギルドの館を出た後、今回の依頼を引き受けることをヴァラルは伝え、彼女の家で詳細を聞いていた。

「なるほど、病気の治療のためということか」

「はい…」

彼女には娘がいるらしい。その子が病をこじらせ、起き上がるのもやっとな状態だという。

冒険者をしていた父親は魔物に襲われて命を落とし、現在は彼女が娘の面倒を見てきたのだそうだ。

先程ヴァラルは眠っている彼女を見たのだが、悪夢でも見ているのか時折うめき声が聞こえてきた。

これは確かに具合が悪そうだった、心配するのも無理はない。

「薬草売りのお店をいくつも訪ねたのですが、どれも手が出せなくて…」

「それで銀貨一枚だったということか」

ハナメキ草は市場の安い所でさらに値切っても銀貨五枚はかかってしまうという貴重な薬草だったのだ。

そこで駄目もとでギルドに依頼を申し込んだところ、奇跡的にもヴ

アラルが来てくれたと言うことだ。

「事情は分かった。それでいつまでに持ってきてくれればいいんだ？」

「出来るだけ早くお願いします。娘の体調がだんだん悪くなっているんです…あ、す、すみません！折角来て下さったのにこんな注文をつけるような真似をして…」

「別に良い。今回はあんたが依頼者だ。ある程度は意向に答えないと」

そういつて、ヴァラルは彼女の家を出た。

「出来るだけ早くということだからな」

セクリアの街の郊外でパリリと地図をめくり、レニア溪谷の位置と彼女から貰ったハナメキ草の絵を頭の中に刻み込んだ。

「とつとと終わらせるか！」

そして、辺りに人の気配がないことを確認し、彼は一気に草原を駆け出していった。

「ヴァル。冒険者としての初仕事はどうだったんだ？」

「まあまあだったな。ちゃんと報酬も貰った」

夜、クレース亭でヴァラルはちゃりんと銀貨を指で弾きながらセシアに言った。

あの後ヴァラルは昼過ぎに出発し、夕刻には戻ってきた。かかった時間は往復四時間。

四日かかるのを僅か四時間だ。

ヴァラルとしてはハナメキ草採取の依頼は悪いものだとは思わなかった。

確かに、四日かければかなり割に合わない仕事になるだろう。

だが、もし一日で達成することが出来たのなら？

一日で銀貨一枚だ。すると途端にEクラスの中でかなり割の良い報酬に早変わりとなる。

そしてヴァラルが行うことでかかった時間は実質四時間だったため、破格の依頼に変貌することになるのだ。

彼が戻ってきたとき、夕食の準備をしていた彼女は大いに慌てた。もしかして何か大切なもの忘れてきたのではないかと。けれど、ヴアラルが袋から取り出したハナメキ草を見て彼女はさらに驚いた。

「こ、これをどこで？」

「ああ、行く途中で知り合いに会ってな。譲ってもらった」

さすがに四日かかるところを一日で済んだと言えなかったため、彼は適当にでっち上げた。

「譲ってもらったって…そんな」

「気にするな。何というか…そいつには貸しみたいなのがあったな。それでチャラということにしてもらった」

「それでしたらその方にも是非お礼を…」

「俺の方から伝えておく。それよりも、娘さんを待たせちゃまずいんじゃないのか？ 具合が悪いんだろっ？」

ヴアラルは話を打ち切り、ハナメキ草を強引に渡した。

「それと、依頼は四日後に報告しておいてくれ。変な風に思われたくないもんでね」

別にそのまま報告しても良かったが、後で余計に調べられるのもま

ずいので一応つじつまを合わせることにしたのだ。

冒険者ギルドはヴァラルの嘘のように自身の人脈を使つての入手も許容される。ギルドはあくまでも仲介役なのだ。依頼者と冒険者の合意があつたのなら基本的には不干渉の立場をとっている。

殺人や脅迫といった犯罪行為を見つけた場合には問答無用で介入してくるが。

「分かりました。ヴァラルさん、今日は本当にありがとうございました」

母親は深々と頭を下げ、礼を言った。

とりあえず、無事に終わったかな…

「しかし、初の仕事で銀貨一枚か。一体どんな依頼だったんだ？」

ついさっきの出来事に思いを馳せていたヴァラルはセレシアの言葉で回想するのをやめ、彼女の質問に答えた。

「そこらへんに生えている薬草を集めて欲しいと言う何の変哲もない依頼だ。Bクラスだったら簡単すぎるものだぞ」

「む、あまりクラスのことを出すのは止めないか？私は対等に接し

たいんだ」

「ああ、悪かった。つい、な」

「全く…ヴァルはときたら…」

こうして彼の冒険者としての初の仕事は終わった。

ヴァラルは多少不便ながらもこうして細々と冒険者稼業を行いつつ、各地を巡る予定だった。

だが、過ぎたる力はどうなに隠してもいずればれてしまう。

そのことを彼が知るのもう間もなくのことであった…

Eクラスの冒険者

最初の冒険者としての依頼を終えた彼は、彼女がギルドに報告するまでの間セクリアの街の周囲の自然の調査をしていた。

調査と言ってもそんなに仰々しいものではなく適当にぶらぶらしていただけなのだが、彼は傷薬となる野草や料理に使う数集類のハーブを採取していた。

ちなみに、この採取はギルドからの依頼ではない。街中で見つけた店の一つに様々な野草を買い取ってくれる商店があったため、散策のついでに引き受けたのだ。

「よし、これ位で良いだろう」

ヴァラルは細かく分けられた籠にそれぞれの草を入れ、時間の許す限り摘んだ。この後、彼には用事があるのだ。

そうしてヴァラルは瞬く間にセクリアの街に到着し、買取をしてくれる商店に足を運んだ。

「いらっしやい、ってヴァラルか。どうだった？成果の方は」

「ほら、これだ」

彼はドサリと籠いっぱいに入った薬草やハーブの山を見せた。

「ほお、初めてにしては中々上出来じゃないか。どれ…」

店主は驚きながらも見積もりに入った途端商売人としての厳しい目つきになった。大抵最初に持つてくる連中はそこらへんに生えてい
る草を入れ、水増しをしてくる輩がいる。そのため最初は店主も警
戒していたのだが、徐々に満足げな表所になっていた。

「よし、いくつか違うのがあったが十分だ。…ほら、これが今回の
金だ」

「どうも。って少し多くないか？」

店主がヴァラルに渡した金は銀貨三枚。二枚程度だと思っていたが、
どうやら余分にくれたようだ。

「何、真面目にやってくれた礼だ。ここ最近はお前さんみたいな奴
はいなかったからな。ま、とっておけ」

「分かった。遠慮なく貰っておくことにする」

ヴァラルは店主の厚意を素直に受け取り、銀貨を懐にしまった。変
な遠慮はせず貰えるものは貰っておく、彼の心情の一つである。

「ははッ。そういう態度悪くないぞ。どうだ？この後一杯やらない
か？」

「すまんな。この後用事があるんだ」

「ほう？女か？」

ニヤニヤしながら店主はヴァラルに尋ねた。

「その知り合いと会うだけだ」

所変わってここは街にあるマノドールの酒場。クレース亭ではなく、今回はここでセレシアと待ち合わせしているのだ。

中へ入ると冒険者や街の市民達等、様々な人たちでごった返していた。クレース亭のような落ち着いた雰囲気ではなく、酔っ払っている客が多いのかここでは皆活気づいていた。

その喧騒のなかで一際目立つ集団があった。セレシアたちだ。彼女の美貌はどこに行っても非常に目立つようで、少し窮屈そうにしていた。

「あれがシアのお仲間というわけか」

テーブルには頑丈そうな鎧を着こなした男と、旅人のような男、そして魔法士と思われる女がいた。やはり彼女のパーティーメンバーだけあってそれぞれが一流の冒険者と言う貫禄を周りに見せ付けていた。

そして彼女はヴァラルが店に入ってくるや否や椅子から立ち上がりスタスタと近づいてきたかと思うと、

「遅いぞ、ヴァル。待ちくたびれたぞ」

開口一番そう言った。好奇心な視線に晒されることでセレシアは少し

不機嫌なようだった。ヴァラルが来るまでそれを我慢していたが、つい噴出してしまったようだ。

全く、このお嬢さんときたら…

「悪い、次からは気をつける」

時間はそれなりにあったのだが、余計な口を挟まずとりあえず謝った。

それからセレシアはヴァラルの手をとって自分達のところへ連れて行った。その途中、酒場にいた客達は見知らぬ男の手を掴んでいる彼女に驚きをあらわにしつつも、とりあえず平静を保っていた。

このときはまだ。

そして彼女を含めた四人とヴァラルの合計五人が集まった。Bクラス冒険者四人の中にEクラスの冒険者が一人というなかなか奇妙な光景がここでは見られた。

「皆には事前に伝えたように私の隣にいるのがヴァラルだ」

「宜しく。セレシアから色々話を聞いている。皆凄いやつだな」

「へえ、ということはこの俺様の輝かしい武勇伝も知っていると言うことか？」

分厚い鉄の鎧を着たこの男の名はグレインという。その持ち前の巨体で数々の魔物をしとめた男であり、彼女のパーティ最前線を進んで買っている勇敢な男だ。

「勿論だ。クレーヌ亭の店主に酔っ払って突っかかった挙句、出入り禁止になったことも知っている」

「な！？それを言われるとこっちもつらい……」

途端に彼は口調が静かになった。

そう、今回ここで集まった理由はグレインにあるといっても過言ではない。彼のせいでクレーヌの店が使えなくなったため、急遽ここで集まることになったのだ。

グレイン抜きでやっても良かったのではとヴァラルは思っていたのだが、さすがにそれはかわいそうだとセレシアが言ったため、彼も交えての参加となった。

今はこうして不機嫌な彼女だが、何だかんだいって仲間思いなのだ。

「彼のことは放っておいて…始めまして、私はソイル。弓を専門に扱っています」

しよげているグレインを無視し紳士的な口調でこういったのはソイル・デニクス。彼はここトレマルク王国で貴族の地位を持つ男である。パーティの解散に合わせ、彼は王国の貴族のデニクス家からは非うちに来てくれないかと声を掛けられたのだ。

「ああ、こちらこそ。弓だけに限らず、森や山の知識も詳しいようだな」

「ええ。自慢じゃありませんが新たなところでは、私をそっちの方

で買っていただいてるようなので」

デニクス家の領地は自然豊かな場所である一方、デパン伯爵のように開発が上手くいっていない。そのため、彼の冒険者で培った経験と技能をもつ人材を欲していたのだ。

「それでもソイルさんのおかげで私たちはかなり助かっていますよ」

「何を！俺様だってばったばったと魔物を狩ってるぜ。ソイルのキザ野郎より、ここは俺様を褒めるところだろう！」

「ひゃっ！？す、すいません！」

いきなり復活したグレインにぺこぺこしている彼女は魔法士のエーニス。ヴァラルは最初魔法士と聞いたときアザンテのように高慢な奴を想像していたのだが、目の前にいるのはびくびくしている少女が一人いるだけだ。

エーニスはその性格のため魔法士にもかかわらず他の冒険者達から良いように扱われてきたようだ。それを見るに見かねたセラシアが仲裁に入り、このことがきっかけでエーニスは彼女達と知り合いになったという。

目の前ではグレインがいつの間にかソイルと言い争いを始め、それをおろおろしながら見ているエーニス。そして仲裁に入るセラシアがいた。ヴァラルを紹介するこの催しは早くも崩れ去っていたが、彼は目の前で起きている光景をかつての自分達と重ねていた。

あのときは随分と馬鹿なことをやったもんだな…

彼はふと昔のことを回想していた。

「悪い悪い。つい調子に乗っちまった」

場が収まったところでグレインがヴァラルに謝った。酒が入ると悪酔いするというのは本当のようだ。

「別に気にしてない。似たような奴を見てきたからな」

こうして、再び彼らの話をヴァラルは熱心に聞くことにした。グレインは農民出の冒険者であること、ソイルがセレシアと出会う前の旅先での話、そして魔法皇国ライレン出身であるエーミアの魔法学院の出来事など、ヴァラルにとって興味深い話ばかりだった。

特に魔法学院の話は実に気になった。何せ知り合いが理事長と学院長だ、気にならないわけがない。機会があればこちらの世界の学院に訪れてみるのも良いだろう。ヴァラルはそんなことを考えていた。

「それにしてもヴァラルさんはグレインさんを見ても全然怖がらないんですね」

一通り話を聞いた後、酒を飲みながらつまみをもぐもぐと食べている彼にエーミアは言った。そもそもEクラスの冒険者がこの場にすつかり溶け込んでいるという異常事態が起こっているのだが彼女はそれに気づかずヴァラルを褒めていた。

「そうですね。大抵の人はグレインの強面で緊張する人がたくさんいるようですが、あなたはそうでも無さそうだ」

「誰が強面だ、ソイル。男溢れるダンディな顔と言え、馬鹿」

三人もまた口ではああ言いつつも何だかんだで強い信頼関係で結ばれているようだ。

そうでなければBクラスが勤まるわけではないということか…

「安心しろ、グレイン。ヴァルはちゃんとお前の事を見ている。現に私のことだって最初会ったときから態度は変わっていないからな」

「げ、セレスシアの姉さんがそんなことを言っただなんて…あんたまさか!？」

「ああ、シアと呼んでいるぞ」

その瞬間、酒場全体が一気に静まり返った。あんなに騒がしかった酒場が一瞬でだ。

と言うか全員さり気無く聞き耳を立てていたのか…

「かあ〜！羨ましいことだ。俺にはとても言えねえ」

そんな雰囲気など関係無しにグレインは言った。

「驚きました。まさかセレスシア殿をそんな風と呼ぶ人がいるだなんて…」

「私もです。本当にびっくりしました…」

二人もまた驚きの表情でヴァラルの顔をまじまじと見ていた。

セレシアはそんな彼らの反応にうんざりしたかの表情でため息をついていた。

…何だ？そんなにもおかしいことなのか？

「グレインも言えば良いじゃないか。同じBクラスだろう？シアも別に良いと言っていたぞ」

「そういうわけにはいかねえ。一応俺達のリーダーでもあるし、それに…」

「それに？」

「おっといけねえ、つい口が滑っちゃまった。ははッ、まあ忘れてくれ」

おいおい、それはないだろう…

話を聞く限り彼女にはBクラスの冒険者という肩書きの他に、何かがあるようだ。セレシアはヴァラルと会う前に仲間達に口止めしていたようで、ポロリと喋ったグレインを氷のような冷たい目でキッと睨んでいた。

…まあ良い。誰にでも秘密の二つや三つはある。いちいち問い詰めることもないだろう。

「分かった…ならこの話は一旦やめだ。ちょっと外に出てくる。少し飲みすぎたようだ…」

「大丈夫か？ヴァル、もしかして気分を悪くさせてしまったか？」

セレシアは心配した。さっきのことで彼に対して引け目を感じたのだろう、その顔はどこか物憂げだった。

「すぐに戻ってくる。心配するな」

そういつてヴァラルは酒場を出て行った。彼はただ飲みすぎで気分が悪くなったわけでもないし、セレシアのことに対して怒っていたわけでもない。

ただ煩かったのだ。周りからの視線が。

「…で、さっきから俺のことをじろじろと見ていたのはお前達か？」

酒場はヴァラルの爆弾発言の後再び喧騒に包まれたものの、相変わらずヴァラルを鬱陶しげに見ていた連中がいた。それが目の前にいる彼らである。その数は十人。セレシアのときとは違い数は倍で、しかも全員が冒険者達だ。

ここはセクリアの裏街道。唯でさえ人通りが少ないここは夜になることで人の姿はヴァラルたち以外は誰もいない。

「ふん、セレシアさんたちに言わなかったのは褒めてやる。けどね、少し調子に乗りすぎじゃないか？」

「大方彼女に気に入られたからこそまでいい気になっているのさ。本当は彼女達に敬意を持って接するべきなんだ」

口々に彼らは言う。どうやらCクラスの冒険者であり、セレシアのファンのような態度がなっていない、もっと愛想良く振舞え等等など、ヴァラルにとってどうでも良いことを延々と語っていた。

「で、結局お前達は何がしたいんだ？」

彼はとつと話を進めるため彼らに言った。

「そうだな…とりあえず殴らせる。これはいわば新人への歓迎なんだ。おとなしくしてろよ」

「何だよ…そんなことのためにこんな長話に付き合っていたのか、なら早くしろ。あんまり心配させるのも不味いんでな」

「ふっ、ただで帰れると思うなよ」

指をボキボキと鳴らし彼らは徐々に近づいてくる。彼らは本当に痛めつけるだけのようで武器は使わないようだった。そうこうしているうちにヴァラルはあっという間に囲まれてしまった。

そして冒険者が一斉にヴァラル打ちのめそうとしたとき、

そのうちの一人がまるでぼろ雑巾のように大きく吹き飛んでいき、路地にあつた資材が大きな音を立てて彼の元へなだれ込んでいった。

「俺も反撃するけどな」

啞然とするCクラスの冒険者達をよそに、ヴァラルは淡々と告げた。

「お、お願いします！許してください！もうあんなことは言いませんから！！」

「駄目だ」

バキツつと何かが碎けるような音が響き、冒険者の男がまた一人崩れ落ちた。

一人が吹っ飛んだ後、ヴァラルは鬱憤を晴らすかのように次々と彼らを殴り飛ばしていった。ヴァラルはスローモーションで見える彼らの攻撃を避けては拳を繰り出すと言う単純なことを繰り返しており、その間ひたすら彼らを死なせないよう別の方面で全力を尽くしていた。

Eクラスの冒険者がCクラスの冒険者を一撃で倒していくのを見て、恐怖のあまり武器を持ち出すものもいた。けれどそんな愚か者に対してはさっきの男のように容赦なく顔面に拳をめりこませた。

「なんだよ、Cクラスとか言っておきながらこんなものなのか？Eクラスなんだろう俺は？」

呆れた口調でヴァラルは最後の冒険者の男に言う。

「あ、あんたがおかしいだけだ……」

震えながら彼に言った。辺りでは倒れた冒険者達がうーうーと苦しげにうめき声を漏らしていた。自分もこの後彼らの仲間になるかと思つとぞつとしていたのだ。

彼らは一流の冒険者を名乗るだけあつて幾多の魔物を狩り続けた。そのため、人間相手なら大抵の連中にも勝てると言つ自信があつた。しかも相手はEクラス、彼らが全員経験してきたのだから力量は大体把握しているつもりだった。さらに、この間も生意気な冒険者を痛めつけてきた。警備隊に聞かれたとしても目撃者は誰もいない。何の問題も無いはずだった。

けれど舐めた結果がこれだ。

「そうか？セレシア達は凄いと思つたんだがな……成る程、つまり彼女らは特別だったと言つわけか」

妙に得心が言つた顔でヴァラルは言つた。

その雰囲気はさつきまで冒険者を相手にしてきたものとは思えないほど軽薄なものだった。

「な、なあ。実は彼女の秘密を知っているんだ。長いことファンをやっていると、そういうことも分かるんだ。見逃してくれたのなら

それを教えても良い。どうだ？」

いきなり彼は変なことを言い出した。それはファンではなくストーリーカーなのではないかと思わず突っ込みを入れたかった位だ。

「結構だ。シアのプライベートを探る気なんぞ俺はさらさらない。あいつが話すまで気長に待つことにするさ」

「そ、そんな…」

「そういうわけでお前もとっと消えな。もう格下相手にこんな真似はするなよ。はつきり言って反吐が出る。そんなことをする暇があるならとっと自分の腕を磨きな」

スタスタと彼は近づいてくる。このまま見逃してもらえればどんなに良いだろうと男は思っていたが、ヴァラルの目はしっかりと冒険者の行動を見ていた。まるで何者をも逃がさないかのように。

「あいつの家はな、帝国のツ！？」

あまりの緊張にパニックになった男は何かを口走ろうとした。しかし、

「五月蠅い黙れ」

ヴァラルは拳を顔面に乗せてその口を強制的に黙らせた。

「十人もいて何をしているんだ…お前達は…」

暗い暗い夜の裏街道で、彼は嘆かわしげに言った。

「ヴァルか!？」

「おお、心配したぜ！」

「人騒がせな男ですね」

「よかった…」

四人が口々にヴァラルを見かけるなり急いで駆け寄ってきた。あまりにも遅いと言うことでセレシアが外に出たところ、酒場の周りには誰もいないことでかなり心配を掛けてしまったようだ。

もう少し遅かったのなら自分達で探しに行こうとしていたほどだという。どうやら少し時間がかかってしまったようだ。

これでもまだ十分も経っていないはずなんだが…どれだけ心配性なんだ…

だが、ヴァラルとしては不快な気持ちにはならなかった。むしろかなり嬉しかった。

そしてあの日からセレシア、グレイン、ソイル、エーニスの四人と行動を共にすることが多くなった。昇格試験までの間彼らはやるこ

とがなくて暇だったと言うこともあるのだが、ヴァラルに冒険者としての依頼に色々と付き合ってもらっていた。

ギルドでは原則としてEクラスがBクラスの依頼を引き受けると言うことは許されないが、その逆の場合は許可される。

これもまた依頼者と冒険者との間で解決すべきことと言うこともあるのだが、先輩冒険者が後輩の面倒を見ると言うことは度々あるようだ。

けれど、それもDクラスがEクラスの冒険者を教えるというのが精々だった。何せCクラスからはパーティでの行動が基本なため、個人の面倒を見ると言うことは基本的にありえなかったからだ。

だから、ヴァラルがギルドに彼女達を連れて行ったときは受付嬢に非常に驚かれた。

「えっと…セレシア様たちは本当にそれでよろしいのですか？他にも良い依頼がたくさんありますが…」

「気にしなくて良い。元々ヴァルに無理を言っついて来たのだ。私たちのことはそのおまけと思っってもらってかまわない」

「ですが、さすがにこれは…」

そう、今回の依頼は例の”コボルドの討伐”だった。本当はヴァラル一人だけでも十分、いやどう考えても絶対的な実力差があったのだが、そのことを知らない彼らはヴァラルが初の討伐依頼を無事に達成できるかどうか気になっていたようだ。

彼は普段通りの実力を出せないことに多少鬱陶しさを感じていたが、彼らが厚意で付き合っているのが分かっていたため余計な口は挟まなかった。何故なら、報酬はヴァラルが全額貰い受けることになっていたのである。

Cクラス以上の冒険者はパーティでの依頼がほとんどであるため、報酬もDクラスに比べると凄まじいものになる。結局それを分け合うことにはなるのだが、それでも一人頭の稼ぎは遥かによくなることは確かだ。

それがBクラスともなればさらに顕著だ。そのためパーティで下のクラスを受けない理由はここにある。

報酬が少ないからだ。

冒険者は命を金に換えて依頼を受ける。一度目の眩むような大金を目にすればもう戻れない。彼らの大半が貧民の出だ、ある意味それが必然でもあった。そのため、今回の出来事はギルドを大いに騒がせた。

ヴァラルとしては本当にそれで良いのかと彼らに念を押したが、もうすぐパーティは解散するのだから、そのときまでは好きにさせて欲しいと彼女らは言っていた。

命を掛ける冒険者を舐めきったその姿勢に他の者たちは激怒するだろう。けれどヴァラルはそんな彼らに感謝した。

この世界は過酷だ。実力のあるものはどんどんのし上がるが、その一方で命を落とすものが後を絶たない。ゆえに、セレスシアたちのような存在はどれだけ稀少だということを身にしみて彼は理解してい

だからだ。

ヴァラルに絡んできた冒険者連中とは違い、Eクラスだということ
でヴァラルを決して見下したり蔑んだりしない。それどころか助け
の手を差し伸べる。彼以外にも助けられた者は大勢いるだろう、だ
からこそ彼らは実力と相まってここまで上り詰めたのだ。

お人よし過ぎるところがあるが、それでもセレシアの言った通り、
良い奴ばかりだな…

ヴァラルは改めて思った。

「君、ちょっと良いかな？」

ある日のこと、警備隊の一人にヴァラルは声を掛けられた。どうや
ら以前の冒険者達のことと話があるようだった。

あいつらめ、結局言ったのか…

彼はあの連中が何も言わないと思っていた。何せ一人に対して十人
がかりで痛めつけようとしたところを返り討ちにあつたのだ。まず
プライドは折れ、そんな汚点を誰にも言えるはずはないと考えてい
たからだ。

けれど、彼らは恥も外聞も無かつたようだ。面倒くさいなと思いつ
つヴァラルは適当に警備隊の質問に答えていた。

「言っただろう？あのときは酒場の外にいたが、俺はそんな奴らは知らない。誰かと間違えたんだろう」

「しかし、彼らが言うには確かに黒髪の男だったと言っていた」

「おいおい、考えてもみる。どうやったらEクラスの冒険者がCクラスの連中を痛めつけることが出来るんだ。俺はまだ冒険者になつて一月も経っていない新米なんだぞ？」

「それは……」

「どうしたんだ、ヴァル」

「ああ、シアか。丁度良いところにきた」

そこへセレシアたちがやってきた。ついでに彼女達にも弁護してもらおう。

警備隊の話聞いたセレシアは最初は真剣に聞いていたのだが、後からは怒ったような表情に変わった。

「何だそれは！ヴァルがそんなことをする男だと本当に思っているのか！」

「そうだが、大体理由も無いのにいきなり襲ってきたとか信じられないな」

「現実的な話をしてどうやって彼らを相手にできると言つのです。仮にもCクラスなのでしょう、彼らは」

「確かあのときは十分も経っていないはずですから…その間に彼らを倒すとなるとちょっと考えられませんか」

四人が口々に言う。こういったとき数の力は有利だとしみじみ思っていたヴァラルであった。

「彼女達の言った通りだ。逆に彼らのことをもつと調べたらどうだ？きつと何かがあるはずだ」

「わ、わかった。時間をとらせてすまなかった」

彼女達の気迫に気圧されたのか警備隊の一人はさすがごと引き下がっていった。

その後、男達は複数の冒険者達から私的な制裁を受けたとの報告が上がり彼らはそのままお縄となった。

いくら冒険者とはいえ、街の治安を守っているデパン伯爵には勝てなかったようだ。

とりあえず、何とかなつたか。こういうごたごたは勘弁して貰いたい…

そしてヴァラルたちはその後もEクラスの依頼を淡々とこなしていった。どれも非常に簡単な依頼だったが、それでも、報告するたびにヴァラルは周りの人たちから驚かされていた。何せ、Bクラスのセ

レシアたちと行動しているのだ。そのため良い意味でも悪い意味でもヴァラルは注目的になっていたのだ。冒険者として有名になると言うことはこのような好奇の視線を一身に集めると言うことを身をもって味わっていた。

そのため彼は彼女達と別れた後は、このまま気の向くままにEクラス
の冒険者としてのんびり世界を回ろうと考えていた。Aクラスの
冒険者だなんてもつてのほか、あいつらは一体どういう神経してや
っているんだと思いつつ一仕事終えたヴァラルなのであった。

ところが、そうも行かない事態が彼を待っていた。

「君、ちょっと良いかな？」

今日も彼女達と街の酒場めぐりをしようと思っていた矢先に宿屋の
前で一人の男に声を掛けられた。風貌からして以前の警備隊のよう
なものだろうか。だが、やたら立派な鎧を着ている。どうやらトレ
マルク王国の騎士のようだ。

「君がヴァラルかい？」

若い男の騎士が尋ねた。

「そうだが、一体俺に何のようだ」

訝しげに彼は言い返した。何か嫌な予感がする、本能がそう告げて
いた。

「いやなに、別に大したことじゃない」

騎士の男は本当に簡単なことを言うかのよつに一日間を置き、

「テトスの村でのことを聞きたくてね」

ヴァラルに淡々と言った。

そして、この日をもって彼の平凡な日々はガラガラと音を立てて終わりを告げた。

アザンテの正体

「伯爵が君の事を探していてね。テトスの村の出来事について詳しい話を聞きたいらしい」

エンラルの宿の前で騎士は飄々とヴァラルに言った。辺りは道行く人がそれなりにいるはずなのだが、何故か二人の周りには誰もいなかった。

「俺は何も知らない。事情を知りたいのなら、そのテトスの村人に聞いたらどうだ？」

ヴァラルはしらばっくれた。目の前の騎士にいちいち付き合っていたらきりが無いし、無駄な足掻きだと思いつつ一応は抵抗した。

「それがもう聞いた後なんだよね。ローグだったかな？彼もこの街に来ているんだ」

「何だと？」

あいつがここへいるのか。だがありえないわけじゃない。テトスの村の住人ということなら彼がここへやって来るのもまた道理なのかもしれない。

「アザンテを倒したから引き取ってくれて報告があつてさ。だけどアザンテって結構有名な魔法士で、引退した冒険者一人でどうにかなる相手ではないんだ。詳しいことを話さないと懸賞金を渡せないと言ったら、ヴァラルという冒険者なら事情を知っている。だから彼に聞いてくれとの一点張りだ。そういうことが伯爵の耳にも

届いて、現在僕がここにいるというわけだ」

ヴァラルは舌打ちしたい気分になった。口止めとして懸賞金を渡しただがこういうことになってしまつとは。しかもアザンテは魔法士の中でもかなりの使い手だったようで、そのこともまた彼を重たい気持ちにさせた。

しかもトレマルク王国のデパン伯爵が直々に調べていたという。正直言つてこのまま逃げ出したかつた。

「分かつた…とりあえず伯爵に会えば良いんだな？」

けれどヴァラルは渋々了承した。先延ばしにしたところで結局は意味がないと悟つたからだ。

「すまないね。そうしてくれるとありがたい」

男の騎士は言った。

「シア、今回の酒場めぐりの件だが俺は遠慮させてもらつ。急に野暮用が出来たんでな」

先に宿へ帰っていた彼女の部屋の前でヴァラルは言った。

「ん？隣の男は…ってトレマルクの騎士じゃないか。ヴァル、一体どこで知り合つたんだ」

セクリアの街にも警備隊とは別に伯爵に仕えている騎士がいることは知っている。けれどその一人がヴァラルに用があることが信じら

れなかった。

「そこでちょっと色々とあってな。心配するほどのことじゃない、三人にもそう伝えておいてくれ」

「…わかった。くれぐれも気をつけて」

そんなやりとりをセレシアと交わした後、二人はデパン伯爵の住んでいる屋敷に向かった。

ヴァラルがその途中で色々と伯爵のことについて質問したが、騎士の男の話を聞く限り、デパンはなかなかのやり手のようだ。

これは注意していかないと…彼は気を引きしめた。

伯爵の屋敷に到着し来賓用の客室に案内されると、そこにはローグがいた。すると彼はヴァラルを見るなり申し訳無さそうな顔を浮かべていた。

「元気そうで何よりだ、ローグ」

しよぼくれた表情をしていたが、この様子だと体の方に問題は無さそうだった。

「ヴァラル、すまない。村を助けてくれたのにこんな恩を仇で返すような真似をして…」

「別に良い。俺も危害を加えられたわけでもないし、あの村も金が必要だったんだろ？こうなった以上仕方ないさ。それよりも村の人たちはどうだ？」

「ああ、サリスや子供達、カウンも元気だ。村の人たちから、ヴァラルに会うことがあるのなら是非礼を言って欲しいと伝言を頼まれてな。確かに伝えたぞ」

「わかった。カウンたちにもよろしく伝えておいてくれ。…っと、そろそろ来るみたいだな」

二人が再会の言葉を述べていたその直後、ガチャリと客室の扉が開き、伯爵が中へ入ってきた。

デパン・ラーノイル。若干二十にしてラーノイル家の当主として、トレマルク王国に仕える貴族の一人である。彼は身分の差を問わず能力のあるものを次々と登用することで、みるみるうちに王国の中でも大きな発言力を手にした男である。しかもこの国の王子と学生時代に悪友として名を轟かせていたようで、今でも個人的な交流があるのだという。

こいつは油断ならない奴だ…

伯爵という地位に驕ることなく彼なりに努力してきたのだろう、才気あふれる彼の姿を見てヴァラルはそう思った。

「君がヴァラルか。私はデパン、この地域の領主をやっている」
人を不快にさせない落ち着いた態度で彼は言った。

「わざわざEクラスの冒険者を呼び出してくるとはね…随分と俺のことを買って頂いているようで」

皮肉にも似た口調でヴァラルは目の前の男に接した。最初に下手に出て舐められては元も子もないからだ。

「謙遜はいい。Bクラスの冒険者と共に行動する不思議な男がいると聞いていたけど、まさかテトスの村のことを知っているととは思わなかった。ローグからそのことを聞いてびっくりしたよ」

「もしかして俺はヴァラルという名を騙る違う奴かもしれないぞ。」

「そんなの、君の態度で大体分かるよ。大抵の人は私を見ると萎縮するみたいだからね。なのに君はものともしない。それに人を見る目はこれでも多少あるつもりさ」

チツ：分かつてはいたがどうもやりにくいな…

「わかったわかった。どうやらはぐらかすのは無理みたいだな。それで？伯爵自ら出向いて俺に聞きたいことは何だ？」

「話が早くて助かるよ。それでは単刀直入に聞く、君がアザンテを倒したのかい？」

このときばかりは真剣に聞いてきた。さっきまでとはまるで雰囲気が違う。さすがに伯爵と言う地位を持つだけのことはあるなとヴァラルは思った。

「質問を質問で返すように悪いが、それを知ってどうするつもりだ？」

彼もまたその間に疑問を呈した。答えによっては斬り捨てることもやぶさかではなかった。彼もまた真剣だったのだ。

「いやなに、別に君を利用しようとか始末しようとかそういうことじゃないんだ。ただ、このことはいずれ王国とライレンに報告しなければならぬことなんだ。だから正確な情報を把握しておきたいと言っるのが本音さ」

しかし、今度はあっさりとした表情でヴァラルに答えた。本当にそれしか考えていないかのようにあっけからんとしたものだった。

嘘をついているようには見えない。どうやら、ヴァラルが来る前にローグは本当に黙っていてくれたようだった。口ぶりから察するに、エリクシルや剣のことにしてもまだ知らないようで、ローグの精一杯の抵抗が目に浮かんできた。

ローグは喋らなかったのか…それなら少しくらい話しても問題はなにか。

ヴァラルは彼に感謝しつつ伯爵にある程度のことを話すことを決意する。

「お前さんにも事情があるということがあったよ……ああ、本当だ。俺がアザンテを倒した。ついでに盗賊たちもな」

「ツツ!!どうやって?」

彼はまた真剣な表情になった。あまりにも呆気なく白状したことに少々驚いたが、デパンはすぐさま尋ね返した。

「別に何もしていない。ただあいつらの手下とまとめて相手してやっただけだ」

「

…」

ヴァラルの言葉を聞いた二人は沈黙した。

デパンは何かを考えるような表情になり、ローグは得体の知れないようなものを見る目で彼のことを見ていた。

「…なあ、それって本当のことだよな？」

「何言ってるんだ、ローグ。お前も見ていたんじゃないのか？」

「いや…それは…」

彼の言葉で、ようやく以前の出来事が改めて現実として認識できた途端、ローグは尋ね返していた。

それから一分ほど誰も喋ることはなく、こちこちと時計の音が応接間に響いていた。

「…何だ？言いたいことがあるならさっさと見え。あいつを倒したからって何か問題があるのか？」

ヴァラルは沈黙を破るかのように言った。さすがにこの空気がずっと続くのは勘弁願いたい彼であった。

「いや、すまない。事態を把握するのに時間がかかってしまった」

「おいおい、伯爵様とあろうがお方がそんな真剣に悩むほどのことじゃないだろう、こんなこと。ほら、俺からの話はこれで終わりだ。後はローグに金を渡してやってくれ。あの村も大変なんだ」

「デパンで良い。… ヴァラルは彼を倒したことについて何の感慨も沸いていないようだけど、事はそう単純じゃないんだ」

「…何だと？」

「またもや嫌な予感がした。」

「ヴァラル、良く聞いてくれ。そもそも一人の冒険者がアザンテを倒すこと自体、ありえないことなんだ」

ローグは震えを誤魔化すかのように冷静に言った。

トレマルク王国に限らず、魔法士はどこでも優遇される。それは単に魔法が使えるからというわけではない。

強いのだ、一人ひとりが。

デパン曰く、Bクラスの魔法士を相手にするためにはCクラスの冒険者を十人同時に差し向けなければならぬらしい。Bクラスの冒険者を相手にすれば魔法士の方も苦戦は免れないだろうが、それでも数人同時に相手にすることができるといえるのだという。Aクラスの場合には言わずもがな、相当の犠牲を覚悟しなければならぬそうだ。

「セレシアがそこいらの魔法士に負けるとは思えないのだが…」

「彼女は別格だ。Bクラスいや、もしかしてAクラスの魔法士と互

角の勝負をするだろう。けれどギルドの魔法士とライレンの魔法士は少し事情が違うんだ…話が逸れた、続けるよ」

デパンは話を再開した。

そして今回ヴァラルが倒したアザンテは、ライレンの誇る宮廷魔法士の一人として仕えていたという。

魔法王国ライレンはトレマルク王国のように冒険者を戦力として雇い入れたり、バルヘリオン帝国のように強大な軍事力を持っているわけでもない。

一応軍と言うものはあるにはあるが、彼らの本当の戦力は宮廷魔法士団であり、そこに籍をおいているということは魔法士の中でもエリートと言う証でもあるのだ。

つまり、ヴァラルはそんな化け物じみた魔法士を一人で倒してしまっただということになる。

「そういうわけで、君のしたことは遅かれ早かれ王国中に知られることになる。当然すぐに他の国も黙っちゃいない。特にライレンなんて相当慌てるだろう。魔法士の優位性を覆されたんだからね」

「…」

ヴァラルはまた頭が痛くなっていた。やたら高慢な奴とは思っていたが、まさかそんな大物だったとは…

「…今このことを知ったみたいだね。まあ当然か。とりあえず今日はもう遅いからここへ泊まっていくと良い。宿の方にはこちらから

伝えておくよ」

「だが、この後が問題だ、デパン伯爵。ヴァラルはEクラスの冒険者だ。そんなことまで知られたらもうどうしようもないんじゃないか？」

ローグが何も言わないヴァラルの代わりに伯爵に言った。ただでさえ彼は冒険者登録をしたばかりなのだ。そんな輩に犯罪者とはいえ宮廷魔法士が倒されたのだ。そうならば混乱は必至だった。

「付け焼刃だけど、策が無い訳じゃあないからね。また明日話し合うことにするよ」

今日のところの話し合いは一旦終了になったが、この後ヴァラルはベッドの中で一晩中苦悩し続けることになったのである。

「なんですか？デパンさん。こんな夜遅くに」

深夜、ここはデパンの屋敷にある執務室。彼はそこにとある男を呼んでいた。

「すまないね、モーロン。実は緊急の頼みごとがあるんだ」

「何です？一体」

「ヴァラルという冒険者を知っているかい？」

「ああ、セレシア達と一緒にいる男のことですか。そりゃもう」

「実は彼のことに関してなんだ」

「へえ、やはり気になりますか」

「ああ、これから昇格試験があるだろう？申し込み期間を過ぎているはずだが、そこに彼をねじ込めないか？後で本人に確認を取っておくからさ」

「それは…まあ良いですけど、大丈夫なんですか？彼はまだ初心者なんですよ？いくら彼女達がアドバイスをしたとしても、いきなりDクラスは厳しいんじゃないですか？」

「いや違う。彼を入れるのはそこじゃ無い」

「じゃあどこですか？まさかCクラスとか言っんじゃないでしょうね？冗談はよしてくださいよ、もう」

「Sクラスだ」

伯爵の提案

「…本気で言ってますか？」

モーロンはまじまじとデパンを眺めた。

トレマルク王国のギルドマスターを勤める彼はデパン伯爵から火急の用件があると知らされ、わざわざこんな夜中に呼び出されていた。そして、たまたまセクリアの街に泊まっていたことが彼の運のツキだった。

「本気だ」

当然だと言わんばかりに彼は言う。デパンは一度決めたことはとことんやりぬく男だ。その彼がここまで真剣なのだ。戯言を言っているわけでは無さそうだった。

「分かっているんですか！？彼はまだEクラスなんですよ！？」

モーロンはわけが分からないと思った。普段は思慮深いデパンだが、こんなとんでもないことを言い出すとは思いもしなかったからだ。

「そんなことは百も承知だよ。何回も聞き返さなくても分かっている」

「ありえないですよ！こんなこと！ソロのEクラスがパーティを組まずにいきなりCクラス以上の昇格試験を受けるだなんて…正気の沙汰とは思えません！」

モーションは間近に見てきたから分かるのだ、いかに一人で戦うことが厳しいものであるかということ。

Cクラスからは四人から五人のパーティで行動するのが常である。ニーベンスに住む魔物たちは強大だ。彼らと一対一で戦うには個々の力よりも集団で立ち向かう方が遥かに有効だからだ。そのため、ギルドでは安全策としてパーティを組むことを強く推奨している。仲間を見つける為の専用の酒場まであるくらいだ。それほどまでにCクラスとD・Eクラスの差は歴然としている。

そして、BとAクラスからは魔法士の存在が鍵になる。彼らがいることで魔物に対して冒険者のパーティはより柔軟な対応が可能となるからだ。しかもこのクラスの冒険者ともなると一人である程度の数の人間や魔物を同時に相手をするができるようになる。だからセレスシアたちは人々から尊敬を受けているのだ。

けれどソロの冒険者の場合、話が大きく変わってくる。前述したように、パーティで挑む魔物の集団を一人で相手をしなければならなかったため、その負担は想像を遥かに超える。そのためEクラスでもパーティを作る者たちもいるほどだ。

これまでも自称腕の立つ冒険者が一人でCクラス昇格試験を受けに来たことを彼は何回も見してきた。しかし、どれも惨憺たる結果で終わった。誰一人無事に帰ってきた者はいなかったのだ。

「しかも、Sクラスですって？デパンさん、言うておきますけど冒険者ギルド設立以来、そのクラスを受けたものは誰一人いません。そもそも存在自体が冒険者の間で噂話になっている程ですよ」

Sクラスは冒険者ギルド発足して以来、幻の階級として存在してい

た。なにせこれは個人に課せられたものであるため、パーティを組んでしまうと受けることが不可能になってしまふからだ。そのため、Sクラスはいままで誰もいなかったのである。

「だが、それに匹敵する男がいるじゃないか」

「……確かにあの男はそのくらいの実力があると思いますが、それがヴァラルにもあるとは思えません。…とりあえず昇格試験の話は聞かなかったことにします。それとデパンさん、今日は遅いですけど帰らせていただきます。ただでさえ今回はAクラスを受けるセレスシアたちで忙しいんです。あまり変なことで呼び出さないでくださいよ…」

モーロンが話は済んだとばかりにデパンから踵を返し、執務室を出て行くとした。

「ところでモーロン、アザンテという魔法士を知っているか？」

しかし、それをさえぎるかのようにデパンは尋ねた。

「…何ですか？いきなり。ええ、勿論知っていますよ。レスレック魔法学院を首席で卒業、魔力量はCランクながらも卓越した魔法運用により宮廷魔法士に任命。けれど反社会的な態度から、ライレンに反逆するも結局失敗。その後国を逃げ出し、今では盗賊稼業に身をやつしているとか。…けれどここ最近は何について噂を聞きませんね…それで彼がどうしたんです？」

「彼が倒された」

「…何ですって？嘘でしょう？」

モーロンは耳を疑った。ライレンのクーデター騒ぎはトレマルクでも有名な出来事だったからだ。その首謀者である彼が死んだ。にわかには信じられない事だった。

「死体も確認した、間違いない。二つにばっさりと斬られていてね、おかげで大変だったよ。身元の確認が彼の愛用していた杖とロープ、それといくつかの遺品があったから何とか分かったけど」

「…誰にやられたんです？ 一体？」

モーロンは尋ね返す一方、薄々感じてはいた。こんな夜更けに突然の呼び出し、ヴァラルの昇格試験について伯爵直々の話。すると答えは…

「言わなくてもわかるだろう。ヴァラルだよ、今話したEクラスの冒険者だ」

「……そんな馬鹿な……」

改めてモーロンは愕然とした。正直、ギルドマスターに任命されたときよりも驚いたかもしれない。それ程までデパンの言葉は堪えた。「そう思えたらどれだけ良かったことが。さっき彼と会ったんだけどね、さも当たり前のように話していたよ。まるで邪魔だったから殺しましたみたいな感じでね」

「……」

デパンの言葉に彼はもう何も言えなかった。

「というわけで大体の事情は理解できたとは思ってから後は宜しく。こつちも色々と準備しなくちゃならないからね。彼からも承諾を得ないと」

「待ってください」

「ん？何だい？」

「私も参加させてもらえませんか？」

チユンチユンと小鳥のさえずりがきこえ始め、のどかな朝がやってきた。日は昇り始め今日も平和な一日が始まる頃、

ヴァラルはそれとは対照的に最悪の気分だった。

「あゝくそ…全く、何でこんなことになったんだ…」

早速彼は愚痴をこぼした。

あの話し合いの後、ヴァラルは一睡もせずこの後どうすれば良いか必死に考えていた。いくつかの代案が浮かんだがどれも却下した。時間稼ぎにはなっても結局はれる事にかわりはなかったからだ。

とりあえず、アルカディアのことを話さなければ何とかなるだろう。多分…

彼はひとまず、この後の話し合いも自分に不利にならないよう努力することだけだった。

「やあ、ヴァラル。昨日はよく眠れたかい？」

運ばれてきた朝食を食べた後、ヴァラルはデパンの屋敷の執務室に呼ばれた。どうやらここで昨日の話し続きのするようだ。

「おい、ローグはいないようだが」

ふと見ると彼の姿がなかった。昨日の夜にはいたはずなのだが影の形も見当たらなかった。

「彼なら先に帰ったよ。何でもテトスの村の復興を手伝わないといけないらしいからね。昨日、君と話せただけでも良かったみたいだ」

「そうか…」

名残惜しい気持ちにはなったが、またどこかで会えるだろう。とにかくこの場を切り抜けなければどうしようもない。ヴァラルは自分を切り替えた。

「とりあえず、当面の資金はこちらで出すことになったから安心してくれ。それよりも今日は君に会いたいという人がいてね、もうすぐ来るはずだ」

「どうせデパンの知り合いだろ…」

すると応接間の扉から一人の男が現れた。ローグに似たような大きな男だ。けれど、それなりに風格もある。彼もまた冒険者として名を上げた者なのだろう。

「紹介するよ。トレマルク王国のギルドマスターだ」

「宜しく。モーロンと呼んでくれ、ヴァラル」

「伯爵に続いて今度はギルドマスターのおでましか。次から次へと増えていくな」

やれやれといった顔でヴァラルは呆れた。セレシアたちはともかくとして、昨日まではこんな大物達と知り合うなんて全く想像していなかったからだ。

「今回の件ではギルドの沽券にも関わることになるからね。少なくともヴァラルにとっても良い話になるはずだ」

モーロンはヴァラルに語った。

「そうなれば良いけどな…それで、デパン。話の続きは何だ？」

「ヴァラル、ギルドには昇格試験があることは知っているね」

「ああ、セレシアたちも受けるのか言っていたな」

「それを君にも受けてもらいたい」

「断る。第一、その受付期間はとっくの昔に過ぎているはずだ」

ヴァラルは即座に拒否した。何せ彼は昇格する気などさらさらなかったからだ。多少不便はあるが、元々身分を手に入れるために冒険者と隠れ蓑を利用したのだ。それなのにどうして自分の方から目立たなければならぬのか理解できなかった。

「それはこちらで何とかする。ヴァラルはただ受けるだけで良い」

「…クラスは？」

けれど、モーロンの言葉に一応反応した。聞くだけは無駄にならないからだ。

「Sだ」

「…おいおい、確かギルドではAが最高だったはずだ。それなのに、なんで、その上があるんだ！」

「これまでに誰もいなかったからね。そのうちにすっかり忘れ去られてしまったんだよ」

「絶対に断る。セレシアたちのBクラスでさえかなり注目の的だったんだ。これ以上目立つのは御免だ」

ヴァラルは思わず天を仰いだ。セレシアたちがAクラスを受けるのにこの街は沸いている。そんな中、ヴァラルがSクラスの試験を受ければどうなるか。それは火に油を注ぐようなことであることは明白であった。

「ヴァラル。言っておくが、アザンテのことが露見するのも時間の問題なんだ。今はデパンさんが何とか押さえつけているが、それで

も限界がある。ライレンの魔法士が何か探ってきているみたいだから」

「…君は目立つのが嫌なようだけど、このままだと余計なトラブルが君の元に飛び込むでくるよ。この前のようなCクラスの冒険者の集団が謎の重傷を負ったときのような。あれ、君のせいだろうか？」

アザンテを倒した男ならあの程度のことでも成し遂げるのだと踏んだのだろう、デパンは何もかもお見通しと言つ目でヴァラルを見た。

「…デパンさん、そういうことは昨日のうちに言ってくださいよ」

「いやなに、あのときは第三者の目撃者が誰もいなかったからね。確証はなかったんだ」

「本当に嫌な奴だな、デパン」

「褒め言葉をどうも。だけど、Sクラスになればそういったトラブルを未然に防ぐことが出来るし、ギルドからも最大限のサポートを保証するみたいだよ」

そう、確かにセレシアに喧嘩を吹っかける愚か者がいなかったのは事実だ。この辺り、長いものに巻かれると言つ変なこだわりがあるのか、彼らはきちんと弁えていた。

「ああ。ギルドの各種施設は無料で仕えるよう取り計らうし、依頼人とのトラブルもこちらで対処する。それに依頼も好きなものを受けられる」

「それはニーベンスや秘境、遺跡の調査も含まれるのか？」

モーロンの物言いに別のところで反応したヴァラルであった。彼としてはAクラスの依頼も受けられるという所に一番の魅力を感じていたのだ。

「勿論。Sクラスになればむしろこちらから依頼することになるだろう。とはいえ、そう簡単に回せるものではないけどね」

「……一つ聞きたい。俺は冒険者だ。国に忠誠を誓う騎士とは違う。それなのにデパン、なぜ俺にここまでする？ 言っておくが俺はこの国に仕える気はないぞ」

「分かっている。目的としては君とのつながりが欲しいからかな。世の中何が起こるかわからないからね、こうして少しでも恩を売っておきたいのさ。態度は不躰だけど、それ以上に君は情に厚い男のようだからね。テトスの村がいい例だ、あれほどの懸賞金をポンと渡せる冒険者なんてそうそういない。それに人との付き合いと言うのは金や名誉よりも案外大切なものだよ、ヴァラル」

「……」

懸賞金のくだりは少々間違っではいるが、意外にも彼の本質を見抜いているデパンだった。伊達に貴族の中で腹の探りあいを行っているわけでは無さそうだ。

「ギルドとしても意味はある。実は今の冒険者の上位層の殆どが魔法士だ。それは別にかまわないんだ。けれど、彼らは若い冒険者とのトラブルが絶えなくてね、今回のことはそれを防ぐためでもある」

モーロンも補足するかのように入った。

「成る程ね…Sクラスという存在が現れることで、彼らの関心がこっちに向くと…つまり、体のいい圏というわけか」

「そう思ってくれてもかまわない。だが、それでもヴァラルに頼らざるを得ないのも事実だ…」

ヴァラルは考え出した。このまま時間が過ぎることによって注目を浴びてしまうのは不可避のようだ。けれど、それを利用するデパンの提案は確かに魅力的だった。

これは流れに乗るしかないか…

「まったくしょうがない…分かったよ。とりあえずそのSクラスの昇格試験を受ければ良いんだな？それで、その内容は何だ？」

「それがアザンテを倒した時点でクリアしたも同然なだけだね。だから、どうすれば良いかまた相談というわけだ」

「デパン…人を散々煽っておいてそれはないだろう。拍子抜けしたぞ」

「実際、Aクラスが最難関といわれているからね。急に作りようがないんだよ」

「…一つヴァラルには試験の代わりに頼みがある」

そんなことを言い合っているうちにモーロンが発言した。何か言いたいことがあるようだ。

「俺は別にかまわないが…そんなこと、公平な試験のはずなのにやっても良いのか？飯にもギルドマスターなんだろう？」

「素直に引き受けるヴァラルも凄いいけどね…だけどモーロンの気持ちも分かるよ。色々と世話になっているらしいから最後までくらは礼をしたいんだろう、きつと」

「だが、本人達が知ったら相当怒るぞ？」

「そのときはそのときだ。どうせすぐに分かることだしね」

その後、三人の怪しい会合は幕を閉じヴァラルは二人の提案を受け入れた。メリットとデメリットがそれぞれ非常に大きいものだったが、それでも彼は今後のために引き受けざるを得なかった。

身の振り方をもう少し考えていかないとな…

そして、この決断が更なる波乱の幕開けでもあった…

昇格試験

ヴァラルとデパン、モーロンの話し合いは結局のところ夕方まで続いた。そのため、今日もデパンの屋敷で泊まることになりかねなかったが、さすがに二日連続でエンラル宿を空けるのはまずいと思っただのかヴァラルは急いで帰ってきた。

「セレシアは人前で強がっている割には妙なところで寂しがりやなところがあるからな。一体どうしてあんなったんだか……」

ヴァラルは伯爵の手配してくれた馬車の中で一人呟いていた。

エンラルの扉を開けると案の定彼女がいた。時刻は夜と呼んでも差し支えない時間帯だ、それなのにセレシアはエンラルのロビーにポツンと座っていて、その姿はどこか物悲しさを感じさせるものだった。

もしかしてずっと待っていたわけじゃないだろうな？…さすがにそれはないか

「時間がかかってすまないな、シア」

ヴァラルが声を掛けると、セレシアは無言のまますたと彼に近寄ってきた。一步一步が怒気をはらんでいたため、かなりご立腹のようだ。

整った顔の瞳は少し赤くなっていたが。

「ヴァル、随分と時間がかかったんだな。遅かったじゃないか、待

ちくたびれたぞ」

口調は少し棘を含んでいたが、彼を氣遣っていることはすぐに分かった。ヴアラルを見た瞬間、彼女はほっとした様な表情を一瞬見せたことを見逃さなかったからだ。

「ああ、ちょっと伯爵のところでいろいろとな」

本当に色々あった。これからは相当目立つことを覚悟しなければならぬほどに。

…まあ、そのおかげで手間も省けたのも事実だが。

「デパン伯爵のところへか!？」

ヴアラルに掴みかからんばかりに詰め寄り、そうして彼女の吐息が感じられるくらい二人の距離は縮まった。

警備隊に連れて行かれるならともかく、デパンのところに行っていたと語るヴアラルをにわかに信じられない彼女であった。伯爵は多忙な男だ、冒険者一人に割く時間などありはしない。現に、彼女達が伯爵と会ったときは一時間もしないうちに彼は席を立ち、次の来客の相手をしていたからだ。それなのに二日近くも彼のところに行った。つまり余程のことがあったに違いない。

もしかして、以前のCクラスの冒険者達との事で新たな問題があったのか？それが伯爵の耳にも伝わってとんでもない事態に発展したのではないだろうか？様々な憶測が頭の中をよぎり、彼女は不安げな表情でヴアラルを見つめていた。

「心配するな。セレシアもそのうち分かることだ。別に悪いことをしたわけではないからな、安心しろ」

誤解を解くため、ひとまずヴァラルは彼女を落ち着かせた。こんな光景、誰かに見られたらまたとんでもないことになる。セレシアと少し距離をとる彼であった。

「ッ！？そ、そうか。ならいいんだ。全く…あまり私を心配させるな」

自分が興奮していたのに気がついたのだろう、彼女もすぐに取り繕った。こんなに慌てるのは久しぶりのことだ。まだ一ヶ月も経っていないというのに、ヴァラルの事に関しては異様に動揺する自分がそこにはいた。

…本当に不思議なことだった。

「ははっ。セレシアもそんな顔をするんだな」

「うっ、うるさい！私だっていつも仏頂面というわけではないんだぞ…」

照れたような表情でセレシアは怒った。しかし、勿論本気ではない。どちらかといえば恥ずかしがっていたというのが正しい表現だろう。

「悪い悪い。別に笑うつもりではなかったんだ、許してくれ」

こう見えていてもセレシアは誰もが振り返るほどの美貌を持っている。だが、基本的に凜々しさが先行するあまり、誰も近づけさせない雰囲気をつけていたのだ。けれど、こうして改めてみるとそんな

彼女もまた魅力的だとヴァラルは思った。

「…ヴァルには改めて話がある」

あれからセレシアは話を仕切りなおしヴァラルに言った。元々この話をするために彼女は待っていたのだまさかこんなに長くかかるとは思いもしなかったが。

「これから昇格試験で忙しくなるから、以前のように付き合うことが出来なくなる。さしあたりこんなところか？」

「…そうだ。名残惜しいが、再び会うことができるのはそれが終わった後になる。無事だったらの話だが…」

「Aクラスは確かここしばらくの間、合格者は出ていないんだろう？そのために準備をするのは当然だろう。けれど、もう少し早くても良かったんじゃないか？俺に付き合っただけ落ちたら元も子もないだろう」

「確かにそうだが、これは四人で決めたことだ。ヴァルの気にすることではない。死んでしまったらそのときは私達がそれまでだったということだ。けれど、私達の方も全力を尽くすつもりだ」

「当たり前だ。これで戻ってこなかったら俺が他の冒険者達から何言われるかわからないし、下手をすれば襲われかねないからな」

「フツ、それもそうだな…それとだな、ヴァル」

「何だ、まだあるのか？」

「私が帰ってくるまで…死ぬなよ？」

ヴァラルは呆気に取られた。Aクラスという試験を前にして、自身ではなく、他人の心配をするとは…

彼女は自分のことを何とも思っていないのか？いや、それは考えられない。何せ彼女はBクラスだ、どこへ行っても憧れの存在なのだ。当然、自身の価値をより理解しているはずだ。それなのにどうしてここまで歪なのだろうか。ヴァラルは目の前の彼女が非常に危うい存在に見えた。

「…それは俺が言うべき台詞だ…シアも気をつけてな」

「ああ、わかっているさ」

セレシアの表情は実に晴れ晴れとしたものだった。

その後の一週間は瞬く間のうちに過ぎていった。

セレシアの姿はあの日以来エンラルの宿と行きつけのクレーヌ亭でも見かけることはなかった。おそらくグレイン、ソイル、エーニスたちと綿密な準備をしているのだろう。

そして八日目、セレシアたちはAクラスの昇格試験を受けにギルドの館を訪れていた。

「よく来たねセレシア」

「今日は宜しく頼む、モーロン」

ギルドの館のとある一室でセレシアたちのパーティとモーロンがいた。

今回の試験はギルドマスターであるモーロンが直々に取り仕切る事になっていて。それほどまでに今回のAクラスという試験は重要性を持っているのだ。

「一応確認するけど、今回の試験をもってセレシアたちのパーティは解散と言うことでもいいのかな？今ならまだ取り消せるけど」

羊皮紙をめくりながらモーロンは尋ねた。

「いや、そのまま手続きをしてくれ。私は国へ帰らなければならぬし、グレインたちもそれぞれ進むべき道が決まっているのだから」

グレインはトレマルク王国の近衛軍に所属、ソイルは貴族になり、エーミアは魔法皇国ライレンに戻るのだそうだ。

「そうか…このまま残ってくれたら有難かったんだが、しょうがないね。それじゃあ改めて内容を説明するよ」

「頼む」

すると、モーロンの雰囲気はがらりと変わった。

「今回の試験の内容はクヴィクトの森でのオーク討伐だ。これは本来Bクラスの受け持つものだが、その周辺ではオーガの姿が確認さ

れている。そのため、君たちにはオークの討伐を主にしながらもオーガについて調査を行ってもらいたい」

「待った。オーガの討伐はしなくて良いのか？」

グレインが尋ねた。オーガはAクラスのパーティが討伐する魔物だ。これをしないということは難易度が大きく変わることを意味するからだ。

「オークの数が六十体ほどいるようだ。魔法士がいるとはいえ、さすがに四人でこれほどの数のオークを相手するのは骨が折れるだろう。そのため、オーガに関しては無理して戦う必要はない。彼らと遭遇したのなら逃げてもらってもかまわない」

「分かりました」

ソイルとエーニスはそれぞれ納得した。Bクラスではオークを数多く倒してきた彼らであったが、一度に相手したのは三十体ほどだ。それを考えると確かにこの内容はAクラスの昇格試験としてふさわしいものだと感じた二人であった。

「この袋に討ち取った証であるオークの部位を入れてくれ。彼らは周辺の村や街に危害を及ぼしている。変な遠慮は無用だ」

モーロンは頑丈な袋をセレシアたちに手渡した。

「それではセレシア、グレイン、ソイル、エーニス。健闘を祈る」

四人は無言で頷き、そのまま部屋を出て行った。

誰もが歴戦の冒険者である雰囲気纏わせて。

「…行ったようだな」

それから少しの時間が経ち、男が一人モーロンの元へやってきた。

「そうだね…何事もなければ良いけど。でも、本当にいいのかい？」

モーロンは確認した。本来、これは彼にとって受けなくても良いものだった。しかもAクラスの昇格試験だ、何が起こるかわからない。もしかしたら彼もろとも殺されてしまいかもしれない。そんな漠然とした不安がモーロンにはあった。

「あいつらには俺の依頼に付き合ってもらったことがあるからな、その礼だ。それに彼女はまだまだ成長する。そんな才能溢れたやつをこのまま見殺しにするわけにはいかないな」

「そうか…わかったよ。くれぐれも気をつけて」

驚くのはもう飽きた。モーロンは彼の言葉をそのまま信じることにした。

そうして一人の男もまた、彼女達の後を追うようにして旅立っていた。

目的地はオークの多数住まう

クヴィクトの森だ。

彼女の苦悩

その頃セレシアたち一行は街道を歩きつつ、目的地であるクヴィクトの森を目指していた。彼女達の歩く速度は中々速い、このペースで歩き続ければ三日後には到着するだろう。

けれどセレシア、グレイン、ソイル、エーニス誰も喋っていないかった。それも当然だ。彼らは冒険者ギルドの最高峰であるAクラスの昇格試験を受けている真つ最中なのだ、緊張しないわけがない。そのため四人の空気はどことなく重たいものだった。

すると、エーニスが場を和ませようとグレインに明るい声で話しかけた。

「グレインさん、モーロンさんの言ったことをどう思いましたか？ 私としては少し拍子抜けしたというか…その、今までの試験のことを考えたら楽そうだなと」

「まあ、Aクラスの内容にしては少し簡単だろうな。俺はてつきりオーガを討伐することになると思っていたからな」

「そうですよね。私達なら大丈夫です！このままさっさと終わらせて、街に帰りましょう！」

「ああ、そうだな」

オーク討伐ならセレシアたちのパーティは何回も経験済みだ。そのためか、二人の雰囲気は明るくなっていき、あれやこれやと色々な会話をしていた。

「二人とも、そんなことを言っただ丈夫なのですか？ギルドマスターも話していたではないですか、オーガも確認されていると。私はとてもこの依頼は一筋縄ではいかないと思いますよ」

だが、ソイルはエーニスとグレインに水をさした。二人は甘い、これはAクラスと同等の依頼内容なのだ。必ず何かあるに決まっている。そんなことでこの先立ち向かうことが出来るのか、彼は不安だった。

「ソイルさん。今回、オーガは関係ありません。私達はオークを相手にすればいいんですよ」

エーニスが内容を確かめるように彼に言った。今回の討伐は発見されている八割程、つまりは約五十体倒すことで依頼達成となる。彼女の言い分も考えると何とかかなりそうな気もするが…

「ですが、実際に戦闘になったときはどうします？見つかったらそのまま尻尾を巻いて逃げるのですか？試験だけを考えるのならそれでも良いかもしれませんが、村や街はどうなります？調査といってもそのままオーガを放っておくのですか？私は反対です」

ソイルはエーニスの言い分に反論した。昇格試験とはいえ結局のところ形を変えた通常の討伐依頼と同じなのだ。それをみすみす放置することなど彼には出来なかった。

「だからといって五十体のオークを倒した後にあいつの相手にするのはさすがにきついぞ。判っていつてるのか。まず何よりも俺達が生き残らなきゃ話にならないだろう」

明るいムードになりかけたと思っただけの間にか険悪なものとなり、バチバチと三人の間で火花が散っていた。彼らの間で意見の食い違いがあったのはこれが初めてではなかったが、それでもこれはかなりまずい状況だった。

「…三人ともそこまでだ。ソイル、あくまでもオーガについては調査だということをおぼろげに忘れるな。実際の村の被害はオークによるものだと聞いている。ひとまずそのことは置いておけ。それとエーニスとグレイン、場を和ませようとしたのはわかる。だが、その考えは危険だ。最後だからこそ、油断は禁物だ」

見かねたセレスシアは諭すように彼らに言った。そう、彼女たちは行方不明の冒険者パーティの捜索というのも引き受けたことがある。その中で彼女達は依頼達成の半ばに死んでいった者たちを何度も見てきたのである。

「そ、そうですね。すみません…反省します…」

「…悪い。少し浮かれていた。最後だからって油断してしちゃ元も子もないな」

「エーニス、グレイン、私からも謝らせてください。どうやら少し緊張していたようです。あなた達の気持ちを知りながらも、むきになっていました…」

「それでいい。こんなところで争いになってもしょうがないからな…もうすぐ日が暮れるみたいだ、初日からそんなに急ぐこともないだろう。三人とも、準備の手伝いを頼む」

グレインたちが仲直りしたのを見て、日が地平線に沈むのを遠目で

眺めていた彼女はこのあたりで休むことを提案した。もう少し先に進むことも出来たが、今日のところはお預けだ。

「分かりました」

「了解です」

「オツケー。とつとと終わらせるぜ!」

セレシアの言葉に三人はそれぞれ野営の準備に取り掛かった。何度も繰り返してきたため、その動きに淀みはない。

どうやらいつもの調子に戻ったようだな…

彼女はとりあえず一安心した。

「そういえば、こうしてヴァラルがこの場にいないのは珍しいことだよな」

グレインがふと思い出したように言った。

時間は少し経過して、四人は焚き火を囲いながら彼のことについて振り返っていた。日はすっかり沈み周りは夜の闇に支配されていたが、炎の暖かさが彼女達の疲れを癒していた。セレシアを含めた四人はこうした時間が何よりも好きだった。夜であるがゆえ魔物には警戒をしなければならなかったが、それでも親睦を深めるいいタイ

ミングであることには間違いないからだ。

十分すぎるほど既に深まっているのも事実だったが。

「確かに。ここ最近彼の依頼に付き合っていましたからね。こうして四人だけと言うのも久しぶりな気がしますよ」

「そうですね…今思うとなんだかとても不思議な人でした」

「ヴァルは冒険者の才能の塊みたいな奴だからな。全く、今までどこで何をしていたのだから…」

そうなのだ。ヴァラルという男はセレシアたちの協力があったとはいえ、どの依頼もそつなくこなしていたのだ。大抵何かしらの失敗をこの時期にするもののだが、彼女達が見る限りそういうことは一切なかった。むしろ依頼人の大半から感心される場合がほとんどであった。

セレシアたちも今では有名な冒険者パーティの一員として名を上げてはいるが、当然最初の頃は様々な失敗を経験した。今ではいい思い出になっているが、その当時は色々と落ち込んでいたものだ。

「彼がもし私達とこの場にいたらどうなっていたんでしょうね」

「案外、この試験もあっさりパスできたかもしれないぜ？」

ソイルが冗談混じりに言うと、グレインもそれに続いた。

「仮定の話をするのはよせ。あいつはここにはいないんだ。」

「でも、彼といると安心するんですね。何か大きなものに守られているような…そんな感じがします」

「そうだ、それ。何でだかわからないが、あいつとは不思議と息が合うんだよな。なあ、セレシアの姉さん。本当にヴァラルは素人なのか？正直かなりおかしいと思うんだが？」

「そういわれても…私と彼が会ったときはクレーヌ亭なのは知っているな？そのとき、あいつから冒険者登録をしてきたばかりだと言うことを聞いた。実際、ギルドカードも発行されたばかりのものだった」

「怪しいなあ…」

グレインはセクリアの街にいるはずのヴァラルに疑いのまなざしを向けた。正直言ってセレシアに紹介されたときからおかしいと思っていたのだ。Bクラスを目にしたEクラスの連中はグレインの顔のことを差し引いたとしても恐れおののくのが普通だ。なのに彼は何食わぬ顔で席に着き、自らの素性をはぐらかし、余計な口を一切挟まずに聞き役に徹していたのだ。通常だったら格下の冒険者は自らの顔売るために何かしらの行動をとるものだが、ヴァラルは全くそんな気配を見せなかったのだから尚更おかしい。

「嘘をついてもしょうがないだろう。それともグレイン、ヴァルが実力を隠しているとそう言いたいのか？なら何故Dクラスを受けなかった？エーニスだったら分かるだろう？」

「私の場合は魔法士ということとで、逆にギルドの方からすぐにも昇格試験を受けるよう言われましましたから何ともいえません…けれど普通だったら受けるのでは？」

冒険者になった以上、彼らの大半がCクラスを目標にしている。そこから先は分からないが、とりあえず一種のスタート地点であることには間違いないだろう。それを目指さなかったとしたら一体彼は何が目的なのだろうか？

…これ以上悩んでも仕方がない。エーミアは考えるのをやめ、再び三人の会話の中に入っていった。

「セレシアさん、彼はこの後どこまで伸びると思いますか？」

ヴァラルについてソイルも何か思うところがあるのか、彼女に聞いてみた。彼もまたヴァラルの不可解さに疑問を持っているようだ。

「Dクラスはすぐにでも受かると思う。気の会う仲間を見つければCクラスもあつという間だろう」

「本当のところは？」

当たり障りのない模範的な回答を聞いてソイルはセレシアをじっと見つめた。そんなことを聞いているのではない、もっと本質的な意味でのことだと訴えるかのように。

「正直わからない…ヴァラルはグレインも言ったように本当につきみどころがない。覚えているか？コボルドの討伐のときのことを」

「ええ、覚えています。あのときはさすがに彼は戸惑っていたようですが、何とか倒すことが出来ましたが」

「そうか…ソイルにはそう見えたのか…」

「セレシアさんはどう思ったのです？彼にとって最初の討伐はさすが…私としては特に違和感を感じなかったのですが」

「ヴァルは別の意味でコボルドに苦戦しているように見えた。本来の実力を出せないかのような…ああ、さっきと言っていることがまるで逆だな。すまない、忘れてくれ」

セレシアは人を見る目は確かだ。彼女がヴァラルのことを紹介した時点で信頼に値する人物であることソイルは知っている。だが、当の本人でさえ理解できないという彼女の姿は非常に珍しいものだった。

何ともいえない沈黙が彼女達を包み込む。彼のことを考えれば考えるほど四人は深みにはまっていくようだった。

「…セレシアの姉さん」

「何だ？グレイン」

「一度ヴァラルと腹を割って話してみたらどうだ？あのことを含めて」

「そうですね！彼はきつと大丈夫です！」

「だが…」

「二人とも、これはリーダーである彼女自身の問題です。迂闊に触

れて良いものではありません」

「でもよ…これが終わったら俺達ばらばらになっちまうだろう？その前に話くらいはしてもいいんじゃないか？」

「それでもです。私達はセレシアさんに一歩引いてしまったのも事実なのです。彼ももし、私達と同じようになったとしたら？それこそ取り返しのつかないものになります。私達はこのことについて既に何かを言う資格などないのですよ」

「ソイルさん…」

「…ソイル、グレイン、エーニス。お前達の気持ちは良くわかった。ありがとう、少し考えてみることにする」

「…分かりました。出すぎた真似をしてすみませんでした」

「いや、いい。気にすることではないからな。今日は私が寝ずの番をするからお前達は早く休め」

三人はちらりと彼女を眺め、了解したと頷き、そのまま眠りについていった。

ぱちぱちと火花が散り、薪をくべながら彼女は焚き火を眺めていた。先程の喧騒はなくなり、夜の闇はますます色濃くなっていった。

あれから彼女は必死に考えた。何度も何度も繰り返して。けれどAクラスの昇格試験の影響か、結局彼女は後一歩が踏み出せなかった。

「…すまない二人とも。やはりヴァルには言えない…これ以上誰かが離れていくのはもう嫌なんだ…」

膝を抱え、何かに怯えるようにして彼女は夜明けを待っていた。

その姿は凜々しい騎士のものではなく、一人のか弱い女の姿であった。

予兆

セクリアの街から出て三日後、ついに彼女達は目的地であるクヴィクトの森に到着する。

昇格試験の場所となるクヴィクトの森はフェンバルの森とは違い、奥地に良質な材木が採れるという事でいくつかの民家が立ち並ぶ程に開発が進んでいるところだ。けれど、その場所は既にオークの襲撃によって占拠され、無残なところと成り果てていた。

オークの習性として、一体ではなく複数で村や街を襲う点があげられる。

これはCクラス相当のゴブリンも似たような特徴を持つが、オークの方が彼らよりも一体一体がそれなりに強力なため冒険者ギルドでBクラス指定を受けている。実際問題、セレスシアのような卓越した剣の技能を持つ者がいるか、エーニスのような複数を同時に相手に出来る魔法士がいなければ苦戦は免れない相手なのだ。

「どうだ、ソイル？」

小声で隣にいる彼に声を掛ける。

「やはり多いですね…ざっと見ただけでも二十体はいます」

オークの集落近くでソイルはセレスシアに報告する。

彼らは集団で行動するとはいえ、人間ではなく所詮は魔物だ。大抵は十体ほどのごく少数で彼らは生活しているのだが、クヴィクトの

森に住むオークはいままででない規模であるようだ。

セレシアたちは現在、ソイルが彼らを目視できるギリギリの場所にいた。とはいえ彼の目は非常に良いため一方的に動向を探ることが出来、さらにつつそうと生えている茂みの中に隠れているため、余程のことが無い限りオークたちに気づかれることはないだろう。

初日では四人ともちょっとした問題が起こったが、クヴィクトの森に近づくにつれていつもの調子に戻っていった。これから命のやりとりをするという瀬戸際で以前のことを気にする程、彼女たちはやわではないのだ。

「やはりモーロンの言っていたように六十体はいると見るべきだろうな。…よし、それなら手はず通りに行く。タイミングは任せたぞ」

「分かりました。私も出来るだけ援護しますが、それでも魔物と直接戦うのはセレシアさん、貴方です。くれぐれもお気をつけて」

「その言葉、グレインとエーニスにも伝えておく。ソイルも危なくなったらすぐに知らせるんだ。今回は何よりもソイルの腕にかかっている。それを忘れないでくれ」

「そこまで期待されているのならば応えないわけにはいきませぬね…お任せください」

その力強い返事を聞いてセレシアはソイルをその場に残し、二人の待つ場所へと移動していった。

「待たせたな。二人とも、何か問題はあったか？」

彼女は二人に問う。これがセレシアたちパーティの最後の依頼なのだ、念には念を入れる必要があり、もし何かあればすぐにでも引き返すつもりだった。

この後三人はそれぞれ別の道を歩き始める。その道半ばでその命を無駄には出来ない。彼らのためなら命を賭けて戦う決意が彼女には備わっていた。

「大丈夫です」

「問題は無いぜ」

二人はリーダーの到着に安堵したのかほっと一息をついた。

セレシアの立てた作戦はいたって単純なものだ。まず、ソイルがオークたちを弓で注意を引かせ、次に別の方向からエーニスが魔法を放ち、彼らを動揺させる。そして最後はセレシアとグレインがエーニスを援護しつつ一気に彼らを掃討にかかる。あまり長くかけすぎると増援を呼ばれるかもしれないので、これは時間との戦いでもあり、入念な下準備とパーティの連携が重視されるのだ。

「準備はいいな…頼むぞ、ソイル」

セレシアが呟き、いよいよオーク討伐が始まりを告げた。

「傾合ですか……それではいかせてもらいますよ」

ソイルは近くに設置してある弓に矢をつがえ、遙か彼方に見える一

体のオークに狙いを定める。弓は今にも魔物を撃ち殺そうとばかりにギリギリと音を立て、弦を限界まで引き絞るところで彼は矢を放った。

パシュツと何かが森の中を駆け抜けたとき、集落にいたオークの一体の首がドスツと鈍い音を立てて吹き飛んだ。すると周りにいたオークたちがその音の出所を探ろうとして騒ぎ始めた。けれど、その間にもパシュツ、パシュツと乾いた音が森の中に響きわたり、オークの腕や足を吹き飛ばして彼らは次々と倒れていった。

「ふう……」

ソイルは一通り矢を放ち終えた後、弓を下ろし一息つく。

持っている弓は対魔物用に改良された弓で、通称魔物殺しの大弓とも呼ばれる。これは飛距離は勿論のこと、威力もオークの首を一撃で吹き飛ばすほど強力な物である。魔物だからこそ良いものの、人間に向かって放つことになろうものなら鎖帷子を仕込んだ服ごと容易に貫いてしまうだろう。

また矢も特別なものを使用しており、通常の矢に比べ遥かに大きい。彼はこの大弓と大矢を共に使いこなすことで数々の魔物を葬り去ってきたのだ。

実はセレシアたちのメンバーの中で一番力があるのは意外にもソイルで、グレインが一度彼の弓を引き絞ろうとしたことがあるのだが結局少ししか引っ張ることができなかったという逸話がある。腕相撲も、グレインが彼に勝てたためしが無いくらい彼は力持ちなのだ。

「とりあえずざっと十体はいけましたか……さて、次の場所へ移動し

ないと。そろそろ気づくかもしれないからね」

そうして彼は急いで弓と矢を抱え、その場を後にした。

「ソイルが上手くやっているようだ。エーニス、頼むぞ」

オークたちが慌てている姿を確認したセレシアはすぐさま指示を出す。

「はい！」

エーニスはその言葉を聞き、すぐさま集中した。魔法の発動に必要なのは雑念を振り払い、気を静めることが何よりも重要だからだ。

エーニスは魔法士としての才能はよくいって平凡、悪く言えばそれよりもやや下といったところだが、セレシアたちのパーティで彼女は欠かせない存在であった。勿論、魔法士ということもあるのだが他にも理由がある。

彼らの力は確かに目を見張るものがある。だが、ギルドに所属する魔法士たちは仲間との連携というのをあまり重要視していなかった。魔法を放つだけで大勢の魔物が倒れていくのだからメンバーのことをあまり考える必要性がなく、しかも大半がパーティのリーダーであるためどちらかといえば指示を言い渡すタイプなものも拍車をかけているのだ。

けれどエーニスの場合はその魔法士たちとはだいぶ違う。彼女は自分の魔法をセレシアたちやグレイン、ソイルに役立てて欲しいと思いい行使するのだ。つまり、魔法士であるエーニスが逆にセレシア

たちに合わせているのだ。

そして長いようで短い時間は終わり、ついに魔法が発動した。

『ウインド・カッター』

杖から魔力の風が生み出され、オークたちの集団に猛烈な勢いで吹き荒れる。魔法で作り出した風は自然発生したものとは違い、明確な意思を持って全てを切り裂く真空の刃となって彼らに襲い掛かった。

ガアアア!!!!!!

獣のような絶叫が辺り一面に響き渡り、風に取り込まれた彼らの皮膚に無数の裂傷が走っていく。そして、風がやんだ後、辺りには無残な姿と成り果てたオークがバタバタと地に倒れていった。

「さすがだな、エーニス。それじゃあここからは俺の出番だ。しっかりついて来いよ」

「グレインさん、あまり一人で行かないでくださいよ。ついていくの結構大変なんですから」

「フォローは私がする。それではいくぞ！」

そうして三人は茂みの中から飛び出し、彼らの住処を奇襲した。

「……」

ドスツと鈍い音を立てグレインの大剣がオークの体に深々と突き刺さる。致命傷を負ったオークは口から血を吐き出し彼を呪うかのような咆哮を上げ、命を落とした。

彼はソイルの弓を引くことは出来なくても、こうして身の丈にも及ぶ剣を軽々と振り回し、態勢を整えて次々と襲い掛かってくるオークたちに一歩も引かずに立ち向かっていた。

本来、人間と魔物では基礎的な身体能力に大きな差がある。けれど、人間は知恵を絞り、武器と体を鍛え、魔法の力を駆使して彼らと対抗してきた。そしてグレインもまたその中の一人であった。

彼は武器の扱いのみならず、勇敢な男である。討ち倒した魔物は数知れず、その功績のため街やギルドから何度も表彰され、そしてバルヘリオン帝国で行われた大陸中の実力者の集う闘技大会に出場したという経歴を持つ程だ。

「次い！！」

彼はすぐさま別の一体に狙いを定め再び突撃した。オークもまた彼を迎え撃とうとするが、グレインは素早く懐に飛び込み渾身の力をこめた上段斬りに腕を持っていかれ、続けざまに大剣を振るった彼の前に痛みの声を上げる間も無くあっけなくやられた。

しかし、オークもただやられっぱなしというわけではなかった。彼らのうちの一体がグレインの不意を突こうと死角から近づいてくる。グレインは他のオークに気をとられ、まだ気づいていない。そして棍棒が彼の頭上めがけて振り下ろされる直前に彼は咄嗟に反応した。

「くっ！！！」

思わず大剣で防御したものの、オークの叩きつけるような強い衝撃が腕を伝わり思わずグレインはよろけてしまった。その隙を見逃すまいとオークは再び棍棒を振り上げる。このまま頭に直撃すればさすがの彼とてやられてしまう。しかしその一瞬の間に、

「はぁア！！！！」

セレシアのレイピアがオークの棍棒を持つ腕に穴を開けていた。

「出すぎだといったはずだ、グレイン。聞こえなかったのか」

目の前では突然の痛みに棍棒を落とし、腕から血を流しているオークが怒り心頭といった顔で彼女を威圧していたが、セレシアはそれをひとまず捨て置いて辺りに気を配りながらグレインを助け出した。

「いや、本当にすまん！聞いてなかった！」

痺れが治り、剣を持つ手に力が戻ってきた彼はセレシアの背中を守るように構えながら謝っていた。どうやら彼らを相手にするのに夢中で本当に気づいていなかったようだ。

「……まあいい。後でたっぷりと叱ってやる。覚悟するんだな」

「ああ、最後の最後でやつちまったぜ……」

目の前の魔物を無視するかのように軽口を言い合っている二人のその姿に、先程手傷を負ったオークは憤慨した。何せ止めを刺さずに今まで放置されており、しかも女が一人出てきただけで男の気迫は嘘のようになくなっていたからだ。

「……あのオークやたらとセレシアの姉さんをうらんでいるみたいですが、大丈夫ですかい？」

横目で彼女を見る。こうなったのも自分のせいであるということを理解しているのだろう、気まづげに彼は尋ねていた。

「それよりもグレインは後ろを見ておくんだ。今度はちゃんと聞いておけ」

「わ、わかった……」

けれどそんな心配も全く無用のようで、彼女の有無を言わせない力強い言葉に彼は言う通りにした。

セレシアと今にも折れそうな細長いレイピアを構え、さっきのオークはもう片方の手で棍棒を持ち、互いを牽制していた。負傷したとはいえ、さすがはBクラス指定を受けている魔物だ、中々のタフさである。

あまり時間はかけられない、さっさと終わらせないといけないな……

だいぶ数を減らしたとはいえ、まだ油断は出来ない。いつオーガが現れてもおかしくない状況であるため、セレシアは出来るだけ早く決着をつける必要があった。

すると、そんな彼女の期待に応えるかのようにオークはセレシアめがけて勢いよく棍棒を振り下ろした。

彼女は鎧を着ていない、しかも防ぐにしてもあのレイピアでは無理だ。そう判断したのだろう、迷いの無い一撃だった。

「フッ！」

けれど、セレシアは不意を突くような攻撃をものともせず、逆にオークの手を再び刺し貫いていた。

オオアアアア！！！！！！

両腕に穴が開いたオークは絶叫した。何せ、勝利を確信したと思っただけなのに腕から剣が生えてきたのだ、それはもう何かの拷問を受けているような痛々しい叫びだった。

アアア……

けれど、その声が弱々しくなっていた。オークが突然体に力が入らなくなった原因を探ろうとする。そして虚ろな目で自分の胸を見ると、

レイピアが突き刺さっていた。

セレシアが間髪入れず、魔物の胸に容赦なく穿つたのだ。

そして彼女は素早くレイピアを引き抜き、オークはそのまま血の海に沈むこととなった。

「すげえ……」

グレインは惚れ惚れするような彼女の技に驚嘆していた。

セレシアはグレインやソイルのように力があるわけでもないし、エーニスのように魔法を使えるわけでもない。けれど、彼女はBクラス、いや冒険者ギルドの中でも屈指の実力を持つ。それは恐るべき早さで繰り出される技の数々だ。

本来、レイピアは魔物の討伐においてあまり使用されない武器だ。使うのに高い技能が要求され、ロングソードやブロードソードのほうが遥かに扱いやすいからだ。

けれど、セレシアが扱うことでそれは真の強さを発揮する。魔物が武器を振るった瞬間、先程のようにセレシアは反撃に転じることが出来るのだ。

彼らの力は人間よりも強大だが、その一方で武器の扱いには長けていない。そのため振りも大雑把で、ただ相手を叩き潰すことしか考えていないのがほとんどである。

そういった魔物は大抵セレシアの前に力尽きることになる。何せ彼女の技は魔物の優れた感覚を持っていたとしても捕らえきれないほ

どに鋭く、そして魔物を容易に刺し貫いてしまうからだ。

これは最早才能の一言で片付けられる問題ではない、

彼女はいわば天才だった。

さすがは” の一人娘…俺達とは最初から出来が違うというわけか…

「……おい、グレイン！ここはもう片付いた、早く次の場所へ行くぞ。そこでエーニスと合流する手はずになっている。もたもたするわけにもいかない、急ぐぞ」

そんなセレスシアの姿にポーっとしてみると、彼女から声を掛けられた。

「あ、ああ。分かった。すぐに行く……」

こんな場所にいつまでも長居するわけにもいかない、残りのオークを片付けるため二人はすぐさま移動を開始する。

そして彼らの残した死体から血の臭いが森全体へ広がり、それを嗅ぎ付けてうごめく影があった……

接触

「グレイン、右の連中を相手にしろ！ エーニス、私がオークを引きつける、その間に魔法を打ち込め！」

「おうよ！」 「はい！」

グレインの大剣が唸り、エーニスの魔法が次々と炸裂し、そしてセレスシアの華麗な剣技の前にオークたちは手も足も出なかった。

エーニスと合流した二人は破竹の勢いでオークたちをなぎ倒していく。先程はグレインが一人で突っ込んでしまったため一時は危なかったが、今ではその遅れを取り戻すかのように彼らを殲滅していた。一人ひとりでも十分強いのだが、セレスシアの的確な指示により彼らはそれ以上の実力を発揮していたのだ。

「！！」

すると、グレインと戦っていたオークの首が突如音を立てて近くの木に突き刺さった。いきなりすることにオークたちの混乱の度合いはさらに増し、恐慌状態に陥っていた。

これはもしかや…

「ソイルか！」

咄嗟にグレインは後ろを振り向く。何も返事が無かったものの、森の茂みの中から何かがあるのを感じ取れた。彼もセレスシアの指示通りに動き、一目散に駆けつけてきてくれたようだ。

ソイルは弓の名手だ。長距離からの狙撃は勿論、この距離からの味方への誤射は一度も無い。何よりも正面から勝てないと悟ったオークたちの不意打ちを防ぐという意味で彼の存在は非常に頼もしかった。

「よし、このまま一気に押し込むぞ！」

彼女は三人を鼓舞するかのような大声を出した。もう残り十体もない、彼らを倒せばこの依頼は達成することができる。そう思うとセレシアは胸がいっぱいになったが目の前のオークたちを倒すことに集中する。

「わかったぜ！」

グレインが三人を代表するかのように返事をする。気合の入った声だ、これなら大丈夫だろう。

そして四人の猛攻の前にクヴィクトの森にいるオークたちは駆逐された。

セレシアたちが彼らの住処を襲った僅か二十分の出来事であった……

「やれやれ、ようやく終わったぜ……お！ソイルじゃないか。さっ

きは助かったぜ、ありがとうな」

森の中から現れたソイルにグレインは礼を言う。

「相変わらず一人で突っ走っていたようですね。さては、セレスシアさんにまた迷惑をかけましたね？」

彼のもとへ進み出るソイル。その顔は怒っているというよりもまたやったのかという呆れが混じったものだ。

「まあ、結果オーライだからいいじゃないか……はは」

「グレインさん！もう、心配したんですからね！あんなことはもう二度としないでください！」

すると、ソイルに引き続きエーニスからも説教を食らった。結局、自業自得ではあるものの全員からお叱りを受けるグレインであった。

「悪い悪い！次からは……つてもう無いのか。……エーニス、名残惜しいがお前の気持ち確かに受け取った。その言葉を胸にこれから俺は頑張るぜ！だから……元気でな！」

「何をバカなことをやっているんだあいつは……まだ終わりじゃないぞ。ほら、さっさと回収するんだ」

セレスシアはグレインに袋を渡す。要はこの中に魔物の部位を入れるということだ。

「了解。けど、こればかりは何度やっても慣れないな……」

「そうですね。仕方ないとはいえやはり気が引けます……」

「二人とも、これが最後です。私も苦手ですが早く終わらせましょう」

そうして四人はグレインとソイル、セレシアとエーニスの二組に分かれ、倒した証となるオークの体の一部を回収していった。ギルドにきちんと報告をするため、こうした作業は必要不可欠だったが、それでも中々慣れない三人であった。しかも辺りはたくさん死体の山だ。これほどの数はかつて経験したことのない量であったため、そこからの血の臭いが満ちて、彼らの鼻を曲げさせる。そのため、討伐した後だというのにどこか気分が晴れないでいた。

幾分かの時が流れ、四人は再び集まった。グレインとセレシアの袋にはいっぱい詰まっており、この場所にたくさんオークがいたことをうかがわせていた。

「どうでしたか？セレシアさんたちの方は。こちらは大体四十体ほどいました」

「四十五体。似たようなものだな。しかし、これほどたくさんいたとは正直驚いたぞ」

「確かに。この数は少し異常ですね…一体何があったんでしょうか？」

エーニスは首をかしげる。モーロンが彼女達に説明した時点でこの数は少しおかしいものだと感じてはいたのだ。そして実際には八十体も生息していたことで彼女の疑念はさらに深まっていた。

「私も少し気になるところだが、今回の依頼はあくまでも討伐だ。いちいち詮索してもはじまらない。とりあえずここを出よう」

「そうだな。さすがにこのままいたら鼻がおかしくなっちまう。さつさと街に帰ろうぜ」

セレスシアの意見にグレインも賛同の意を示した。こんな血なまぐさい場所ではなくもつと別のところで考えればいい、彼はとにかくここを一刻も早く出たがっていた。

そして彼女達はオークの住処を後にする。結果として四人で八十体以上のオークを相手にしたのだ、これほどまでの数と戦ったことがあるのは恐らくセレスシアたちだけだろう。四人は疲れた表情をしていたが足取りは軽く、あの不快な場所を離れたのが功を奏したのか心は晴れやかであった。

「しっかしこれでこのパーティも解散か。何だかんだいって上手くいったよな、俺達」

大剣を背負いながらグレインは今までのことを振り返る。討伐に限らず、採取や調査など様々な依頼をこなしていたセレスシアたち四人はギルドの間でもかなり仲の良いパーティとして知られていた。Bクラス以上のパーティは基本的に魔法士がリーダーだ。けれど、それ以外のメンバーは魔法を使えないためリーダーとの間で軋轢が生じることが多々あった。

ギルドに所属する魔法士は自分の力を基準にしてしまい、どうしても彼らの力量をうまく測れないものが大勢いた。そんな彼らが仲間達に指示するのは魔物の群れを一人で相手にしろだのといった無茶なものばかりだった。そのため、そんなリーダーに飽き飽きする者達が続出していった。けれど、結果として依頼は成功すると、取り分は少ないものの結構な額をもらえるのでそこを中々抜け出せないというのが現在のBクラス以上のパーティーの現状だった。

そんな中、セレスシアはリーダーとしての責務をきちんと果たしていた。報酬は四等分、作戦を決める際も一人ひとりの意見を尊重し、自分の得意分野を生かせるよう最大限の配慮をしていた。何よりも剣の実力だけでなく彼女の力量把握は天性のものがあつた。魔法士でもないのにエーニスがどれほどの実力をもっているのかをすぐさま見抜き、彼女が集中して魔法を唱えられるようフォローしたり、グレインのバックアップに回ったりと八面六臂の活躍をこなしていたのだ。

そして、一番の驚くべきところは解散するこの日までメンバーの誰一人死なせていないことだ。

実はセレスシアのパーティーが注目されていたのはこのことが大いに含まれる。魔法士ならいざ知らず、冒険者が死亡、または瀕死の重傷を負うというのはBクラス、Aクラス共に珍しいことではない。むしろ日常茶飯事だ。そのため、パーティーを組んだとしても一年も経たないうちに解散に追い込まれるところも少なくない。一方でセレスシアのところはパーティー発足以来、グレインが腕の骨を折るということがあつたもののそれ以外は目立った負傷は一切無かつた。

そもそも彼の骨折も魔物との戦闘によるものではなく、ソイルとの力比べで起きた本当にしょうもない理由だったが……

「そうですね。色々ありましたけど私はとても楽しかったです。グレインさんは確かこのままトレマルクに残るんですね？」

「ソイルもな。こいつ、貴族の地位をさりげなく掻っ攫いやがったからな……羨ましいやつめ」

「そう言っておきながらも、あなただって王国戦士長直属の部隊に配属されるみたいじゃないですか。名誉なことじゃないですか、前例が無いって聞きましたよ？」

「ん〜そう言われてもな……あまり実感がわかないんだよな」

隣の芝生は青いという言葉があるが、ソイルは実のところグレインのことを感心していた。

彼はその性格が災いしたのか交渉ごとはかなり苦手で、トラブルに巻き込まれるとソイルがいつも仲裁に入っていたのだ。正直、このパーティが解散した後彼がどうするのか正直心配ではあった。けれど、グレインはひよんなことで王国戦士長と知り合い、彼に気に入られたようだった。

トレマルク王国の戦士長ガナード・モーゲン。質実剛健を表したかのような壮年の男は、厳しいながらも部下からは慕われていることで有名だ。そのため彼の元なら大丈夫だろう、グレインの話の聞いたとき率直に思ったのであった。

「でもグレインさん、早くそのことを意識しないと大変なことになりますよ？なにせ、冒険者ときのような勝手気ままな行動は許されないんですから。最後だから言いますが、気をつけたほうがいい

です」

「私からもだ。臨機応変に対応するのは大切だが、基本的に軍というものは上官の命令には従うものなんだ。今日のことを含めてちゃんと反省しておけよ」

「わかったわかった……あゝほら、俺のことよりもエーニスのこの後の話とか聞かせてくれよ。ライレンのこととか、たくさんあるだろ？」

「えゝ！グレインさん、話を逸らさないでください。まだまだ言いたいことがたつぷりあるんですからしっかりと聞いてもらわないと！」

「そつだ。それに帰った後は説教だからな。逃げるなよ？グレイン」

「ああ……なんてこつた……」

女性陣二人から容赦の無い宣告を受け、へこたれる彼がそこにはいた。

だが、これでセレシアたちの最後の冒険がこれで終わるはずも無かった。彼女達はこの後パーティ結成以来、最悪の危機に直面するということを誰も知らなかった……

四人は森の中をひたすら進む。ある程度開拓されているとはいえ、やはり大自然の中に変わりは無い。同じような風景が続いていくうちにさすがの彼女達も先程の戦闘による疲労の色を隠せなくなっていた。

「……もうそろそろ休まないか？」

「駄目ですグレイン。まだ森を抜けていません」

ソイルはぴしゃりと言う。彼も少し疲れてきたようで、額には大量の汗をかいており、その言葉にもあまり余裕は感じられなかった。

「でもよ、さすがにこの辺りにはオーガはいないだろう」

「その油断が命取りだ。荷物が重たいのは分かる。もう少しの辛抱だ、頑張れ」

「私も持ちます。少し貸してください」

「セレシアの姉さんとエーニスに言われちゃあまずいな……悪かった」

ガシャリと音を立てて背負いなおし、再び彼女達は移動する。

グレインとソイルは彼女達よりも少し大目の荷物を持っていた。今回は中々の大仕事だった。いつもだったらとつくの昔に休んでいたのだが、今回はオーガの目撃情報があったため、なるべく早く森の外に出る必要があった。けれど、オークの住処からだいぶ離れたはずなのに、いまだこの森には血の臭いが満ちていた。そのため、セレシアは少し焦っていた。

（何故だ？私達も多少の返り血を浴びたのは分かる。それでもどんな臭いが濃くなっているのはどうしてなんだ？）

とにかくこの森はどこかおかしい。気を取り直して不気味に静まりかえる森を彼女は突き進んだ。

だが、不幸にも彼女達は見つけてしまった。

百体を優に越すオークの死体を

「これは……何だ……」

セレシアはそう呟くのが精一杯だった。

目の前に広がるのはうず高く積まれたオークの死体の数々。その周囲の木々は竜巻にあったかのようになぎ倒され、死体はどれも絶望に満ちた表情のオークたちだった。しかし、表情を辛うじて読み取れたのはまだいい、それ以外の死体のほとんどが原型をとどめていなかったのだから。

「……………」

グレインもまた絶句した。自分達もオークを殺したばかりだということすっかり忘れ、凄惨な光景を見せ付けられた一人だった。エ

「二スの場合は顔色を悪くしていたが辛うじて意識を保っていた。さすがに魔法士のことだけはある。こんなもの誰が見たところで通常は胃の中のを全部吐き出してしまふほど酷いものだったからだ。」

「何があつたんですか、一体……」

以前ここを通つたときは何も無い森の風景だったのだ。それが短時間でこの有様。

(まさか……)

ソイルの脳裏を何かが掠めた瞬間、四人の間で一斉にゾクリと今までに無い強烈な寒気が走つた。

こちらに何かが近づいてくる！

彼女たちはすぐに臨戦態勢を取る。荷物を全員かなぐり捨てグレインは鉄で出来た丈夫な大剣を、ソイルは魔物殺しの大弓を、エーニスは古めかしい杖を、そしてセレシアはレイピアを構え、全神経を集中させた。

ザザザツツ！と茂みをかき分けその音が一瞬止んだとき、森の中から何かが飛び出してきた！

それは森に住む魔物の中でも上位に位置し、数々のAクラス冒険者を死に至らしめた

『オーガ』と呼ばれる存在がセレシアたち四人の前に姿を現したの

だ
っ
た
…
…

オーガとの戦い

オーガ。

体長三メートル、岩を削りだしたかのような大斧を携え、猛牛とオークの頭を混ぜ合わせたかのような醜い相貌である。四肢は丸太をくっつけたかのような溢れんばかりの筋肉で盛りあがっており、不気味に光る大きな二つの目でセレシアたち四人を見ていた。それは彼女達を敵としてではなく一方的に狩り尽くす対象としての捕食者の目つきだった。

獐猛な性格をする彼らはAクラス指定されている魔物の中でも冒険者達の間からさらに警戒されている。オーガは立ちふさがる全てのものを喰らい尽くす凶悪な存在だからだ。

ある日、オーガ討伐に出かけたAクラスの五人の冒険者達が依頼に失敗して帰還したことがあった。五人中一人だけが命からがら逃げ出したようで、生き残った冒険者は右腕が何かに食いちぎられたかのような痕が残っていおり、見るも無残な姿に成り果てていた。ギルドは急いで男を治療し、そのときの状況を詳しく聞こうとした。けれど、その冒険者は中々口を開こうとしない。男の表情はなにもかも諦めたかのようなものだったが、度重なる説得によりぽつりぽつりと語り始め、彼の口から語られた内容にギルドは驚きをあらわにした。

たった一体のオーガに魔法士を含めた四人の冒険者が目の前で食べられていったのだ。

今まで、彼らが肉食だということは確認されていたが、まさか人間

までも捕食するようになるとは……

冒険者の死亡報告は彼らの悲しい日課でもであったが、遺族にこのことをそのまま伝えるのはさらに躊躇した。結果として死ぬということには変わりなかったが、それでも食べられるという事実は彼らの心に重くのしかかった。

このようなことが明らかになったことでギルドはすかさず大陸の全支部に連絡した。Aクラス未満の者が遭遇した場合は直ちにその依頼を中止しても撤退をすること、またAクラスの冒険者達であってもオーガとの戦闘をする場合はくれぐれも万全を期するようとの異例の通達だった。

その日以降、Aクラスの冒険者では彼らのことを人食い（マン・イーター）という恐怖の代名詞として認識されていたのである。

（……まずいな、よりもよってこのときか……）

彼女は悔しげに目の前の怪物を眺めていた。

怖気づいたわけではない。昇格試験を受ける際、オーガが出ることを最初から想定はしていた。だが、最悪のタイミングである。あとほんの少してクヴィクトの森を出られるところだったのだ、その直前に現れるとは何ということだろう。

（だが、私達なら勝てない相手ではないはずだ…今までだってこうしたピンチは何度も潜り抜けてきたんだ、ここでやられるわけにはいかない！！）

彼女は気持ちを奮い立たせて仲間達に指示を下す。

そして、オーガとセラシアたちとの戦いが今ここに幕を開けた……

「ソイルッ！！やれッ！！」

彼女の声を聞いた瞬間、ソイルはすぐさま魔物殺しの大弓をオーガにむける。この距離ならば確実に当たる、彼は弓をギリギリと引き絞り、必殺の一撃を放った。

乾いた音が響き、オーガを射殺さんと矢が飛んでいく。その速さは最早肉眼では識別不可能な程で、たとえオーガだろうと見切ることが出来まい。ソイルはそう思った。

しかし無情にも彼はその期待を裏切られることになる。

「なッ！！」

四人の目の前で信じられないことが起こった。オーガがいきなり大斧を目の前に構えたと思ったらソイルの放った矢をガードしたのだ。彼はまず頭よりも確実に当てられると踏んだ肩を狙った。しかし、オーガはあの一瞬でソイルの弓の軌道を読み、すかさず大斧で弾き返すという芸当を見せたのだ。

そして、彼女達が一瞬ひるんだところにオーガは手に持つ大斧を構え強靱な二本の足で突撃を開始する。

「ッ離れる!!」

その声に、四人は弾けたかのように一斉に散開した。

グレイン、エーニス、ソイルたちがその場を離れた瞬間、彼女達の元いた場所はベキベキと何かが折れるような音が聞こえてきた。オーガが周りの木々を大斧でなぎ払ったのだ。

「やばいぜ……こりゃあ……」

グレインは茂みの中に素早く隠れ、間一髪のところまで難を逃れていた。そしてもうもうと土煙や木の破片が立ち込める中その一部始終を見ていた。倒された木の一本一本はそれなりの太さだ。それを一気に破壊するとはなんて馬鹿力だ。あと少し遅かったら彼の体もあの木々のようにはらばらになっただろう。そのことを思い出したのか、体中から冷や汗が流れだしていた。

「それよりもあいつらは……っておいつ!! エーニス!!」

「え……あつ……」

グレインははつとエーニスの姿を見ると、彼女は尻餅をついて動けなくなっていた。彼女は目の前でおきたあまりの出来事にぼつとしてしまったのかオーガの方にまで気が向いていない。

そしてオーガはそんな彼女を狙い定めるかのようにじろりと見ていた。

(クソツ!! 間に合え!!)

彼は一目散に走り出す。一刻も早く助けなければエーニスは死んでしまう。オーガに斬りかかるという思考よりも先にグレインは彼女の命を優先させたのだ。

オーガはエーニスに向かって大斧を振りかぶる。その動きは先程とは違いゆっくりとしたものだったが、それでも彼女は動かない。いや、恐怖で動けなかった。

再び森は凄まじい音が響き渡り、辺りは土煙が舞う。

「グレイン！エーニス！無事かッ！」

セレシアは危険を承知で叫んだ。オーガという怪物を前にして自分の居場所を知らせるといふ彼女にあるまじき行動だったが、それでもこの日まで苦楽を共にしてきた仲間だ、二人を見捨てることなどセレシアに出来るはずも無かった。

視界が開けると、彼がすんでのところでエーニスを助け出したようだ。守るかのようにグレインは彼女を抱きしめ、すぐさま茂みの中に隠れるのを確認した。エーニスのいた場所はすっかり誰もいなくなっていたが、オーガの繰り出した大斧の衝撃で彼女の後ろに立っていた木は粉々になっていた。あんなのをまともに受けたらひとたまりも無い、彼女達が無事で本当に良かった。

（グレイン、流石だ。帰ったら説教ではなく褒めてやらないとな…）

「ソイルッ！」

体勢を立て直すため、森のどこかにいる彼に援護をするよう指示し

た。

彼の弓が放たれると同時に彼女は森の中を駆け抜ける。ソイルが注意を引いている間にセレシアはオーガに見つからないよう慎重に行動した。とにかく、あれは正面から一人で戦ってどうにかなる相手ではない。足止めするならまだしも、倒すのなら四人の力が絶対に必要だ。特にエーニスの魔法を使わなければ勝ち目は無い。セレシアはそう悟り、すぐさま二人と合流することを決意するのだった。

「あつぶね……エーニス、怪我は無いか？」

「ッは、はい！私は大丈夫です！おかげで助かりました。それよりもグレインさん、その傷……」

「ん？ああ、これか？全然大したことはないぜ」

グレインは腕に怪我を負っていた。どうやらエーニスを庇った際、飛び散った木の破片で腕を切ったようだ。けれど、彼はそんなことは気にしていないとばかりに彼女に応える。

「……本当にごめんなさい……私がしっかりしていなかったからこんなことに……」

「俺は普段エーニスたちに迷惑をかけてばかりだからな。これくらい出来なきゃ三人に申し訳が立たないし、気にすんな！」

「グレインさん……」

「エーニスはそのようなことはない」と声を大にして言いたかった。あんな強大な魔物を前にしてすぐさま行動に移せる冒険者はそういない。彼女が以前入っていたパーティなら最初のオーガの突撃でやられていただろう。彼女にはグレインに對しいかに凄いことをしたのか説明しなかったが、オーガが近くににいる以上そんなことは出来ずじまいであった。

「エーニス、グレイン！ここにいたか！」

すると、セレシアが二人を見つけて近寄ってくる。息が荒い、それほどまでに急いできたのだろう。それほどまでに事態は急を要するみたいだ。

「今ソイルがオーガをひきつけてくれている。私達はすぐに彼を見つけて合流し、奴を倒すぞ」

「倒すってどうやってだ？あんな攻撃、俺じゃ防ぎきれないぞ」

「防ぐんじゃない、避ける。または受け流せ」

「ちよっ！！相変わらず無茶なことを……」

「できないと死ぬだけだ、グレイン。さっきのを見ていたぞ。咄嗟にあれだけのことが出来たんだ、お前なら大丈夫。それにちゃんと私がフォローに回る、だから安心しろ」

「お、おう。わかったぜ……」

いきなり彼女から褒められたため、思わずそう返事をしてしまったグレインであった。

「私とグレインの二人は魔法の発動までの時間稼ぎだ。エーニス、やれるな？」

「はい！三十秒……いえ、二十秒ください！それまでに何とかしてみせます！」

「グレイン、エーニスの言ってくれたように、ソイルと合流したら二十秒だけオーガを二人でひきつける。決して近づけさせなよ」

そうして三人は移動を開始する。オーガという魔物を前に決して怖気づくことなく立ち向かう彼女達の姿は間違いなく冒険者を体現するものだった。

「くッ!!」

ソイルはセレシアの指示を忠実に守っていた。元々単独行動が多い彼は次々と弓を射る場所を変え、しつこくオーガを射殺さんとならっていた。だが、オーガはその図体とは裏腹に時折予想外の動きをする。彼の放つ矢を常に大斧でガードし、拳銃の果てには片方の手でそれを掴み取ることがあったのだ。そして、ソイルのいる場所に岩や木を投げつけて反撃してくるため、彼はその突飛な行動に苦しめられていた。

（オーガ……噂以上の魔物ですね……しかもこのままでは……）

ソイルは今回のオーク討伐で大量の矢を持ち込んでいた。だが、それもオーガにことごとく防がれていったため、残り十本も無かった。

それ以外にも彼は短剣と投げナイフを持ち込んでいたが、あの速度の矢を掴み取るということはこれらの武器も全くの無意味だろう。彼の焦りの表情が色を濃くしていくのだった。

だが、そんな彼の前についてに逆転の兆しが見えた。

そう、セレシア、グレイン、エーニスの三人がオーガと対峙するのを目にしたのだ。

(何とか合流できたようですね。私も行かなければ……)

ソイルはすぐさま三人の茂みの近くへ駆けつける。恐らくエーニスの魔法を発動させるための時間稼ぎをするつもりなのだろう。彼女の意図を理解した彼は走りながら残り僅かの矢に手をかけた。

その頃、二人はオーガの猛攻を辛うじて凌いでいた。エーニスは魔法に集中しているのか全く微動だにしない。任された時間は二十秒。だが、大斧の繰り出す衝撃で彼らの足元は揺れ、思うように立ち回ることが出来ない。

「うお!!」

頭上を大斧が通過していき、グレインは思わず身をかがめた。一瞬でも気を緩めればあの世行きなため、彼はとにかく避けることに専念していた。

「ッ!!」

一方セレシアはレイピアを翻し、オーガへ攻撃を仕掛ける。彼女はグレインと違い、徐々にだがオーガに切り傷を与えていった。その

思わぬ反撃に苛立つオーガ、一気にけりをつけようと彼女に向かって大斧を振り上げた。

しかし、彼女達に意識を向けたのが間違いだった。

次の瞬間、

「オオオアアアア!!!」

オーガの苦悶の声が二人の耳に聞こえてくる。ソイルの魔物殺しの大弓から放たれた矢が命中したのだ。当たったところは武器を持つ腕ではなかったが、それでも深々と突き刺さり、そこから大量の血液が噴き出している。

「グレイン！」

「よっしゃあ!!」

ここぞといわんばかりに彼の大剣が唸りを上げ、負傷したオーガの腕を一刀両断する。

「!!!!!!」

更なる反撃に手痛いダメージを受けるオーガ。今まで数々の冒険者を貪り食ってきた怪物がついに一步後退した。信じられないという表情で彼女たちを見るオーガ。その目は強者である自分が負けるという事実を認識できないようだ。

そしてついにそのときを迎える。

「時間だ！！離れる！！」

ここにおいては危険だ、セレシアとグレインはすぐさまオーガから離れる。

「いきます！！」

杖の先から魔力が迸り、エーニスの魔法が発動する。

『エア・ハンマー』

エーニスが行使用することの出来る魔法の中で最大の威力を誇るものであり、圧縮された空気が片腕となったオーガを叩き潰す。その破壊力には確かなものがあり、三メートルもある魔物の巨体が一瞬のうち地に伏せ、その後はもうもうと土煙が舞い上がり、周りの地面も大きく窪んだことからそれは明らかだ。

そして、セレシアたち四人はついにオーガを討ち果たした。

「……………」

人食い（マン・イーター）の異名を持つ強大な魔物が沈んだ瞬間、四人の誰もが声を発することが出来なかった。全員肩で息をし、ソイルもいつの間にかそばにいたが、そのことに気を配ることが出来ないほど彼女達は疲弊していたのだ。

「……………いよつしゃあああああ！！！！！！」

しかし、そんな疲労を気にしないかのようにグレインは歓喜の叫び声を上げた。

オークを八十体以上を倒した後、オーガを討ち取ったのだ。しかも全員生還して。こんなこと、どの冒険者パーティも成し遂げていない快挙であることは間違いなかった。

グレインはその前代未聞の出来事で感動に打ち震えていた。

「……………ッ！！」

エーニスの場合、自分がオーガに止めをさしたという事実感激していた。

魔法皇国ライレンではレスレック魔法学院の入学試験に落ちてしまったという苦い経験がある。

セレスシアたちと出会う前は、冒険者達に忌み嫌われることもあった。けれど、そのつらい過去を全て払拭するようなのが彼女の手で為され、思わず涙ぐんでいた。

「はあ……流石に疲れましたよ……」

ソイルはどっかりとその場に座り込んだ。普段は落ち着いた雰囲気を持つ彼だったが、これほどの大仕事を終えた後ではさすがのソイルも限界だったようだ。

「お疲れみたいだな、ソイル。だが仕方ないか」

そこへセレシアも歩み寄る。彼女の足取りもやや疲れたものがあつたが、それでも三人に比べれば力強いものを感じ取れた。

「ええ、まあ……私はあの二人みたいに喜べません。この一日で何度寿命が縮む思いをしたことが……」

「グレインと合流する際は一人で任せてすまなかつたな。でも、最後の一撃は助かった。ありがとう」

「あれはセレシアさんのおかげです。貴方がオーガの注意を逸らしていなければ当たりませんでした。それよりも、あの距離でオーガと互角に渡り合うセレシアさんの方が凄いですよ……」

ソイルの見た中でも一番に挙げられるくらい先程の戦いは印象深かった。グレインを手助けしつつ、オーガの豪腕から繰り出される攻撃を紙一重で避け、受け流す彼女の姿は『戦女神』の二つ名にふさわしいものだった。

「……そうか！ならリーダーとしての面目を保てたということだな。こう見えても私だけあまり活躍が無いように感じていたんだ……う

ん、それなら良かった」

(……………本当に貴方という人は……………)

この人には一生敵わない、ソイルはそう思った。

「しっかしよ、オーガの部位は証拠として集めるとして、こいつらはどうする？これも俺達の手柄にするか？」

四人の目の前にあるのはうず高く積み重なったオークの死体。ギルドでは一体ごとに金額を設定されており、それに応じて金が支払われる。そのため、冒険者にとってはこのオークの死体は金となる木も同然だった。

「好きにしる。だがもうすぐ日が暮れる。なるべく早く済ませるんだぞ」

「わかったぜ、セレシアの姉さん！」

そう言ってグレインは比較的損傷の少ないオークの死体から部位をかき集めていく。先程は集めるのは苦手だといっておきながらこの変わりよう。彼もまた冒険者としてしたたかだった。

「しかし、これだけの量をオーガがやったとなると……………少しぞつとしますね……………」

「確かに。この森では予想以上にオークがたくさんいた。しかも過去に類を見ないほど。一体どうしたことなんだ……？」

夕陽がクヴェイクトの森を不気味に照らし出す。それはまるでセレスアたちを黄泉路に引きずり込むかのように。

そんな赤く光る夕陽を眺めているうちに、セレスアの脳裏に衝撃的な事実がひらめいてしまった。

それが彼女達の死のカウントダウンが始まる合図でもあった。

(まずいッッッ！……！……！……！……！)

「三人とも……！！！！今すぐここから離れるぞ……！！！！！」

セレスアはかつて無い大声で叫んだ。

「どうしたんですかい？セレスアの姉さん？そんなに慌てて」

「……何かあったんですか？」

「そうですねよ。どうしたんですか？」

セレスアの取り乱しように一同は騒然とした。こんな彼女の姿を今まで誰も見たことがなかったからだ。

「説明する時間が惜しいッ……いくぞッ……！！！」

「お、おい！」

彼女がすぐさま駆け出したのを見て、三人は荷物を背負って慌てて走り出した。

そしてオークの死体たちは無駄な足掻きだといわんばかりに死んだ目で彼女達を見届けていた。

「どうしたんですか！？セレシアさん！！」

走りながらソイルは彼女に尋ねる。彼女の美しい横顔は悔しげに顔を歪ませていた。

「いいか！今回のオークの異常な数には理由がある！そもそもありえないんだ、オークたちがあんな集団でいること自体が！」

オークは基本的に十体でひとまとまりだ、今回の依頼ではセレシアたちが確認しただけでも二十倍近い数がこの森にいたということになる。通常、こんなことはありえない。

ありえるとすれば、彼らが何かに脅かされてさらに大きな集団で行動せざるを得ないときだ。

「つまりだ！、彼らはオーガから逃げてきたんだ！その一部のオーグたちがさっきの場所を襲い、それが私達の依頼に回ってきたんだ！」

「さっきの奴ですかい？」

「違うんだグレイン！私達は今までオーガが単独で生活をする魔物だと勘違いしていたんだ！」

「それって……まさか!？」

エーニスガセレシアと同じ考えに至ったとき、森の中からがさがさとは何かか蠢く音が聞こえてきた。

そして、ぬらりと地獄の淵から蘇るように彼らは現れた。

猛牛とオークの頭を混ぜ合わせたかのような醜い顔。四肢は丸太をくつつけたかのような溢れんばかりの筋肉で盛りあがっており、不気味に光る大きな二つの目で彼女達を敵としてではなく一方的に狩り尽くす対象として見ていた。

そうして、オーガの集団が四人の前に現れる。

彼女の生死を分けた戦いがいまここにはじまった……

邂逅、そして……

オーガという魔物が何故今まで単独で行動するものと思われていたのか、それには理由がある。

冒険者ギルドでは魔物の生態調査の依頼が少ない頻度で回ってくる。これは大抵国ごとに行われるものだが、強大な魔物に対しては冒険者に一日の長があるため、それなりの報酬と引き換えに彼らを雇い入れるのだ。

けれど、実際の調査はあまり芳しいものではない。何せ依頼される内容の大半は危険なものになることがわかりきっているため、事実上Aクラスの冒険者しか依頼を受けていないのだ。

そのため、オーガを含めた強大な魔物にはまだまだ謎が多く残されているというのが現状である。そのため、彼女達が思わぬきっかけで手に入れたこの情報は各国にとって何よりも重要なものであることに間違いなかった……

オーガの群れと対峙した瞬間、セレシアたちは自身の血が凍りついていくような感覚に囚われ、深い絶望が彼女達を襲った。

先程オーガと死力を尽くして戦ったばかりなのだ。そしてやっとの思いで倒したと思ったら、目の前には数十体のオーガ。

悪夢としか言いようがなかった。

(まずい…このままでは確実に全滅する……)

セレシアはオーガ一体で百体のオークを相手にするという馬鹿げた発想をした自身を反省するよりも、まず現状を打破しようと必死に考える。

オーガはおよそ確認できるだけでも二十体。だがまだまだいるのだろう、森の奥はがさがさと蠢いている。倍はいると見たほうが良い。これらを一度に相手取るとなると、Aクラスの冒険者達を緊急召集させるか、あるいはトレマルク王国軍の一部を導入するしかない。

彼女はそう結論づけようとするが、つまりそれはセレシア達で彼らの相手をするのが不可能であることを意味するものだった……

「グレイン、エーニス、ソイル。良く聞くんだ……」

一時はパニックになりかけたが、こういうときこそ冷静にならなければ意味は無い。それよりも彼らに伝えなければならぬことがある。セレシアは気を落ち着かせ、静かな声で彼らに語る。

「セレシアさん……」

「オーガがクヴィクトの森に多数生息していること。奴らはゴブリンやオークと同様、集団で行動をする魔物だということをすぐにギルドと王国軍に伝えるんだ。これはもう、私達がいくらあがいてもどうにかなる問題ではない……」

「……撤退をするということですね……了解です。それで、貴方はどうされるおつもりですか？……まさかとは思いますが、ここに残るとか言いませんよね？」

彼女のただならぬ雰囲気過敏に察知したソイルの目が彼女をじつと見る。

「私はここに残って少しでも足止めをする」

そしてセレシアは自分の決意を彼らに告げる。

「そんな！？いくらなんでも無茶です！あんなにたくさんいるんです！セレシアさん、殺されちゃいますよ！！」

「俺達と一緒に逃げるんじゃないのかよ！？なあ！！」

目の前のオーガを刺激するのはまずいのか、エーニスとグレインは小さな声で彼女の言葉に反応する。彼女はここで死ぬといっているようなものだ、はいそうですかと素直に受け取る二人ではなかった。二人の悲痛な叫びがセレシアの胸を打つが、今は情に流されている場合ではない。とにかく生き残ることが何よりも重要であった。

「……すまない。だがこれは私の判断ミスが招いた結果だ。それを三人に押し付けるわけにはいかない。責任をとるのは私一人で十分だ……」

「だからといって、それとこれとは話が別だろう！」

セレシアの話をそのまま鵜呑みにするなら、自分がここに残るべきだ。あのときオークの死骸を回収しようとしなければもっと早くこ

こを出られたかもしれない。過去を振り返るのは既に遅すぎたが、それでもセレシアをここへ置き去りにすることなど彼には出来なかった。

「非情なことを言うかもしれないが、グレイン、今のお前に何が出来る？もう剣を振るうことも出来はしないじゃないか。エーニスやソイルも同じだ、ここで残ったところで何にもならない。だが私は足止めをするくらいならまだ大丈夫だ。……そんな心配そうな顔をするんじゃない。必ず私も後から駆けつける。だからそれまで絶対に生き残るんだ」

「……」

セレシアの指摘にグレインは黙り込んだ。三人は連戦に続く連戦で疲れ果てており、これ以上の戦いは肉体的にも精神的にも限界だったのだ。セレシアもきつとそうだろう、それなのに最後まで気丈であり続ける彼女に三人はもう何もいえなかった。

そんな中オーガたちは強者の余裕からか、目の前の獲物がどんなことをして立ち向かってくるのかを期待するように彼女達の行動をじっくりと観察していた。

まるで裁きのをときを待つ処刑者のように。

「……わかりました。ですがセレシアさん、絶対に死なないでくださいね。私たち三人に約束してください」

「そうだ、こればかりは守ってもらうぜ……」

決死の面持ちで彼女を見るエーニスとグレイン。ソイルは何も言わ

なかったが、二人と同様に真剣な顔つきだった。

「ああ、約束する」

必ず再開することを互いに誓い合って三人はセレスシアを一人置いて森の中を駆け出していった。

一刻も早くギルドと軍に伝えるために。

「……………待たせたな……………」

目の前には無数のオーガたち。先程よりも数が増えていると思ったがセレスシアにとっては既にどうでも良いことだ。

だが、怪物は集団で襲い掛からず、そのうちの一体が彼女の前に現れた。人間という種族がどこまでやれるか見てみたいのだろう。しかし、セレスシアにとってはそれが好都合だった。

「……………有難い。これなら集中して戦える……………」

思わぬ魔物の行動にセレスシアは感謝し、精神を極限にまで研ぎ澄ませレイピアを構える。

彼女の使命はただ一つ。

とにかく時間を稼ぎ、ひたすら奴らを駆逐することだけだ。

そして、一人だけの戦いが火蓋を切って落とされた。

「はあああ!!!!!!」

セレシアとオーガの激しい攻防は続く。彼女を一撃で即死させる大斧の攻撃をギリギリのところまで次々と身を翻してかわし、その隙を見計らって彼女のレイピアが鋭く光る。元々ソイルの破壊力のある大弓やガラムの持つ大剣ならまだしも、彼女の持つ武器はあくまでも人との戦いを考慮されたものだ。オークならまだしも、オーガとの戦いではその時点で敗北が確定したと思われたが、彼女のレイピアの早さは鋭さを増す一方だった。

さつきはグレインやエーニスを守りつつ戦っていたため、セレシアは本気を出せないでいた。けれど、こうして一対一の戦いではオーガでも苦戦せざるを得ないほど彼女の剣技は凄まじいものを秘めていた。

「!!!!!!」

彼女と向かい合い、大斧を縦横無尽に振るうオーガは驚きをあらわにする。本当はさつきと片付けて残りの三人を見つげようとしていたが、目の前の鬼気迫る彼女の反撃にたじろぐ一方であった。

そんななか、セレシアと仲間のオーガの戦いを見ている彼らの間でいつの間にか目的が変わりつつあった。

逃げた三人よりも、目の前の女を屈服させたい。

そんな欲望が芽生えつつあった。

「ッ！！」

彼らが邪な思いを抱いていることに気づかない彼女だったが、ついに戦いの流れをこちらに引き寄せることに成功する。高速の突きと斬撃を混ぜた攻撃に翻弄されたオーガは思わずぐらりと体勢を崩したのだ。

（今だッ！！）

今までは大斧が邪魔で近づくことが出来なかった。

けれど、これはチャンスだ。セレシアはすかさず間合いをつめ、オーガの懐に接近する。

そして、ついに彼女のレイピアがグサリと鈍い音を立てて魔物の胸を貫く。分厚い皮膚を貫通し深々と突き刺さるそれは、オーガの命を一瞬にして刈り取る致命の一撃だった。

「オオオアアアアアアア！！！！！！！！！！」

「それでも……」

「それでも、私は、」

「負けるわけにはいかないんだッ！！！！！！」

体力が限界に近い彼女は最後の力を振り絞り、目の前のオーガに一矢報いようと突撃する。体のあちこちに返り血を浴びていたため、誰が見ても汚らわしい姿であったが、これほどのオーガを前に決して怯むことの無かったセレシアの心はどこまでも美しかった。

けれど、そんな彼女の死闘もついに終わりを告げる。

オーガの拳が彼女の体に深々とめり込み、大きく吹き飛ばされてしまったのだ。

「がはッ！！」

森の木に激突し、口から血を吐き出すセレシア。頭を大きく打ち付けてしまったのか彼女の意識は朦朧とする。既に抵抗する力は無く、そこへゆっくりと近づいてくるオーガたち。その醜い顔はどこか愉悦が混じっていた。

彼女とオーガとの勝敗は決した。彼らの圧倒的勝利で。

(…これまで…か……)

頭から血は流れ、視界は歪み、その場から離れようとするもピクリとも体に力が入らない。

(……すまない……三人とも……約束を……守れなかった……)

彼女は仲間達の姿を思い浮かべ、

(……父上……)

遠い地にいる父の姿を思い出した。

そして、欲望にギラギラと目を光らせるオーガの一体がセレシアに接近し、彼女をさらに汚そうとする。

その邪な思いを感じ取ったセレシアは、

今まで自らの胸のうちに溜め込んでいた思いがついに決壊し、

「ヴアル………助けて………」

小さな声で彼に救いを求めた。

「いいぞ」

無愛想ながらもどこか頼もしい彼の声を聞いたそのとき、

セレシアの前に迫り来るオーガの腕が、

風を切るような音と共に消失した。

「おい、大丈夫か？」

「……ヴァル……なのか？……」

目の前で両腕が消失する痛みにもだえるオーガを無視して彼女の無事を確かめるヴァラル。その一方でセクリアの街にいるはずの彼が何故ここにいるのか理解できなかったセレシアは、あまりの出来事に混乱していた。

「随分手ひどくやられたな。だが、あの戦いっぷりは見事だったぞ。最後の突撃はどうかと思っただけだな」

彼女の戦いを最初から見ていたかのようにヴァラルは苦笑する。

「……逃げる……」

「……おい、人に助けを呼んでおいていきなりそれは無いんじゃないのか？」

急に態度が硬くなったセレシアに思わず突っ込みをいれ、ヴァラル

は彼女に黄金の液体の入った瓶をどこからともなく取り出す。

「ほら、飲め」

彼女の口元にエリクシルを近づけるヴァラル。

「……いいから……早く……逃げむぐ!？」

「うるさい、早く飲んでけ」

なかなか飲もうとしない痺れを切らしたヴァラルは無理やり口をあけてエリクシルを流し込んだ。

すると、彼女の体に異変が現れた。瞬く間にオーガから負わされた傷は時間が巻き戻るかのように治り、体中から活力が湧いてくる。

(無事に効いたみたいだな)

「これは、一体……」

「頑張ったご褒美だ」

ローグと同じ反応をしたセレシアの頭をポンと撫でるヴァラル。

そしてすかさずオーガの群れに身を翻していく。

その雰囲気はEクラスの冒険者のものではなく、偉大なる王と錯覚するほど威厳溢れるものであった……

ヴァラルはセクリアの街を出た後、彼女達に見つからない範囲で行動していた。

彼の見立てではオーガの集団が現れた時点でセレシアを含め全員が逃げ出すものとみていた。けれど予想に反しセレシアだけが残った。この時点で手助けしても良かったのだが、ヴァラルはオーガと同様、彼女の実力を知りたかった。それに残酷かもしれないがここで彼女が仲間を騙し、命惜しさに逃げ出したのなら、モーロンとの約束を反故にして見捨てるつもりであった。そんな見下げ果てた奴なら助ける価値など無いと考えていたからだ。けれど、彼女はヴァラルの期待に応える活躍を見せた。最後の突撃に関しては彼の言葉にやや棘があつたものの、それは照れ隠しのようなもので、実はセレシアを大いに賞賛するものだった。

あのときの彼女は身に迫る絶望をはねつけ、希望を捨てず、最後まで必死に生き残ろうとする命の輝きを放っていた。

それはかつての大災厄でヴァラルと共に世界を駆け巡った仲間達にそっくりだったのだ。

(まさか千年後でも見られるとはね……)

結果としてやられたとはいえ、あの姿を見ることができただけでもヴァラルは大満足だった。

「グレインやエーニス、ソイルを見つけないといけなから早めに終わらせるか……夜も遅いし」

彼にとってごく単純な理由でさっさと始末することを決めたヴァルは、真龍の剣を抜いて颯爽と歩き出し、

セレシアにちょっかいをかけようとしたオーガの横を何事もなく通り過ぎる。

すると、

オーガはいつ自分が斬られたのかを全く知覚出来ないまま、

二つに分かれた。

「……………次はどいつだ？」

真っ二つになったオーガを冷めた目で見届けた後、ヴァラルは獲物を見定めるかのようにそのほかのオーガ達をぎろりと睨みつける。

強者と弱者が入れ替わった瞬間だった……………

一つの問いかけ

ギリギリのところまで助けられたセレシアは、両腕を失ったオーガを瞬時に倒してしまったヴァラルの煌く剣技に圧倒されていた。

どうしてクヴィクトの森にいるのか。また負傷した自分を完治させた黄金の液体等、問いただしいことが山のようにあった。けれど、それらを全て忘れてしまうほど目の前で起きた出来事に心奪われていた。

(凄い……)

まず、両腕の無いオーガの元へ近づくと彼があまりにも自然な動きだった。まるで魔物なんかそこには存在せず、そのまま散歩に出かけるかのような軽やかな足取りだ。

その一方でオーガを真つ二つにせしめたあの一撃はセレシアでも完全に捉えるのが難しいほど苛烈極まりないものだった。あれをまともに受ければ一切の反撃を許さず、そのまま防戦一方の展開になることは間違いなかった。

そんなことを思っていると、状況はまた移り変わっていく。

仲間を殺されたというよりも、折角の楽しみを邪魔されたのが気に食わない様子で、新たなオーガがヴァラルの目の前に現れたのだ。

「アアアオオオオ!!!」

「いちいち喚くな、鬱陶しい」

怒り狂っているオーガの殺気をまるで気にしていないヴァラルは剣

を持ったまま徐々に近づいていく。
そのふてぶてしい顔を恐怖にゆがめようとオーガもまた彼との距離を縮め、

武器を振りかざした。

「危ないッ！！！」

思わずセレシアは叫んでしまった。

筋骨隆々とした太い腕から大斧が繰り出され、ヴァラルを真っ二つにしようと頭上へ降りかかる。

他方でヴァラルは何故かその場を動こうとせず、ただじっとしているだけだ。

「くッ！！」

何をぼうっとしているんだと思わず駆け出しそうになる彼女。

けれどももう遅い。避けるにしても、受け流すにしてももう無理だ。

思わずセレシアは悲惨な結末を想像してしまい、目をぎゅっと閉じて顔を横に背けようとする。

その直後、

ガキンッ！！

何かが互いにぶつかったような激しい音が耳に聞こえてきた。

彼女は恐る恐る目を見開くとヴァラルの剣とオーガの大斧が、

真正面からぶつかり合っていた。

「そんなッ……ありえないッ……!!」

オーガは魔物の中でもかなりの力を持っている。

巨大な腕から振り下ろされる一撃は木々を易々と粉碎し、立ちほだかるものを全て蹴散らすのだ。たとえ万全の状態のグレインでもそれを受け止めるのは不可能で、セレスアがやろうとするならレイピアごと破壊されてしまうだろう。

そんな強力な攻撃を剣一本で受け止めるだなんて……

「おお、この状態でも案外いけるな。流石はエド、やっぱりあなたに頼んで正解だったな」

（何を言っているんだ、ヴァルは……この状況を理解しているのか？）

彼の意味不明な言葉の直後、さらにとんでもないことが起きた。

グググッ

何と、力で圧倒しているはずのオーガが負けているのだ。

絶対的な体格差があるにもかかわらずヴァラルはギリギリと大斧を押し返していき、そんな馬鹿などでもいうかのようにオーガの顔が驚きに変わる。

「おらア!!!」

彼の掛け声と共に大斧は火花を散らせて空中に弾き飛ばされる。手

元に何も無くなったことで啞然とするオーガを余所にヴァラルはすかさず剣を横なぎに振るう。

そして宙を舞った大斧がドサリと地面に突き刺さったとき、また一体オーガを打ち倒したのだった。

「ほら、次。早く来な」

「……オオアオオアアア！！！！」「！！」

憤怒の雄叫びを上げた無数のオーガたちが一斉に襲い掛かる。

言葉を理解できないはずだが、目の前の男が挑発していることを肌で感じ取ったのかその勢いは増していく。そして濁流に流されるかのようにヴァラルの姿はオーガに埋め尽くされ、あっという間にその姿が見えなくなってしまった。

(ヴァラル！！)

彼の安否を心配するセレシア。それもそうだが、あんな大勢のオーガが一度に来たのなら最早逃げるしかない。一体を力づくで倒したとしてもまた次が来る。あれはまさに数の暴力だ。

けれどほんの僅かだが、ヴァラルがこんなことで死ぬはずがないという思いが湧き上がっている自分に気がついた。

オーガの集団に飲み込まれていったのに何を考えているのか良くわからなかった彼女だが、それに応えるかのように、

「邪魔だ」

オーガの集団の中心地からまばゆい光が彼らの隙間から漏れ出して

いき、その直後オーガたちはその巨体を突風に煽られたかのように吹き飛ばされていった。

「くツツ!」

その衝撃波に思わず身を屈めるセレシア。そして、光が収まり彼女がゆっくりと目を開けると、

彼の様子が一変していた。

「……かかって来いとはいったが、いきなり全員で来るなよ。びっくりさせやがって、全く」

全てを断ち切る白銀に輝く剣と、全てを拒絶する漆黒の鎧を纏ったヴァラル。そして無様に転がっているオーガたちを眺めながらそりと呟く。本来はこの姿をセレシアには見せたくなかったが、一斉に襲い掛かられたことで驚きのあまりつい魔力を込めてしまった彼なのであった。

「でもまあ、おかげでこの剣の良さが改めて分かったことだし、そろそろ退場してもらおうか」

彼女への弁解をどうしようかと考えつつ、彼は一番近くに倒れているオーガの元へ駆け寄り、目にもとまらぬ早さでその首を刎ねた。

ヴァラルがセレシアの昇格試験、要はモーロンの依頼を引き受けたのは個人的な事情も絡んでいた。勿論セレシアの手伝いが最大のものだったが、魔力の込められていない『真龍の剣』の力を知りたかったのも理由の一つだった。

何せ事あるごとに剣を人前で光らせたなら流石に目立つ。ローグの驚きようからもそれは明らかだった。けれどEクラスの魔物討伐では全くの手ごたえが無い。どうしたものかと途方に暮れていたのだが、そこへ舞い込んできたのが今回のAクラスの昇格試験の依頼。つまりヴァラルは素の状態の真龍の剣でオーガとどれ位戦えるのかを試してみたかったのだ。

そして真龍の剣はヴァラルが何の魔力を込めていないのにもかかわらず、大斧の一撃にも全く傷つかず、さらには分厚いオーガの皮膚を易々と断ち切ったため、この状態でも十分名剣であると結論付けたのであった。

（おかしい……あいつらにも多少の感情があつたはずだが……一体どうしたんだ？）

その後のヴァラルはオーガの集団を徹底的に『駆除』していった。恐れをなして逃げ出すのならまだしも、何故か彼らはヴァラルを目の敵のように攻撃してくるのだ。……逃げたとしても容赦なく殺していたが。

繰り返される大斧を全身を躍動させて次々と避け、彼らの隙間を縫うかのように高速で移動し、白銀に輝く真龍の剣で大斧ごとオーガの体を断ち斬りつつヴァラルは思う。

セレシアから見ればオーガの集団を一人で屠っていくという凄まじい光景であるのは間違いないのだが、彼にとってはこの程度のこと、造作も無かった。

実際のところ、彼らは目の前の存在があまりの理不尽な強さを誇っていたため恐慌状態を起こし、そのままだれ込むようにして彼に戦いを挑んでいったのが事の真相だ。

けれどそんなことに最後まで気づかないまま、ヴァラルの魔物討伐は瞬く間に終わりを告げた。

Aクラス相当のオーガの群れを一切寄せ付けない圧倒的な強さを見せ付けて……

「やっと終わったか」

最後のオーガが断末魔をあげて息絶えたのを確認すると、剣と鎧は眠りにつくかのように輝きを失い元の古びた姿に戻っていった。その後グレインたちと合流しなければならぬのだ、セレシアを気絶させるわけにはいかない。そう思い、ヴァラルは魔力を抑えた上で彼女の元へ向かう。

（けれどどうしたものか……説得するのが面倒になりそうだ）

彼のことを黙ってじっと見つめている彼女を見ながら彼はため息をついたのであった。

そして二人は対面する。

辺りはすっかり闇に包まれていたが、互いの顔がすっかり見えるほど二人の距離は縮まっていた……

「ヴァル」

「何だ？」

「まずは助けてくれたことに礼を言わせてくれ。本当にありがとう……」

自分が助かったことに改めて気づいた彼女が思わず涙ぐむ。

「気にするな。それよりも、」

「分かっている。詳しいことは聞くな、だろう？……分かっている意外にも、セレシアは彼の心配をよそに冷静に事実を受け止めていた。コボルトの討伐、Bクラスの自分にあっけからんと接するその態度。彼女の中でパズルのピースがはまるように彼の驚異的な実力について納得した部分があったのだ。」

しかも自分にはヴァラルに隠し事をしているという負い目があり、何よりも助けてくれた恩人にいちいち詮索するのは恥であると彼女自身感じていたのだ。

「そうか、なら助かる」

「あ、でも……一つだけ、一つだけ聞かせてくれないか！」

突然、何かを思い出すかのように彼女はヴァラルに尋ねてきた。冒険者である以上、過去の素性をおいそれと聞くのは無礼なことであることを承知の上で。

「言ってみる」

ヴァラルはその先を促す。本当は色々と聞きたいことがたくさんあっただろうが、その中でも一つだけと言っ言葉に気がかりを覚えた彼であった。

すると、彼女はもじもじとして、一呼吸置いた後、

「……ヴァルは、もしかして、魔法を使えるのか？」

そう彼に質問した。

（何故そうなるんだ……普通はエリクシルのことや俺の武具について聞くものじゃないのか？）

予想外の質問にヴァラルは戸惑った。実際、彼は魔法を行使した覚えは一切無かったからだ。

（……ああ、もしかして俺の動きが魔法で強化されたものに見えたのか）

身体強化の魔法はたしかにある。なるほど、彼女の知り合いにはその魔法を使える者がいるのかもしれない。

それがヴァラルのことをライレン出身の魔法士と勘違いしたのだろう。あそこは日々魔法の技術が進歩している国だと聞く。きっとエリクシルなどもその産物だと思ったようだ。彼はそう考え、

「ああ、使えるぞ」

彼女の疑問に答える。

しかし、この一言がきっかけでセレシアとの関係に大きな影響を与えることになるうとは露も知らないヴァラルであった……

「……………!!っそ、そうか!!あ、いや、すまない。変な事を聞いたな……………その、悪かった……………」

すると彼女の纏っている雰囲気が一瞬変わった。いつもの凜としたセレシアではなく、少し幼くなったような気がしたのだ。

(……………どうしたんだ、一体?)

シユンとして謝るセレシアの姿にどこか違和感を覚えたヴァラルだったが、とりあえず話を進めることにした。

「謝ることは無い。それよりも早くここを出るぞ。あいつらに追いつかないといけないからな」

「け、けどどうやって?それにヴァル、オーガは……………」

辺りは真つ暗だ。探そうとしてもそう簡単には上手くいかないだろう。それに目の前にはオーガの死体の山。全部で四十体はいるだろう。それらの部位を集めたのならばかなりの金額で引き取ってくれるに違いない。だがヴァラルはそんな宝の山とも呼べるオーガ達を興味なさげにみている。

「気にするな。それよりあいつらもシアのことを心配しているだろう。だから早く合流したほうが良い」

するとヴァラルは彼女から背を向けしゃがみ込んだ。どうやらシアのことを背負って彼らを見つけるようだ。

「ほら、乗れ」

「でも……」

彼女の体は返り血で汚れている。それにセレシアといえど、男の背中におぶさるといふのは小さい頃以来だったため、中々踏ん切りがつかなかった。

「いいから、ほら」

「……分かった……」

渋々といった具合で彼女はヴァラルの背中にもたれかかる。

広くて大きな背中だ。近くで見たことはあるものの、こうして直に触れてみると全然印象が違っており、とても頼もしい体つきだった。

「重くは無いか……？」

ヴァラルの耳元から恥ずかしがるように囁くセラシア。

オーガとの力比べに勝利した彼にとっては今更だったが、女としてはやはり気になるところだった。

「全く問題無い。それよりしっかりつかまってる。少し飛ばすからな」

だが、ヴァラルはそんなことをまるで気にしていないかのようにセラシアを背中に乗せて疾風のごとく駆け出していった。

グレイン、エーニス、ソイルと再会するために。

その頃、三人は汗を大量にかき、森の中をひたすら走っていた。途中で彼らは何度も引き返そうと思ったが、それでも辛うじてその欲求をこらえ、彼らはセラシアの言う通りにしていた。

「くっ！」

グレインはエーニスの荷物も持ち、がしゃがしゃと音を立てて走っている。火事場の馬鹿力なのか、このときの彼はソイルも驚くほどの怪力を発揮していた。

「グ、グレインさん！危ないです！いくらなんでも無茶ですよ！」

「うるさい！セレシアの姉さんが必死に戦っているのに俺達が頑張らないでどうするー！」

併走するエーニスを鬼気迫る形相で睨みつけ彼は奔走する。

「け、けど……」

グレインの言い分も尤もなところがあるが、このままでは彼が倒れかねない。そんなことを心配していると、

「待ってください！こちらに何か近づいてきます！」

ソイルが警戒するよう二人に告げる。

「何だと!?!」

その言葉にさすがのグレインも急停止した。今までオーガの一体も追いかけてこなかったのだ、それはつまり、彼女が生きており上手く足止めをしてくれていたという証でもあった。

けれど、ここへ近づいてくる存在がいるということは……

(くそツツツ!!--!)

グレインは悔しさに涙を浮かべつつ、身の丈もある改良されたクレイモアを素早く構え、ソイルやエーニスも次々と身構える。

(こうなったらやけど……覚悟しやがれ怪物ども……)

最早逃げ切ることはかなうまい。それなら一体でも多く道づれにしてやる。森の中から現れるオーガと思われる存在をひたすら待つグレインたち。

しかしその反面、三人はどことなく違和感を感じていた。

まず音が軽い。オーガは三メートルもあり、しかもあの場には集団でいたため、こんな人間一人が出すようなカサカサとしたものではないはずだ。

そして何といつても……

「……上ツ!？」

目の前の茂みからではなく、頭上の木々から聞こえてくるのだ。

そして次の瞬間、三人の目の前に

「よう、元気にしてたか？」

「……その、待たせたな……」

ヴァラルとその背中に子供のようにおぶさっているセレスシアが降りてきて、

「……」

驚きのあまり、口をあんぐりと開けているグレイン、エーニス、ソイルがそこにいたのだった……

広がる世界

無事にセレシアと合流し、その直後に歓喜の涙を流す三人。

まさか彼女が生きていたとは思ってもよらなかったのだろう、満身創痍の状態にもかかわらず、彼らはとにかく泣いていた。そして、ヴァラルがなぜここにいるのかを彼らは問いたださそうとしたのだが、ひとまず四人はクヴィクト森に程近い川原に移動し、今日はここで夜を明かすことになった。

「……それって本当なのか？嘘じゃないよな？」

「ヴァラルさんと二人で戦ったわけではないんですよ？」

「ですが、セレシアさんが嘘をつくとは考えられませんし、こうして無事に戻ってきたのですからきっとそうなのでしょう。それにもしその話が本当なら……」

時間を区切って水浴びをした後、ぱちぱちと燃えさかる焚き火を囲いながらグレイン、エーニス、ソイルはセレシアの語る内容を熱心に聞いていた。当の本人は少し用事があると言ってこの場にはいない。

尚、セレシアとは事前に打ち合わせ済みで、エリクシルのことやヴァラルの武具の類等、彼にとって肝心の部分は誤魔化してもらっている。

というか、彼女にとってそれは最早どうでも良かったらしく、特に気にする様子は無かった。

その一方で、モーロンから頼まれたこと、ヴァラルがSクラスの冒

険者であるということとを彼らに語ってもらっていた。どうせ、セクリアの街に帰ったらばれることなので彼らの関心を別の方向に向けようというヴァラルの下心が多少混じっていたのであった。そして、それが十分に功を奏したようで、彼らは相当驚いていた。

「そうだな。俺もソイルと同じことを考えた。Sクラスということのはあのと同じ力を持っていることなんだな……」

「ええ。私もです。だからこそ余計に信じられません。ヴァラルさん、そんなに凄い方だったなんて……」

さらに、ソイルとグレイン、エーニスの三人はSクラスと聞いてあつる男を想像していた。

その名は、ドレク・レーヴィス。一対一の戦いでは四ヶ国中最強と目されている男だ。そしてこの男もまた魔法を使うことができる。

とはいっても彼は厳密に言って魔法士ではない。あくまで剣主体で戦い、魔法は補助に使う程度だ。だが、このアールヴリール大陸では剣と魔法を同時に使いこなす人間はドレク唯一人だけだ。

本来、この世界の实力者は剣か魔法のどちらか一つを選び、生涯をかけてその道を探求する。

だが、魔法に関しては幼い頃からの教育でその優劣が決定されると言われているため、才能があると認められたものはまず最初に魔法を学ぶ。そして、その後剣に転向するものはほとんどいない。勿論、護身程度に学ぶ者はいるが、オーガのような強大な魔物相手に戦えるレベルにまで極めようとする変人はまずいない。

なにせ、魔法一つで彼らを蹴散らせるのだ、わざわざ命を賭けて強大な魔物と剣を交えて戦うなど正気の沙汰ではない。彼らはそう考え、魔法の詠唱速度や威力を高めるなど研鑽の日々を送っているのだ。

その一方でドレクは変人だった。魔法士の才能があつたにもかかわらず、彼らとは逆に剣の腕を達人の領域まで高めたあと、魔法を学んだのだから。そのため、最初は彼を馬鹿にするものが多かった。なんて才能の無駄遣いだ。けれど、ドレクは剣の修行で培ったその天才的な感性を魔法という特殊な分野でも遺憾なく発揮し、ある魔法を修めた。

それが『身体強化』だ。

体内の魔力を全身、または一部に集中させるこの魔法は彼らの中であまり人気の無いものだ。何せ習得に時間がかかる割には効果が地味で、さらには肉弾戦でしか使えないのだ。そんなことを覚える暇があるのならもっと別の魔法を習得したほうが良い。彼らの間ではそう評されている不遇の魔法だった。

けれど、ドレクはこの魔法を習得したことにより天下無双の力を得た。先程ヴァラルがセレシアの前で見せたような高速移動を可能にし、立ちふさがる魔物を自慢の剣技で次々と斬り伏せ、帝国主催の闘技大会で連覇を果たすといつとんでもない偉業を成し遂げたからだ。

剣を抜いた瞬間斬られる。ドレク・レーヴィスは『閃光』の異名を持った帝国の誇る最高の剣士なのだ。

「ああ……ヴァルは父上と同じ魔法を使える」

そして、こう言ったのはセレシア。

セレシア・レーヴィス。

冒険者登録をした際のミアアエットは偽名であり、これが彼女の本当の名だ。つまりドレクとセレシアは親子であり、彼女に剣を教えたのも父のドレクその本人だった。

「しっかしな。一体どこであんな強さを身につけたんだ？」

「そうですね。身体強化の魔法は高位の魔法です。それを独学で学んだなんて……もしかしてライレンの魔法士の方なのでしょうか？でもそんな人がいたらすぐに有名になっているはずですよ……」

ライレンでは、彼の偉業を目の当たりにして彼に続こうと真似をするものが大勢いた。けれど、その誰もが挫折した。

もともと無理な話だったのだ。身体強化の魔法は常に持続させなければ意味は無い。つまり、魔物と戦いながら複雑な魔法を行使し続けなければならなかったため、脳がパンク状態になってしまうのだ。それほどまでに身体強化の魔法は修めることが難しいことで有名だった。

「言ってもはじまりませんよ、グレイン、エーニス。そんなことを聞いてもはぐらかされるだけです。いずれギルドの方から発表があるとはいえ、それを事前に教えてくれたヴァラルにはむしろ感謝するべきでしょう。彼の魔法を知っているのは現在私達だけのようですよ」

一般的に魔法士というのは自らの魔法をむやみにひけらかしたりし

ない。学生の頃やドレクのような相応の実力者は別として、彼らには秘密主義のところがある。そのため、ヴァラルが前もって明かしたのは四人を信頼しているという証だとソイルは考えていた。

「ぐぐぐ……それを言われると確かに……あゝでもやっぱり知りた
い……！」

「別にいいが」

「え……まじで……！」

「ヴァラル……！」

グレインが信じられないという声で、セレシアは想い人が現れたかのように顔を輝かせて振り向くと、ヴァラルが三人の前に立っていた。

「ただし、俺に勝てたらの話だな」

「……それ無理。しかもそれじゃあ意味無いだろ……ところで、手に持ってるそれは何だ？」

「いいにおい……」

「ああ、いやなに。お前達が何も食べていないようだったからな。今までこれを作っていたんだ」

そういつて出て来たのは彼の特製野菜スープだ。ヴァラルは彼女達の食事を作るのをかって出て、今までこの場にはいなかったのだ。

単に説明するのが面倒だったというのもあるが……

そして各自に彼特製の野菜スープが配られる。心が温まるような香りがセレシアたちに空腹を感じさせ、一口食べると、

「うめええ！ー！！」

グレインが思わず声を上げた。

「そうか、なら良かった」

あくまでもこれはアイリスの料理を作るところを見て彼なりにアレンジしたものだ。そのため少々心配なところがあつたが、とりあえずまずいということはなさそうだ。因みに、材料は全てアルカディアのユグドラシル産であるため品質は保証できる。

彼らはその後も一心不乱に食べる。誰もが食欲というのを今まで忘れていたかのように食べ続けた。

すると、

「うう……」

エーニスが涙を流していた。

「やっぱりまずかったか？」

ヴァラルが心配そうに彼女を見る。

「あ、いえ、違うんです……またみんなと一緒にこんなに美味しい

ものを口にすることができて幸せなんです……」

改めるまでも無いが、エーニスたちを含め今日一日で命の危機に何度も晒された。そのため心のタガが外れたのだらう、彼女の器にぽたぽたと大粒の涙が零れ落ちていた。

「……こうして他の冒険者達のことも助けたことがあるんだろう？
それが巡り巡って自分のところに返ってきただけだ。それに四人はこれから別々の道へ進むんだ。その饞別だと思ってとっておけばいいよ」

「でも……」

「ヴァラルがこう言ってるんだ。そこまでにしとこうぜ。折角の飯がまずくなっちまう」

「グレインの言うとおりで、エーニス。だけどな、ヴァル」

「何だ？」

「ありがとう。私達はこの恩を一生忘れない……」

「……困った奴に会ったらこれからも助けてやれよ。それが俺から言えることだ」

素直に受け取れない彼は、相変わらず不遜な態度でセレシアに言葉を返す。

こうしたやりとりがあった後、彼女達の夜は更けていった。

その翌日、セレシアたちが目覚めるとヴァラルの姿はそこにはいなかった。流石に一緒に街へ帰るのはまずいのか、先に帰ったようだ。ヴァラルの態度に対し、彼女達は不満げに思いつつもセクリアの街へ歩き出していった。オーガとの死闘で三人は多少は疲れが残っていたものの、何かから開放されたように晴れやかな表情をしている。一方でセレシアはそんな彼らを複雑な心境で見ている。

まるでこの後に待ち受ける別れを惜しむかのように……

そして、川原をでて三日後。多少の遅れはあったもののついにセクリアの街に帰還する。街中は彼女達が無事に依頼を果たしたこのことで大騒ぎになっていた。すぐに解散してしまうとはいえ、アクラスの昇格試験に合格した冒険者パーティーは実に数年ぶりの出来事だからだ。けれど彼女達はその雰囲気は浮かれず、オーガが集団で行動するということを報告するため、急いでギルドに駆けつけた。

「……そうか。このことはすぐに各支部に通達する。疲れているはずなのにわざわざありがとう」

ギルドの一室で彼女達からクヴィクトの森の出来事を聞いたモーロンは安堵していた。もたらされたこの情報で何人も冒険者の命が救われるのと同時に、彼女達が無事だったことにほっとしていたのだ。

「それよりも、一体いつヴァラルのことを知ったんだ？あいつ、モーロンに頼まれたとか言ってたぞ」

「……なら話が早い」

そうしてモーロンは語りだした。自分がデパン伯爵の元へ真夜中に
かりだされたこと、そして、このことはまだ秘密だと念を押した上
で魔法士のアザンテが倒されたこと、それを彼が一人でやってのけ
たことをかいつまんで話した。

「改めて聞くと本当に凄いやつだったんだなあ、あいつ……」

「ええ、そうですね。彼が助けに来てくれなかったら今頃どうなっ
ていたことやら……」ところで、彼は一体どこへ？ギルドにはいない
ようですが」

「そ、そうだ。ヴァルは一体どこへ行っただんだ！？」

「セレシアさん、落ち着いてください。ここ数日、ちょっと様子が
おかしいですよ……」

「ああ、彼なら」

「……ヴァラル、ここは私の仕事場なんだけど」

「いいじゃないか。俺のことはそこらへんに落ちている石ころとで
も思っておけばいい」

出された茶菓子をもぐもぐと食べながら彼はこう言った。

セレシアが街へ到着した頃、彼はデパンの屋敷に来ていた。街が一日中騒がしいため、静かな場所を捜し求めてここへ退避していたのだ。

「こんな白昼堂々と来るとは思ってもみなかったよ……それで？彼女達は無事に達成できたのかい？」

カリカリと書類を書きながらヴァラルをちらりと見て事の顛末を聞くデパン。

「街の様子を見れば分かるだろう。あいつらは無事にやったよ。ちよっとトラブルはあったけどな」

「……オーガが、でたのかい？」

「それもわんさかとな。今頃、ギルドじゃ大騒ぎなんじゃないか？」

「君はそれを難なくやつつけたと。つくづくでたらめだね……」

やれやれといった具合で彼のとんでもなさを実感するデパン。彼の話には退屈をすることが無い。仕事にもかかわらず、伯爵はそう思うのだった。

「シアたちに散々言われたよ。だからもう慣れた。だが俺は四人も中々やると思ったな……さすがBクラスの冒険者達。チームワークが他のやつらと全然違う。あ、あいつらはもうAクラスだったか。けれどそれも終わりか。つくづく勿体無いな……」

備え付けられた豪華なソファに寝そべりながら呟くヴァラル。

(……彼女達の異常性に君はまだ気づいていなかったのか?)

デパンは思わず言いそびれてしまった。

ヴァラルとは価値観が違う、そう思ったのだ。

僅かな時間、二人は何も喋らなかった。

「ヴァラ
」

「お仕事の中、失礼します!!!」

「……何だい?」

そしてデパンがそのことを言おうとした瞬間、彼の従者が駆けつけてきた。何でもセレシアたち四人が解散のパーティをするからヴァラルを出せと表で騒いでいるらしい。

「あいつら、もうここがわかったのか……しょうがない、ちょっと付き合っただけか……」
と言うわけでデパン、何か言おうとしたのは分からないが、それはまた今度な。茶菓子、中々旨かった。じゃあな」

そういつてヴァラルはデパンの執務室をあっという間に去っていった。

あとに残されたのはまだ手がついていないクッキーが何枚と、紅茶、そして伯爵一人だけだ。

「……」

外を見るとセレシアたちがヴァラルのことを大きな声で非難していた。どうしてあそこまできて自分達を置いていくのかと、一緒に来ればよかったじゃないかと詰問していたが、それは本気のものではないと言ったことを伯爵は理解していた。

そんな彼女達の光景を見ている中で、

（オーガがわんさかといたからそれを倒した？まあそれはこの際おいておいて……ヴァラル、君はセレシアたちをBクラスの冒険者の基準にしているようだけど、彼女達はAクラスの冒険者と同等、いや、ギルドの中でもトップクラスの実力をもつパーティなんだよ……）

デパンはそんなことを思っていた。

そしてかつかつと執務室を歩き出し、

（それにしても、彼は開き直っているのかわからないけど、この後が問題だ。とりあえず王国とライレンに提出する書類は作ったけど、正直言つて碌なことにならない気がするよ……）

目の前にある『極秘』と記された資料をぺらぺらと眺めながら彼は深いため息をつくのであった。

こうして今回のセレシアたちの昇格試験は一波乱あったものの、ヴァラルの活躍により無事に幕を閉じた。

そして、結果発表の当日。ギルドの前では昇格試験の結果を張り出

す紙を心待ちにする人たちが大勢いた。

セレシアたちのパーティはすでに解散したが、それでも輝かしい彼女達の栄光の証を見ようと大勢の人だかりが出来ていた。

そして、ギルドの職員が結果を掲示板に張り出しにやってくる。

人々は沸き立ち、彼らの一挙手一投足を舐めるように見て、ついに掲載された。

その瞬間、人々は一瞬沸き立ち、

困惑に包まれた。

彼らが目にしたのは、

Aクラスのセレシア、グレイン、エーニス、ソイルの文字と、

Sクラス　　ヴァラル

という、今まで聞いたことも無いクラスと冒険者の名前だった。

……この日を持ってヴァラルはその思いとは裏腹にあらゆる騒動に巻き込まれることとなり、

彼をめぐって、

世界は動き出した。

それぞれの思惑 前編

「ローグさん！！ローグさん！！大変ですよ！！」

テトスの村の復興の指揮を取っている彼に、カウンが今にも倒れこむような勢いで彼に駆け寄ってきた。

「……ん？何だ？」

「ヴァラルが、今回の昇格試験の結果に出ていたんですよ！」

ゼイゼイと肩で息をしながらカウンはまくしたてる。

「ほう、それは凄いな」

冒険者になって早々昇格試験を受けるものはそれなりにいるが、その大半が出鼻をくじかれる。けれどヴァラルはそんなことお構い無しのようにだった。

「ほう、じゃないですよローグさん！！何と彼、いきなりSクラスっていうわけのわからないクラスになっていたんですよ！！」

あまり反応していないローグにカウンが力説する。どうやらこの件についてセクリアの街では市民や冒険者達がギルドに詰めかけているらしい。Sクラスとは何だ、ヴァラルという冒険者は何者だと。

「そうか……やはりな」

「……あまり驚かないんですね。てっきり、もっとびっくりするか

「思っていましたよ」

「あんなことを間近で見たんだ。むしろ当然だと思えたよ、俺は」
それに、フェンバルの森での出来事もきつと彼がやってくれたのだろ。魔法士を一騎打ちで倒せたのならわけではない。カウンと話すうちに今更の出来事に気がついた彼であった。

「けれど、ヴァラルはこの後どうするんでしょうね。きつと大変ですよ、これから」

「ああ、それは同感だ。けどな、カウン。ヴァラルはそれでも何とかするさ。きつと」

「それは冒険者としての勘ですか？」

「それもあるが……あくまでも個人的な勘だ。冒険者はとか一切抜きであいつには何かを感じさせてくれるものがある」

「そうですね……」

（ヴァラル……お前さんはこれから世界中から目をつけられるだろう。俺が言えた義理じゃないが、それでも頑張れよ……）

ローグはセクリアの街にいらるであろうヴァラルに思いを馳せたのだった。

Sクラスという突然の発表に困惑したのはセクリアの街だけではない。支部を持つライレン、バルヘリオン、アルンの三ヶ国もこの話題で持ちきりだった。

そして、当然のことながらギルド発祥の地であるトレマルク王国の上層部にも、その知らせは届いていた。

「くくくつ。デパンの奴、また何か面白いことをしでかしたみたいだね」

ここは王都インペルンにあるウオストーン城。この城の一室で一人の男が届けられた書類を読みながら笑っている。

何人も一度に横になれそうな豪華なベッド、部屋を彩る意匠を施した繊細な調度品や美術品の山の数々。そして高貴な身分の者が着ているような彼の服もまた、その男の美貌もあいまって絵に描いたような美しさを放っていた。

彼の名はマリウス・トレマルク。この国の王子にしてデパンの親友であり、そして次期国王と周囲から期待されている男である。

「どうかされたのですかな。王子」

彼の笑い声が外まで聞こえてきたのか、壮年の男が部屋の中へ入ってきた。

かなりの長身であるこの男は、限界まで鍛え上げられた肉体が彼を覆う頑丈な鎧の隙間からのぞかせており、一目で相当の実力者であることが分かる。

マリウスに話しかけた男の名はガナード・モーゲン。繰り出される槍の一撃は盾の上からでも相手の手を麻痺させてしまうほど稀代の槍の使い手であり、王国戦士長というトレマルクの軍を一同に率いる栄誉ある肩書きを持っている。

「ああ、ガナードか。失礼失礼。ちよつとセクリアの街にいるデパンから面白い情報が入ってね。思わず笑ってしまったんだよ」

そういつて彼は今まで読んでいた書類をガナードに差し出す。『極秘』と書かれた文字に彼は一瞬戸惑ったものの、マリウスが無言で見るよう指示したため、それを受け取り黙って目を通していった。すると、

「これはッ！！……王子、何かの間違いなのでは？」

報告書の内容にガナードは思わず聞き返す。

「はははッ！！君でも驚くことなんだ。僕はそのあたりのことが良くわからないからね。驚くよりも先に笑っちゃったよ。書かれていることがあまりにも非現実的すぎてね。そうなるとデパンも大変だったろう。彼、苦勞人だからね。情報封鎖を含め、関係各所への根回しは相当大変だったと思うよ」

「それはそうです！！これが事実ならヴァラルという冒険者はあの『閃光』のドレクと同じ実力をもっているということになるのですよ！！デパンが機転を利かせたから良いものの、Eクラスのままだ

「だったらどうなっていたことが……」

「ギルドの制度が破綻していたかもね。パーティならまだしも、個人でこれだけの実力を持つ者をそのままにしておいたら各国から何言われるか分かったもんじゃない。彼には頭が上がらないよ」

セクリアの街にいる彼に礼を言いつつ、マリウスはそう推察する。

クラス制度は冒険者と依頼主、双方にとって余計なトラブルを防ぎ、円滑な取引を可能にするものだ。あくまでもEクラスというのはそこらへんの日雇い労働者と大差ない。けれどもし、そんな彼らにヴアラルのような功績を期待してしまったら？それこそAクラスの冒険者は立場がなくなり、ギルドそのものが立ち行かなくなる可能性だってある。そのため、デパンのやったことを大いに賞賛する彼だった。

「……しかし、この男は大丈夫なんでしょうか？もしわが国に攻め入ろうとするならばそれなりの対応をせざるを得ないのでは？」

「国を預かる身として少しは心配してるけどね。でも報告書を読む限りだと、こちらから手を出さない限りは何もしないそうだよ。だから下手な小細工とかはやめたほうがいいかもしれない」

あくまでも参考との注釈を入れた上でのことだが、彼個人の性格や趣向も盛り込まれていた。それを読んでみると、彼にはあまり出世欲というものが感じられないらしい。けれど、その一方で刃向かうものには格上の者に対してもとことん容赦が無いとのこと。だから、彼と対話をするときは決して嘘をつかず、自分の本心を語ることにそう書かれていた。

「……………」

「もしかして、戦ってみたいと思ったりする？」

黙っているガードに対し、そう問いかけるマリウス。

「冗談を……………」

「でも目が笑ってないよ」

「……………王国を守護する者としてこれほどの存在をそのまま見過ごすわけには……………出来ることなら剣を交えてでもその真意を確かめたい」と

口に出したことは裏腹に、Sクラスという存在がどれほどのものかということに興味があったガード。ドレクとは結局手合わせが出来ずじまいであったため、大陸に名を轟かすその男と同等の力を持つとされるヴァラルと武人として戦ってみたいと思っていたのだ。

「流石だね、頼りになるよ。……………うん、君の意見は分かった。少し考えたいことがあるから今日はもう一人にさせてもらえないか？」

「……………失礼。それではこれにて……………」

ガードは一度彼にお辞儀をしてそのまま部屋から去っていった。そして扉が閉められ、マリウスは腕を組み再び思考を開始する。

（彼はああいつていたけど、僕個人としてはそれほど脅威には感じていないな。わざわざ冒険者ギルドに登録をするくらいだ。国の転覆を図るならこんなまどろっこしい真似をしなくてもいいはずだから

らね)

そうだ。やるのならもつと徹底的にことを進めるはずだ。それも目撃者は全員消す勢いで。そう考え、目を横にずらし、仕事机に置かれている魔法アイテムで撮られた写真を見る。そこには学生時代のデパンとマリウスが互いに肩を組み合い、笑いながら映っていた。

(あの頃はこんなことを考えずに済んだのにな……時の流れは残酷だねえ……) そうだ、この際だからデパンに会うことにするか。直接彼から聞いたほうがよさそうだ。それと噂の彼にも……)

そういつてマリウスは二通の手紙をしたためることにした。

一人は親友の彼に。もう一人は話題の中心にいるあの男だ。

「……よし、こんなものでいいだろう」

少しの時間が経過し、衛兵を呼び出したマリウスは、セクリアの街に滞在しているであろう二人に渡すよう頼んだ。可及的速やかに。

(だけど、こうしているうちにもあのお姫様が何かしてきそうだな……彼女はやることがむちゃくちゃだからなあ……)

そうして彼は窓からのぞかせる青空を見ながらそんなことを思うのだった。

「はあっ、はあっ」

魔法王国ライレンにあるフォーサリア宮殿でも、ヴァラルという新たな冒険者の登場に話題が集まっていた。ライレンでは冒険者を軽視する傾向があったのだが、それでもSクラスという過去に例を見ないこの事態に当惑していたのであった。

そして高貴な髪飾りを身につけた少女は、宮殿のはずれにある小さな小屋へ向かう。

きめ細やかな刺繍を施してかわいらしさを演出したドレスは多少乱れているが、それでも気品さを損なわずにいて、ふわふわとした白い髪を風に揺らし可憐な少女が息を切らせて目的地へ走っていた。

「じいっ!! いるか!!」

ボタンと小屋の扉を開ける少女。その小屋の中は小奇麗にまとめられており、魔法に関する分厚い本や実験器具、それに何に使うのか良くわからない置物など、様々な物が陳列してあった。そしてある一室に入ると一台の机に柔和な笑みを浮かべた老人が座っていた。

「おお、これは姫様。そんなに慌ててどうされましたかな？」

古めかしい灰色のローブに身を包んでいる彼の物腰はゆっくりと落ち着いており、誰に対しても安堵感を与えるものだったのだが、目の前の興奮している少女には全く意味が無さそうだった。

この老人の名はオーランド・デニクス。ライレンの魔法士の間で『賢者』と呼ばれ、レスレック魔法学院の学院長を勤める男だ。

「聞いたか！？今回のギルドの発表！！なんとヴァラルという一人の冒険者が幻といわれるSクラスになったそうだ！！」

「ほう、それはそれは……」

丸い眼鏡をかけたオーランドは、立派にたくわえた白いひげを撫でながらにこやかな笑顔で少女の言葉に耳を傾ける。その二つの眼差しは孫を見るかのように慈愛に満ちていた。

「むう、あまり驚かないようだのう……折角妾が訪ねてきたというのにその反応……もしかして既に知っておったのか？」

「いやいや。これでも十分驚いておりますぞ。そうですな……ドレクが入学してきたときと同じくらいには」

しよんぼりと落ち込む彼女を元気付けさせるように自らの思うところを伝えるオーランド。実際、彼は別のところから既にヴァラルの情報を得ていたのだが、それでも少女の言うことに驚嘆していたことには変わりなかった。ただ、普段の落ち着いた立ち振る舞いから誤解を与えてしまったようだ。

「そうだっ！！すっかり忘れていた！！妾は、じいに聞きたいことがあってここに来たのだ！！」

「ほう、それはなんですか？」

ころつと表情は変わり、くりくりとした明るい目でオーランドを見る一人の少女。それは異性に限らず、同姓までもが庇護欲をかきたてられる愛らしい姿だった。

「うむっ！！昔のドレクのことについてだ。じい、奴はどんな者だったのだ？」

「……ドレクは快活な青年じゃった。一部の者たちからは怪訝な目で見られていたようだが、それでも大多数の者からは好かれておった……」

今は寡黙な男だと風の噂で聞いたことがあるが、学生時代のドレクはライレンの宝であった。成績優秀で、誰に対しても人当たりの良い性格であったため彼のファンクラブが出来るほどの人気ぶりだったのだ。そのため、彼がこの国を去ったときは皆が落ち込んだものである。

オーランドは昔の出来事を回想し、目の前の少女に語る。今でも時折学生相手に教鞭を振るってはいるが、ドレク・レーヴィスは教師としてこれほど教えがいのある生徒はなかないなかった。

「おお、ドレクはそんなにも立派な男だったのか。凄いぞ！！しかも、ヴァラルという冒険者はそんな彼と同じ力を持っていることなのだな？」

「Sクラスということを考えればそうなのかもしれない。けれど、彼が魔法を使えるかどうかはまだ分かっておらぬですよ、姫様」

「ヴァラルか……気になる男だのう……む？じい、これは一体何だ？」

立场上、冒険者というものに憧れを抱いていた少女はSクラスの彼に関心を寄せる。そして、近くに置かれてあった書類を見つけると

オランダに質問した。

「おお、そうでした、丁度いい。姫様もご覧になられますかな？」

「……こ、これは本当かつ!!」

書かれていた内容は魔法士のアザンテ討伐による懸賞金の支払い請求書だった。しかも、倒した者の名が今現在ライレンを賑わせているスクラス冒険者、

ヴァラルだった。

「真のようですぞ。かの者が姫様の仰る冒険者によって討ち取られたよつで。それともうすぐ彼の遺体と遺品がこちらに送られるみたいですよ」

「じい、何故もつと早くこのことを言わぬのか!!」

少女はまくし立てる。何せ父を殺され母を負傷させられたのだ。しかも後一步のところ取り逃がしてしまったため、アザンテに対して相当の殺意が沸いていた。そのため、彼が死んだという文書を読んだことでその感情が再び蘇っていくのと同時に、別の想いもまた膨れ上がった。いった。

「いやいや、わしもこれを受け取ったのはついさっきのことですな。そしてこの後たずねようと思った矢先に姫様が来られたのですよ」

「……こうしてはおれぬ。妾はアザンテを倒したそやつと会ってみたくなつたぞ……ここへ呼ぶ!! すぐにな!! じいつ、後で詳しい

話は聞かせてもらうぞー!!」

「……ほっほっほ。姫様は相変わらずのようですね」

ぐしゃりと書類を握り締め、突風のように小屋を飛び出していった少女を見届けたオーランドは呟く。

彼女の行動を見ているだけでいつも驚かされる。今度はどんなことがあるのだろうか、年甲斐もなく心が躍る一人の老人がそこにはいた。

その頃少女はもと来た道を急いで引き返していった。Sクラスの冒険者である彼に対し、アザンテを討ち取った礼をしたいという内容の招待状を送るために。

「リヴィア様！探しましたよ！一体どこへ出かけていたのですか！あれほど出歩く際は護衛の者をお連れするよう申し上げたはずですが、もうお忘れになられたのですか！」

歴史のあるフォーサリア宮殿の中をぱたぱたと駆けていると、そこへ女の侍従長が現れた。どうやら余計な心配を招いてしまったようだ。

「すまぬ。少しオーランドのところへ顔を出しに行っておった。以後気をつけることにする」

面倒くさい奴と会ったなと心の中で舌打ちしながら表面上は取り繕うとする少女。

「そういうことを私は過去に何度も聞きました！いいですか？もつと姫様は憤み深くなさってください。ただでさえこれから大切な時期が来るというのに、そのような振る舞いでは皆に示しがつきません！」

「安心せよ。妾もいずれは母様のようなおしとやかな女性になるであらう。……………多分な」

「多分ってなんですか！多分って！あ、ちょっと！まだ話は終わってませんよ！リヴィア様！」

「今は忙しい！またの機会にな！」

リヴィアと呼ばれる少女はこれ以上の説教は飽きたのか、きびすを返し、別のところから自室を目指すことにした。

（むっふっふ。ヴァラルとやら、おとなしく待っておれ。妾が直々に感謝することを光栄に思うが良い。そして……ああ、今から会うのが楽しみだのう……）

高級そうな絨毯の敷いてある廊下を走っている中で、彼女の深い紫の瞳は怪しく光る。

その目つきは新たな獲物を見つけた狩人のそれだった。

そして、そんな好奇心旺盛かつ天真爛漫な少女の名は、

リヴィア・ド・ライレン。

魔法皇国ライレンの第一皇女がぺろりと舌なめずりをして、彼との
対面を心待ちにするのであった……

それぞれの思惑 後編

「次」

「は、はい!!」

とある訓練場の一角で平坦な声と、緊張でうわずっている若い声が聞こえてくる。周りには緊迫した空気が流れ、無駄口を叩くものは誰もいない。

そこでは、新人と思われる騎士と一人の男が対峙しており、彼の同期である騎士達も固唾を呑んで見守っていた。

先程から地面に突っ伏している同期の身を案じつつ、若い騎士は真新しい甲冑を着て目の前の男に模擬剣を構える。けれどその切っ先は男の方を向いてはいるものの、焦点が微妙にずれていた。

「どうした？早くするんだ」

渋みを増しながらも、同年代に比べ遙かに若く見える男は腰に手を当て、攻めあぐねている彼に向かって言い放つ。彼は薄い茶色がかった庶民が着るような簡素な服装でいたため、目の前の甲冑の騎士とは随分異なっていた。

そして、その男は剣を抜いておらず、鞘に入れたままであった。

「……いやああアアアア!!!!」

次の瞬間、女の叫びともとれる奇声を上げ若い騎士の男は剣を振り

上げる。訓練用の剣であるため切れ味は全く無いが、それでも実物と同じ重さがある。ゆえにこのまま目の前の男に当たればただではすまないだろう、上段からの一撃は男を昏倒させるのに十分な威力を持っていた。

だがその刹那、

「脇が甘い」

中年の男はそう呟くと同時にほんの少しだけ体を前に倒したかと思うと、接近してきた騎士の胴体に剣をめり込ませた。

「ぐぐッ!？」

金属がひしゃげるような音と共に思わず騎士は呻く。頑強な甲冑を装着しているはずなのに直接殴打されたかのような痛みが体中を駆け巡り、そのあまりの苦痛に両腕から剣を取りこぼしそうになり、膝をついてしまった。

「まっ……………」 「駄目だ」

男は騎士の言葉を最後まで聞かない。苦悶の表情を浮かべる騎士に心配そうな顔一つせず、次々と技を繰り出していく。

顔、首、肩、腕、腹、足。

流れるような剣の舞を全身に打ち込むと、

「あ……………」

何が起きたのか分からないまま騎士の男はそのまま地面へ崩れ落ちていった。

「……次」

ごくりと誰かが息を飲み込む音が聞こえ、

数十人いた騎士達はその後誰も立ち上がることが出来ず、

そのまま訓練場に放置された。

不定期ではあるが、ドレク・レーヴィスの仕事のひとつとして新人の騎士達を鍛え上げるというものがある。別に帝国に仕えているというわけではないが、卓越した剣技を後世にも伝えて欲しいとのことで軍の上層部から強く頼まれ、娘のこともあつて教えることには多少の経験があつたのが幸いしたのか、暇つぶし程度に彼らの面倒を見ることにしたのだ。

そして、その知らせを最初に聞いた騎士達は誰もが喜んだ。閃光の異名を持つ彼から直接指導してもらえるのだ、もしかしたら彼の駆使用する魔法についてもあわよくば教えてもらえるかもしれない。期待に胸が沸く若者達が続出した。

けれど、騎士達のドレクへの羨望は粉々に打ち碎かれることとなる。

もともと彼は懇切丁寧に指導する気などさらさらなく、先程のよう

に意識を失うまで徹底的にしごき倒すのだ。その地獄のような訓練の前に、新米の若い騎士達はまずここで心をへし折られ、彼との実力差が天と地ほどもあるということ体を思い知らされるのだった。

「お帰りなさいませ、ドレク様。今日はお早いお帰りです」

「……ああ、ただいま」

訓練場を一人で去り、帝国の一角にある自分の屋敷に帰宅し執事と簡単なやりとりをする。

ドレクの屋敷はそれほど大きなものではない。美術品の類は一切なく閑散としており、調度品もどこにでもあるような普通のものばかりだった。その一方で目の前の執事はどこかの大貴族に仕えているような立派な出で立ちだったため、おんぼろ屋敷と優秀な執事、その二つの対比が微妙におかしかった。

「ドレク様、お疲れのところ大変申し訳ないのですが、お客様がお見えになっております」

「客？今日はもう何も無かったはずだが？」

執事からの報告に思わず首を傾げるドレク。時刻は既に夕方を回っている。こんな時間にたずねてくるとは一体誰だ？彼はふと考える。

「それが……」

「……ああ、言いたいことは分かった。少し待たせておけ。どうせ

奴のことだ、私の都合など関係無しに来たのだらう。あまり気に入るな」

「分かりました。それでは失礼します」

言いづらそうにする執事の顔を見て、一人の男を思い浮かべたドレク。そして、彼は執事に簡単な指示をして自室に戻る。

(訪ねるときぐらい、前もって連絡するよう言っただけ……だが、一体何のようだ?)

ドレクはさつきと似たような地味で簡素な普段着に着替える途中、やや呆れながらもそんなことを思うのだった。

「随分と待たせるのだな、ドレク」

「そつちから勝手に入ってきたんだらう、文句は言わせない」

身なりを整え、一階にある応接室の扉をガチャリと開けると、三代ほどの尊大そうな男がソファに居座っていた。その男の身なりはドレクとは違い、過度な色使いを施して見るもの全てを威圧するものであったため、男の態度と共にそれは一層強調されるのであった。

「相変わらず敬意という言葉を知らぬ男だな。もう少し我を敬つても良いのだぞ?」

「私に今更それを言うか?アクルス」

王者の風格をドレクに見せ付けるのはバルヘリオン帝国を統べるアクルス・ベイオン。絶大なカリスマ性を誇り、帝王という存在をそのまま具現化したような覇気溢れる男だ。

「ふん、まあ良い。そんなことを言うためにここへ来たのではない。今日は貴様の娘を祝いにやってきたのだ。感謝せよ、ドレク」

「ああ、そういうえばそうだったな……だから街は騒いでいたのか」
ドレクは今思い出したかのように呟く。帰宅の途中で人々がギルドの発表で盛り上がっていたのだが、どうしてもよさ気にそう答えるのがあった。

「何だ、実の娘がAクラスになったというのに随分興味無さ気に言うのだな」

「あれくらい当然。むしろやっとスタートラインに立ったというところだ」

「厳しい男だな。女の身であそこまで上り詰めるのは大変だったろうに、父親からは褒め言葉一つも無しとは。だから嫌われるのだよ、娘に」

事も無げに返事をするドレクをからかうように事実を突きつけるアクルス。実際、彼とセレシアの不仲は一部の間では有名なことだったのだ。

「……そうやって教え込んだのだからな、それもまた必然だろう」

「以前はもっと明るい男だったというのにこの変わり様。奥方が知

「つたら悲しむのではないか？」

「……黙れ。それ以上、そのことを言うな」

アクルスの言葉に怒りを覚えたドレク。目の前にいるのがこの国の王であるにもかかわらず、彼は殺気を叩き付けた。

その瞬間、部屋全体の空気がひやりと凍りついた。だが、アクルスも伊達にこの国を治めているわけではない。そんなことを意にも介さず今日の話の本題に入る。

「こんなところを誰かに見られてもしたら大変だというのに、やはり面白い男だ……それとだな、ドレク。実は先程ギルドから新たな知らせが届いてな、どうやらオーガという魔物、集団で行動するのが確認されたようだぞ」

「……それで？」

「それを発見した一人がセレシアだ」

「……」

その言葉を聞いたとき、無愛想なドレクの顔が一瞬だけ歪んだ。

「……なるほど、娘が襲われたことを知った途端にその反応。やはりお前も父親か。安心したぞ、ドレク」

「だが私は、セレシアに強大な魔物の集団に対抗する術を充分に教えていない。一体どうして生き残ることが出来たんだ？」

「これはまだ未確認の情報だが、ヴァラルという冒険者がオーガの集団を一人で打ち倒したという報告が上がってきている」

「……………ヴァラル？」

「つくづく鈍い男だな…………… Aクラスの連中を差し置いてSクラスに昇格した男のことだ。世間ではお前と肩を並べる実力の持ち主だとの噂だぞ？ ああ、因みにドレク。奴には礼を言ったほうがいいぞ。実の娘の窮地を救ってくれたのだからな」

「……………機会があればな」

色々とアクルスの口から衝撃的な発言が飛び出してきたが、それでも相変わらずな彼だった。

「本当にお前という奴はとことん無愛想な奴だ。まあ良い、我からの話は以上だ、今日はもう帰らせてもらう。詳しい話はセレシアから聞くと良い。何せ生き残った張本人なのだからな」

そう言っただけは薄暗い応接室から立ち去っていき、玄関の方ではがやがやと騒がしくなっていた。恐らくこの場に訪れていたことはまだ誰にも知らせていないのだろう、アクルスの破天荒ぶりにため息をつきながらもドレクは先程の言葉を思い出す。

(……………そのまま帰ってくるとは思えないがな)

実はセレシアが旅立つ際ドレクはある条件を彼女に提示しており、アクルスの話を聞いた後に改めて彼が予測する通りに事が進むのなら、

彼女は二度とここへ戻ってこないだろうと踏んでいたのだった。

水の浮かぶ大浴場のような広い空間に一人の女が立っていた。一目見ただけでその者を虜にしまいそうな美しい顔立ちをし、腰まで伸びた長い銀色の髪が夜の闇のなかで静かに輝きを放っている。

そして透き通るような白い肌は一点の曇りもないほど女の美というものを体現しており、祈りをささげるその光景は一枚の芸術的な絵になるほど神秘的な雰囲気醸し出していた。

アルンの首都、テサリムにあるナーファリム神殿内で聖女エレーナは現在、楔を行っている。

聖女は一日二回、朝と夜に礼服を着て身を清めるのが日課だ。他の国々へ赴く際はその道中で祈りを捧げるだけなのだが、神殿にいるときはこうして清浄の間と呼ばれる場所で彼女は毎日儀式を行っているのだ。

その時間を邪魔するものは例え王侯貴族であろうと許されず、過去には縛り首にあった者が出たほどだ。それゆえ覗き見るものなど一人もおらず、この場ではエレーナ一人しか存在していなかった。

それから少しの時間が経過し、清浄の間から祈りを終えたエレーナは石造りながらも荘厳なたたずまいのナーファリム神殿を一人歩いていた。その姿は先程の透けて見えるような礼服ではなかったが、白を基調とした法服は相変わらず彼女に似合っていた。

「本日の勤め、お疲れ様です。エレーナ様」

すると、大神官のアウレスが彼女に声を掛けてくる。彼女の右腕である彼は様々な政務をこなしているため、こうして夜遅くまで神殿内に残っているのだ。

「ありがとうございます、アウレス。そちらもご苦労様です。……ところで今日はいつもより神殿内が騒がしく感じました。何か心当たりはありますか？」

「……いいえ、特には。きっとエレーナ様の勘違いでしょう。今日もこの国の民は平穩無事に過ごしております」

「誤魔化すのはやめなさい。貴方は私のためを思っているのかは分かりませんが、そういうところは直したほうが良いですよ、アウレス」

彼の定型句を聞き流し、彼女は大人びた声で再び問います。神殿に一日中いることが多いエレーナではあったが、すれ違う者の多くがまるで重大なことが起こったかのようにそわそわとしていたため、気になっていたのだった。

「……失礼しました。実はギルドの方から発表がありまして、とある冒険者が今までにない階級に昇格したとのこと。そのため人々は騒いでいたのでしょうか」

「なるほど……そういうわけですか。それで皆は落ち着きが無かったのですね」

アルンでも冒険者の活躍はそれなりに聞いている。エレーナも彼らと何度か出会った経験があり、いずれも非常に礼儀正しく紳士的な人たちだったことを思い出していた。そのため話題になっている者も立派な冒険者の一人なのだろう、彼女は納得するかのように頷いた。

「……聖女様のお耳を汚すだけかと思いましたがあえて口に出さずにいました。申し訳ありません」

「いいえ、そんなことはありません。人々の話題を知るというのも聖女の務め。今後もこのようなことがあればちゃんと報告するようになさい。分かりましたね？」

「はっ」

そしてエレーナ自身、世俗に疎い所があることを自覚していたため、このような話を積極的にするようアウレスに言い渡した。

「ところで……その者のお名前は？アウレス、貴方なら知っているのでは？」

「ヴァラルと言う者です、エレーナ様」

「ヴァラル……ですか……」

「何か心当たりでも？」

こうして深刻な顔をして物思いにふける彼女は珍しい。思わずアウレスは尋ね返してしまった。

「いえ、特には……」

「そうですか……そのようなお顔をされるのはあまり見なかったものでつい邪推をしました。申し訳ありません」

「良いのです、私は気にしていません。それよりも長話につき合わせてしまいましたね。もうそろそろ帰ったほうがよろしいのでは？」

「はっ、それでは聖女様。今日はこれにて失礼します。良いお眠りを」

再びお辞儀をしてそそくさと立ち去るのを見届けた彼女は

(ヴァラル……不思議な名前の人……)

月明かりが照らす、静かな夜にそう思っただった。

セレシアの想い、ヴァラルの思い

「そろそろここを出るか」

エンラルの宿でヴァラルはふと何かをひらめいたように呟く。

あれから数日、街ではいろいろなことがあった。セレシアたちAクラスのことはいざ知らず、Sクラスの制度やヴァラルという冒険者についてギルドの公式見解を求めて人々が殺到し、大変な騒ぎとなったのだ。

このときのギルドの中は、こんなにも人でごった返したことはないだろうという彼らの想定以上の混雑ぶりとなり、通常の業務に支障が出てしまい、この事態を受けてギルドマスターであるモーロンは今回の騒動について説明する機会を設けた。

そしてその翌日、ギルドの会議室で彼はSクラスの制度の概要やヴァラルは一人でAクラス以上の昇格試験を受けていたということをも市民の前で何回かに分けて発表。だが、これで混乱が収まったかといわれればそんなことは無かった。

なぜなら当の本人のヴァラルがその場にはいなかったし、モーロンの解説にはヴァラルの具体的な実力について彼は一切の黙秘を貫いたためだ。そのため冒険者を含む市民の間からは様々な憶測が流れ出していったのだから、むしろ悪化したといっても良いだろう。

だが、モーロンとしてはヴァラルがライレンの宮廷魔法士やオーガの集団を一人で倒したなど、すぐに明かせるわけがなかった。何せ王国やライレンにつきさつき報告書を送ったばかりなのだ、だから

関係者以外にはまだもらす訳にはいかない。そう考えたため、一旦時間を置いて、彼のことについてどう市民に説明していくのかをライレンと協議を図り、解決への糸口を探ることとなったのである。

（しかし、こうも騒がれるとは予想だにできなかったな。たかが冒険者一人のことだというのに……）

そんなこんなの状態であったため、ヴァラルは心理的、いや物理的にギルドへは一步も近づくことが出来ずにおり、しかも外に出ただけで結構な視線に晒され、段々と居心地悪くなっていったのだった。

（ま、ここを出るのには他に思うところがあつてのことなんだがな……さて次はどこへ行くか）

ヴァラルは地図を広げあごに手を当てながら考える。

（とりあえず、トレマルクのどこか、だよな。まだ他の国へ行く気はしないな。村、街ときたから、今度はもう少し大きなところを見てみたい……）

アルカディアを囲んでいるメクギリス山脈はトレマルク王国とバルヘリオン帝国に隣接している。彼としてはどこからでも回っても良かったのだが、転移魔法陣の関係でトレマルク王国から巡ることにしたヴァラルであり、とりあえず次の目的地もセクリアの街の近辺にしようと考えていた。

（だが、ここは王国の中でも結構大きいところだからな。その他のところが都合よく見つかるわけ……ん？ここは……意外と良さそうだな。よし、次はここへ行ってみるとするか）

ヴァラルは地図とにらめっこをしている最中にとある一点を凝視する。

その場所はセクリアの街から東南に位置するトレマルクの王都、

インペルンだった。

「そうか……ヴァラルはこの街を出ることにしたのか。グレインたちもいなくなつたし、寂しくなるな……」

「ああ、ぼちぼち他のところも見たくなくなってな。短い間だったが世話になった二人とも。色々とセクリアのことを教えてもらつて助かつた、おかげで楽しかつたぞ」

「何、俺達の方も存分に楽しませてもらったさ。特にこの数日は刺激的な毎日だった。そうだろう？ケラク」

「ああ、もちろんだともクレース。こんな寂れた酒場の店主人生の中で、こんな冒険者と知り合える機会なんて早々無いからな。あの発表を聞いたとき、本当に驚いたぞ」

日が沈み始めた頃、少し早いクレース亭にてヴァラルとケラク、そして店主であるクレースの三人は集まっていた。エンラルの宿を経営するケラクは普段忙しい毎日を送っているのだが、彼が旅立つことを聞いてわざわざ駆けつけてくれており、クレースの場合、俺のおごりだといって本日の酒代は無料にしてくれた。そしてそんな

二人の厚意に感謝しつつ、ヴァラルは緩やかな雰囲気に身をゆだねているのであった。

「お前達もか……全く、この街の連中はどうしてこつも噂好きなのか」

ヴァラルはやれやれといった感じで首を横に振る。

「そんな愚痴を言つてられるのも今のうちだぞ？ここほどではないにせよ、きつと大陸全土にお前さんの名が広まっているだろうさ。覚悟はしておいたほうが良いぞ」

「クレース、そんな不吉なことを言うなよ。面倒くさいな……」

そんなことを思いつつもヴァラルは徐々に気持ちを切り替へつつあった。注目的になるのはこれが初めてではなかったし、余計なちよっかいをかけられることも全くといっていいほど無かつたため、こつなつたらとことんこの状況を利用してやるうと意気込んでいた。

「はははっ！まあ、俺達からの忠告だと思つて受け取つておくんだな。ところでヴァラル、これからお前さんはどこへ行くつもりなんだ？」

「そつだ、肝心なことを聞いていなかった。一体次はどこで騒ぎを起こすつもりなんだ？」

「ん？まだ言つてなかつたか。とりあえずインペルンに向かう予定だ。というか、ケラク。お前は俺のことを何だと思つているんだ……」

「そりゃあ、天下のSクラス冒険者様だ。きつと道行く先々でんでもないことが起こるだろうさ」

「ぐ、ちよつとそれは洒落になつてないぞ……」

酒を煽るのをやめ、ケラクの言葉をすぐに否定することが出来なかつたヴァラル。あの発表の後、彼は原因不明のくしゃみが止まらず、しかも何かに狙われているような寒気までしたのだ。けれど体調にはどこも異常がない。そのため、これはまた厄介なことに巻き込まれるなどヴァラルの直感が告げているのだった。

「おいおいケラク、そこまですておけ。ヴァラルがびびっているだろうが……まあ、あまり気にするな。あんたなら大丈夫だよ。セレシアたちと一歩も引かずに付き合ってきたんだ。それだけでも十分凄いことなんだぞ」

「確かに、そりゃあセレシアたち以上に強かつたのならあんなふうな口を聞いたのもわかる……そういえばヴァラル、お前にまた尋ねたいがあつたんだ。ちよつと聞いてくれるか？」

「……何だ？改まって」

「セレシアたちのパーティーは解散したんだよな？」

確認するようにケラクはヴァラルに質問する。

「ああ、そうだ。というか、ケラクもその場にはいたはずだ。覚えていないのか？」

解散の打ち上げではケラクやクレース、それにヴァラルの初依頼者

である親子や受付嬢といった比較的親しい者達だけで静かに行われた。それ以来、グレインやソイル、エーニスの姿を見たものはいない。だから、彼の言うことはある意味正しかった。

一部を除いて。

「勿論覚えていて。だがな、どうしていまだにセレシアだけがこの街に残っているんだ？」

「……それはだな」

すると、クレース亭の入り口から、

「ヴァル！探したぞ！」

セレシアが息を切らせてヴァラルの前に現れたのだった。

「ここを出るって……それは本当なのか!？」

「ああ、そうだ」

「そんな……」

エンラルの宿にあるヴァラルの一室にてセレシアは愕然としていた。

実は、ヴァラルに起きた身の回りの変化はSクラスの冒険者が知れ

渡ったということだけではない。セレシアの彼に対する態度が大幅に変わってしまったことも大いに含まれていて、むしろヴァラルとしてはこちらの方が大いに戸惑う原因となった。

今までは誇り高き騎士のような振る舞いを見せていた彼女だったのだが、あの日以降、ヴァラルにやたらと甘えるようになってきたのだ。

どこへ行くにしても雛鳥が親鳥についていくようにヴァラルの後ろをついて回り、拳句の果てにはこのようにヴァラルの部屋に夜中に訪ねるようになって、日増しにその行動がエスカレートしていったのである。

今回のクレース亭の飲み会に関しても彼女には何も言っていなかったはずなのだが、あつという間に見つけられてしまったのだった。

「だったらヴァル……お願いがあるんだ……」

「聞くだけ聞いてやる。何だ？」

何かの決断をしたのか、ヴァラルに真剣に何かを頼み込もうとするセレシア。ただ、彼にはこの後に続く言葉が容易に想像できた。

「私も一緒に連れて行ってくれないか？」

「……」

「ほ、ほら。ヴァルはまだ旅に慣れていないだろう？ 私は一応他の国々を回ってきたことがある。だから道案内として役に立つことが出来る」

確かに、その提案は魅力的だ。地図だけでは分からないことがそれぞれ
の街にたくさんあるだろう。だが、ヴァラルは相変わらず腕を
頬について黙ったままで、漆黒の二つの瞳がセレスシアの全てを見透
かすかのようにじっと見ていた。

「それに、ヴァルの剣の技には正直驚いた。だから……気が向いた
ときでいいんだ。私にもその技を教えて欲しい」

「……」

「勿論、そのときはまた別に私に出来る限りのことはするつもりだ。
お金ならある、あまり使つてこなかったからな。料理だつて出来る、
こつ見えても多少の自信がある」

これにはヴァラルも心当たりがあつた。セレスシアが金を使っている
ところを見たのはクレース亭や市場等、鍛冶屋など必要最低限の所
でしか見たことが無かつたし、彼女の料理も中々の腕前だつた。

彼の気を引こうと自分の出来ることを精一杯アピールするセレスシア。
だが、ヴァラルにとってはそれがあまりに必死すぎて、とても痛々
しいものだつた。

「それに……ヴァルが望むのなら……」

セレスシアはがたりと椅子から立ち上がり、テーブルを挟んで座つて
いるヴァラルの目の前に立つ。その瞳は潤み、頬は赤く上気してお
り、以前の凜々しい彼女からは想像できないほど女の色香を振りま
いていた。鍛えられながらも細くくびれた腰、すらりとモデルのよ
うに伸びた手足、胸も平均以上のサイズであり、服の上からでもそ

れははつきりと強調されており、彼女の放つ甘い香りと共に彼を誘惑するかのようだ。

そしてテーブルに片手をつき、つやつやとした茶色の髪をかきあげ、ヴァラルの口元にその唇を近づけようとしたとき、

「やめろ」

ヴァラルは彼女に対してきっぱりと拒絶の意を示し、

セレシアとヴァラルの激しい夜が今ここに始まったのであった……

決意と別れ

「な……いまなんて……」

「そんなことをして俺の気を引こうとしても無駄だと言ったんだ。それにお前、震えているぞ」

セレシアを見ると、確かに小刻みに体が震えていた。ああいったことに慣れていないのか、それとも切羽詰ったからなのか、とにかくヴァラルにはお見通しであった。

「それとだな……」

ヴァラルはつきりと口にする。

「今のお前じゃあ連れて行くわけにはいかないな」

「そんな……!!どうしてだ……!!」

彼女はわけがわからないと取り乱した。決して無茶な提案はしていない、むしろヴァラルにとってはいい事尽くめのはずだったのだから。それに、あのまま雰囲気の流れられていたならどうなっていたかは分からないが、彼と一緒にいられるのならそれでも良かった。

「セレシア、お前に一つ言っておくことがある」

「な、なんだ……」

「俺を、誰かの代わりにするのはやめる」

ヴアラルの容赦の無い氷のような眼差しがセレシアを射抜く。

「っ！！！！！」

すると彼の言うことが真実だったと証明するかように彼女の顔は青ざめ、ひどく動揺していた。

「今まで黙っていたが、ここ数日のお前の態度、かなりおかしかったぞ。正直別人じゃないかと疑ったくらいだ……何がお前をそこまで駆り立てた？」

「ふふっ……そうか……そこまで私は変だったのか……」

セレシアはベッドのほうに力なく座り込み、観念したかのように語りだした。自分がドレク・レーヴィスという偉大な父を持っていること。幼い頃のドレクはとても優しい父親だったこと。けれど、母親が魔物に殺されてからは人が変わったかのように彼女を鍛えだしたこと。

「最初は、我慢できた。私も父上のつらさがよく分かっていたからな……」

ドレクの訓練は想像を絶するものだったらしい。帝国の訓練場での出来事が生易しいと感じるくらい、それはもうひどいものだったようだ。そのため、辛さに耐えかねて父親の言いつけを守らなかつたこともあった。けれどそれをドレクは決して許さず、次の日にはさらに過酷な試練を課すなど、彼女に逃げ場は無かった。

しかもそれを訴えられる身近な友達や大人も、レーヴィスという名を明かすことで怖気づいてしまい、怪物を見るかのようにだれも彼女に近づいてこなかったようだ。

だが、それも仕方なかったのかもしれない。ドレクの指導を受けているうちにセレシアは僅か十歳でバルヘリオン帝国の騎士を相手取り、打ち勝ってしまうほどの実力を身につけてしまったのだから。

そんなこともあり、彼女の幼少時代は非常に寂しいものだったという。

「けれどな……そんな中でも父上に感謝するときもあった。力を持ったおかげで他の連中から馬鹿にされることも無かったし、本当に偶にだが褒めてくれるときもあった。それに私は父上の強さに憧れていた所があったからな……まあ、それもすっかり昔の話で、今の今まで忘れていたんだがな……」

そして、セレシアは父を毛嫌いしながらもその強さを追い求め、そのまま彼の言いなりになってしまい、二律背反の歪んだ精神構造を形成してしまった。

そしてある日のこと、彼女はドレクから言い渡された。

冒険者になれ

その言葉に嫌悪しながらも、彼の力に惹かれていた彼女は言うがままに従った。そして、その頃にはもう同期の冒険者の中では敵無しであり、異例の早さでBクラスに上り詰めたのであった。

「そんなところにヴァル、お前が現れた……」

EクラスながらもBクラスという格上のセレシアに対し、あるときは優しく、またあるときは気さくに接し、そしてオーガの集団を圧倒し、魔法を使えるという衝撃的な発言。

彼女の全てが、崩れ落ちたときだった。

「あのときのヴァルは、幼い頃の優しかった父上が戻ってきたかのようにだった……」

そして、彼女は最近ドレクが旅立つ際につきつけた条件を思い出した。

Aクラスに昇格したとき、私との縁を切る覚悟があるのなら好きにしても良い

今まではレーヴィスという名の鎖に囚われていた彼女は気にもしていなかったことだが、ヴァラルと出会うことでそれに亀裂が生じ、彼が旅立つということを知ってしまったせいでその鎖は壊れ、一緒に連れて行ってもらえるよう懇願したのだ。

「もう嫌なんだ！あんなつらいことはもうッ！」

子供が泣きじゃくるようにセレシアは喚いた。夜中だということも忘れてそれはもう喚きに喚いた。

そして、父親への罵詈雑言が一通り済んで落ち着いた頃に、

「私はお前を知ってしまった……だからもう父上の所にはもう戻れ

ない……だけど、ヴァル、お前とならきつと……」

そうして再び彼女が近づいていき、彼の頬を愛おしく撫でさすったとき、

「……言いたいことはそれだけか？」

ヴァラルの冷徹な声が彼女の心を突き刺した。

「駄々をこねるのもいい加減にしろよ、セレシア・レーヴィス。結局お前は俺を利用して都合の良い逃げ道を探していただけだ」

「なっ!?!」

彼女は驚いた顔で見やる。先程もそうだったが、こんなに冷たい態度をとるのは初めてだった。あのオーガとの戦いするときでさえいつも通りであつたというのにこの変わりよう、セレシアは戸惑いを覚えていた。

「いいか？お前は中途半端なんだよ。修行がつかつたのなら冒険者になつた時点で辞めればよかった。強さを身につけたいというのなら、四の五の言わずドレクについていけば良かった。それなのに
お前は父親を口では嫌いと言っておきながらも、そのまま言うことを聞き続けた。それで、俺がドレクと同じ力を持っているからって
教えを請いたいだって？甘えたことをぬかすな！セレシア・レーヴィス！」

「ッッ!!そんな簡単に決められればこんなに悩んだりしないッッ

「！！ヴァラルはどれだけ私がつらい思いをしてきたのか分かっていないから言えるんだ、そんなこと！！」

ヴァラルの迫力に気圧されながらもすかさず反論するセレシア。どちらも一歩も譲りはしない、そんな雰囲気漂っていた。

「当たり前だ。お前と出会ったのはつい最近のことだからな。しかもそんな悩み、一度も俺に相談してこなかったじゃないか」

「それはっ！」

「大方、レーヴィスの名を出すことで昔の友人やグレインたちのように一歩引くんじやないかと恐れていたんじゃないのか？」

「つく……」

「やっぱりな。生憎だが、それこそお前の思い違いだ。俺がどういう性格なのかまだ理解していなかったようだ。それに……」

「な、なんだ……」

「どうして三人にこのことを相談してやらなかった？俺が見た限りじゃあいつら、お前の悩みに気づいてたと思うぞ」

そうだ、グレインたちは最後の最後までセレシアを心配していた。結局、彼らは相談されなかったのか、別れ際にヴァラルに対して自分の力不足を嘆きながら去っていったのだ。正直ここまで聞く限りでは、彼らはセレシアとの壁はとっくの昔に無かったのではないかと思うヴァラルだった。

「……………」

セレシアは怒り心頭といった面持ちで睨みつける。そして、ヴァラルは続けて彼女に追い討ちをかけた。

「大体、俺はそんな弱い奴を連れて歩く趣味は無いんでね。どうせ教えたところですぐに投げ出すに決まっっているさ」

「そんなことはっ!!！」

「ないと言い切れるか？こつやって泣き言を言っているのか？説得力が無さすぎるぞ、お前」

「くっ!!……………」

この光景を見ているものがいたら心配のあまり止めようとする者が出ただろう。けれど、ヴァラルは言いたい放題、彼女への思いをぶちまけていた。

「オーガのときの気迫はどこにいった？あれが本来の姿だろう。それなのに何だ、この体たらくは。正直失望したぞ」

「……………それ以上……………」

「それ以上、何だ？」

「……………私を愚弄するなツツツ!!!!!!」

セレシアは怒りのあまりレイピアを抜いた。直前で止めるつもりではあったものの、それでも本気で彼に斬りかかった。だが、暗闇に

紛れた不可視の一撃を

「っ！……！！！」

ピタリと止められた。

二本の指で何かを挟み込むかのように。

「結局、そんな甘ったれた奴には無理なんだよ。俺に本気で教わりたいと思うのなら、まず父親の元でもう一回鍛えなおしてもらっただな。話はそれからだ」

「……っ、うわああああ……」

ヴァラルが手を離すとレイピアが音を立てて床に落ち、彼女は最後まで聞くことが出来なかった。そして、ヴァラルとの実力の違い、自分の認識の甘さによく気がついた彼女はついに涙をこぼしてしまう。今まで、こんなにも泣いたことがないという風に。

「……」

そして、ヴァラルは泣き崩れるセレシアを黙ってみていたが、先程の突き放すような冷たいものではなく、彼女の成長を期待するような眼差しだった。

(しかし、どうしてこうなるのか……)

隣ではピンクの可愛らしい寝巻きを着て、すやすやと眠るセレシア

がいる。

こんなことになったのも、実は彼女のわがままのせいだった。

「うっ……」

「ようやく泣き止んだか。この駄々っ子め」

少し時間はさかのぼり、セレシアはようやく涙を流し終えたのかヴァラルのことを見上げ、そしてそんな彼女をあやすかのようにヴァラルは彼女の顔を拭く。

いつもだったら抵抗した彼女も、このときはされるがままだった。

「それで、結論は出たのか？」

「……ああ」

「ほう、それは是非聞かせてもらいたいね」

ここまで騒ぎ立てたのだ。これくらい聞いても罰は当たらないだろう。

「……それは後で聞かせる……その代わりといっっては何だが……」

「何だ？」

「……今日だけは一緒に寝てくれないか？」

「……は？」

「あーいや勿論そっちの意味じゃないぞ！ただ、私はその……」

「分かっている、そんな度胸が無いことくらい……」

今まで彼女はずっと気を張って生きてきたのだ、要はヴァラルに甘えたいのだろう。

(本当にしたたかな奴だな……)

上目遣いの彼女を見て、そう思わずにいられなかった。

「だ、駄目か？嫌ならいいんだぞ……」

「……」

がっくりと落ち込むセラシアに対し、流石に罪悪感が沸いたのか渋々といった感じで、

「……支度してから来い」

了解したのだった。

(……くっ、寝返りを打とうにも……)

そして現在に戻り、左腕をがっちりとホールドされ、天井を見上げながら彼女の凶太さに途方に暮れていたヴァラルは、

「んんう……」

安らかに寝息を立てるセレシアを見て。何かを諦めたかのように眠りについた。

ここはセクリアの街から少し離れた二つの分かれ道。片方は王都インペルンに続く道で、もう一方は北に進むことでバルヘリオン帝国に続く道だ。

時刻は丁度太陽が真上に差し掛かる時間帯。風がさわやかに吹いているこの場所はセレシアとヴァラルしかおらず、世界に二人だけが取り残されているようだ。

「……ところで朝のことなんだが、どうしてそう決断した？辛い修行になるんじゃないのか？」

「ああ、そのことか……」

あの騒動の後、二人は共に朝を迎え、セレシアは寝ぼけ眼の彼に「父上の元に戻る」と、何か吹切れたような顔でそう告げた。以降、二人はここまで喋らずにいたのだが、ヴァラルはその胸のうちを聞くため話を切り出していた。

「私には今まで目標が無かった。ただ漠然と父上の指示に従っただけで、何一つやりたいことが見つけれなかった。けれど、私

には夢が出来た」

「……ほお、それは一体なんだ？」

口調が真剣になったヴァラル。彼もまたセレシアのただならぬ雰囲気の影響されたのだろう、それは威厳に満ちた声色であった。

「私は改めて世界を見たい。それもヴァルと一緒に」

「……ふっ。だが、そのためには俺を認めさせないといけないぞ？
それも意志ではなく力で」

「分かっている。私は父上を超えるつもりで修行に励むつもりだ。
もう昨日のようなことはこれっきりにする」

セレシアはあの晩、ヴァラルが父のドレクを超える力を持っていることに気がついた。そのため、ヴァラルについて行くためには最低限父親と同じ場所に立たなければならぬと悟り、再び過酷な修行に身を投じる決意をしたのだ。

「シア。改めて言うが、お前にはグレインやエーニス、ソイルがいる。あいつらはお前にとって頼りになる仲間だ、それを忘れるなよ……まあ、それでも辛いのなら俺に言え。相談くらいは乗ってやる」

一人ではない、彼は確認するようにセレシアに言った。今の彼女には心配無用そうだが、それでもおせっかいをかける。

「ふふつ、分かった。だが、ヴァルは各地を回るんだろっ？見つけるのが相当苦労しそうだ」

その後、緑の広がる草原でしばらく二人はじっと見つめあっていた。まるでどちらが先にこの話を切り出すか迷うかのようじ。

そして、ついにヴァラルは切り出した。

「……いずれ帝国にも顔を出すつもりだ。それまで元気にしているんだな」

「旅先でグレインたちにあつたら伝えておいてくれ。心配をかけてすまないと」

「分かった。……お別れだ、シア。修行、頑張れよ」

「ああ、そつちも元気だな……」

それを聞いた彼は背を向けて歩き出し、

「……ヴァル！」

「ん？」

真後ろから聞こえたその言葉に振り向くと、

セレシアが背伸びをし、逃げられないよう彼の首に抱きついて、

二つの影が重なりあった。

「……あのお返しだ!」

長いような短い時間がすぎた後、セレシアはにこやかに笑いながら駆けていく。

その笑顔はヴァラルが見た中で、いや、彼女が今まで見せてきた中でも最高のものだった。

「……最後の最後でやってくれたな」

湿った唇を撫でながら不敵に笑い、騎士のような凛とした彼女が見えなくなったのを確認して、彼もまた歩き出していった。

こうして、ヴァラルとセレシアとの出会いは終わりを迎えた。

だが、これが今生の別れではないということを知っている。そのため、悲しい気持ちではなく、晴れやかな気分で別々の道を歩みだしていったのだった。

再会のときを互いに信じて

ある日のアルカディアにて

「はあ……」

ここはアルカディアのユグドラシル区画にあるアイリスの自宅兼仕事場。ヴァラルのローレン城やガルムの聖地、セランの屋敷と比べるとかなり見劣りするが、それでも彼女は小さいながらも温かみのあるこの家が気に入っていた。

けれど、そのような木造の小屋の中でアイリスは大きくため息をつく。

ヴァラルがこの国を旅立ってから一ヶ月以上が経過した。その間アルカディアは大きなトラブルに見舞われること無く常に平和であったが、彼女の心は徐々に沈んでいった。

彼が眠った千年間は待つことが出来た。仕方の無い事情だったし、ヴァラルに褒めてもらうことを原動力に今まで頑張ってきたため、何とか持ちこたえることができた。

（けれど、あんまりじゃないですか……）

それなのに目覚めた後、彼はあつという間に旅立ってしまった。せめて一年、いや、百年程ここに留まってから出て行ってもよかったのではないかとアイリスは常々思っているのだった。

割と真剣に。

しかも、当の本人であるヴァラルからの連絡は一切ないことも彼女

が落ち込む原因でもあった。ここを出て行く際、ヴァラルは緊急の事態がない限り互いに連絡を取るのはよそうと取り決めていた。というか、それを許可してしまっただら仕事を放り出してまで長々と喋り続けるアイリスやイリスが目に見えれば事前には警戒線を張っていたのであった。

そんなことが積み重なり、アイリスはストレスを抱え込むようになっていき、悶々とする日々が続いていたのだ。

（でも、主様の国を守るのが私の務め。今日も頑張らないと！）

そうして気持ちを改め、彼女は仕事机に向かおうとすると、

「アイリス、いるか？」

フィリスの声が聞こえてきた。

「今日もありがとう、フィリス」

「何、こうして人の姿をとるのも中々に楽しくてな。体を慣らすためにも、こうして出向いたまでだ」

アイリスがそれぞれの籠いっぱい詰まった新鮮な魚介類や野菜、果物を運んできてくれた老剣士姿のフィリスに感謝する。

ここ最近ヴァラルがいなくなると同時に、フィリスは毎日のようにアイリスの元に足を運んでいた。あまり他人とのかかわりを持たず、静かに暮らすことを望んでいた彼にとっては驚くべき変化だった。

表面上、アイリスは何でも無さそうにしていたのだが、深い付き合いであるフィリスには気落ちしている彼女の気持ちはお見通しであり、気を紛らわすため話し相手になったり、仕事を手伝ったりと、様々なところで手助けをしていたのである。

「そういうことしておきます。それよりもお腹すいているでしょう？何か作りますね」

「おお、それは有難い。今日は一体何が出てくるのか楽しみだ」

彼の気遣いにアイリスは感謝しつつてきぱきと支度をはじめ、フィリスは朗らかに笑ってリビングの椅子に座るのだった。

「アイリス」

その後、彼女の手料理を堪能したフィリスはお茶をすすりながら話を切り出した。

「どうしたんですか？そんなに改まって」

「ヴァラルのことだが、やはり気になっっているではないか？我からすると段々と落ち込んでるように見えるのだが……」

今日ここへ来たのは彼女の心の容態を確かめるためであったため、心苦しくもあったが尋ねずにいられなかった彼だった。

「……確かに心配ではありません。正直、今からでも追いかけたいくらいです。でも留守を任された以上、ここを離れるわけにはいきませんからね。これからも頑張りますよ！」

「そうか……すまないな、余計なことを聞いてしまった」

「気にしないでください。私はフィリスだけでなく、ユグドラシルを預かる身ですからね。これくらいは当然です！」

むんつ、と細い腕でと力こぶをつくるようにして元気いっぱいに振舞うアイリス。だが、彼にはそれが空元気のように見えて仕方がなかった。

(そろそろ、まずいかもしれぬ……)

フィリスは彼女の姿をみて静かにそう思った。

「……ということで、フィリスからこのような相談が持ちかけられました。なので、彼女のことを含め、これからのアルカディアの進むべき道について検討する会議を開きたいと思います」

ビフレストにあるセランの屋敷にて彼はそう皆に告げる。

ここにはガラムとマルサス、イリスとセラン、そして当事者のフィリスが集い、アイリスのことを含め、これからのアルカディアの運営について話し合われるのだった。

「質問。具体的にどんなことを話し合うんだ？」

ガルムが真つ先に手を上げる。こういう素直な態度の彼は、このメンバーの中では貴重な人材だ。

「そうですね……とりあえずは今の体制を見直すことからでしょうか」

とりあえずアルカディアの主な問題点はアイリス、ガルム、セラんにそれぞれ権力が集中しすぎていることだ。そのため彼らは仕事に忙殺される日々が続き、中々休みが取れない。だがここが聖地と同じような環境なため、疲れるといふ概念がほとんどなかった。それが彼らの優秀さと相まってとんでもないことになっていたのだった。

「そうだね、私から見てもこれは異常だと思う。一つの国であるはずなのに、それがたったの三人で維持されているだなんて考えられない」

アイリスも口に出した。彼女の場合、ヴァラルが旅立った事を契機にして、身近な者に対し猫をかぶるのはやめ、言いたいことをずけずけと言うようになったのだ。

「確かに……私達は今の状況に甘んじていたのかもしれない。セラン殿、ガルム殿申し訳ない……」

マルサスが気の毒そうに謝る。彼のこういふところは相変わらずだった。

「別に大したことはしてねえって。なあ、セラン」

「その通りです。ですがガラム、あなたは私達に仕事を回しすぎです。なのであなたの場合、本当に大したことはしていないのです。まずそれを自覚してください」

「うへえ……悪かったよ。これからはもう少し頑張ってみる……」

とは言うものの、彼がアルカディアのパトロールを行うことで、三つの区画の住人から分け隔てなく慕われていると言うのも事実だった。そのため、セランは冗談半分のつもりで彼に発破をかけているつもりだったのだが、思わぬところで功を奏したみたいだ。

「……だが、具体的な方法は何かあるのか？」

「それなら安心して。私に考えがある」

イリスが聖獣リヴァイアサンのフィリスに向かって言い放つ。やけに自信満々だ。

すると、彼女は事前に準備していたのか、分厚い紙の資料を各自に渡し、皆の前でプランを発表した。

「要は三人の負担を減らせばいいんでしょ？なら簡単。ユグドラシル、ウトガルド、ビフレストに住まう皆にもっと協力を仰げば良いじゃない。私達は大変です、だから皆、手伝ってくださいってね。で、最終的に判断するのは三人。それで解決」

「……それはそうだが、事はそう簡単にはうまくいかないぞ？何せいきなりのことだ、戸惑う住人も多いと思うぞ？」

マルサスが思わず突っ込みを入れる。

現在のところアイリス、ガラム、セランの三人をサポートしているのはそれぞれの種族の王や長、それに近い者たちだが、それでもアルカディア全体からするとごく僅かな人数だ。

そのため、仕事をさらに細分化して協力すれば負担は減るだろうし、最終的な判断を三人が下すのならば特に異論はないはず。だが、いきなりわけのわからない仕事を押し付けられる多くの者たちはたまったものではないだろう、多くの混乱が起こることは必至だった。

「何言っているの？マルサス、私としては今までが考えられない。時間がいくらでもあるからって皆怠けすぎ。そろそろいい加減目を覚ますべきだと思う」

古龍の王である彼をまったく気にせず、吸血鬼の真祖であるイリスは真っ向から立ち向かう。

アルカディア三区画のそれぞれの住人は基本的に何かしらの仕事を持っていたのだが、あくまでもそれらは趣味の延長線にあるものであり、彼らの大半がその日暮らしの生活をしてきた。そのため、両親のヘスターやエイミア、ドワーフのエドたちのように向上心をもって何かに取り組む者というのはあまり見受けられなかった。

そのため、イリスはそんな怠け者の彼らに腹が立っていたのだ。

大災厄は終わった、いつまでも過去を引きずっている場合ではない。何もしないで生活できるからといってそこで歩みを止めたら終わりだ。愛する我らの偉大なる王、ヴァラルの目指すところはそんなところではない。もっと遥かな高みを私達は目指すべきだと告げるよ

うに彼女は言った。

「そ、そうか……」

イリスの剣幕に押されたのか、騎士の格好をしていたマルサスは結局黙り込んでしまった。

「分かったのなら良い」

それが契機となったのか、その後の彼女は水を得た魚のように熱弁を振るった。起こりうると思われる様々な問題を挙げ、それらの対処法を一つ一つ丁寧に解説し、このプランは実現可能だということここにいる皆に思いこませたのだった。

その姿は、まさに才女と呼ぶにふさわしいものであった。

「ということ、何か意見や質問はある？無いならこのままアイリスにも伝えに行くつもりだけど、大丈夫？」

「「「「……」」」」

異論は誰からも上がらなかった。

「凄かったな……」

「ああ、全くだ」

イリスがこの場から出て行った後、マルサスとフィリスが互いに先程の出来事を振り返る。黒龍と聖獣である二人も、彼女の並々ならぬ迫力に押されてただ頷くしかなかった。

しかし、貰った資料を見てみると、事細かに誰でもわかりやすく書かれており、いかに彼女が熱心に取り組んでいることが伺えたのであった。

「……おい、セラン。実はこれ、お前が考えたものじゃないのか？、底意地の悪さがにじみ出ているような箇所があるぞ？」

「どれどれ……ああ、違いますよガルム。言っておきますけど、この資料に関しては彼女一人で書いたものです。私はほんの僅かだけ彼女にアドバイスをしただけです」

分厚い紙の書類を眺めながらセランはガルムの指摘した所に答える。

実のところ、ヴァラルから指摘されたことは長年彼の頭を悩ませてきた事柄だ。本当は対策をとりたいのは山々だったのだが、普段の仕事に忙殺されていたため、考える時間が取れなかったのだ。けれどイリスはそんな彼に代わって自分なりのアイディアを盛り込み、セランにちよくちよく見てもらえるよう頼んできたのだった。

「へえ、そりゃ中々やるな……」

ガルムは資料をめくりながらそう語る。

大富豪ヘスターの娘であり、そしてメルディナ魔法学院きつての才媛、そしてセランご自慢の秘蔵っ子であるということは承知だった

が、それにしてもこれには驚いた。内容はただ負担を押し付けるものではなく、三区画の交流をより一層深めるための様々な提案が含まれており、のどかでありつつも、どこか停滞していたアルカディアの雰囲気にも風穴を開けるようなものであった。

そして、彼はそんな彼女の刺激的な提案に心が躍っていたのだった。

「でしょう？私もなかなか楽しませてもらいましたよ。仕事が減るのも幸いですが、これでさらにこの国は発展しますよ」

「だが、暇が出来たからってどうするつもりなんだ？セランに興味なんてあったか？」

「……やれやれ。何を言っているのやら……本当にあなたは肝心なところが抜けていますね……」

「？」

仕事を押し付けたりするものの、やることはそつなくこなしているガルムだったが、肝心なところに気づかないのが彼の欠点でもあった。

「主のところに顔を出すに決まっていますでしょう？私達をほっぽりだして一人だけ旅するだなんてするんじゃないですか……」

セランが悪魔のように笑い、

「……やっぱりお前、性格かなり悪くなったよな……」

ガラムはそんな彼に呆れていた。

「ふう、何とかうまくいった……」

あれほど大物メンバーが集まる中で、あそこまで啖呵をきって語ったのはイリスにとって初めての経験だった。

その一方でイリスは先程の説明で十分な手ごたえを感じていたのかほっと一安心し、ユグドラシルにある彼女の小屋に向かいながらそう思っていたのだった。

実は彼女もまた三人と同じように多忙な毎日を送っていた。だが、ヴァラルがここからいなくなったことでハイエルフのアイリスと同じような思いが沸きあがっており、アルカディアの改革と共に自らの時間を確保するために動き出していたのである。

（それに、私はアイリスみたいにヴァルと旅をしてきたわけじゃない。あのときの私は何一つ出来ない弱虫だった……）

アイリスとイリス、名前の似通った二人だが、本音を言えばイリス

はアイリスに対して劣等感を抱いている。

彼女の笑顔は誰もがひきつけられ、そして誰に対しても優しい純粋な心の持ち主だ。対して自分は親しいものにしか本当の素顔を見せることが出来ない臆病者だと卑下していた。

過去にヴァラルに救われたもの同士とはいえ、アイリスがその当時から彼についていった事もアイリスに影響を与え、彼女に対して小さな嫉妬の念を覚えさせていたのであった。

……だがそんなアイリスのネガティブな考えとは裏腹に、アルカディアでの彼女の人気はかなりのものだ。

母親であるエイミアの美しさを引き継いだ彼女は、一つの個として確立しているはずのアルカディアの住人たちから羨望の的だった。お見合いや婚約の話は両親の元に数多く寄せられ、アイリス自身にもそんな話が大量に舞い込んできた。けれど、二人ともヴァラルにしか興味がないようで、最初は穏便に、それでもしつこく付きまとってくるようなら容赦なく制裁を加え、次々と断り続けていったのである。

そんなことをしているうちに、この国では太陽のアイリス、月のアイリスという名誉なのか不名誉なのか良くわからないあだ名がつけられ、高嶺の花として彼らを魅了していた。

ゆえに、そのようなアルカディアの誇る二大美女を前にヴァラルは旅立っていたのだから、なかなか豪胆な性格と言えるだろう。

（だから、私は私なりのやり方で彼に認められてみせる。だから待

つてて、必ず会いに行くから)

そうして、プラチナブロンドの髪を夜の闇に輝かせ、真紅の瞳と、それにあわせるかのような鮮やかな赤いドレスを着て、

「アイリス、いる?。」

彼女の住んでいる小屋の扉を叩く。

そして同じ男を愛しつつ、親友であるアイリスを心配するイリスはどこまでもたくましい女であり、

ヴァラルが旅立ったことで、アルカディア内でも徐々に変化が現れていったのであった……

王都インペルン

晴れやかな青空の下、インペルンに向けてすたすたと足を運ぶヴァラル。

セレシアと別れてから二日目、彼はなだらかに続く草原の道をただひたすらに歩いており、その旅は順調に進んでいた。

と思われたが、ヴァラルの心中では様々な思いで満ちていたのだった。

(しかし、あの街では色々なことがあったな……)

改めて彼はセクリアの街で起こった様々な出来事を振り返る。

最初の頃は冒険者という職業をあくまでも仮のものとして位置づけていた。しかも実際に仕事を請けてみると、どれもこれも彼にとつて物足りないものであったため、これでいいのかと何度も依頼内容を確かめたほどだった。

(けれど、よくよく考えてみれば依頼に手ごたえのあるものなんて求めるもんじゃないな。やはり平和が一番だ)

そして、あの街ではセレシアたちのような立派な冒険者と出会うことができた。あのような冒険者達がヴァラルの前に現れるという保証はどこにも無いが、それでも暇があれば冒険者としてちよくちよく活動するのも良いなと彼は思っていたのであった。

(……まあ多少面倒ごとになったが、それでも問題は無いだろう……)

…今のところ……)

そして、例の出来事でこれからの旅に若干の懸念を覚えつつ、トレマルク王都への期待を膨らませていくヴアラルだった。

「……何だ？」

ヴアラルが再びインペルンに向けて歩き出そうとしたそのとき、後方から馬のひづめの音が聞こえてきた。

(ん？やけに早いな)

今まで何人かの旅人や行商人と会ったが、ここから響いてくる音はどこか急いでいるようだった。

そしてヴアラルの視界に段々と貴族が乗るような大型の馬車が現れ、そのまま通り過ぎると思ったなら急停止し、彼の横にぴたりと寄せてきた。

「やあヴアラル。奇遇だね、元気そうで何よりだ」

「っってお前か！」

馬車の扉が開かれ、お付の騎士とともに現れたのはセクリアの街で(両方の意味において)散々世話になったあのデパンであり、ヴアラルは思わず呻く。全然奇遇でもなんでもなくデパンは彼を急いで追いかけてきたようで、馬達の息は荒れ、御者もどこか疲れた顔を

している。

「びっくりしたよ。急に街からいなくなるだなんて。別れの挨拶くらいしても良かったじゃないか」

「俺がいつ出ようが関係ないことだろう」

しかも彼女と街を出たときは早朝のことだ。というのも、街の人々にいちいち騒がれなくなかったし、デパンの屋敷に行くのも億劫だったからだ。

そして、デパンがやたらなれなれしくしてくるのを見て、ヴァラルはまた何か厄介なことに巻き込まれるのではないかと肌で感じ取ったのだ。

「つれないねえ。君と私との仲だろう？もう少し優しくしてもいいんじゃないのかな？ほら、色々と世話を焼いたんだからさ」

「おい、どの口で言ってるんだ」

人がのんびり旅を続けようと思っていたのに、それが今ではスクラス。当初の予定を大幅に変更せざるを得なくなったヴァラルは、八つ当たりだと分かっているながら、もやもやとした気持ちを彼に対して抱えていたのであった。

「そんなに冷たいことを言わなくてもいいじゃないか。私は悲しいよ……うっうっうっ……」

「前フリはいい……それで？ここへ来た理由は何だ？」

落ち込んでいるふりをする彼を無視して話を進めるヴァラル。デパンの話に付き合っていたらあっという間に日が暮れてしまう、なので話を切り上げて早くこの場を立ち去りたかった。

「ああ、そうそう。ついすっかりしていたよ。はいこれ、君宛のものだ」

「手紙？誰からだ？」

ヴァラルはけろりと立ち直ったデパンから差し出された品質の良い一通の手紙に首をかしげる。

この世界に来てから彼の知り合いと呼べる者たちは数えるほどしかない。てつきりログからだと勘ぐったが、封蝋をみるとどこかで見たことがあるような紋章が描かれていた。

「トレマルク王家の紋章だよ、それ」

「……俺はそんなところに知り合いはいないぞ？」

狼をモチーフにした紋章はギルドの館で見かけたのを思い出し、デパンに尋ね返す。

「分かっている。私にも似たようなものが届いていてね、マリウス王子が君に会いたいようだ」

デパンは同じような封を切られた手紙を服の中から取り出し、ヴァラルに見せた。

久しぶりに旧交を温めないか？噂の冒険者についても色々聞きたいことがある。まだセクリアの街にいるんだらう？出来ることなら彼も連れてきて欲しい。

長々と畏まった文を要約するとこのように書かれていた。

「この道を歩いていることはインペルンに訪れるつもりなんだろう？ついででいいから立ち寄って貰えないか？」

「……機会があればな」

思っているよりも早く情報が伝わっていることに辟易しつつヴァラルはこう答える。

(しょうがない……こうなったらとことん利用させてもらうか……)

彼はSクラスが知れ渡ることを予期し、人付き合いを多少変えようと思っていた。勿論、そこまで大きく様変わりするものではない。ただ一般の市民達だけでなく、この世界においての貴族達や王族の考えを知っておく必要性を感じたため、この機に乗じて利用できるものはとことん利用しようと結論付けたのであった。

まあ、そうでもしなければSクラスなんかやってられないというのが本音であった。

「有難い。それが聞けただけでも十分だ。すまないねえ、本当に。ところでどうする？よければ送っていくけど」

体を馬車の方へ向けるデパン。席には多少の余裕があるようで、ヴァラルもインペルンへ連れて行ってくれるようだ。

「遠慮しておく。俺はゆっくり旅を楽しみたいんだ」

「そう？ならいいけど。それと途中で魔物に襲われないよう気をつけるんだよ、それじゃあまた」

「……これっぽっちも心配してないくせしてよく言う……ああ、そうだ。ついでにグレインやソイルに会っておくか」

勢いよく走り出し、一足先にインペルンへと向かっていった馬車を眺めつつ、ヴァラルはインペルンでの予定を考えていたのだった。

そしてデパンと出会ってから四日が経過、彼はトレマルクの王都に到着する。

城塞都市インペルン。

王家の者たちが住まうウオストーン城や、冒険者ギルドの本部が立ち並ぶここはトレマルクの中心地だ。デパン伯爵の統治するセクリアの街も中々のものだが、それでもインペルンとの経済規模は五倍ほど違うため、この場所がいかに巨大な都市であることが窺い知れるのだった。

彼を置いてそのままどこかへ行ってしまったのだった。

「……………早速かよ」

冒険者となったことで、ヴァラルはすんなりとインペルンへ入ることが出来るはずが、

そうはいかなかった。

(……………遅い)

あれから三十分、ヴァラルは門の隣にある番兵達の詰め所でひたすら待たされていた。その間特段何かされたわけでもないが、ちらちらと時折彼の様子を伺う番兵達の視線にむかむかしていた。

「それにしても、たかだかカード一枚に何びっくりしているんだか。俺には理解できないぞ」

ヴァラルはテーブルに足を組みながら自分のギルドカードを頭上にかざして呟く。

冒険者達の持つこのカードはクラスごとに色分けされており、Eクラスが紫、Dクラスが青、Cクラスが赤、Bクラスが黄、Aクラスが白となっており、一目見ただけで冒険者の力量が分かるよう工夫がなされている。(それもあくまでも目安ではあるが)

そして、モーロンから以前手渡されたカードの色はヴァラルの髪の色

色と同じ黒であり、この世界でただ一枚だけの特注品だ。そのため、番兵が見慣れなかったのも無理は無かった。

因みにこのブラックカード、ただのお飾りというわけではない。

四方国にある全てのギルド関連施設の使用料は全て無料^{タダ}。しかもそれらを利用する場合は常に最高のサービスが約束され、彼らの運営する店での買い物も脅威の五割引。そして何より無利子、無担保、そして極めつけが限度額無し^のの借入れが可能というとんでもない仕様である。

正直そこまでやっても良いのかと疑う内容ばかりのものだが、モーション曰く特に問題ないとの事。それほどまでに冒険者ギルドの威光というのは各国に影響を及ぼすことの出来る組織のようだ。

そして、誰もが喉から手が出るような化物じみたカードの説明を受けていたヴァラルもまた、

「あつそ。まあくれるというなら遠慮なく」

既に金銭感覚が麻痺していたのか、あまり興味を示していなかったのだった。

そんなことをぼーっとヴァラルは回想していると、デパン伯爵がいつの間にか現れていた。

「やあヴァラル。元気そうぞ何よりだ。魔物に襲われなくてほつと

したよ」

形だけは心配してそんなそぶりを見せる伯爵。けれど心のうちでは何を考えているかさっぱり分からなかった。

「……何でお前さんがこんなところにいるんだ？俺はついであいつははずだが？」

先日といっていることがまるで違うデパンにヴァラルは何故この場にいるのかを問いただす。

「いやあ、悪いね。マリウスがすぐにつれて来いって言うからさ。仕方無しに僕が迎えに来たというわけさ」

「……マリウスだか王子だか知らないが、そんなに俺に会いたいのならまずそっちから顔を見せるべきなんじゃないか？」

彼個人としては王子と会うことに対して特に異論はなかった。

何せこの国のトップに近い男だ。彼がどんなことを思い、人々を導いていくのか興味があったのだ。

ただ、上から目線の連中はあまり好かない。デパンを差し向けておいて自分だけ城で待っているのはどこか釈然としないヴァラルであった。

「そついうと思って来てもらったよ。おい、マリウス！」

すると、扉を開かれ、二人の人物がヴァラルの前に現れた。

一人はヴァラル以上の背丈を持つ武人のような大男。そして、

「やあ、君がヴァラルか。私はマリウス、この国の王子をやっている。今後ともよろしく」

服装が違っただけで、顔がデパンと瓜二つの青年が親しげに話しかけてきて、

(デパンが二人……何の冗談だよ……)

一人だけでも相当の曲者なのにそれが二人、しかも片方は王子。

ヴァラルはこれからの旅に安寧の日々はないと改めて悟るのだった。

強者に対する反応

デパン・ラーノイルとマリウス・トレマルクは双子の兄弟である。

けれどそのことが原因で二人が誕生した際、トレマルク現国王であるコーレリクス・トレマルクは大変な苦勞に見舞われたという。

この国では双子は忌み嫌われる存在として人々に認知されており、王家に生まれてくる双子は国難の前触れとして伝承に残っていたためである。

そんな言い伝えなど迷信に過ぎないと彼自身は思っていたのだが、現実問題として王位継承権で将来二人の間で争いが起こるのではないかと危惧していた。

また、たとえ二人の仲が良好だったとしても他の貴族連中にそそのかされて争いになる危険性もある。そんなことからコーレリクスは大いに悩んだ。

すると、代々国王に仕えてきたラーノイル家の当主、エルトアからこのような申し出があった。

私どもにお子を引き取らせていただけませんか？

ラーノイル侯爵家には当時子供がいなかった。そのため、コーレリクスに対しこつ具申したのだ。

だが、本当に良いのか？それはつまり……

エルトアは信頼できる家臣の一人だ、裏切ることは無いだろう。だが、その一方で他の貴族からのやつかみや陰謀に巻き込まれるかもしれない、コーレリクスは彼の身を案じた。

心配には及びません、考えがあります。

そう言っただけはその後、コーレリクスの子を引き取ると同時に自ら侯爵の地位を返上し、貴族の中でも一番下の位である男爵の地位へ下ったのだ。

この突然の出来事に王国は当然騒ぎになった。ラーノイル侯爵家はコーレリクスの腹心ともいえる貴族の一人だ、そんな彼が政治の世界から一步身を引いた、貴族達は耳を疑った。

だが、当の本人のエルトアはあまり気にしていなかった。というのも、彼は王国のために力を尽くしてきたと思っていたし、これからは若い者達に任せようと常日頃から感じていたのだ。

だから、貴族の位を下げることは彼にとってあらゆる意味で都合が良かったのである。

「……というわけで、私とマリウスは別々に育てられたわけだ。それにしてもあのときはびっくりしたよ。物心ついたときに、いきなり父上と母上から話があるという呼び出されたときはもうね……」

「久しぶりに会ったというのにデパンは変わらないな。逆に僕はあまり驚くことは無かったよ、薄々感じていたし……それよりも妙な表情をした父上の顔の方が僕は印象に残ったな」

インペルンの街を歩き、自らの身の上話をヴァラルに話すデパンとマリウス。口調は微妙に違っているが、それでも同じ顔で喋る二人は本当に兄弟のようだった。

あの後、マリウスとガードはヴァラルに簡単な挨拶をして、ウォストン城へ行くついでとのことで王子自らこのインペルンを案内してもらったことになったのだ。周りの人々がそれはもう騒ぎ立てたが、ガードのひと睨みにより渋々退散していくのだった。

「……二人はそれぞれの生まれについて気にしなかったのか？特にデパン、お前は王族の一員になれたかもしれないんだぞ？」

かつての彼はコーレリクスが危惧したように、親類縁者の血なまぐさい権力闘争を間近に見てきた。しかも、そのどれもが凄惨なものばかりで、ヴァラルの心を大いに苦しめた。けれど、ここにいる二人は互いに憎しみ合うことはせず、こうして仲良く接している。そのためヴァラルは疑問に思う。どうしてここまで普通することが出来るのかと。

「私は特に気にしていないさ。むしろ父上と母上には感謝したいほどだ、色々私のわがままを聞いてくれたからね」

「本当にうらやましいよデパンは。ヴァラル、王族の生活って皆が思うよりも優雅なものじゃないんだ。確かに衣食住は満たされるけど、それ以外の部分では本当に色々ながらみに囚われているものだよ……ま、贅沢な悩みといえばそうなんだろうけどね」

マリウスは愚痴を呟くかのように語りだす。

トレマルクの王家に生まれた以上、王族としての立ち振る舞いを覚えなければ周りの連中にいいように扱われてしまうため、彼は生まれて間もない頃から様々な教育をコーレリクスから施されたようだが、けれどその言葉に棘は無く、父のことを王として尊敬していることが言葉の端々から分かった。

「だから私はかなり恵まれたほうなんだろうね。貴族としての礼法は多少学んだつもりだけど、マリウスのように私生活まで縛られたものじゃなかったから」

その一方、デパンはエルトア夫妻にのびのびと育てられたようだ。

領地は以前の十分の一以下になってしまったが、それでも比較的裕福な生活を送ることが出来たようで、彼からもまた両親への感謝の気持ちを感じ取れたのだった。

「……そうか」

成る程、本人達の性格も関係あるようだが、何よりも親達理解があつてこそそのようだった。

だが、それからの二人の話はとんでもないものだった。

騎士学校時代に再会した二人はその日以降つるむようになり、様々な悪戯を働いていたのだ。

二人の容姿を利用した入れ替わり、日常茶飯事の校則違反、持ち込み禁止といわれているライレンの魔法道具の使用や販売等を行ったりするなど、二人の悪名は留まることを知らなかったという。

「お二人とも、そのようなことをなさっておられたのですか……」
今まで黙っていたガナードも流石に口をなさざるを得なかった。職務に忠実な彼は今までこのような話を聞いたことも無かったのか、大変驚いていた。

「あれ、ガナードは知らなかったっけ？ てっきり父上辺りから色々聞かされているものだと思っていただけ」

「そのようなこと、一度たりとも耳にはおりませぬ！……まさか、一時期王が体調を崩されたのは……」

「ああ、それ？ 多分僕が説教を受けたとき、ついでに学校の方に呼びだされたんだろうね。いや、あれはまいった。久しぶりに父上から拳骨くらったよ」

「……」

ガナードはわなわなと震えていた。

「まあまあ、落ち着きなつてガナード。あくまでも昔の話だ。それに今は真面目にやっている。そう目くじら立てることもないだろう？？」

「デパン、お前も人のことは言えないはずだ。どうせ一枚かんでいたんだろう？？」

「一枚どころかほとんどだけどね、ヴァラル。まあ、私はその辺うまくやっていたからね。マリウスのようなドジは踏まなかった」

「何を言うかと思いきや。サラマンダーの幼体を教師共に見つかりそうになったのは一体どこの誰だったかな？ 全く、僕がいなければどうなっていたことか……」

サラマンダーは成長すると一メートルほどの巨大な蜥蜴に成長する魔物である。

一般的に魔物と呼ばれるものは、人に害なすものもいれば手なずけられるものもいる。このサラマンダーもそのうちの一体ではあるがクラスはC、学生の彼らにはとても手に負えない危険生物だ。

「……たまには私もミスをするものさ」

「お二人とも……流石にそれはまずいのでは？」

魔物の管理はライレンで厳しくとり行われている。そのため、下手をすれば国際問題にもなりかねないこんな裏話を暴露されたガナーの気はますます重くなっていた。

「大丈夫。信頼できる友人に預けたから、無事にライレンへ保護されたと思うよ」

「その通り。ばれなければ何の問題も無い」

(本当にこいつらは……)

今はやり手の二人のようだが、ヴァラルからすればとんでもない悪餓鬼だ。恐らく二人の性格は学生時代に培われたのだろう、彼もまたガナーと同様呆れ返っていたのであった。

「いやあ、悪い悪い。つい調子に乗ってしまった。すまないヴァラル、君が客人だということをつかり忘れていたよ。それと、さっきのことはなるべく内緒にしてくれよ？僕にもイメージというものがあるからね」

「だったら最初から話すなよ」

マリウスにビシッと突っ込みを入れるヴァラル。

あれからインペルの街を回り、現在はウォーストン城の一室で話し合う四人がそこにはいた。やはりトレマルクの王族が住まうだけあってこの場所は広く、そして立派だった。

「それほど君があまりにも自然体だったからだよ。だから感心しているのさ」

「お前に褒められても嬉しくも何とも無いぞ……」

気味悪がるようにして言葉を返すヴァラル。

デパンといいマリウスといい、どうして自分の周りにはこう変な奴らが集まってくるのか、彼自身よく分かっていたのであった。

「そうそう、それぞれ。デパンの言ったとおりだ、こんなに面白い男は初めてだよ。本当に初対面だよな？何処かであったことは無いよね？」

「当たり前だ……それよりとつとと本題に入れ」

「……そうだね。それじゃあそろそろ本題に入ろうか。皆からも言われてると思うけど、改めてSクラスの昇格おめでとう。それとアザンテ討伐もご苦労様」

「はいはい、世辞はいい。それで？わざわざデパンを遣わせて俺に用事とは何だ？」

本当に感謝しているマリウスの言葉を軽く流して先を促すヴァラル。そのしぐさにデパンは苦笑し、ガナードはムツとした表情を浮かべていた。

「……僕はね、君がどんなことを思い、これからどう行動するのか興味があるんだ。だから直接君と話をしてその真意を確かめたいと思っっているんだ」

「要はこの国に対して何か企んでいないか知りたいんだろう？正直に言え」

あっさり彼の目論見を見破ったヴァラル。というのも、国の重鎮たるマリウスがこのように切り出すのも予め想定内であったのだ。強者に対する人々反応は大体決まっている。畏れや嫉妬、憧れの感情を抱く者、懐柔あるいは取り込もうとする者、そして排除しようとする者。これらに大抵別れる。

そして、マリウスは自分のことを微かに畏れているとヴァラルは踏んだのだ。

「本当に容赦が無いねえ……そんな態度だと周りに敵を作るだけだよ?。」

「そのときはそのときだ……ただ、俺は今の話をしている。で、そのところはどうか?。」

「……有り体に言えばそうだよ。けれど、立場抜きで語るなら僕は君の事を既に友人として歓迎しているつもりだ。そこを勘違いして欲しくはない。」

(嘘はついてないみたいだな……どっちでもいいけど)

そう思い、

「お隣さんはそう思っていないみたいだけどな……まあ、俺は別にこの国に対して不満も何も無い。国が欲しくて冒険者やっているわけじゃないからな。」

ヴァラルはガードの方をちらりと向いてマリウスへ言葉を返す。

「というと、他に目的があるのかい? 良ければ教えてくれないか?。」

「大した理由じゃない、気の向くままに旅をしているだけだ、俺は」

「冒険者になったのは各地を回るため……か。ずいぶんとまあ欲の無いものだね。成りあがるうだとか、良い生活をしたとか、そういったものは無いのかい?。」

マリウスは疑問に思った。デパンからの報告で彼の性格について一

応は把握しているつもりだ。だが、こうして言葉に出されることで改めて彼は不思議に思ったのだ。

「特に無い、俺は今のままで十分だ」

「……ふうん。つくづく君は変だ。大抵の冒険者は地位や名誉、金や女に惹かれるものだと思っていたんだけどね……」

僅かな沈黙の後、彼はヴァラルの認識をようやく改めた。デパンの言っていることは真実だと。

「マリウス、だから言っただろう？ヴァラルはそんじょそこらの冒険者じゃないって」

「その前に訂正しろ。俺はお前達みたいに变じゃない。至って普通の思考の持ち主だ」

「………ははははははははっ！！！！」

そのヴァラルの場違いな発言を聞いた瞬間マリウスは腹を抱えたように笑い出し、

「……ガード、これは本物だ。自分のことを棚に上げて真面目に僕達を変人呼ばわりする男がいるかい？国の転覆を図るだなんて僕にはとても考えられないよ」

至って真面目な口調で自分の考えを口に出した。

恐らくデパンに対しても同じ態度だったのだろう、彼はふてぶてしいものながらもこの国のことに関しては何でもいよいよに興味を示さない。しかもあの実力の通りなら、襲う機会は幾らでもあったはず、なのに彼は何もしない。しかも自らを売り込もうとせず、ひたすら傍観者に徹しようとするその姿勢。

最早考えるのもばかばかしかった。

「ぬう……」

だが、ガードはどうしてもやりきれない思いだった。

そこで、彼は一つヴァラルに問いかけた。

「ヴァラルとやら、一つ良いか？」

「何だよもう」

質問ばかりで飽き飽きしていたヴァラルは投げやりに返事をする。

「アザンテを打ち倒し、オーガの集団を相手に立ち向かったという噂、あれは本当なのか？」

「おいデパン、そのあたりのことを説明しなかったのか？」

「勿論したさ。なあマリウス」

「ああ、確かに報告書とデパンの口から直接聞いた」

彼の問に相槌を打つかのように二人はそのまま述べる。

「……ですがお二人とも、実際にその目で彼の實力をご覧になったことは？」

しかし、ガードは二人に疑問を呈した。いつもだったらこのような無礼を働くことは無いのだが、事は非常に重大な問題。彼は最後まで愚直であった。

「……いや、無いね。そもそも彼と会ったのは今日が初めてだから無理だったけど。デパンはどうだ？」

「そういわれてみれば……私が実際に見たのはアザンテの死体だけで、オーガの死体は報告だけだ」

「おい、珍しいじゃないか。そんなしくじりを犯すだなんて」

「マリウス、それは君が実際に見ていないからそんなことを言えるんだよ」

二人はその途端、言い争いに発展した。

一方それを横目にしてガードは、

「ヴァラル殿、もしよろしければお相手願えるかな？」

衝撃的な発言を繰り返し、

「……別に良いぞ」

ヴァラルもまたそれに応じた。

……強者を前にして人々の取る行動はヴァラルが思っている以上に存在する。

セレシアのように憧れの感情だけで終わらせるのではなく、彼に並び立とうと以前にも増して努力する者。

さらに、

敗北すると分かっているにも尚戦いを挑む者。

ガード・モーゲンはそんな珍しい一人だった。

ガナードとの対決

「……ガナード、君は自分の立場を分かって言っているのかい？ 仮にも王国戦士長なんだよ？」

「ヴァラルも何あっさり引き受けているのさ。こんな安い挑発に乗ってどうするんだ？」

マリウスとデパンが口々にガナードとヴァラルに意見する。先程まで二人はやかましく口論をしていたのにこの変わりよう、やはり息の合う双子である。

王子の場合、敵対する意志のないヴァラルに勝負を挑むとは思っていなかったのだろう、彼にしては珍しく慌てていた。

伯爵もまたヴァラルがこんな安請け合いをするとは考えていなかったようだ。しかもガナードはトレマルクの重鎮の一人。魔物ならまだしも、そんな彼を易々と潰されてはかなわない。

二人は共にガナードの身を案じるのだった。

「王子、これは二人の問題。どうかわがままをお許し願いたい」

マリウスに対し謝罪するガナード、けれど撤回する気はない。武人の血が騒いでいるのか、その口ぶりに迷いは無かった。

王国戦士長である彼の場合、最初に会ったときからヴァラルの異質さに気がついていた。

あの内容だけで彼を判断するのは間違っている。

しかもガードは自分の目で確かめないと気がすまない性格であったため、ヴァラルとの対戦を望んでいたのだった。

「デパン。俺はな、こんな風に真っ向から勝負を挑んでくる奴は嫌いじゃない、むしろ尊敬している位だ。だから絶対に邪魔をするなよ?」

そしてヴァラルの場合、そんな彼の覚悟を感じ取り、挑戦を受け入れたのだ。

「……マリウス、これは何を言っても無駄っぽいよ。お二方、かなりやる気満々なんだけど……」

「……しょうがないな……二人とも、今回は特別に認める。ただし、互いに相手を再起不能、または殺すことは許さないよ」

「「……」」

何故かその言葉に二人は反応しなかった。

「何で黙り込むんだ……いいかい二人とも、今回は僕達も立ち会っただ。余計な流血沙汰なんて真っ平ごめんだよ。そのところ、きつちり理解してもらいたいんだけど?」

「……そこまでおっしゃるのなら……」

「ちっ、分かったよ……」

確かに、ガードを殺してしまつては王国中でさらに大変な騒ぎになつてしまつたろう。そのためヴァラルはマリウスの言葉を不満げに思いつつも渋々従うのであつた。

（本当に私には彼らの考えが理解できないよ……どうしてこうも命のやりとりが好きなんだろうねえ……）

デパンは似たような二人を眺めて、深いため息をついていた。

そして四人はウオストーン城の外にある鍛錬場へと移動する。

そこでは大勢のトレマルクの騎士達が訓練に明け暮れており、見ているこつちが暑苦しくなるほど熱心に取り組んでいたのだつた。

「ガード隊長！マリウス王子にデパン伯爵まで！本日はお三方、用事があるのでは？」

「やあやあ、邪魔するよ。ちよつと新たに野暮用が出来てね、少しこの場を借りたいんだけどいいかな？」

こちらへ駆けつけてきた騎士の男にマリウスが陽気に挨拶し、ここに来た用件を伝えようとすする。

「と言いますと？それに……そちらの方は一体？」

「今からこの者と一試合やる。騎士達の訓練を止めさせ、一日下が

らせる」

そして、ガナードは部下である彼に命令する。

「……は？隊長自らでありますか？」

「他に誰がいるのだ？いいから早く準備をしろ。あまり待たせるなよ。」

「はっ！はいっ！」

迫力のある彼の言葉に圧され、男は急いで訓練を中断するよう指示を下していった。

「いいのか？わざわざ下がらせて。俺としては隅っこでやってもいいんだぞ？」

「別に構わないだろう。あの者達にとってもいい経験になる。このような機会、早々あるものではないからな」

ざわざわと突然の指示に驚く騎士達だが、徐々に下がっていく彼らを眺め、ガナードはこう答える。

「そんな大げさな……たかが一勝負するだけだろう？」

「さて、それはどうかな？」

そのガナードの真意は分からなかった。

「おい、ヴァラル。隊長とやるってのは本当か？」

控え室で刃の無い訓練用の武器を漁っているヴァラルに声を掛ける人物がいた。

「……ん？ああ、グレインか。久しぶりだな、元気にしていたか？」

トレマルク王国の鎧を着込んでいる彼は冒険者のときとはまた違う印象を抱かせたが、それでも性格の方は変わっていないように感じ取れるのであった。

「それどころじゃねえ！一体どうしてこんなことになったんだよ！」

「成り行きだ」

がさごそと様々な武器を漁り、それらを軽く振り回しつつ彼の間に答えるヴァラル。今回は殺し合いではなくあくまで試合だ。なので、万が一のことを考えヴァラルはいつも使っている真龍の剣を使わず、こうして自身に合う武器を探していたのだった。

けれど、どうもしても手にしっくり来るものがないようで、地味に彼を悩ませていた。

「成り行きって……はあ。いきなり伯爵やら王子やらが現れたと思ったら、今度はお前さんが隊長とやりあうとは……本当に世の中何が起こるか分からないな……」

目にもとまらぬ速さで武器を振り回すヴァラルの手並みに驚愕しながらも、今更だと思ったグレインは彼との奇妙な縁を感慨深く思っ

ていたのだった。

「それはこっちの台詞だ。俺だって王子がいきなり現れてこんなことになるとは予想できなかった。それよりもだ、グレイン。ガナードって奴はどれくらいの実力の持ち主だ？一応聞いておきたい」

「……技の鋭さはセレシアの姉さんと同等かそれ以上。力はソイル並。だから相当強いのは間違いないぞ」

グレインは自分なりの考察をヴァラルに語った。

実は彼、一度ガナードと手合わせをしたことがあるのだ。

そのとき、グレインは彼のことを侮っていた。何せセレシアと長年冒険を共にしてきたのだ。彼女から教わった知識や技の数々もそれなりにある。なので、あわよくば彼を打ち負かそうと意気込んでいたのだった。

けれど彼は勝てなかった。

まるで弄ばれるようにして。

グレインが攻勢にでると、途端にガナードは彼の力を図るように徹底的に守勢に転じる。その姿はセレシアと瓜二つであったため、まるで彼女と戦っているように見え、いいように扱われるだけだった。

そして、彼が疲れる兆候を見せた瞬間、己の内に溜めた力を爆発させるかのように長大な槍を突き出し、怒濤の攻勢にでる。その一回の一撃は彼女の早さとソイルの力を併せ持った強力無比なもので、グレインは結局為す術も無く敗北したのだった。

「成る程ね……」

けれど、深刻そうに告げるグレインを置いてヴァラルはせつせと武器探しに勤しんでいた。

「……ってそれだけかよ！もっと他に聞くことはないのか？ほら〜もっところ、得意技とか癖とか色々あるだろう？」

「無い。要はセレシアとソイルが二人同時に襲い掛かってくると考えればいいんだろう？それだけで十分だ」

「微妙に違う気がするけどな……」

「似たようなものだから気にしないことだ……あゝもう！それにしても全然いいものが無いな、ここは。もっと他の所は無いのか？」

ヴァラルはグレインと語っている間、ブロードソードやバスタードソード、グレートソードやエストック等、ありとあらゆる武器を試していたのだが、結局良いのが見つからなかった。なまじ真龍の剣というヴァラル専用ともいえる最高の武器を使い続けたため、違和感がどうしてもぬぐえなかったのだ。

「そう言われてもな……ここにあるのではほぼ全部だな。あとはどれも似たり寄ったりのものしかないぞ。というかヴァラル。お前、どれだけ好き嫌いが激しいんだ……」

あんなに多種多様な武器を熟練者のように扱っているのにこの言いぐさ。一体何が気に食わないんだとグレインは言いたかった。

「仕方ないだろ、合わないものは合わないんだから」

ヴァラルは一通り探し終えた後、武器が飾られている最後のスペースへ移動しようとしていた。

（ここにも無ければ後は素手でやるしか……いや、いくらなんでもそれはまずくないか？）

ガナードのことだ、訓練用にしても本物と同じような武器を使ってくるだろう、それなのに自分は徒手空拳。そんなシニールな場面を想像しつつ歩き出し、ふと足元の方へ目を向ける。

「……グレイン、これはこの場所にあるものの一つなのか？」

雑多な部屋の隅に置かれ、埃かぶっていたとあるものを拾い上げ、ヴァラルは彼に尋ねた。

「ん？……ああ、それか？多分誰かの落とし物だろう。貸しな。後で俺が持ち主を見つけておくから」

「……おっ意外に良いな。なかなか使いやすいで」

簡単に体を動かして動作を確認する。思ったよりも体に馴染む、これなら大丈夫そうだと思った彼であった。

「……ヴァラル、一応言っておくがそれは武器じゃない。防具だ防具」

「勿論分かっているつもりだ」

「分かったのかよ……まさかそんなもので隊長とやるつと言っ
じやないだろうな？言っただろつ？隊長は槍を使っつて」

「俺は相手の武器に合わせるようなちままとしたやり方は好きじ
やない。こつというのは自分に合わせるものだ」

ヴァラルは持論を展開する。グレインはこれを使つても素手と大差
ないと思いがちだが、彼にとっては心強いものに変わりなかつた。

「……つくづくでたらめだな」

「今更だ。それよりもグレイン」

「？」

「セレシアのことについては安心していい。彼女はちゃんと家に帰
つた」

「……分かつた。わざわざありがとつな。それと頑張れよ、試合」

「適当にやるさ。適当にな」

そつしてヴァラルは控え室の外へと向かつていったのだつた。

彼が外へ出ると、周囲にはたくさんの人ばかりが出来ていた。先程
の騎士達のほか、どこから噂を聞きつけてきたのか大勢の貴族達も
その場におり、ガナードとヴァラルの試合を観戦しにきたようであ
つた。

「ずいぶんとまあ増えたもんだ。見世物じゃないんだけどな……」

「すまない。気が触ったのなら下がらせるが？」

「別にいい」

ガードを見ると二メートル以上もある巨大な長槍を持っていた。恐らく彼の本気なのだろう、その切っ先はまるで本物のようにざらりと鈍く光っており、その巨体と相まってとてつもないものだった。

「了解した……しかしヴァラル殿、本当にそれで良いのか？」

「ああ、問題ない。むしろこれがいい」

一方ヴァラルの場合、手には何も持っていなかった。いや、正確に言えば彼の両腕には、誰かの忘れ物とされる鉄の手甲がはめられていた。

だが、そのやりとりを聞いていたのがギャラリーから次々とヴァラルを馬鹿にした野次が飛んできた。

隊長に対してなんだあの者は……

少々馬鹿にするのにも程があるのでは？

「……黙らぬかッッッ！……！！貴様ら、それでも誇り高きトレマルクの民か……！この手合いに文句があるのなら今すぐ前が出るがいい……！」

彼の素性を知らずにいて、こちらから頼んでいるのにもかかわらず、あまりに無礼な彼らの物言いに腹を立てたガナードが震えるような大声で一喝する。

すると、彼らは一斉に黙り込んだのだった。

「…………… 本当にすまない。あとで彼らにはきつく言い聞かせておく」

「どうせ口先だけの連中だ。気にしていない」

「…………… 心遣い感謝する、ヴァラル殿……………」

ガナードは彼に礼を言うと、長槍をゆらりと構え沈黙する。全身から闘気をたぎらせて凄まじいプレッシャーを放っており、ヴァラルという強大な存在を認識しても尚余りあるものだった。

(…………… いいだろう。これなら相手をするのに不足は無い)

一方ヴァラルもそんな彼に敬意を表し、

片方の腕を前へ、

もう一方を体の手前へ置き、真剣に構える。

それは彼がアルカディアを出てから初めてのことだった。

「……………」

そして両者は一瞬睨み合い、

「「ツツツ……！」」

激突した。

激闘、その後

ヴァラルの両腕に身につけた鉄の手甲とガードの重厚感溢れる長槍、その二つが互いにぶつかり合い、火花を散らし、金属の打ち付けあう甲高い音が辺りに響き渡る。

ガードとヴァラルの攻防は時間が経過することに激しさを増し、デパンやマリウス、グレインとその他大勢の騎士や貴族達が二人の戦いに釘付けとなっていた。

「おい、デパン……おいっ！聞いているのか！」

「何だマリウス……いちいち話しかけてくるな……今試合中だぞ？」
こんなときに一体何のようだ、デパンは隣にいるマリウスに苛立たしげに答える。マリウスもまた二人の戦いに見とれていた一人だった。

「凄くないか……あれでガードと相手するときはどうなることかと心配したけど、まともに打ち合っているじゃないか……」

「確かに……それに関しては本当にびっくりだよ……」

驚異的な力を持つヴァラルとはいえ、武器も持たずにガードと立ち向かうのは正直どうかと思った。彼の一撃はとにかく重い。そのため、ヴァラルが身につけているあんな小さな手甲で受けきれぬのか、マリウスと同様疑問に感じていたのだ。

「……でもここまでのようだ。ほらデパン、ヴァラルはガードに

「一步も近づけないでいるよ……このままだとジリ貧だ」

マリウスが指摘するように、試合はガードの優勢の運びとなっている。息つく間も無く繰り出される変幻自在の槍捌きの前にヴァラルは両腕で防御し、ひたすら打ち払ってはいるが、防戦の一途をたどっている一方だ。マリウスはそんな光景を目にしてデパンに状況を語っていたのだった。

「……仕方の無いことだ。武器のリーチが全然違うからね。ああいや、ヴァラルのあれはちがうか。まあ、ここまでよく頑張ったよ、彼は」

デパンもまた彼に答えるように分析する。

騎士学校時代では剣術を含めた実技の成績が芳しくなかった二人でも、長物が他の武器に比べて有利なのは知っている。しかも、ガードという達人が扱うことで、無類の力を誇るといふのをその身に嫌というほど理解させられていたのだ。

何せ、彼の相手を務めたのはグレインを含めた王国の騎士達だけでなく、デパンとマリウスの二人も入っていたのだから。

彼に負けたとしても、本当に凄いことには変わりはないよ、ヴァラル

宮廷魔法士やオーガを屠ったヴァラル本来の力を見てみたかった気もするが、仕方が無い。誰にだって慢心や油断といったミスはある、今回はそのうちのひとつだと思って彼の健闘を称えよう、双子はそう思った。

……けれど、ここにいる彼らの考えとは裏腹に、ガナードはまったく別の思いに囚われていたのだった。

(ぬう……)

ガナードはとてつもない重量を誇る長槍をまるで自分の手足のように扱いながらヴァラルの底力に驚倒する。

槍という武器は相手を突くという動作の関係上、剣に比べてより一層早さに重きを置いている得物だ。けれど一点を攻撃するという特性のため、自身の体重を乗せたり、力の限り振りぬくといった、威力の上乗せが難しい。

けれどガナードの場合、一流の剣士にも勝るとも劣らないありとあらゆる方向からの斬撃、より一層磨き上げられた鋭い刺突の両方をいともたやすく行う。

そして、それらが彼の怪力と相まって王国史上稀に見る強さを発揮していたのだった。(事実、彼は王国戦士長に就任してからというもの、常勝無敗の戦績を誇っていたからもそれは明らかである)

だが、そんなガナードの攻撃を愚直に受け止め続けるヴァラルに対してはそんな自信も揺らぐ。

(まるで手ごたえが無い……)

彼ほどの力量の持ち主となれば、対峙する際に息の乱れや汗の量から自ずと相手の状態が手に取るように分かる。さらに今までの間、

ガードは数え切れないほどヴァラルに鋭い刺突と斬激を放つてきた、それも一片の容赦なく。

それなのに彼には疲弊の色が全く見えない。傍から見れば押されているのはヴァラルであることは疑いようも無い事実だが、間近でしか確認できない彼の不気味さに気圧されなかったために、ひたすら攻撃を仕掛けるガードがそこにはいた。

(……まずい……冷静にならなければ……)

格上の彼に対し、一気に勝負をかけたつもりであったのだが、汗一つかかない彼に対し次第に焦燥感が湧き上がってくる。

ゆえにガードは心を落ち着かせるため、一旦彼から距離をとった。

「……ヴァラル殿、一つお聞きしたい。一体その力、どこで身につけられた？」

「どうでも良いだろう、そんなこと」

(はぐらかされたか……)

見るからにしてまだ若いヴァラルは師匠などがいるのだろうか？精神を落ち着かせつつそんな疑問がふと浮かんだが、構えをとかずにいる彼にとってはガードと戦うほうが重要なようだった。

「いや、全くその通りだ……気を紛らわせたようだな……」

試合中に立ち話とは一体何を考えているのだ。こんなことをポロリと語ってしまうほど自分は動揺しているのか、そう思った次の瞬間、

「……手仕舞いか？その心意気に免じて先手を譲ったつもりだったが、これで終わりならそろそろ出るぞ？」

ヴァラルがぼそぼそと周りに聞こえない程度の声で彼に言い放った。

(ツッ！！)

一切の反撃が無いかと思っただらそういうことだったのか。どうやら、ヴァラルは彼に全力を出すよう今まで待っていてくれたようだ、少しでもこの試合を有意義なものにするために。

(しかし……)

この後はどう攻略するべきか、ガードは思案する。まるで自分が騎士達に行ってきたことをそっくりそのままやり返されたガードは最早、勝利という以前にどうやってヴァラルに一矢報いようかという至極単純な気持ちになっていた。

(……いくら実直に技を繰り出しても意味が無い　それならばツッ！！)

しかし、彼は新たな考えがひらめいたのか、再びヴァラルに向かって疾走を開始する。

槍の先端は彼を真正面から捉え、後ほんの少しで接触する直前、

「フッ！！」

ヴァラルはそのあまりに単調な突きを難なく受け止める。

オーガの繰り出す一撃を防いだ彼だ、これくらいどうということはない。

だが、

（とつたツツ！！）

その瞬間彼の長槍が、ガキンという音と共に

二つに分かたれた。

ガナードの槍は通常の二倍近くあり、その槍もまた訓練用とはいえず、グレインと同様に特注製である。

そして、この機構は本来、彼の緊急事態に際して備え付けられたものだ。

武器も使い続ければ磨耗する。定期的に修理に出してはいるが、過酷な任務も背負うトレマルク軍では何が起こるか分からない。そのため、この措置は彼なりの工夫といえるだろう。

それがこんな形で使われようとはガナード自身全く想像だにしないか

つたが致し方ない。流石に腕をふさがれているヴァラルにこれは防ぎきれまい、

そう思ったとき

彼は横殴りに吹き飛ばされていた。

「……………へえ、面白いな、これ」

ヴァラルは分かれたもう一方の槍を掴みながら素直な感想を述べる。

最初見たときは異様に長いと思っていたが、まさかこんな仕掛けが施してあるとは予想だにしていなかったようで、心底彼は感心していたのだった。

「……………ぐっ……………何をした……………」

すると、ガードが槍を突き立ててよろよろと起き上がる。それに力を入れたはずなのだが、もう立ち上がってくるとは。ヴァラルはまたもや感心するのだった。

「ん？特に何もしていないぞ？ただ両腕が塞がっていたから、蹴りいれただけだ」

「な、何と……………」

ガードは彼の言っていることが信じられなかった。彼の虚を完全に突いたつもりであったが、それをあっさりと避けられ、すかさず体を反転させて回し蹴りを入れられたという衝撃的な事実には頭が追いつかなかったのだ。

「俺は何も、両腕だけで相手するとは一言も言わなかった気がするが……」

確かに、彼の足にも古びた防具がつけられている。

だが、鎧を身につけた上で、生身の体と同様に格闘術を行うなどガードは全く予想だにしなかったのであった。

「……まあ、さっきのことを含めると中々の腕前だ。グレインの見立通り、確かに強い。この国では一番なのかもしれない」

「……」

ガードは彼の評価をただ黙って聞いていた。いや、

聞かざるを得なかった。

「……けれど俺の相手をするには」

まだまだだな

そう言ってヴァラルはガードの視界から消え失せた。

「……………なんだよ、ありゃ……………」

グレイン、デパン、マリウスを含めた一同は困惑の真っ只中にいた。ガードの槍の秘密にも驚いたが、いつの間にかヴァラルが優勢になっているのだ。

それも圧倒的に。

瞬間移動をしたかのように彼の目と鼻の先に現れたかと思いきや、次々と拳や蹴りを繰り出すヴァラル。

それはまるで嵐のような凄まじい連続技であり、ガードはそれでも槍を駆使して何とか反撃の糸口を探ろうと必死にこらえていた。

だが、ここまでヴァラルの接近を許してしまうと、彼の自慢の槍は武器としての役目を果たさない。徹底的な接近戦に持ち込んでいる彼はそんなことを見越していたのだろうか、今までの分をお返しといわんばかりに、ガードに容赦の無い打撃の雨をお見舞いしていたのであった。

(……………これじゃあ、俺達には敵わない訳だ……………)

恐らく誰もが気づいたであろう、

ヴァラルが身体強化の魔法を使えるということに。

その恐るべき強さを直に見て、グレインは思わず身震いをするのだ
った。

「ぐうううう！……！！！」

ガードは思わずうめく。

終わらない打撃の数々。一発一発が本当に早くそして重い。今までの自分の鍛錬は一体なんだったのかと思わせるほど、強力無比な一撃が槍越しにガードの体力をごりごりと削り取っていく。

何という膂力、そして洗練された動き。これは一朝一夕で身につけられるものではない。一体目の前にいるこの男は何なんだ。

様々な思いが一瞬にして湧き上がり、衝撃と共に霧散していく。

「……もう休んだほうが良いんじゃないのか？流石にそろそろ限界なんだろう？」

「ツツツツ！！！！！」

そんな言葉に付き合う余裕がガードには一切無かった。逆に、こんな最中でも声を掛けられるヴァラルの余裕に恐怖する。

彼の指摘のようにガンードは追い詰められていた。足腰に力が入らず、両腕も痙攣を起こすかのようにぶるぶると震えてきており、このままではあと十秒も持たないだろう。

(こつなればツツツ!!!)

しかし、追い詰められたガンードはついに決断する。

彼は自分の長年使っていた槍を手放し、彼へ一矢報いようと拳を交えて彼に直接打って出ることにしたのだ。

しかも、その予想外の行動にヴァラルは本当に一瞬だが、持ち主のいなくなった槍の前で隙を見せるのをガンードはしっかりと確認した。

(おおおおおお!!!!!!!!!)

彼はヴァラルの顎を狙い打つ。

これで決まらなければ敗北が確定する。

それは王国戦士長、いや、一人の男として、恥も外聞も何もかも捨て去った一撃だった。

しかし、

その思いもむなしく、彼のひたむきな攻撃は、パシツという拳を受け止められたような音と共にヴァラルに防がれてしまったのだった。

(ここまでか……)

彼を守るものはもう何も無い。鎧を着けてはいるものの、ヴァラルの拳の威力はとてつもない破壊力を持つ。直に喰らえば骨折どころではすまないだろう。けれどもガナードは初めて全力を出せた相手にめぐり合えたのか、どこか充実した表情を浮かべていた。

「見事だ」

ヴァラルは最後に見せたガナードの一撃に健闘を称え、そして目の前に何かが迫り来るのを認識したとき、

ガナードの意識はそのままブツリと途切れたのであった。

「……………ここは……………」

「……た、た、た、隊長つつつ！！！！」「……」

周りにはガナードの部下が大勢いて、彼が目覚めると同時に彼に詰め寄ってきた。どうやらあの試合の後、ウォーストン城の医務室に担ぎ込まれていたようだ。

(……………負けてしまったか……………)

病室だというのがやがやと喚きたてる騎士達を叱る医者を前にして先程の出来事を回想するガナード。

けれど、後悔はない。ヴァラルの拳はどこまでも素直で、一切の迷いが感じられなかった。マリウスの言うように本当にこの国に対し

て何かするつもりはないようだ。

また、それ以上に今まで気づいていなかった己の弱点が判明したことで、彼はとても満足していた。そして、これからの鍛錬に向けて大きな希望を持つのがあった。

（だが、それもこの怪我が治ってからだな……）

ガードは自身の容態を確認しようと起き上がるつとす。

このとき彼は多少の苦痛を覚悟していたが、

（……痛みが、無いだと？）

普段と全く同じように起き上がることが出来たのであった。

「やれやれ……」

打ち捨ててあった鉄の手甲を持ち主の騎士に返し（戦々恐々とした面持ちであったが）ヴァラルはギャラリーの追及を逃れるため城の中を彷徨う。こう日に何度も追求されるとするのは如何ともしがたい、彼は気まぐれにうるついていたのだった。

「冒険者のヴァラルというのはそなたか？」

するとやたら威厳に満ちた服装をした初老の男が彼に話しかけてきた。

「ああ、そつだが？」

こういふ輩から逃げ出そうとした彼の目論見は早くも消え去ってしまったが、無視するわけにもいかないので無難に返事を返すヴァラル。

「先程の戦い、見事であった。久しぶりに心が躍ってな、つい興奮してしまつたわ」

「それを言うならガードにも言ってやれ。尤も、今は忙しそつだけどな」

ギリギリまで彼はヴァラルの猛攻に耐えたのだ。彼は最初の数秒で片をつけるつもりだったが、それが三十秒近くガードは持たせた。それだけでも驚嘆に値する精神力だったと彼は評していた。

「勿論だとも、彼の働きも存分に素晴らしいものだった。これから彼の活躍に期待するでしょう」

「ま、そう思つんだつたらいいけどな」

ガードに対し、上から目線で喋っているこの男は一体誰だ？ヴァラルはそう思い声を掛けようとする。

「そついえば自己紹介がまだであったな。余の名はコーレリクス、この国では王をやつておる」

どこか双子に似た物言いです。そう告げたのはトレマルクの現国王、コーレリクス・トレマルク。彼もまたあの試合を遠くから眺めていたようであった。

「……やっぱり親子だな」

「おお！息子たちを知っておるのか。それなら丁度いい、今から話をせぬか？仕事が終わわり、少々退屈しておったのだ。いまなら美味しい茶菓子も用意するぞ？」

なるほど、コーレリクスは話し相手を探してうろつろつと城内を彷徨っていたようだ。意外と気さくな王だと感じたヴァラルは、話に乗ることでこのまま追っ手を振り切れると確信し、

「分かった」

その誘いに乗ったのだった。

だが、その二人のやりとりを物陰からじつと眺める一人の男がいた。

（あれがガードに勝った男か……名は確かヴァラルといったか？……くくっ、あいつがいればあの計画も……）

そして男は下卑た笑みを浮かべ、その場を立ち去っていくのを談笑に興じていたコーレリクスとヴァラルの二人は知る由も無かったのであった……

敗者の意地

コーレリクスとの話は思いのほか盛り上がった。

この地の世界情勢について彼の主張を交えてそれとなく聞くことが出来たし、マリウスとデパンの知られざる一面も分かった。何よりも、意外な形ではあったがトレマルクの国王であるコーレリクスの人となりを知ることが出来たため、ヴァラルにとっては中々の成果であった。

彼によると現在のトレマルクを含めた各国では魔物の対処に四苦八苦しており、互いに同盟を組んで事にあたっているのだという。たまたま魔物の討伐事案でライレンやバルヘリオンと争いが起こることもあるが、それでも表面上は事なきを得ているという。

（成る程、魔物という脅威が図らずも彼らの結束を固めているのか…… 皮肉なものだな）

ヴァラルはコーレリクスの話を聞いてそう思いを巡らせたのだった。

そして二人の話が一段楽したところで国王の部屋の扉がノックされる。

「入れ」

「失礼します！！例の準備が整いましたので、至急お越しくださいとのことですよ！！」

「」苦勞、下がってよろしい」

「はっ！！」

「……ああ、もうこんな時間だったのか」

コーレリクスと騎士との簡単なやりとりを聞いてヴァラルは窓の外を眺める。

外はすっかり日が沈み、インペルンではたくさんの明かりが灯っている。どうやら本格的な夜が到来したようだ。

「ヴァラル、この後の予定は何かあるのかな？」

「そうだな……とりあえず街に帰って宿でも探すつもりだ」

ここでの用事はひとまず済んだ、後は今晚寝るところの確保である。だが、今から探しに行ってみつかるとか、多少の懸念が彼の中をよぎった。

「それだったら丁度良い。先程の二人の健闘を祝して、これから夕食会を行うのだ。是非ともお主に参加してもらいたい。それと今日はここへ泊まるといい、元々そのつもりでマリウスはおぬしを呼んだのだろう。何、遠慮することは無い」

どうもヴァラルとガードの戦いは余程コーレリクスの心を打ったようで、急遽宴の席を設けたことから、彼の熱心ぶりが窺い知れたのだった。

「まあ、良いだろう」

食事の場所と寢床をあつさりと確保できたヴァラルは特に異論は無く、その提案に乗るのだった。

どよどよとざわめきの声があたりから聞こえてくる。

会場にコーレリクスと到着した際、ヴァラルは周囲の視線を独り占めすることになった。いきなり姿をくましましたかと思えば国王とお出まし。流石の急展開にデパンとマリウスは驚きを隠せずにいたようで、その見慣れない驚きの顔にヴァラルはしてやったりという気持ちになった。

けれど、その後は状況が一変。あの試合を見ていた貴族達の面々から散々質問攻めにあつたのだが双子は我関せずと高みの見物。まるで手助けをしようともしない二人にヴァラルは辟易としながら、彼らをあしらひ続けるのだった。

「…………ふっ」

そして現在、コーレリクスの手助けにより彼はひとまず落ち着くことが出来た。折角の主賓だというのに彼の気をそぐような真似は慎めとの一声により、普段の晩餐会の様相を呈するようになったのだ。あいつらとは違ってなかなか出来た国王だとワイングラスは片手に会場をうろついていると、ふと見知った顔が見えた。

ソイルとグレインである。

「よう、二人とも」

「おっとと……貴方ですか」

「噂をすれば何とやら、か」

ヴァラルが声を掛けると、ソイルはグラスを取りこぼしそうになり、グレインは彼の到来を予期するかのように咳いた。

「何だよ、お前らもか」

「いやいや、今の貴方がそれを言いますか？」

ソイルもどうやらギャラリィの中に混じっていたらしく、グレインと同様ヴァラルの実力をその目で確認してしまったようで、そんな噂の張本人であるヴァラルの無頓着ぶりにあっけにとられていたのだった。

「そつだぞ……おかげでこっちも大変だったんだ」

グレインはため息をつき、愚痴をこぼした。なんでも以前ヴァラルと知り合いだったということが周囲に知れ渡り、さっきのヴァラルのように色々と大変な目に遭っていたようだった。

「それは不幸だったな。けど、俺が普段どんな目に遭っているかというのを知ることが出来たんだ。中々貴重な体験だったろう？」

「……多少の苦労は理解できましたけど、冒険者をやっていた私にとって瑣末なことです。むしろ、貴方こそもう少ししっかりしないと……ああ、それとグレインから聞きましたよ。彼女の件、本当に

ありがとうございました。最後まで気がかりなことだったので」

「俺も気にはなっていたからな、礼を言われるほどのことじゃない」

「そうですね……いやはや、貴方には最後まで世話になりっぱなしですわ……ところで一つお聞きしたいのですが、どんなやり方での状態のセレシアさんを宥めたんですか？ちょっと想像がつかないのですよ、私は」

「おお、それは俺も聞きたい。一体何があったんだ？」

「それは……まあ、色々あったんだ。色々とな」

ソイルとグレインは聞いただす。彼の言うことだ、セレシアが元に戻ったのはきつと本当のことなのだろう。だが、どうやって？ ヴァラルのしたこと二人は興味津々だったが、当の本人ははぐらかした。

あんな出来事を逐一語れば何を言われるかわかったものではないし、彼女のイメージを出来るだけ壊さないようヴァラルは一人頑張っていたのだった。

「そうですね……確かに少々不躰でしたわ。この話は聞かなかったことにしてください、ヴァラル」

「まあ、言いたくないのならそれでもいいか」

そして、二人もまた一波乱があったことを彼の態度から察し、素直に話を引っ込めた。こういった素直な態度は悪くない、その場を立ち去り彼はそう思った。

「あんたがヴァラルだな？」

宴もたけなわに盛り上がり、酒が会場の全員に回り始めた頃、マリウスやデパン、ガナードと話をしていたヴァラルの下へ一人の貴族の男が近づいてきた。王であるコーレリクスから必要な接触を控えるよう忠告されていたはずだが、この男には関係のないようだった。

「ん？ああ、そうだが。ところであんたは誰だ？」

「……」

しかし、貴族の男はヴァラルの事をじろじろ見るばかりで、彼の言葉を無視していたのだった。

「タルセン、人にものを尋ねるときは自分から挨拶するのが礼儀だよ」

「デパン、公爵である僕に何を言っているんだい？少しは立場を弁えるんだな」

「それは父君の話だろう？君はまだ正式に家督を継いでいない、それを鑑みても彼に失礼じゃないのか？」

「ふん、マリウスか。国王陛下から気に入られたからといっていい気になるなよ。お前だってまだ国王になったわけじゃないんだからな……」

タルセンと呼ばれる貴族の男はまるで親の敵を見るかのように言い放つ。どうやら双子との間で何か因縁があるようだ。

「タルセン殿、言葉が過ぎますぞ。仮にもエールバス家の次期頭首、そのような態度では誰もついては来ませぬぞ」

「……それを奪ったのはこいつらだ。それにガード、あんなに無様に負けておいて何言ってるんだい？」

その瞬間、辺りの空気が張り詰めた。あまりの物言いに腹を立てたのか、主にガードの部下である騎士達から発せられ、まさに一触即発の状態であった。

「……なんだよ。文句があるのならでて来いよ!!」

自信満々に周りに告げる貴族の男。身なりはしっかりとっているが、どうも口が悪い。彼とはあまり関わりたくないものだ。とヴァラルは静かにその光景を眺めていた。

「その辺にしたらどうだ、タルセン」

「へ、陛下……」

すると騒ぎを聞きつけたのか、コーレリクスがその場へ現れる。やはり一国の王だけあって威厳に満ちたその声でタルセンを宥め、不穏な雰囲気を一瞬にしてかき消したのだった。

「折角客人がいる中でわざわざ争いをけしかけることも無かるうに。少しは憤みも覚えることも必要だぞ？」

「は……申し訳ありません……ですぎた真似を……」

「……余ではなくガナードに言うのだ、タルセン。かものは騎士として立派に戦った。それを辱めるといふことはこの国を侮辱するのと同じことになるのだぞ？」

「は、は……」

タルセンは苦虫を噛み潰したかのようにガナードに謝罪、その後は、この場を直ぐに立ち去っていったのだった。

「不愉快な思いをさせてしまったようだな、ヴァラル」

「コーレリクスか。いや、俺は気にしてないから別にいいんだが……いきなり何だったんだ？やたらマリウスとデパンに絡んでいたよ。うだが、何かあったのか？」

「ああ、それはね……」

マリウスやデパンの仲は周知の事実だ。けれど、それを快く思わない者達もこの国には当然いる。

このトレマルクも一枚岩ではない、彼らの国民に対する人気ぶりに嫉妬し、反発する者がいた。その筆頭が彼、タルセン・エールバスだ。

彼は塩や香辛料を独占的に販売する権利を有していたエールバス家の嫡男であり、トレマルク王国ではかつてエールバス公爵家が台頭

していたのだった。

その力の源は利権による財政的な余裕、公爵家という血筋。その二つによって大きな派閥を築いていたため、当時、コーレリクスの後を継ぐのは分家の頭目であるタルセンだと周囲から言われていた。

けれど、彼が生まれた一年後、国王にマリウスとデパンの双子が誕生したことにより、彼はその歯車を大いに狂わされた。

最初の頃は余裕があった。何せ貴族の大多数が味方についていたし、タルセン自身は政治に関する能力があまり無かったのだが、周りの者たちがそれをサポートしていたため、事なきを得ていた。

だが、双子は成長するにしたがってめきめきと頭角を現すと共に徐々に人は減っていった。当然だろう、一つ理解したことを五にも十にも発展させる二人の前に、大人たちは皆賞賛の拍手を次々と送ったのだから。そして、その才覚は他者を引き込み、いつの間にか彼の周りには誰もいなくなっていた。

そのため、今では見る影も無くしたエールバス家は双子に対し、並々ならぬ憎しみを抱いていたのだ

「父親のカンバルトは、僕が次期国王に指名されるとショックを受けて病床に伏せったまま。母親はそんな夫を見かねて失踪。気の毒といえばそうなんだろうけどね……」

「……あいつも随分と大変なんだな」

「けれど、どうもここ最近何かを企んでいるような気がするんだ……
…ヴァラル、君も気をつけるんだよ？」

「おいおい、何でそこに俺も含まれるんだよ」

話を聞く限り、タルセンはデパンとマリウスの二人に恨みを持って
いるはずだ。なので自分は全く無関係である、デパンの突然の忠告
にヴァラルは反論した。

「何を言ってるんだ。彼が最初に声を掛けてきたのは私達ではなく
君だよ、ヴァラル。彼には色々と思い噂があるからね。十分気をつ
けることに越したことは無いだろう？」

タルセンはどうやら影で色々な悪事に手を染めているようだった。
それも双子のような悪戯の類ではなく、その手の裏の輩と手を組ん
でいるようで、一筋縄ではいかない相手であることをヴァラルに伝
えるのだった。

「忠告は受け取っておく。だがな、デパン。あいつと俺は今日が初
対面だ、それに俺は恨みを買った覚えは無い。今のところは心配無
用だ」

「そつだといいいけどね……」

最後まで疑問に満ちた声でデパンは考え込むのであった。

「で、あんたは一体誰だ？」

「……」

晩餐会が終わり、マリウスとデパンに案内された客室でヴァラルはくつろいでいると、突然扉が叩かれた。

そして、現在、顔を布で覆い隠した見るからに怪しい風体の男がヴァラルの目の前に立っていたのだった。

すると、その男が一通の手紙を渡してくる。

裏をひっくり返し、差出人の名は何も書かれていなかったが、誰が送ったかは火を見るよりも明らかであり、

(……………)

ヴァラルは目の前の男と同様、何も言えなかったのであった。

誤算

「よく来たな。ここに訪れたということは、あの話に乗るといこととで良いんだな？」

「何言ってるんだ。乗るも何も、あんなのじゃ全然分からないぞ」

王都インペルンの街外れにある廃屋でヴァラルと仮面の男は話が微妙に食い違ったやりとりをする。

ヴァラルに送られた手紙にはただ廃屋への道筋と時間の指定がされていただけだった。最初は悪戯の類かと思っていたが、渡した男がやたら神妙な目つきだったことや、なにやらきな臭い感じを受けたこともあってこの怪しげな場所へ踏み込んだのだった。

「それはこの計画があくまでも秘密裏に行われるものだから……ここから先は他言無用だ、いいな？」

「……」

ヴァラルは仮面の男の問に沈黙しながらもこくりと頷く。どうせ良からぬ事であろうと推測はしていたが、こんな手紙一つでは証拠にもならないし、何よりヴァラル自身そんなことをする気にもならなかったからだ。そのため、とりあえず事情を把握する意味でも彼の話を耳に入れることにしたのだった。

「……よし、なら話を続ける。そもそもだ、この国はかなりおかしくなっている」

仮面の男はヴァラルに対しトレマルクの裏の実状を語りだす。

マリウスとデパンがこの国を取り仕切るようになってからというもの、冒険者を著しく優遇する動きがトレマルクで起きており、貴族の価値が相対的に低下しているのだという。

そもそも、彼らの大多数が身元不詳の浮浪者だ。それを体のいいように名乗りを変えたのが冒険者であり、そんなごろつきともいえる彼らを簡単に登録できるようにしたのはあの二人で、その結果質の低い冒険者の流入が後を絶たず、この国の治安を悪化させていると彼は糾弾した。

「おい、俺はセクリアへ行ったことがあるが、あそこはそんなに治安は悪くなかったぞ？むしろ良かったほうだ」

「……当たり前だ。あそこはデパンの直轄地だからな、そんなの当然だろう。それにヴァラル、お前はマリウスやデパンと仲良くしているみたいだが、それでこの国の貴族全てを把握しているつもりだと思っただら大間違いだ」

トレマルクの貴族の半数は各地で大幅に増えた冒険者崩れのならず者たちの犯罪や暴動により、苦勞を強いられていた。領地経営といっても誰もが皆、デパンやマリウスのように上手くいくとは限らず、急激に増えだした彼らに対処する術が圧倒的に足りていなかったのだ。

「現状、この国はあいつら二人の思うがままさ。デパンなんてどうしてこんなに早く男爵から伯爵に成り上がったか分かるか？あいつ、自分のお抱え騎士団を他の貴族の領地に配置させて、村人や町民に施しを与えるんだ。そうなると思う？彼らはあいつを急

に称えだして自分の所の領主は無能だと蔑むんだ。今までこっちは必死にやってきたことを知らないでいいご身分だよ……」

デパンはその点、本当に狡猾だったと彼は語る。他の貴族の要請に従ってその地域における犯罪者のアジトのとりつぶしを行った後、しばらくの間残党狩りの名目で領地に滞在し、貧困にあえぐ彼らに支援の手を差し伸べていた。そして、滞在期間が過ぎると徐々に支援を打ち切り、自身の領地に引き返していったのだった。

するとどうなるか。デパンの施しに飢えた彼らは領主である貴族の下に殺到し、抗議を行ったのだ。なぜ彼らを帰した、何故引き止めなかったのかと。皮肉にも、ならず者の冒険者を倒したというのに今度は彼らが貴族達に牙を向いたのであった。

そして、そんな状況に嫌気が差した領主達の大多数がデパンやマリウスに泣きついた。財政的に疲弊した彼らに村人達や市民を押さえられる力は既に無く、拳句の果てには騎士の中からも彼らに加担する連中も出てくる始末。だが、デパンはその状況をも利用し、彼らの領地を保護という名目で併合し、異例の早さで二人は領地を増やしていったのであった。

「昔はこんなことが無かったと父上から聞いている。冒険者養成学校できつちりと教育していたから、あんな奴らは滅多に出なかった。だから、昔の冒険者というのは今ののように金さえ払えば簡単になれるというものではなかったんだ、こういうことを恐れてな。けれど、結果はご覧の通りだ……」

さらに仮面の男は話を続ける。魔物を狩る彼らの一部が徒党を組み、現在では大規模な犯罪組織がトレマルク王国のあちこちに出来ているという。

その数大小あわせて二十以上、どれもこれも性質が悪く、のらりくらりと騎士団の監視の目をくぐりぬけ、王国の闇に隠れ潜んでいるという。しかも一人ひとりが冒険者を経験している輩が大勢のため、騎士団の者たちでも中々苦戦を強いられる相手のようだ。

「だが、お前もそれらと関わっていると聞いた。そこはどうなんだ、タルセン」

話がどうも複雑の様相を呈してきたヴァラルはこの際知らぬフリをやめ、真実を知るために直接問いただした。

「つつっ！……分かっていたのか……ああ、確かに一時期関わっていたことがある。だが、それは奴らの危険性を調べるためだ、僕自身は法を犯すような真似はしていない」

パカリと仮面を取り外すと、晩餐会で醜態を皆に晒したあのタルセンが現れた。

どうやら夜間に屋敷や王城をたびたび抜け出し、彼らと接触を繰り返すうちに噂が広がっていき、タルセンが直接悪事に加担していると誤解されるようになったようだ。彼は説明した。

(こいつ、本当にさっきまで騒いでいた奴か?)

そして、デパンの説明とまるで違う別人のような彼の真剣な態度にヴァラルは驚きを隠せなかった。

「……確かに全体から見れば二人の行いは正しいのかもしれない。とても癪な話だが実際、この国が豊かになっているのは間違いない

からな……だが、古き良きトレマルクの伝統を乱してまでやることか？」

今はまだその脅威に誰も気づいていない。だが、時が満ちればいずれ彼らはこの王国に刃向かうだろう。そのため、今のうちにならず者どもの冒険者達を廃し、以前と同じでなくとも良いので貴族の復権を彼は願っているのだという。

「……すまない、すこし熱くなりすぎた……」

「で、結局俺にどうしろと？肝心なところをまだ聞いていないんだが」

大体この国の裏の事情とやらも大体ではあるが理解できた。恐らく自分にならず者の冒険者達の排除に協力して欲しいのだろう、そうヴァラルは思った。

「……そうだった。つまり僕がヴァラルに頼みたいことはね……」

だが、

「デパンとマリウスを殺って欲しいのさ」

彼の考えとは裏腹に、タルセンはにやりと笑い、残忍な本性を現わにしたのだった。

(……………こいつは……………)

ヴァラルは冷や水をかけられたかのように一瞬にして心が冷えた。

タルセンはその後、ヴァラルがこちらに組したのを確信したのか、マリウスとデパンに対しての恨みつらみを延々と語り、二人の人格を徹底的に否定した。先程は二人の政策を批判したものだったのに、それが嘘だったと思わせるぐらい、それはもう酷いものだった。

「……………要するに、この計画を遂行するにはあの二人がとても邪魔なわけだ。だからヴァラル、君にはその力を持ってあの二人を暗殺してもらいたいんだ」

彼はもう、繰り返すように言ったその言葉が上手く聞き取れなかった。

(結局、さつき語ったことは全部建前で、これが本当に言いたかったことなのか……………)

ヴァラルは自身が甘い認識を持っていたことを痛感する。今回の旅で出会った人たちがあまりにも良識的な人々だったため、彼はつい楽観的な考えをした自分を貶したいくらい情けなく思った。

主の持つその強大な力を利用してようする者が必ず現れるでしょう、くれぐれも気をつけてください。

旅立つ際、セランの忠告をはたと思い出すヴァラル。

タルセンは人を掌握する術が長けていた。一見内容は乱暴に見えるが、その語る口調やしぐさ一つ一つが人を引き付けるもので、大抵の者では彼の言葉に屈してしまうに違いない。

恐らく、皆の前で愚か者を演じたのもある意味で正しく、そして間違いないだろう、それほどまでにタルセンは表と裏の顔を使い分けていた。

そのため、目の前で語る男は皆をケタケタとあざ笑う道化のようにヴァラルは感じ取れたのだった。

「……分かった」

「おお、分かってくれたか！なら早速……」

「お前が自分のことしか考えていないことが良くわかった……」

「……何だって？」

「……俺はもう帰らせてもらおう……お前の顔を見ているだけで虫唾が走る……」

「何故だっ！！計画が思うように進めば、お前には貴族の地位を握えるんだぞ！！しかもあのデパンと同じ伯爵だ！！こんなことは二度とないんだぞ！！」

タルセンはいきなり態度を豹変させたヴァラルに戸惑いを覚えつつも、自身の計画に加担するよう説得をする。

実は、冒険者から貴族に成り上がるということは相当異例の事態であり、ソイルが貴族入りした件についても一時期王国の話題を掻っ攫ったものだ。けれど、彼はあくまで男爵の地位に留まっている。それを踏まえたとえでの伯爵という今までに考えられない地位の進呈、大抵の冒険者であれば直ぐに飛びつくことは間違いなかった。

「……ああ、それでもお断りだ。大体、そんなことは自分でやれ、俺の手を借りようとするな。それと、もう二度と俺には関わるなよ……」

だが、彼はタルセンの甘言に乗ることは無かった。そして彼の正体が知れた以上、此処には用がないといわんばかりにこの場を後にしたのだった。

「……おい、キャリト」

「はい、何でしょう」

廃屋の暗闇から一人の男がゆらりとタルセンの前に現れる。それはヴァラルに手紙を渡したあの怪しげな男だ。

「あいつをやれ、冒険者の分際で僕に無礼を働いた罰だ。手段は問わない、金は弾む」

「……分かりました」

「くそツくそツくそツ!!!どいつもこいつも馬鹿にして!!!……
見ているヴァラル。ちよつと他よりも目立ったからって、この僕に
刃向かうとどうなるか、あの世で後悔するんだな……」

そうして男は再び雲のように姿を消し、タルセンは誰もが不気味に
思うような下卑た笑みを浮かべていたのだった。

「……そうだねえ、私もそれらの問題には苦慮しているんだ」

「父上から聞いたのかい?それ」

「……まあな」

二日後、デパンとマリウスそしてヴァラルの三人はお付の騎士達と
共に馬を駆り、インペルン郊外のうっそうと生い茂った森の中で森
林浴を行っていた。

とはいえそれは形だけのもので、以前タルセンに言われたことにつ
いてヴァラルは真実なのかどうか尋ねていたのであった。

「確かに、私が今まで行ってきたことは否定しないよ。実際彼らは
飢えていたし、このまま見過ごすわけにも行かなかったからね。結
果として彼らは暴動を起こしてしまったようだけど、それは最初の
頃だけだ。今はそんなこと一切起きていないさ」

「それに、デパンのやったことは双方きっちり合意した上でのこと
だ。決して彼らを脅迫したりはしていない。それは僕が保証するよ」

澄んだ瞳でマリウスは彼の疑問に一つ一つ答えていく。ヴァラルがいきなりこんな話題を出してきたことには少々驚いたが、彼なりにこの国を心配してくれているのだらう、そう思い、二人は本当に起こった事実を淡々とヴァラルに告げていた。

また、冒険者の規制を緩めるかどうか決める際は、貴族の間で大いにもめたそうだ。それも会議が三日三晩続くくらいに。因みにデパンは賛成派、マリウスは反対派であり、今まで仲の良かったのが嘘だったかのようにそれはもう大激論が繰り広げられたという。

しかし、魔物の脅威に怯えるトレマルクの現状を踏まえ、結果としては賛成派の意見が通った。そして多くの質の低い冒険者を生み出してしまったが、それも事前に想定された事柄の一つであり、それらを排除するためにもソイルやグレインのように有能な冒険者も次々と取り入れているようだ。そして、いずれは大規模な討伐隊を組織して、王国中に点在する彼らの活動拠点をしらみつぶしに摘発する予定だと二人は語った。

「ごろつきとはいえ、相手は元冒険者だ。しかもどこにいるか中々足を掴ませないし、数も多い。今までも何度か潰したつもりだったんだけど一行に減る気配が無い。骨が折れるよ、全く……」

デパンは賛成派の代表としての責務を果たすため、彼らの討伐に積極的に参加しているようだ。けれど、中々思うような成果が上がらないのか多少の苛立ちを見せていた。

「そうか……お前達もこの先のことを考えているんだな」

「ヴァラルがそんなことを口にするだなんて……明日は雨でも降るのか？」

「うるさいマリウス。俺だって悩みもする。人が感心しているというのに何水を差すんだ」

「でも、私達は君に感心されたことは今まで一度もなかったような気がするんだが、そこはどうなんだい？」

「……気にするな」

そんなやりとりをしていくうちに次第に彼らの雰囲気は明るくなっていったのだった。

けれど、そんな中、林の草むらの中からじつと彼らの様子をつかがう者がいた。

そう、タルセンからヴァラルを殺害するよう命じられたキャリアトである。

彼はトレマルクの闇に潜む凄腕の暗殺者だ。彼に命じられて殺した者は二十人を優に超え、その中には魔法士も含まれており、魔法士殺しの異名を持っている。

そして、それを可能としたのが幼い頃より身につけた数々の暗殺術と、彼にしか製造不可だとされる猛毒の吹き矢だ。ゆえに彼に対して一切の足がつかず、依頼は必ず達成されるということ、タルセンの懐刀としての地位を誇る。そして今まさに、彼がヴァラルに向けて今まさに必殺の吹き矢を放とうとしていた。

(ッー)

音もなく彼は吹く。ヴァラルとの距離は約十メートル。

極限にまで気配と殺意を絶ったからこそその芸当であり、極細の針が彼の首元を狙う。

だが、彼は信じられない行動をとった。

いきなり腰に構えた剣を抜いたと思ったら、真後ろから迫り来る小さな小さな猛毒の針を弾き飛ばすという芸当を見せ、キャリトの相貌が驚愕の色に染まった。

(!!!)

まるで予知していたかのような正確な斬撃で、近くにいたデパンとマリウスが全く異変を感じ取れなかったことからそれは明らかであり、暗殺者として名を馳せる彼であってもこのような事態を想定していなかったのか、ほんの僅かであるが非常に動揺するのだった。

(失敗だ……)

彼は悟り、その場を消えるかのように立ち去っていく。こればかりは誰にも気取られず行うことが出来る、自分の特技はこれだけではないとヴァラルに対抗するかのよう。

「……どうしたんだい？いきなり剣を抜くだなんて」

「そつだ、危いぞ……ん？そつちに何かいるのかい？」

「いや、なんでもない……」

しかし、ヴァラルはキャリトの立ち去った茂みの中を冷徹な眼差しですっと眺めていたのだった……

「失敗しただと！？馬鹿な！！ありえない！！」

彼の報告を聞いたタルセンは我が耳を疑った。ガードを正面から打ち倒したことは知っている、それはこの目で確認したからだ。だが、キャリトがミスをしたなどとても考えられなかった。

「……それで？ばれる心配は無いだろうか？」

だが、気を取り直してタルセンは暗殺者の彼に確認を取る。自身の関与が疑われないために、最低限のことをしたのかと。

「……それは勿論」

針と毒薬はトレマルクの裏のルートをいくつも経由して手に入れたものだ。探りを入れられたとしても一朝一夕で見つけられるものではない、弁解するかのようにキャリトは依頼主に説明した。

「ならば良い……くそっ、あの二人に余計な警戒を与えるだけになったか……キャリト、お前はしばらく隠れている。指示は追って知らせる」

「分かりました……」

キャリトは何も反論はせず、そのまま彼の屋敷を出て行った。

「仕方が無い、計画はしばらく中止にするしかない……だが、覚悟しろ、最後に勝つのはこの僕だ!!」

ちらちらと蝋燭の火が灯る薄暗い部屋の中、彼は高らかにそう告げたのであった。

一方、その日の夜、ヴァラルはマリウスとデパンと訪れた森に、忘れ去られたようにぽつりと存在する湖畔にいた。

月の光がきらきらと水面を反射し、人気の無いそこではヴァラルの影だけが浮かび上がり、森の動物達のさえずるような鳴き声と共に、辺りの風景と相まって幻想的な雰囲気を作り出していた。

(タルセン、お前が俺を排除しようとするなら……)

そして、彼の手の中には黒い宝石のような召喚石が握られ、

顕現せよ

天に掲げ、静かに、そして堂々とした声で彼らを呼び出す。

するとその召喚石は黒く眩く輝き、幾多の魔方陣がその場に続々と展開し、

偉大なる王よ、如何なされた

漆黒の鎧を身に纏った彼らがヴァラルの目の前に現れたのだった。

王の騎士団

ロイヤル・ナイツ
王の騎士団

ヴァラルの剣であると同時に盾でもある彼らは、アルカディア軍の中でも特別な存在だ。

アルカディアの正規軍は総勢一万。

一人ひとりが一騎当千、いやそれ以上の力を有する屈強な者達の中から彼らは選ばれ、剣と魔法の実力の高さは言わずもがな、あらゆる任務を遂行するための様々な知識と経験、そして何より王に対しての絶対的な忠誠心が彼らには要求され、その厳しい選抜を潜り抜けたほんの僅かな者だけが末席に加わることが出来るのである。

ゆえに、主君に対する忠誠の高さは群を抜き、ヴァラル為なら命を投げ出してでも最後まで戦うことを厭わない勇敢な騎士達なのだ。

そして、そんな彼らがアルカディアを離れ、とある森の湖畔に降り立つと同時に、偉大なる王であるヴァラルの言葉を今か今かと待ち望んでいたのだった。

「ここまでよく来たな、お前達」

「いいえ、王のおわすところ、たとえばどこであろうとも私達は付き従うまで。決して苦ではありません」

すると、一人の黒騎士が前へ進み、跪いてヴァラルに対し返答を行

う。その流麗な身のこなしは大変見事なもので、彼の臣下としてこの場にいることを何よりも名誉であるかのように語ったのであった。

「名は？」

「ランスロー……そう呼びただければ」

湖の浮かぶ深い森の中で彼は自らの名を名乗る。

総勢百人に及ぶ彼らの間では強さの順にそれぞれ序列が決定されている。

その中でもランスローは序列一位、唯でさえ猛者ぞろいである ロイ 王 ヤル・ナイツ の騎士団の頂点に座している男なのだった。

「ランスローか、いい名前だな……ではお前達に改めて伝えることがある、よく聞いておけ！！」

ヴァラルは彼らに事の経緯をランスローを含めた黒騎士達に語りだす。タルセンとの会話を含め、この国で彼が行おうとしていること、そして自身に対し弓引いたことを。

「……………」

最初はヴァラルの話を冷静に聞いていた彼らだったが、話が進むに連れて怒りを溜め込み始め、ヴァラルに刺客が送り込まれたと知るや、今まで静かだった湖面が強烈な突風を受けたようにさざなみを打ったのだった。

「……………落ち着け、俺はこうして無事だ」

「……失礼しました。タルセンという男が王に無礼を働いたことに黙っていられず、つい……」

強烈な風をその身に受けつつ、ヴァラルは襲われたことを全く気にしていないかのように彼らを諫める。その直後、彼らもすぐさま彼の言葉に従ったのだった。

「お前達が心配してくれるのはありがたいが、そんなことでやられる訳がないだろう？ まあいい……さてランスロー、ここで問題だ。今までの話を聞いて、俺が下した結論はなんだか当ててみる」

「実行したその男、そして指示を下したタルセンの断罪」

即座に彼は答える。まるでそれが己の使命だというように。

「惜しいな、それだけでは足りないぞランスロー」

「では他にも？」

「ああそうだ。裁く奴らは二人だけじゃない、俺の暗殺に関わった者」

その全てだ

ヴァラルは黒騎士たちに命令を下す。

彼は暗殺者の男が立ち去る際にタルセン・エールバスの裏に何か巨大な組織がいることをすぐに理解した。

僅か二日であのような手練の者を差し向けることが出来るのだ、背後にはどす黒い関係があるに違いない、そう彼は踏んだのである。

ヴアラル一人で直接彼らと立ち向かうことも出来なくはない。むしろ簡単だろう。

だが、それは彼らがガードのように真正面から挑んできた場合だ。タルセンの居場所はまだしも、暗殺者である男や、その関係者の居場所がどこにあるのか一切分からない以上、彼一人では手出しのしようが無い。

さらに、拠点のひとつを潰したとしても、それらを一つずつ相手をしてはきりが無いし、逃げ出す猶予を与えてしまっただけでは元も子もない。

各地に点在するアジトを一度に相手取るためにはこちらにも手勢が必要。そう考え、ヴアラルは彼らを召喚したのだ。

トレマルクの闇に蠢く奴らを徹底的に叩き潰すために。

義憤に駆られてのことではない。マリウスやデパンの苦勞を知る身ではあったが、それはあくまでもこの国の問題。旅人のような存在である冒険者のヴアラルには一切関係の無い話だ。だが自分に刃を向けた以上、一切の容赦はしない。

彼は各地を巡るに当たって障害になると判断した者は、たとえ虫一匹だろうと決して許すことはなかったのだった。

「ご命令、確かに承りました」

すると、ヴァラルの言葉の意味を理解した彼らはランスローを除き、その存在が徐々に希薄になっていく。

そしてヴァラルが瞬きを一回行くと、彼らはいなくなっていた。

「……やるな」

「このようなこと、私達にはたやすいもの。むしろ出来て当然です」
感心したように呟くヴァラルに、姿を消した彼らを代表して答えるランスロー。王の影となった以上、誰にも気取られず任務を遂行する、それが絶対条件なのですと。

「言わなくても分かるとは……流石だな。それで奴らの足取りを掴むのにどれ位の時間がかかる？」

これはある意味時間との戦いだ。暗殺が失敗した以上、その実行犯である男はきつとどこかへ隠れ潜むだろう。最低でも二週間、できれば一週間ほどで片をつけたい、ヴァラルはそうランスローに告げる。

「王よ、ご心配には及びません。一日、それだけあれば十分です」

「やっぱり凄いな、お前達……」

ヴァラルはきつぱりと言い切ったランスロー達の完成された組織の力というものを実感するのだった。

「それにしてもキャリト、お前さんがしくじるだなんて……何か問題でもあったのか？」

「いや違う……俺は奴を確かに殺ったと思った……」

昨日の出来事をいまだに信じられないかのように目の前のいかつい男に語るキャリト。

尚、彼と向かい合って話をするこの男の名はベザレイ。トレマルクの闇市場を牛耳り、ベザレイ一味を率いる影の首領である。

彼も昔は冒険者であったのだが、腕よりも頭を駆使するほうが性に合っていたらしく、冒険者の規制の緩和によって流れ出た者たちを纏め上げ、今では国の犯罪組織の中で最大の派閥となっていた。

そして、ベザレイはキャリトを通じてタルセンと裏で密かに繋がっていたのであった。

そう、タルセンは彼らを排する事など全く考えていなかった。既に手を組んでいたのだから、現在のところその必要性が無かったのだ。

「……それほどの奴なのか。こりゃあ、俺の方からも手を下したほ

うが良いのか？」

「止めておけ、今は事を起こすのはまずい。王国の連中が警戒しているはずだから……」

「……それなら仕方が無いな……」

ベザレイは唇を悔しげに噛む。

彼もまたキャリトが仕事でミスを犯したと聞いたときは耳を疑った。ベザレイも何度か敵対する勢力の要人暗殺を依頼したことがあり、その全てをキャリトは完遂させてきたからだ。それが状況を聞く限りでは普段通りに仕事を行い、そして失敗した。

そのため、あのガナード・モーゲンを正面から打ち破り、キャリトさえも退けた冒険者のヴァラルという男に戦々恐々としていたのであった。

「だが、そんな奴でもここは見つけられないだろう……」

ベザレイは無意識に怯えてしまった自身の心を叱責するかのようにな高価な酒を煽る。

ここはタルセンと親しくする者たちが集う秘密の場所であり、所在地を正確に知るものは裏の世界に長年身を置いた者にしか分からない。

ゆえに、ここを襲う者など誰もいない。

……そう、そのはずだった。

「何だ、この嫌な感じは……」

するとキャリトは突然この屋敷を包囲されているような、そんな不気味な気配に襲われた。

「どうしたんだキャリト、外に何かいるのか？」
い

(……)

立ち上がりベザレイの言葉に耳を傾けることなく慎重に窓の外を覗き込むキャリト。

しかし、そこには誰もいなかったのだった。

「……気のせいか……」

そう、こんな夜更けに誰も訪れるはずは無いのだ。昨日のことがまだ後を引いているようだ、頭を軽く振り、雑念を追い払うキャリト。

(そう、ありえないはずなのだ……)

「た、大変です、お頭ッ!!」

「どうしたッ!!」

するとそのとき、ボタンと二人のいる部屋の扉が大きく開け放たれ、慌てた様子でベザレイの手下が顔面を蒼白にして二人の元に駆けず

りこんできた。

「い、いッ、今、仲間から連絡が入って、俺達のアジトが襲われたって……」

「何だと！？一体誰だ！！」

ベザレイはその報告に怒りをあらわにする。つい最近、敵対関係にあった他の一味と抗争を繰り広げ、勝利を収めたばかりなのだ。それなのに時を置かずしてのこの報せ、彼は残党が反撃に出たのかと手下に向かって急いで尋ね返したのだった。

だが次の瞬間、

「そ、それ、……が……」

「な、な、なんだあッ！！！」

男の胸は剣が生えたかのように真っ赤に染まり、そのまま彼は息絶えてしまった。

「どッ、どっなってるんだ！！！」

いきなりの事態に彼から後ずさるベザレイ。手下の背後には誰もいない。

そう、誰もいないはずなのだ。

なのに突然何かに貫かれたかのように息を引き取った手下を見て取

り乱すべザレイがそこにいるのだった。

「おっ、おい！！キャリト！！早くここを出るぞ！！窓を割るんだ！！」

「…………無理だ…………」

「な、何言っているんだ！！」

「…………」

彼の手下が死んだとき、彼は窓を全力で叩き割り、飛び出そうとしたのだ。

けれど、外との連絡を取れなくしたのか、その窓は全くびくともしなかった。

そうなる唯一の出口は前方にある開かれた扉だけ。

(ッ！！)

すかさず彼は全身に隠し持っていた投げナイフを出口に向かって一斉に投擲する。その数は二十、目にもとまらぬ早さでがらりと開いた扉の向こうへ殺到する。

しかし、その全てが何かに斬り弾き飛ばされたかのように打ち落とされ、床にぼろぼろと落ちていったのだった。

「…………何者だッ！！」

ついに我慢の限界が来たのか、キャリトは力の限り叫ぶ。

けれど何の反応も無い。

(姿を消すことの出来る魔法をライレンは開発したのか？それとも、新しい魔法道具なのか？)

しかし、すぐにその考えを否定するキャリト。自分の知る限り、その手の情報を耳にしたことはなく、そんな便利な魔法や道具があれば血反吐を吐いてでも習得、あるいは大金を払ってでも入手したに違いないからだ。

だが、そんなことを考えているうちにも部屋は正体不明の何かに埋め尽くされ、じりじりと追い詰められる二人。姿は見えなくとも、ただ静かに迫り来る強烈な殺意の前にキャリトたちは挫けそうになっていた。

(いずれ碌な死に方をしないと覚悟はしていたが……)

「お、おいッ！！キャリトッ！！早く何とかしろッ！！早くッ！！」

燭台を必死に振り回して抵抗を続けるベザレイを横目に、キャリトは己に迫る死期を悟る。

「あ、ああああああ！！！！！！」

そして、ベザレイの悲鳴が辺りに木霊し、ほんの一瞬だけ黒い騎士のような格好をした集団を目撃したのを最後に、

ヴァラルを狙った暗殺者は命を落としたのだった。

「くそッ！何なんだよ……これは……」

この異常事態に気づいたのは彼らだけではなかった。

当然タルセンにもベザレイ一味に限らず、トレマルク全土に広がる彼の息のかかったアジトとの連絡が次々と途絶え、タルセンは自分の屋敷にて大きな戸惑いを覚えていたのだった。

（ヴァラルがデパンとマリウスの二人に伝えたのか？だが、あまりにも……あまりにも早すぎるッッ！！）

あの日から一日しか経っていないのだ。これほどまで大規模な襲撃を前もって王国側が計画していたのならば、何かしらの準備があったはずだ。けれど、騎士団達は何の動きを見せていない。トレマルクでは何かしらの動かぬ証拠が無い限り、騎士団らを派遣することは出来ない。しかし、そんな情報は全く届けられていない。

ゆえに、王国側が何かを嗅ぎつけたという線は考えられない。

（ヴァラルが単身で襲撃をかけてきたのか？……いや、それも考えられない……）

キャリトの潜伏する場所を含め、とてもではないがヴァラル一人で片をつけられる問題ではないし、連中も馬鹿ではない。どこかが襲われればすぐに応援に駆けつけられる万全の体制をとっていた。

けれど現在の状況を鑑みる限りでは、タルセンの思惑を遙かに超えた事態が発生していることは間違いなく、そんなことを考えているうちに、

「お、お逃げください！！タルセン様！！屋敷に火の手が！！」

「！！！！」

彼の審判の時がすぐそこまで近づいてくるのだった。

旅の続き

メラメラと燃えさかる屋敷を僅かな護衛と共に着の身着のまま逃げ出すタルセン達。

いざというときに備えて事前に設置してあった地下通路が役に立った。だが屋敷も襲われた以上、恐らく自分と彼らとの関係に気づいてしまったのだろう。遠く離れた森の中を走りながらタルセンは最早襲撃犯のことなどどうでもよく、とにかく一刻も早くこの場を離れて生き延びることに必死になっていた。

だが、

「何だッ！！何が起こってるんだッ！！」

「わ、私にだって分かりませんよッ！！」

森の中で発生しているわけのわからない出来事にタルセンは恐慌状態に陥っていた。

何しろ後ろの方で誰かが悲鳴を上げること一人、また一人とどこかへ消えていくのだ。これでパニックを起こさないほうがおかしい。このため、タルセンと部下の男の反応はある意味当然だったのかもしれない。

「と、とにかく、この国を早く……」

だがその言葉は最後まで続かず、最後の護衛の男が目の前で消えた

とき、

「う、うわあああ！！！！！！！！！」

彼の何かが崩壊したのか、大きな悲鳴があたりに響き渡ったのだ。た。

あれからどれだけ走り回ったのだろう、タルセンは息を切らしながらひたすら逃げ回っていた。けれど、どれだけ走っても全く終わりが見えない。まるで周りの風景が彼に合わせて移動しているようだ。そんなこともあってか、彼自身、既に時間と場所がよく分かっていなかったのだ。

「うわッ！！」

タルセンは大きくつまずいた。その足元には大きな木の根が生えており、タルセンを転ばせたのだ。

「よう、久しぶり……でもないか」

そして、じんじんとした鈍い痛みにあえいでいるとき、頭上から声が聞こえてくる。

ヴァラルだった。

「なっ、なんでおまえが……こんなところにいるんだ……」

「薄々気がついてるんじゃないのか？ここに居る理由も何もかもまるで幽霊を見るような怯えた目つきで彼を認識するタルセンに対し、ヴァラルは以前の怒りはどこへいったのやら、相変わらず普段の態度で接していた。

そのあまりの温度差に違和感を感じるほどに。

「ま、まさか……全部お前一人でやったのか？」

「いや、今回はまだ何も。正確に言えばお前がやったことを真似しただけだな。それにしてもまあ、こんなにもよくやる……」

彼らのアジトから押収した書類をぺらぺらとめくりながらタルセンの行ってきたことに驚くヴァラル。そこに書かれていたのは目も覆いたくなるようなありとあらゆる悪逆非道の数々が協力者の名前と共に載っており、おいそれと人前に出すのも憚られるような内容のものだった。

「かつ、かえせっ！！」

タルセンは即座に取り返そうとする。あんなものを世に出せばエーバス家だけでなく、彼に組していた貴族もことごとく取り潰し、いや死罪は免れ得ないほどのものだったからだ。

と、そのとき、

「ぐツ!?」

” 抵抗は無駄です”

” 下種が、王の御前だ”

見えない何かにつぶされるかのようにタルセンは地べたに押さえつけられてしまった。

すると、ヴァラルの左右に突然二人の黒い騎士が現れ、それを合図にするかのようにタルセンを取り囲むようにして同じような騎士達が行く手を阻み、彼がそれを取り戻すことは出来なかったのであった。

「だ、誰だ……おまえらは……こっ、こいつと何の関係があるんだ
!?!」

黒い鎧を着込んだ騎士達は、明らかにこの国の者達ではないことをすぐに理解するタルセン。

いや、させられたと言ったほうが正しいだろう。

その鎧に施された数々の魔法的な意匠は今の鍛冶士が為しえないような剛健さと優美さを併せ持ち、鎧と中にいる者が有機的に一体化しているように見えた。しかも彼らの持ち得ている武器の一つ一つもまた、タルセンが今まで目にしたことのないような強力な魔力を秘めたものであり、そんな彼らが、目の前の古臭い貧相な武装を着ているヴァラルと知り合いであるはずが無い。恐怖と疑念の入り混じった声で彼は叫んだ。

「こんな見た目でしか物事を判断できない男だったとは……貴様ツ
！！この御方をどなたと心得ているツ！！」

「だ、誰って……」

ヴァラルの横に控えている二人のうちの一人が怒声を上げてタルセ
ンを罵る。

（ヴァラルはちょっと有名になった薄汚い冒険者のはずだ……そう
だ、そのはずなんだツ！！）

けれど先程と同じように彼を王と呼ぶ黒騎士の得体が知れなかった
彼は、震えんばかりの大声にその思いとは裏腹に尻込みしていたの
だった。

「……ガウエイン、少し落ち着きなさい」

「ランスロー……このような男、早々に斬り捨てるべきだ！！王に
対するこれまでの無礼な働き、私は我慢ならない！！」

ガウエインという名の黒騎士はいきり立つ。

序列第二位の彼はランスローの親友でもあり、良きライバル関係だ。
そして、ヴァラルをこよなく崇拜する一人なのであった。

「まだですよ。王が彼に言いたいことがあるようですから」

「……なアタルセン。お前はマリウスやデパンに限らず冒険者まで
見下しているようだが、そんなに偉いのか？」

地面に這いつくばっているタルセンの前にヴァラルは進み出でて問
いたです。どうも彼は他者を見下す癖があるようで、それがヴァラ
ルの癢に障っていたのである。

「……僕は公爵なんだぞ。そんなの当然だ……」

「……成る程、お前さんの考えは良くわかったよ……おいランスロ
ー、あれやれ」

「はっ」

すると、ランスローの手が謎の光を帯びて輝きだす。だが、その光
の前にタルセンは怖気づいた。

あれに触れば全てが終わる、そんな危機感を彼は抱いていた。け
れど、体は金縛りにあったかのように動けないまま。そのためタル
センに抗う術は無く、黒騎士が歩きたびに近づいていき、それが頭
に触れた瞬間、

彼の意識は吸い込まれるようにしてなくなった。

(あ、あれは一体何なんだ……)

タルセンの目の前には信じられない景色が広がっていた。

この世のものとも思えない荘厳な建物が立ち並び、遙か大昔に滅び
たはずの伝説の生き物達が山のように大きな城の前に詰めかけてお
り、彼は思わず腰を抜かしていたのだった。

「実はな。その森を抜けて、山を越えると国があるんだよ」

「……」

何度も調査隊を派遣したものの、生きて帰ってきた者は誰もいない魔の森の奥にそんな場所があったなんて……

タルセンは項垂れたまま彼の言葉を黙って聞く以外には無かった。

「……さて、それじゃあ改めて自己紹介をさせてもらおうか。俺は
ヴアラル、」

アルカテイア
理想郷の王をやっている

普段と変わらない淡々とした口調でタルセンに名乗ったのだった。

「これで分かっただろう。貴様がいかに矮小な存在で、この御方が
遥か高みにおわす方だということを」

「……」

「そもそも偉大なる王と言葉を交わす、いや、その目に映しただけ
でも大変名誉あることなのです。それなのに貴方は無礼を働くだけ

に留まらず、あまつさえ殺意を向けるとは、到底許されざることな
のですよ……」

するとガウエインと立場を逆にしたかのように、落ち着きを保って
いたランスローがタルセンの眼前に剣を向ける。こつ見えても彼は
ガウエインと対照的に底冷えするような冷徹な一面を持っているの
だ。

その迫力に気圧されたタルセンは思わず、

「お、お許しを……ど、どうかッ！！お許しをッ！！」

命乞いをし始めた。

「貴様……この期に及んでまだそんなことを……」

「ガウエイン、そこまでしておけ。ランスロー、まだこいつには
言いたいことがある。少し待て」

「はっ」「はっ」

彼らにその場で待機するよう指示するヴァラル。

そして彼の目の前にキャリトの亡骸をドサリと落としたのだった。

「ひ、ひい！！！！」

「お前がこれまでに暗殺を仕掛けた奴らもこんな風に死んでいった。
それだけじゃない、お前のしたこと数多くの者たちが犠牲になっ
た。どうせ知らないふりをしてきただろっがな」

ヴァラルは彼の手によって凄惨な人生を歩むことになった者達全員の名前を挙げだした。誘拐され、人身販売により貴族の慰み者となった少年や少女達。彼の卑劣な策略により路頭に迷い、一家心中で命を落とした者達等、その一人ひとりの嘆きを伝えるかのように。

「それにお前は公爵なんだろう？誰よりも偉いんだろう？なら、」

誰よりもしっかりと責任を取らないとな

「あ、あああああああ！！！！！！！！！！」

その断末魔と共に、タルセンの人としての人生はそこで幕を閉じたのであった。

それからトレマルク王国は大変な騒ぎに見舞われる。

各地でベザレイ一味や他の犯罪者集団が忽然と一斉に姿を消失し、それぞれの場所に駐留する王国騎士団は人々の騒ぎを抑えるため総出で事を収めるのに時間を費やすのだった。

勿論それは王都インペルンでも例外はなかった。何と、心を無くしたように呆然としたタルセンが数々の悪行の証拠となる書類の束

と共に騎士団の詰め所の前に放置されていたため、デパンやマリウス、それにガナードやコーレリクスさえも大変に慌てふためいたのだった。

その頃、そんなてんやわんやなウオストーン城をヴァラルは歩いていた。

”しかし、あのままで本当によろしかったのですか？”

”どちらにせよあいつは破滅だ。あれが目にとまった以上、奴はもう日の目を見ることは無いだろうさ”

あの書類を王国が見つけた以上、遅かれ早かれ彼の死罪は免れ得ないし、これ以上ランスローたちの手を汚させる必要も無い。それに万が一死罪を免れたとしても彼は一生心を閉ざしたままだ。情報漏えいの心配は無い。

ランスローは何故彼を生かしたのか多少の疑問に思っていたのだが、ヴァラルはそんな彼の問に答えたのだった。

”そうですね、王の決定なら私達は従うまでです……では、また何かあればいつでもお呼びください。どこへでも私達ははせ参じますので”

”ああ、ご苦労さん。すっかり休んどけ、そうガウエインたちにも伝えておいてくれ”

”了解しました”

そうしてランスローとの連絡を止めたヴァラル。

マリウスやデパン、ガードやコーレリクスは様々な事後処理で手が離せない。そのため彼は一旦自室に戻り、のんびりくつろぐこと
していたのであった。

しかしそこへ、

「ヴァラルと言つのは貴方が」

マントを羽織った小綺麗な貴族風の男が自室の前に佇んでいた。

「私はライレンに住まうリヴィア皇女殿下から遣わされた者です。
どうぞこれをお受け取り下さい」

「……またそれが……」

「はい？」

「……いや、なんでもない」

魔法士と思われる彼から、蠟でしっかりと固められた質の良い手紙
を前にして思わずたじろいだヴァラル。ここ最近この手の類で碌な
思いをしたことが無かった彼は、今回もまた厄介な騒動に巻き込ま
れることを予期しながらも慎重にその中身を確かめた。

(……)

そして、その内容はマリウスとタルセンを足し合わせたかのような内容で、アザンテ討伐の礼を言いたいので手紙を受け取り次第、すぐにライレンへ来ること。

そのようなものであった。

「私は数日の間ここへ滞在します。それまでの間に準備をしていただけば……」

「断る」

「……は？」

「断ると言っただ、俺は」

ここへ到着してから一週間も経っていない。満足にこの国を見て回っていないのにどうして自分から赴かなければならないのか。昨夜のタルセンの件もあってか、即座に断りを入れるヴァラルだった。

「そ、それでは困ります！！何としてでも連れて来いとこの命令を受けたので、おいそれと引き下がるわけには……」

「そうか、ならその皇女殿下とやらに伝えるんだな。そんなにも俺に会いたければ、」

自分で足を運ぶんだな

彼はライレンにいるやたら偉そうな少女（何故かそう思った）に向

かってそう告げたのであった。

「……ふう、これでひとまず安心だな」

魔法士の男をしっしと追い払い、やっとの思いでくつろぐヴァラル。彼があのような態度に出たのは訳があった。

何せ皇女の立場である彼女のことだ。この国に直接住まうマリウスが出向くこととはあらゆる意味で状況が違う。そのため、他国から冒険者一人のためにわざわざ彼女がここへ来ることはまず無いだろう。そのように彼は考え、あんなことを言っただけなのだ。

……だが、彼女はヴァラルの思惑を遥かに上回る破天荒な性格をしていたということを理解していなかったのだった。

「むうううう！……！」

リヴィアはヴァラルの元に遣わした魔法士からの報告を聞くや否や顔をぶくつと膨らませ、宮殿内をスタスタと早足で歩いていた。

喜怒哀楽の激しい彼女はこうして感情を表に出すことが多く、そのこともあってその日の彼女はどんな気分なのか一目で良くわかり、そんなリヴィアを宮殿内の者たちは敬意を払いながらも微笑まじげに眺めていたのだった。

(ヴァラルめ……せっかくの妾からの誘いを断りおって……)

まさか拒否されるとは夢にも思わなかったのだろう、彼女は冒険者の彼にむかむかしていた。

(……まあ良い、そこまで会いたいのなら致し方ない。妾の方から直接出向くことにするか……くふふつ、あ奴の驚く顔が目には浮かぶわ……)

が、その一方で彼の言葉の意味を盛大に取り違えた彼女は怪しげな笑みを浮かべていたのであった。

「お姉さま!」

「お姉ちゃん!」

「やややつつ!!これはリヴィア様、こんなところで一体何を?まさか、またどこかへお出かけになられるのですかな?」

すると、二人の幼い少女がリヴィアに抱きつき、見るからに陽気な魔法士の男がリヴィアに声を掛けてきた。

リヴィアとほぼ同じ位の少女達の名はベリッタ・ファ・ライレンとアンナ・ミウ・ライレン。

魔法皇国ライレンの第二・第三皇女である。

「おおつ、二人とも!!それに なんじゃ、お主か……」

「リヴィア様、いくらなんでもそれはあんまりですぞ……」

そして、わらわらと二人の妹達に揉まれているリヴィアが簡単にあしらった魔法士の男の名はブレント・エイムズ。

ライレンの誇る宮廷魔法士の団長を勤める男だ。

「冗談じゃ。それよりもブレント、妾はこれよりトレマルクへ赴く。ちよつとした用事が出来ての」

「なななつつつ何とつつ！！それならば是非私をお連れください！リヴィア様に何かあつてはこの国の一大事、けつして手出しはさせませぬ！！」

「……ブレント、少し落ち着くのだ。妾は別に戦をしにいくわけではない。それにオーランドも連れて行く、だからお主はここで留守番じゃ」

彼は一体何と戦うつもりなのだろうか、やたらと戦る気満々なブレントに対しリヴィアは辟易としていたのだつた。

「オーランド卿が！？しかし彼はこの時期忙しいはず……よく連れ出すことが出来ましたなあ、リヴィア様」

「ふふんっ、これもまた妾の人徳のなせる業というもの。これくらいどつとということはない」

成長途中の小さな胸をそらせ、ブレントの尊敬を集めるリヴィア。

実のところはオーランドもまた彼女と同様にヴァラルに興味を抱いており、彼の方から同行を申し出たのは内緒である。

「私も！」

「私も〜！」

そして、はしゃぐようにベリッタとアンナも宮廷魔法士長の彼に続く。二人は単にリヴィアについていきたいだけなのだろう、その四つの紫の瞳はきらきらと輝いていた。

「二人はここで待っておれ、すぐに戻ってくるからな。その間は母様と共に待っておるのだ」

「分かりましたっ、お姉さまっ！」

「分かったっ、お姉ちゃん！」

「ほほっ、姫様。そろそろ準備はよろしいですかな？」

「うむっ！！いつでも大丈夫じゃっ！！」

山彦のように繰り返す妹達の元気な返事に満足していると、準備が整ったのか、オーランドが四人の前に現れ、リヴィアは出立できることを彼に伝える。

その後、彼の元に付き従ってフォーサリア宮殿の入り口に出てみると、ドラゴンに牽引された煌びやかなとても大きな馬車が待機しており、

「それではいってくるぞー！！」

元気な明るい声と共にライレンを後にしたのだった。

そして、一人の少女が冒険者である彼に会いに行くのと同時に、

ただ今戻りました、父上

あの日以降、彼と別れた彼女は無事に帰宅の途についたのであった。

……ヴァラルの旅はまだまだ続く。

様々な人々との出会いを経験しながら。

トレマルク王国編・終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5627w/>

黄金の時代

2011年11月23日00時07分発行